

# 発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価 に関する研究（その2）

— 新版 F&T 感情識別検査の試行に基づく検討 —



## まえがき

障害者職業総合センターでは、「障害者の雇用の促進等に関する法律」に基づき、我が国における職業リハビリテーションサービス機関の中核として、職業リハビリテーションに関する調査・研究を始めとして、様々な業務に取り組んでいます。

発達障害者のコミュニケーションや対人態度の問題改善は、職場定着を図る上で緊要の支援課題です。表情や音声から他者感情を読み取るスキルを客観的に評価する指標としては、障害者職業総合センターで開発・改訂された F&T 感情識別検査 4 感情版（2012）（本研究で「4 感情評定版」に改称）や曖昧な音声や表情から他者感情を読み取る際の特性を評価するツールとして開発した F&T 感情識別検査拡大版（本研究で「快-不快評定版」に改称）があります。

この報告書は、「発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究 その2」の結果を取りまとめたものです。ここでは、発達障害の診断のない在職者を対象に実施した調査結果に基づいて、拡大版の基準値を完成させました。また、発達障害者に実施した調査結果やヒアリング調査の結果に基づき、音声や表情からの感情の読み取りに関する発達障害者の特性と支援の課題について検討を加えました。そして、これらの研究成果に基づき、4 感情評定版と快-不快評定版をパッケージ化した「新版 F&T 感情識別検査」及び「新版 F&T 感情識別検査の手引き」を作成しました。これらのツールや本報告書が、多くの関係者の方々に活用され、我が国における職業リハビリテーションを更に前進させるための一助になれば幸いです。

この研究を進めるに際しては、いろいろな方から多大なご協力を賜りました。特に、本研究の調査にご協力くださったみなさまに深く感謝申し上げます。

2017年3月

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構

障害者職業総合センター

研究主幹 樺葉 伸一

執筆担当：（執筆順）

望月 葉子	障害者職業総合センター	特別研究員	概要 序章 第Ⅰ部はじめに・要旨とまとめ 第Ⅱ部はじめに・要旨とまとめ 第Ⅲ部はじめに・第3章・ 要旨とまとめ 総括
武澤 友広	障害者職業総合センター	研究員	第Ⅰ部第1章・第2章・第3章 第Ⅱ部第1章
向後 礼子	近畿大学 教職教育部	准教授	第Ⅱ部第2章・第3章 第Ⅲ部第1章
知名 青子	障害者職業総合センター	研究員	第Ⅲ部第2章

謝 辞

多くの方々のご協力をいただき、研究課題を達成することができました。

調査とヒアリングにご協力いただきました方々に、心からの御礼を申し上げます。

データ収集に際しては、我孫子市障害者就労支援センター 大野達也 センター長、NPO 法人地域活動支援センターぷろぼの 小島秀一 部長、角光裕美 主任補佐、NPO 法人ワークス未来千葉障害者就業支援キャリアセンター 藤尾健二 センター長、国立障害者リハビリテーションセンター研究所福祉機器開発部 井上剛伸 部長、高嶋孝倫 研究員、間宮郁子 研究員、同センター学院 星野元訓 教官、社会福祉法人足羽福祉会 高村昌裕 理事長、社会福祉法人大阪市障害者・福祉スポーツ協会サテライト・オフィス平野 井上宣子 主任、障害者就業・生活支援センターオープナー 山地圭子 施設長、障がい者支援施設大日園 笠羽涼子 理事長、千葉県立関宿高等学校 中村孝一 学校長、鳥取大学地域学部 谷中久和 講師、富山大学保健管理センター 西村優紀美 准教授、富山大学学生支援センター 水野薫コーディネーター、福井大学教育学部 廣澤愛子 准教授、三橋美典 特命教授の他、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構内において、国立職業リハビリテーションセンター、国立吉備高原職業リハビリテーションセンター、地域障害者職業センター 9 所、障害者職業総合センター 職業センターのご協力を賜りました。

ここに記して御礼申し上げます。

付 記

本研究においては、上記執筆者の他に、障害者職業総合センター研究員 榎本容子が担当しました。

また、本研究において実施した調査の集計については、研究協力員 永野千恵美 氏の協力を得ました。

# 目次

## 概要

1. F&T感情識別検査の開発の経緯	1
2. 調査結果から得られた知見	2
3. ヒアリング調査等から得られた知見	5
4. 本研究の到達点	6

序章 発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する検討課題	7
-------------------------------------	---

第1節 F&T感情識別検査拡大版の開発の経過	7
------------------------	---

1. F&T感情識別検査拡大版の構成	8
2. F&T感情識別検査拡大版の基本的特性	9

第2節 発達障害者の感情認知の特性に関する検討の経過	10
----------------------------	----

1. F&T感情識別検査4感情版の結果が示唆すること	11
2. F&T感情識別検査拡大版の結果が示唆すること	13
3. 発達障害者支援の課題と留意事項	14

第3節 本研究の課題	16
------------	----

1. 問題の所在	16
2. 課題解明の方法	16

【文献】	18
------	----

## 第I部 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の基準値の作成と検査特性に関する検討

はじめに	19
------	----

1. 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版における基準値作成の考え方	19
2. 調査の概要	19
3. 調査対象者の考え方	19
4. 第I部の構成	21

【文献】	22
------	----

第1章 快-不快評定版の基準値の作成	23
--------------------	----

第1節 快-不快評定版の概要	23
----------------	----

1. 検査刺激	23
2. 刺激系列の構成	24
3. 刺激呈示の概要	24
4. 回答方法	25

第2節 快-不快評定版の検査得点に関する検討	25
------------------------	----

1. 目的	25
2. 方法	25
3. 検査得点の算出	26
4. 検査得点の性差	27
5. 検査得点の年齢区分による差	28

6. 検査得点の呈示条件による差	28
7. まとめ	29
第3節 快-不快評定版の基準値	30
第2章 快-不快評定版の検査特性に関する検討	34
第1節 感情語に対する快-不快評定と感情の経験頻度に関する検討	34
1. 感情語に対応する快-不快度に関する評定	34
2. 感情の経験頻度に関する評定	36
3. 感情語の快-不快評定、感情の経験頻度と快-不快評定版の検査得点との関連	37
4. 快-不快評定版の特性について	39
第2節 感情場面に対応する感情語の選択に関する検討	40
第3節 表情識別の際の着目箇所に関する検討	42
【文献】	45
第3章 快-不快評定版による特性評価の指標	46
第I部の要旨とまとめ	49
第II部 発達障害者の感情認知特性 — 新版 F&T 感情識別検査に基づく検討 —	
はじめに	53
1. 発達障害者の感情認知の特性評価の考え方	53
2. 調査の概要と対象者の概要	53
3. 第II部の構成	54
第1章 発達障害者の感情語に関する理解、感情の経験頻度及び表情識別の概要	55
第1節 感情語に対する快-不快評定と感情の経験頻度に関する検討	55
1. 感情語に対応する快-不快度に関する評定	55
2. 感情の経験頻度に関する評定	56
第2節 感情喚起場面に対応する感情語の選択に関する検討	57
第3節 表情識別の際の着目箇所に関する検討	59
第2章 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果からみた発達障害者の特性	62
第1節 検査の概要と手続き	62
1. 刺激の概要	62
2. 検査の手続き	62
第2節 正答率と混同の傾向	63
1. 正答率について	64
2. 混同の傾向について	66
3. コミュニケーション・タイプについて	68
第3章 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の結果からみた発達障害者の特性	70
第1節 検査の概要と手続き	70
1. 検査刺激の概要	70
2. 検査の手続き	70
第2節 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の結果	71
1. 曖昧な刺激に対する評定	71
2. 感情語への評定及び経験頻度と曖昧な刺激に対する評定	73
第II部の要旨とまとめ	76
1. 発達障害者の感情認知に関する結果が示唆すること	76

2. 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果が示唆すること	78
3. 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の結果が示唆すること	79
4. 新版 F&T 感情識別検査の結果解釈において留意すべきこと	80
【文献】	80
第Ⅲ部 発達障害者のコミュニケーション・スキルにおける課題と支援	
はじめに	83
1. 発達障害者のコミュニケーション・スキルに関する支援の在り方に関する検討	83
2. 調査の概要	83
3. 第Ⅲ部の構成	84
第1章 対人ストレスに関する検討	85
第1節 ストレス尺度得点からみた定型発達者の対人ストレスの特徴	86
1. 方法	86
2. 定型発達者における対人ストレスの特徴（性差／年齢区分差）	86
第2節 ストレス尺度からみた発達障害者の対人ストレスの特徴	88
1. 発達障害者のストレス評定値について（尺度得点）	88
2. 定型発達者と発達障害者のストレス評価の違いについて（尺度得点）	89
3. 定型発達者と発達障害者の項目ごとのストレス評定の違いについて（項目ごとの分析）	90
第3節 対人ストレス尺度得点と新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の結果からみた発達障害者の特徴	91
1. 定型発達者と発達障害者の比較（男性）	91
2. 定型発達者と発達障害者の比較（女性）	93
3. まとめ	94
【文献】	95
第2章 事例からみた発達障害者支援の課題 —ヒアリング調査の結果から—	96
第1節 ヒアリング調査の概要	96
第2節 事例検討からみた検査活用の意義と課題	97
1. 就職を目指すためコミュニケーションに関する課題整理を支援した事例	97
2. 離転職を繰り返す中でコミュニケーション上の問題に直面し、“適職”を探索している事例	103
3. 初職不適応に関する課題への対応が必要な事例	106
4. 異動や昇進による不適応の課題への対応が必要な事例	115
第3節 事例検討のまとめ	120
第3章 結果解釈とフィードバックのために	126
第1節 新版 F&T 感情識別検査（4 感情評定版／快-不快評定版）の結果から読み取れること	126
1. 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果読み取りのポイント	126
2. 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版の結果読み取りのポイント	127
第2節 結果解釈の留意点	128
1. 高受信タイプ	128
2. 相補タイプ	129

3. 表情依存 F タイプ	132
4. 音声依存 T タイプ	134
5. 音声依存 F タイプ	138
6. 相殺タイプ	140
7. 低受信タイプ	142
8. 特定のタイプに分類されない	144
第3節 まとめ —新版 F&T 感情識別検査 (4 感情評定版/快-不快評定版) の結果から—	149
1. 受信の特徴に関する検討	149
2. 発達障害者支援の課題と留意事項	149
第Ⅲ部の要旨とまとめ	153
1. 対人関係のストレスに関する検討	153
2. 事例検討のまとめ	154
3. 発達障害者支援における留意事項 —新版 F&T 感情識別検査 (4 感情評定版/ 快-不快評定版) の結果から—	155
総括 本研究の課題と調査結果が示唆すること	
1. 問題の所在	157
2. 課題解明の方法	158
第1章 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の概要	159
1. 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の構成	159
2. 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の評定値 (検査得点) について	160
3. 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版実施上の留意事項	161
第2章 新版 F&T 感情識別検査から得られた知見	164
1. 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果が示唆すること	164
2. 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の結果が示唆すること	166
3. 事例研究から得られた知見	167
第3章 新版 F&T 感情識別検査のより良い活用のために	169
1. 感情語の快-不快評定について	169
2. 感情の経験頻度評定	170
3. 感情場面に対応する感情語の選択	171
4. 表情写真が表現する感情と表情識別の際の着目箇所の選択	172
5. 対人関係におけるストレスの把握	173
6. より良い活用のために —結果解釈における留意事項—	176
結語	179
1. 本研究の到達点	179
2. 今後の課題	180
【文献】	180
資料	
新版 F&T 感情識別検査 (DVD 版) の実施に当たって	181
調査票	219

# 概 要

発達障害の特性においては、雇用に至る過程や雇用後の適応・定着に関し、支援の困難さが指摘されている。また、作業遂行やコミュニケーション、対人態度等への対応が就労支援や雇用管理の課題として重視されている。こうしたことから、発達障害者のコミュニケーションや対人態度の問題を改善することは、職場定着を図る上で緊要の支援課題となっている。発達障害者は、言語的コミュニケーションのみならず、非言語的コミュニケーション（表情認知・他者感情の理解・視聴覚情報の処理等）の課題を持つことが指摘されており、これらの特性についての客観的評価は支援を行う上で有益な情報となる。

本研究の目的は、「発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究…… F&T 感情識別検査拡大版に基づく検討……」（障害者職業総合センター調査研究報告書 №119, 2014 : 研究計画その1）に引き続き、職業経験のある成人を対象とした基準値作成と発達障害者対象調査の継続（研究計画その2）により、「新版 F&T 感情識別検査」を完成させること、また、開発した検査によって把握できる発達障害者の特性を明らかにすることにある。このため、発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究（その1・その2）で収集したデータに基づく結果分析と報告を行った。

## 1. F & T 感情識別検査の開発の経緯

障害者職業総合センターではコミュニケーション・スキルに関する一連の研究（障害者職業総合センター，2000；2014）において、発達障害者の言語的な情報の受信を評価する検査の開発及び特性把握に関する研究を行ってきた（序章）。

F&T 感情識別検査 4 感情版（障害者職業総合センター，2000；2012）は、怒りや嫌悪などの「不快な感情」を表現している表情（Face）をみて、あるいは音声（Tone）を聞いて、幸福などの「快の感情」であると読み間違える対象者や、幸福・悲しみ・怒り・嫌悪の4感情のほとんどを特定の1つの感情（例えば、幸福あるいは嫌悪）として判断する対象者の特徴を明らかにできる検査として開発された。この検査は、さらに「音声のみ（T）」「表情のみ（F）」「音声＋表情（F&T）」のそれぞれの条件における読み取りの特徴からコミュニケーションのタイプを明らかにすることができる。「どのように相手からの情報を受け取るか（受信）」を評価することに加え、「どのように振る舞うか（発信）」についても、発達障害の特性評価の必要性が明らかとなっている（障害者職業総合センター調査研究報告書 №39, 2000；№119, 2014）。

その後、職場においては4感情版のような明確な感情表現だけでなく、曖昧な感情表現も多用されることから、「発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究 …… F&T 感情識別検査拡大版の開発と試行に基づく検討……」（障害者職業総合センター，2014）では、曖昧な感情表出から他者感情を読み取る際の特徴を評価できる検査の開発を行うとともに、発達障害者の特性を踏まえた支援の課題について検討した結果を取りまとめた。この検査も4感情版と同様、「音声のみ（T）」「表情のみ（F）」「音声＋表情（F&T）」のそれぞれの条件における読み取りの特徴を明らかにすることができる。

新版 F&T 感情識別検査  
(2017)

{ 4感情評定版（F&T 感情識別検査 4感情版（2012）を改修）  
快-不快評定版（F&T 感情識別検査拡大版（2014）の基準値を再構成）

なお、本研究の成果として支援機関・者に提供する検査（ソフトウェアインストール DVD）の名称を「新版 F&T 感情識別検査」とし、「4 感情評定版」（F&T 感情識別検査 4 感情版（2012）を一部改修）と「快-不快評定版」（F&T 感情識別検査拡大版（2014）の基準値を再構成）とから構成される総合評価ツールとした。

## 2. 調査結果から得られた知見

### （1）新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版の基準値作成について（第 I 部第 1 章・第 2 章／第 III 部第 1 章）

① 曖昧な感情表現に対する評定については、不快の程度が相対的に高い「高不快刺激」と低い「低不快刺激」に分けて算出することとした（曖昧刺激 9 刺激のうち、中央値を除き中央値よりも不快度の高い刺激を「高不快刺激（A 検査）」、不快度の低い刺激を「低不快刺激（B 検査）」とした）。

② 定型発達者（成人在職者）<sup>\*1</sup> の回答傾向では、B 検査の「音声のみ」条件（音声から読み取った快-不快の程度を回答する条件）及び「表情のみ」条件（表情から読み取った快-不快の程度を回答する条件）を除く全条件で、女性が男性よりも不快に評定していた。また、年齢区分別の回答では、A 検査の「音声のみ」条件と B 検査の「表情のみ」条件において、男性の 34 歳以下の者が 35 歳以上の者よりも不快に評定していた。

さらに、本研究（その 1）で収集した大学生・院生データ<sup>\*2</sup> と併せて検討した結果、一般基準値については、男性で 3 表（大学生・院生／在職者（34 歳以下）／在職者（35 歳以上））、女性では 2 表（大学生・院生／在職者）を作成することとした。

③ 曖昧刺激に対する評定は、感情語の快-不快評定の結果とはおおむね関連がない。一方、個人の主観的な感情の経験頻度とは関連が見出されており、「怒り」「恐怖」の経験頻度が高い群は、B 検査（低不快）において、より不快に評定する傾向が認められた。したがって、経験の質だけでなく経験の量によって、検査結果は変動する可能性を含んでいる。なお、経験頻度との関連について、成人の結果は大学生・院生（障害者職業総合センター，2014）とは異なっており、職業経験の有無や年齢の効果による可能性があることから、求職者・在職者・休職者の結果の解釈に際しては重要な情報となることが明らかとなった。

また、ストレスの強さとも関連が見出されており、職場における対人ストレスは求職者・在職者・休職者の結果の解釈に際して重要な情報となることが明らかとなった。

こうした調査結果を踏まえ、結果呈示に際しては、パーセンタイル順位に換算した得点をプロフィールで示して視覚化することとし、そのための評定値換算表を作成した。

### （2）新版 F&T 感情識別検査の結果が示すこと

#### ① 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版における検討（第 II 部第 1 章・第 2 章）

##### 1) 正答率

「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」（音声と表情の両方から読み取った快-不快の程度を回答する条件）の各呈示条件について、定型発達者<sup>\*3</sup> と発達障害者<sup>\*4</sup> の間で正答率に差が認められ、定型発達者の平均が有意に高かった。

発達障害者においては、音声や表情からの他者感情の読み取りに関して、定型発達者よりも困難が大きいこと、特に、表情の読み取りに関して、より困難が大きいことが示唆された。

\*1 有効分析対象者は成人在職者 295 人（男 148 人・女 147 人）。年齢範囲は 21 歳～59 歳。

\*2 有効分析対象者は大学生・大学院生 149 人（男 78 人・女 71 人）。年齢範囲は 18 歳～29 歳。

\*3 有効分析対象者は大学生・院生 128 人（男 58 人・女 70 人）。

\*4 発達障害の診断・判断を有する 124 名（男 98 人・女 26 人）。年齢範囲は 18 歳～54 歳。対象者の 84% 「自閉症スペクトラム」の診断を有しており、単独診断においても重複診断においても、「自閉症スペクトラム」の診断がない者は全体の 15% であった。

定型発達：「音声のみ」＝「表情のみ」＜「音声＋表情」 発達障害：「表情のみ」＜「音声のみ」＜「音声＋表情」
--

## 2) 混同の傾向

### (i) 快-不快の混同（「喜び」と「怒り」または「嫌悪」の混同）

快-不快の混同は、定型発達者・発達障害者ともに認められているが、「音声のみ」条件では、快-不快の混同は定型発達者よりも多い傾向にあった。

### (ii) 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間の混同

定型発達者・発達障害者ともに「音声のみ」「表情のみ」「音声＋表情」のいずれの条件においても、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間の混同が認められた。ただし、いずれの条件においても「悲しみ」を「怒り」「嫌悪」と混同する傾向及び「嫌悪」を「怒り」と混同する傾向は、発達障害者において顕著に高い。また、「表情のみ」条件では、発達障害者に「悲しみ」を「怒り」と混同する傾向が認められた。

なお、発達障害者においてみられた「他者が表出している感情をより不快度が高い方向に読み取る（「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み取る）傾向は、知的障害者においても同様に指摘されている（障害者職業総合センター調査研究報告書 №39, 2000）。したがって、正答率の高低に関わらず、知的障害を伴う者を含む発達障害者は、他者の感情をよりストレスの高い方向へ受け取る可能性があると言える。

## 3) コミュニケーション・タイプ

コミュニケーション・タイプは「音声」と「表情」の回答傾向に特徴的な傾向の認められる8タイプと特徴的な傾向を有さないタイプの計9タイプに分類される。

知的障害者との比較では、発達障害者の方が、(ア) 高受信タイプ、相補タイプが多く、低受信タイプが少ないこと、(イ) より識別力の高い条件を優先的に利用する際、発達障害者では「音声」に依存する傾向が強いことが示唆された。ただし、「表情のみ」条件に関しては、「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み間違える傾向が強い（「悲しみ」の50%以上が「怒り」または「嫌悪」と回答された）点には留意する必要がある。

## ② 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版における検討（第Ⅱ部第3章）

### 1) 曖昧刺激に対する評定

快-不快評定版の刺激に対する快-不快の評定に関して、定型発達者（成人職者）<sup>\*1</sup> と発達障害者の比較を行った結果、「音声のみ」条件では、発達障害者の得点が低い（より不快に評定した）のに対し、「表情のみ」「音声＋表情」の両条件では、有意差は認められなかった。

こうしたことから、発達障害者は音声からの情報に関して定型発達者よりも不快に感じやすい傾向があること、「音声のみ」で行う電話対応などにおいて、よりストレスを感じやすい可能性を示唆している。

次に、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版では、特性をより明確に把握する目的で A 検査（高不快刺激）と B 検査（低不快刺激）に分けて結果を呈示することになっているが、呈示条件別にみると「音声のみ」「音声＋表情」では、B 検査（低不快刺激）において発達障害者がより不快に評価する傾向が明らかとなった。これに対し、「表情のみ」では A 検査（高不快刺激）で定型発達者の方がより不快に評価する傾向が明らかとなった。

\*1 有効分析対象者は成人職者 295 人（男 148 人・女 147 人）。年齢範囲は 21 歳～ 59 歳。

## 2) 性別・年齢区分別の特徴

男女間では、「音声のみ (B 検査：低不快刺激)」「表情のみ (A 検査：高不快刺激)」「音声+表情 (B 検査：低不快刺激)」において有意差が認められた。定型発達者を対象とした第1章第1節において同様の分析が行われ、有意差が認められた「音声のみ (A 検査：高不快刺激)」「表情のみ (A 検査：高不快刺激)」「音声+表情 (A 検査：高不快刺激/ B 検査：低不快刺激)」について、いずれも女性の評定値が低いことが明らかとなっている。したがって、障害の有無を問わず、女性は男性よりも他者によって表出された非言語的な情報をより不快に評価する傾向が確認された。一方で、「音声のみ」においては、発達障害者では低不快刺激に、定型発達者では高不快刺激に有意差が認められた点には留意する必要がある。

また、定型発達者においては、34歳以下と35歳以上において「音声のみ」のA検査(高不快刺激)、「表情のみ」のB検査(低不快刺激)で差が認められたが、発達障害者では「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの呈示条件においても、さらに、A検査(高不快刺激)及びB検査(低不快刺激)のいずれにおいても年齢区分の差は認められなかった。

(3) 発達障害者の感情・感情認知・ストレス等に関する調査結果から(第II部第1章・第3章/第III部第1章)

- ① 感情語に関する快-不快度評定について、定型発達者と発達障害者の感情語に対する快-不快度評定の水準に大きな違いは認められなかった。また、「喜び」がもっとも快であり、「怒り」「嫌悪」がもっとも不快である点では共通していた。ただし、不快感情(「悲しみ」「恐怖」「軽蔑」)の不快度に基づく並び順が異なっていた。
- ② 直近3か月間の感情経験の頻度に関しては、快感情である「喜び」については定型発達者の方が経験が多いと回答する傾向にあり、不快感情に関しては、特に「恐怖」に関して発達障害者の方が経験が多いと回答する傾向にあることが示された。ただし、経験頻度に関しては、対象者が異なるだけでなく、同一対象者であっても異なった時期に実施することで結果が変化することが予想される。また、直近3か月の経験に限定したものであり、調査時点以前の在学中・求職活動中・在職中・その他における経験は、回答に反映されていない可能性もある。そうした中で、「喜び」と「恐怖」に関する経験に関して一貫した傾向が認められた点は、発達障害者の特性を理解する上で留意する点と言える。すなわち、発達障害者は日常生活を送る上で、「喜び」と感じる経験が少なく、一方で「恐怖」と感じる経験が多いことから、ストレスを感じやすい状況にある可能性を示唆された。
- ③ 「発達障害者は表情識別の際に口に着目しやすい傾向がある」という認知特性が示唆された。ただし、発達障害者も「眉」や「目」などの「口」以外の顔の箇所を重視していないわけではなく、「喜び」や「怒り」を表現した表情については、発達障害者の方が「眉」や「目」を着目箇所として挙げる人数の割合が多かった。
- ④ 「対人関係におけるストレス尺度」における定型発達者の尺度得点は、自己の言動因子、他者の言動因子、孤立感因子、意思疎通因子の順に高かった。この順位に関しては、先行研究(障害者職業総合センター, 2014)の結果と一致していた。ただし、在職者である本研究の対象者については、おおむね、すべての組み合わせで有意差が認められており、大学生・院生の結果よりも明確な違いがあると言える。この尺度得点の並び順は、発達障害においても定型発達者の順位と同様であった。

また、発達障害者の性差についても併せて検討した。その結果、孤立感因子と自己の言動因子のいずれについても女性の評定値が低い(ストレスを感じる)結果となった。定型発達者(在職者)の結果とは、一部異なるものの、女性の方が一貫してストレスを感じる結果は共通している。この点は、発達障害の有無に関

わらない特性として留意すべき点である。

なお、質問項目別にみると、定型発達者がより強くストレスを感じる項目と発達障害者がより強くストレスを感じる項目があり、尺度得点による評価とは別に、発達障害者の特徴として日頃の対人場面で留意して観察することが必要と言える。

- ⑤ 感情に対して適切な感情名がラベリングされていることを確認することに加え、ストレス経験や感情経験の頻度等を把握することは、検査結果の解釈において重要である。

### 3. ヒアリング調査等から得られた知見

#### (1) 事例検討のまとめ (第Ⅲ部第2章)

就職を目指す上でコミュニケーションに関する課題整理を図った2事例、離転職を繰り返す中でコミュニケーション上の問題に直面し、適職を探索している1事例、就職後の適応に関する課題への対応を検討している3事例、異動・昇進による不適応への課題への対応を検討している2事例について、ヒアリング調査の結果を取りまとめた。結果を以下に示す。

#### ① 新版 F&T 感情識別検査の評価結果及び受け止め方について

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版の実施の結果は、予想していた結果と必ずしも一致しない場合があった。コミュニケーションの困り感や日常生活場面での非言語コミュニケーションの課題についての本人の主訴とは別に、客観的な指標を用いて特性を適切に評価することの重要性が改めて示唆されたと言える。また、検査結果から得られた情報と併せて、対象者の職業経験やストレス体験等の情報を聴取することは、検査結果の理解に役立てるのみならず、コミュニケーションの課題を整理し、どのように課題解決に取り組んでいくかの手がかりとなった。

また、コミュニケーションの課題を始めとする「障害特性」への理解は、8事例全てにおいて「不適応」という予期せぬ挫折体験によっていたが、通常教育を経てきたために専門支援を早期には選択しがたかった事例であるとみることができる。

#### ② 表情の読み取りに際して注目するポイントについて

8事例中5事例については、表情の注目箇所の確認を行った。5事例の「表情」条件における正答率の範囲は広く、コミュニケーション・タイプも多様であるものの、いずれの事例においても表情の注目箇所が目元などの特定の箇所に限定されていたり、読み取る上で必要な箇所（例：眉間のしわ）に注目されていない等があった。

注目すべき箇所が明確に示されることで着目点が理解された点は5事例に共通していたが、表情をみることに前向きになる事例がある一方で、写真では了解可能だが実際の対人場面において表情をみることで自体に不安を感じる事例もあったことから、表情識別の正答率の向上を目指すだけでなく、言葉で確認する等の補完手段を検討することについて、別途検討する必要性が改めて示唆された。

#### ③ ストレスに関する情報共有の必要性について

快-不快評定版から得られた結果の背景にあるストレスについては、職業経験によってその状態が異なる可能性が示唆された。職業経験のない事例では学校等における就学上の不適応がストレスの主な背景となっている可能性がある一方で、職業経験のある事例では職場での作業遂行上の問題や対人場面でのトラブルが背景要因として考えられた。これらのことから、快-不快評定版における評定の偏りの背景としてストレスを検討する上で、職歴の有無等による経験の違いを考慮する必要性が示唆された。

#### ④ コミュニケーションの課題への対応のために

職業経験があつたとしても必ずしも職場で期待される行動や役割の理解が促進されるわけではない事例からは、発達障害者における職場での「一般的な研修」や「自己研鑽」等によるスキルの獲得可能性について、事前に十分検討することの必要性が示唆された。その一方で、職業経歴が比較的長く、一定期間職場に適応していた事例においては、本人が適応できる環境であれば、期待される行動や役割理解の獲得可能性が高まることが示唆された。

#### ⑤ まとめ

抽象的な事柄への理解や、他者の立場に立って物事を判断したり、自分自身を客観的にみること等に苦手がある者も多いことから、「体験」を伴う学習や練習・訓練のできる場面や環境を用意し、それらの環境下で障害特性の理解や自己理解を補うといった手立てを講じることが重要であることは言うまでもない。新版 F&T 感情識別検査を用いて非言語コミュニケーションスキルの評価を行うことにより、感情識別の特性を明らかにするだけでなく、関連するコミュニケーションの課題やストレス体験等を整理することで優先課題を特定し、職場適応に向けた目標達成を支援することも重要な視点である。

#### (2) 結果解釈における留意事項

……新版 F&T 感情識別検査 (4 感情評定版・快-不快評定版) の結果から…… (第Ⅲ部第 3 章/総括)

非言語コミュニケーション・スキルに関する発達障害者支援の課題を明らかにする上では、新版 F&T 感情識別検査の結果を効果的に活用することが期待される。そのためには、①「怒り」と「嫌悪」の混同の状況と対応の考え方、② 結果を踏まえた過去の経験の振り返り、③ 補完行動の提案と環境調整や支援の考え方、④ 表情識別訓練の実施可能性と課題の検討、⑤ 感情語の理解や経験等 (対人ストレスの評価を含む) の確認、⑥ 特性への配慮などの検討が必要である。

#### 4. 本研究の到達点

本研究その 1 で開発した検査については、成人在職者の基準値を整備することにより、研究課題を達成することができた。また、障害者職業総合センターで開発した新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版を活用することを通して、発達障害者の特性を把握し、障害特性に対する支援の課題を明確化できることを明らかにした。

本調査研究報告書において、一連の研究の成果を取りまとめることとともに、支援に活用できるツールとして「新版 F&T 感情識別検査」及び活用の手引「新版 F&T 感情識別検査 (DVD 版) の実施に当たって」(本調査研究報告書 資料 1) を作成した。なお、この検査は、パソコンにインストールして実施するソフトウェアとして作成した。

## 序章 発達障害者のコミュニケーション・スキルの 特性評価に関する検討課題

障害者職業総合センターにおけるコミュニケーション・スキルに関する一連の研究（障害者職業総合センター，2000；2014）では、日常生活で行うコミュニケーションについて、非言語的な情報（例えば、表情・音声・姿勢・態度など）のやりとりが重要な役割を果たしているという指摘（例えば、Mehrabian,A., 1981）を受け、発達障害者の非言語的なコミュニケーション・スキルの評価に焦点を当てている。

非言語的な情報の受信については、定型発達者であれば基本的な感情（幸福、悲しみ、怒り、嫌悪、恐怖、驚き）について、表情をみることで他者の感情を偶然以上の確率で正確に弁別できる（Ekman,P., 1982）とされている。一方で、発達障害者が非言語的な情報の受信について基本的なスキルを有しているかどうかを評価した研究は十分に蓄積しているとは言いがたい。

発達障害者の特性を考慮した上で、これらの基本的なスキルの有無が検討できる評価法の開発は急務と言える。例えば、F&T 感情識別検査 4 感情版（障害者職業総合センター，2000；2012）は、怒りや嫌悪などの“不快な感情”を表現している表情をみて（あるいは声を聞いて）、幸福などの“快の感情”であると読み間違える対象者や幸福・悲しみ・怒り・嫌悪の4感情のほとんどを特定の1つの感情（例えば、幸福あるいは嫌悪）として判断する対象者の特徴を明らかにできる検査として開発された。この検査は、さらに「音声のみ」「表情のみ」「音声＋表情」のそれぞれの条件における読み取りの特徴からコミュニケーションのタイプを明らかにすることができる。

対象者が「相手の感情を間違えて受け取っている」場合には、対応が適切なものとならないのは当然のことである。この点からは、「どのように相手からの情報を受け取るか（受信）」だけではなく、「どのように振る舞うか（発信）」についても、発達障害の特性評価を検討することが必要となる。

さらには、職場における非言語コミュニケーション・スキルの特性の詳細を把握するための評価もまた重要となる。職場では、F&T 感情識別検査 4 感情版で表現されるような「明確な」感情表出を伴うことが少ない場面が想定されるためである。

こうしたことから、「発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究 …… F&T 感情識別検査拡大版の開発と試行に基づく検討……」（障害者職業総合センター，2014）では、曖昧な感情表出に対する特性を評価する検査の開発を行うとともに、発達障害の特性を把握し、支援の課題について検討した結果を取りまとめた。以下では、F&T 感情識別検査拡大版の開発経過及び特性評価研究の到達点を概観した上で、本研究の課題について述べる。

### 第1節 F&T感情識別検査拡大版の開発の経過

発達障害の特性からは、雇用に至る過程や雇用後の適応・定着において、支援の困難さが指摘されている。また、作業遂行やコミュニケーション、対人態度等への対応が就労支援や雇用管理の課題として重視されており、障害特性に配慮した環境整備や適応・定着支援等の在り方など、支援の方策について検討することが求められている。

対人コミュニケーションに困難がある発達障害者の支援において、「音声」や「表情」から他者の感情をどのように読み取るかという非言語コミュニケーションの特性評価は有効な情報となることが期待される。

このため、感情が明確に表現されない曖昧な音声や表情に関する認知特性を把握するための検査として F&T 感情識別検査拡大版の開発を行った。

「発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究 …… F&T 感情識別検査拡大版の開発と試行に基づく検討…」（障害者職業総合センター，2014）では、検査刺激の選定、検査課題の作成及び基準値の作成等、検査の開発に必要な一連の過程を踏まえて F&T 感情識別検査拡大版を開発した。また、検査を発達障害者に適用するに当たり、検査の特徴を明確にするため、定型発達者を対象としたデータの分析結果に基づき、感情語の快-不快評定や感情の経験頻度と F&T 感情識別検査拡大版における評定値との関連について検討を行った。さらに、検査結果を解釈する上では、感情が喚起される場面の理解についての発達障害者の特徴（感情語との対応）や表情に対する着目箇所を把握することも有効な情報となる場合がある。このため、定型発達者を対象として実施した調査のうち、感情場面の理解や表情の着目箇所についても基礎資料として報告した。以下に、F&T 感情識別検査拡大版の概要を示す。

## 1. F&T 感情識別検査拡大版の構成

F&T 感情識別検査拡大版はパソコン上で実施する形式で開発された。

### (1) 検査実施の環境：

OS：Windows 7 CPU：Pentium(R)4 CPU 2.40GHz 相当以上。

ディスプレイ解像度：1024 × 768 以上／ディスプレイサイズ：14 インチ以上。

ディスプレイ色数：32bit 以上／スピーカーからの出力により実施。

### (2) 刺激の構成：

選定した検査刺激は曖昧刺激\*であることから、不快感情に偏る。ただし、不快刺激を繰り返し呈示することは対象者にストレスを与える可能性がある。そこで、調査対象者全員が「喜び」を選択した快刺激を刺激系列に加えることでストレス緩和を図った。なお、快刺激の呈示箇所は刺激系列中 2 か所と刺激系列の最後の計 3 か所に配置した。また、快刺激の直後には前述の 9 刺激とは別の曖昧刺激を配置し、快刺激とともに分析から除外することとした。これは、快刺激によるストレス緩和がその直後の評定に及ぼす影響を抑えるためである。

(※：どの感情に関しても一致率が 50 %（刺激選定調査対象者の半数）以下であり（ただし、「音声 + 表情」条件については一致率が 60 %以下）、かつ、確信度の平均において「とても自信がある」に分類されない）

こうしたことから、拡大版の各条件を構成する刺激は下記の 23 刺激とした。なお、検査にかかる時間は 1 つの呈示条件につき約 7 分である。また、曖昧刺激 9 刺激は検査の前半と後半で 1 回ずつ呈示されるが、前半と後半の刺激の呈示順序は異なるように配置した。

検査刺激の構成（各条件）

9（曖昧刺激）× 2（反復呈示）+ 3（快刺激）+ 2（分析対象外の曖昧刺激）= 23 刺激

### (3) 回答方法：

調査対象者には呈示された刺激が表現している快-不快の程度を「- 4：非常に不快である」-「0：快で

も不快でもない」—「+ 4：非常に快である」の 9 件法で回答させ、それをその刺激の評定値（- 4 ～ + 4 点）とした。

(4) 実施方法：

モニターによる個別実施もしくはスクリーンで映像を呈示する小集団で実施した。

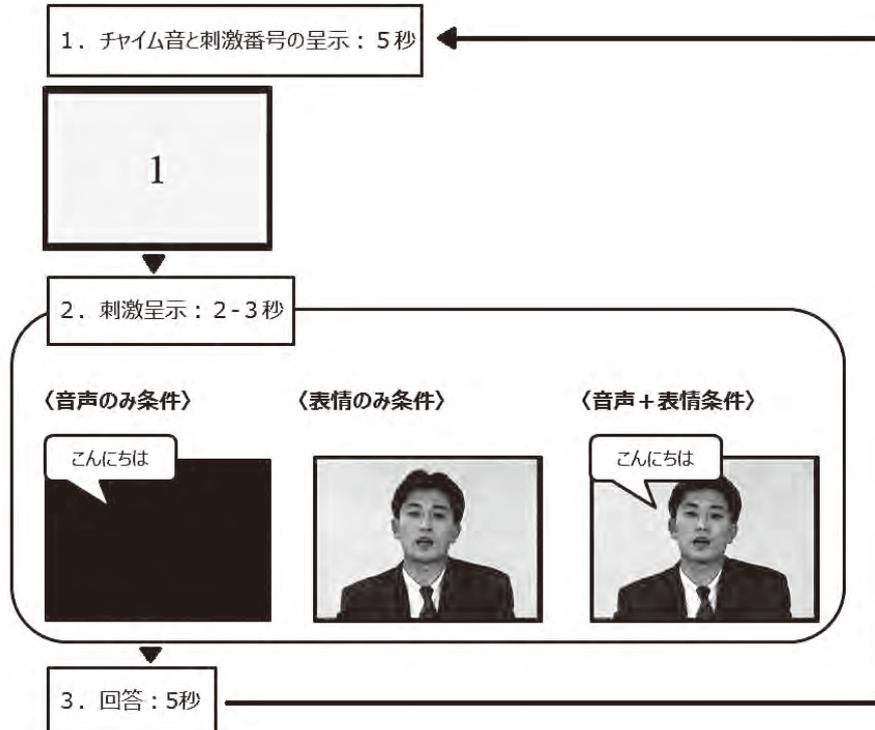


図1 快-不快評定版における刺激呈示

なお、刺激呈示は「音声のみ」条件、「表情のみ」条件、「音声+表情」条件の順に実施した。実施時間は 1 呈示条件につき、約 7 分。「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の 3 条件で計 21 分である。

## 2. F&T 感情識別検査拡大版の基本的特性

F&T 感情識別検査拡大版の評定値について、以下の点が確認できた。

- ・「音声+表情」条件についてのみ、女性の方が男性よりも評定値が有意に低い（より不快に評定する）。
- ・ 曖昧刺激の評定値（不快度）は、呈示条件によって異なる。  
「音声+表情」条件 > 「表情のみ」条件 > 「音声のみ」条件の順に有意に高い。
- ・ 曖昧刺激に対する評定は、個人の主観的な感情の経験頻度とは関連がなく、感情語の快-不快度評定についてもおおむね関連がない。

こうした基本的特性を踏まえ、呈示条件別・男女別に基準値の作成を行った。

### (1) 全曖昧刺激に関する基準値

分析対象者である定型発達者\*1 149 人（18 歳-29 歳の大学生又は大学院生：男性 78 人／女性 71 人）の評

\*1 障害を有していない大学生・大学院生。データ収集後に診断を開示した者や自らが疑っている（主訴がある）ことを開示した者については分析対象から除外し、診断の状況に応じて当事者データに加えることとした。こうした対象者以外で行動観察により除外を検討した事例はなかったが、診断に至っていない発達障害者については定型発達者の中にも含まれている可能性はある。

定値の分布に対して、全刺激得点が分布上のどの位置に該当するかを検査結果（パーセンタイル順位）として示すための評定値の基準表を作成した。

検査結果は、「曖昧な感情表現に対して、どの程度、快あるいは不快に偏って判断するか」（判定値が高いほど不快に偏って判断する傾向が強い）を示す指標として活用できる。

#### （２）不快度の低い曖昧刺激に関する基準値

不快度の低い刺激群を抽出し、独自の基準値を作成することで、曖昧刺激に対する特性を詳細に検討できるようにした。曖昧刺激の不快度の低い刺激に対する発達障害者の認知特性について、詳細に検討することが重要である場合を考慮したためである。

検査結果は、「不快度の低い曖昧な感情表現に対して、どの程度、快あるいは不快に偏って判断するか」（判定値が高いほど不快に偏って判断する傾向が強い）を示す指標として活用できる。

### 3. F&T 感情識別検査拡大版を実施する上での留意事項

拡大版で評価する曖昧な感情表現に対する評価傾向が、他者の感情認知に関わる他の認知特性や主観的経験とどのように関連しているのかについて検討することは、検査結果の基本的な特性を明らかにする上で重要である。

また、F&T 感情識別検査 4 感情版・拡大版では評価できない認知特性や主観的経験に関する情報は、検査結果の補完情報としての意義だけでなく、単独でも発達障害者のコミュニケーションにおける課題の原因推測に役立つことが期待できるため、以下に示すデータを検査実施前後に収集しておくことは意義が大きい。すなわち、ある対象者が複数の項目にわたって特徴的な、あるいは不適切な回答をした場合、その者の特性の理解や結果のフィードバックに際し、注意を要することを示すものである。

- ・ 検査実施前の確認事項

感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に対応する快-不快の程度  
感情場面と感情語の対応 等

- ・ 検査実施後の確認事項

調査時点における直近 3 か月間の感情経験の頻度／  
表情写真が表現する感情と着目箇所／対人関係におけるストレス 等

上記調査に要する時間は、合計でおおむね 15 分程度であった。

## 第 2 節 発達障害者の感情認知の特性に関する検討の経過

F&T 感情識別検査を用いて発達障害者の非言語コミュニケーションの特性評価を行うに当たり、発達障害の診断の有無によって、検査結果にどのような違いが現れるかを把握しておくことは、検査結果から対象者のコミュニケーションの課題を推定し、支援を講じるための資料として活用する上で必要である。

このため、「発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究 …… F&T 感情識別検査拡大版の開発と試行に基づく検討……」（障害者職業総合センター，2014）では、まず、感情語に対する快-不快評定や感情の経験頻度、感情が喚起される場面の理解、表情識別の際の着目点等の特性について、発達障害者の特徴を確認した。次に、発達障害者を対象としたデータの分析結果のうち、F&T 感情識別検査 4

感情版の正答率やコミュニケーション・タイプについての検討をとおし、明確な感情表現による感情識別に関する認知特性について総括した。さらに、F&T感情識別検査拡大版の評価結果を定型発達者（大学生・院生）の結果と比較することで、曖昧な感情表現による感情識別に関する発達障害者の認知特性を概観した。

なお、当該研究における分析対象者は、知的障害を伴わない発達障害の診断・判断を有する103人（男性81人、女性22人）であり、成人期における診断が多数を占めていた。対象者の82.5%は、「自閉症スペクトラム」\*1のある者が占めていた。単独診断において、さらに重複診断においても、「自閉症スペクトラム」の診断がないという者は全体の9.7%であり、診断名による結果の違いを検討できるほど十分な数の対象者のデータを取得できていないことから、診断名による違いは検討していない。一方、発達障害者の回答における男女別の違いが見いだされなかったことを確認しているが、男女比がおおむね4:1であったことから、こうした検討には困難がある。また、対象者の年齢が18歳-54歳に分布しているため、定型発達者の年齢の範囲（18歳-29歳）と大きく異なる。このため、定型発達者との比較は、暫定的な試みとして行っている。

以下、「発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究……F&T感情識別検査拡大版の開発と試行に基づく検討……」（障害者職業総合センター，2014）における発達障害者の感情認知に関する特性理解についての検討の到達点をまとめた。

## 1. F&T感情識別検査4感情版の結果が示唆すること

発達障害者の特性を明らかにするための比較データとして、F&T感情識別検査4感情版開発時のデータ（障害者職業総合センター調査研究報告書№39，2000）と比較した結果を示す。なお、定型発達者のデータは、大学生・大学院生128人（男58人/女70人）から構成されている。

### （1）正答率の比較

「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の各呈示条件について、定型発達者と発達障害者の間で正答率に差が認められており、定型発達者の平均が有意に高かった（表1）。

表1 発達障害者並びに定型発達者（大学生）の呈示条件ごとの正答率

対象者	音声のみ	表情のみ	音声+表情
	平均正答率（SD）	平均正答率（SD）	平均正答率（SD）
定型発達者	85.9 (6.90)	84.5 (6.69)	94.7 (5.55)
発達障害者	76.8 (9.57)	71.0 (10.18)	86.9 (10.04)

なお、対象者群別にみた呈示条件間の正答率については、以下の関係が明らかとなった。

定型発達：「音声のみ」＝「表情のみ」＜「音声+表情」  
 発達障害：「表情のみ」＜「音声のみ」＜「音声+表情」

発達障害者においては、音声や表情からの他者感情の読み取りに関して、定型発達者よりも困難が大きいこと、特に表情の読み取りに関して、より困難が大きいことが示唆された。

### （2）混同の傾向

#### ① 快-不快の混同（「喜び」と「怒り」または「嫌悪」の混同）

\*1 発達障害者支援法が定める発達障害の定義で「自閉症、アスペルガー症候群、その他特定不能の広汎性発達障害」とされる者のうち、知的障害を伴わない者について、自閉症圏の障害の一群として「自閉症スペクトラム」を用いている。

なお、自閉症スペクトラム障害という診断名は、わが国ではアメリカ精神医学会の精神疾患の診断・統計マニュアル第5版（DSM-5）への改訂（2013）前後に注目されるようになったが、厳密にはその範囲が異なっている可能性がある。

快-不快の混同は、定型発達者・発達障害者ともに認められており、これらの混同が発達障害者のみに特徴的であるとは言えない。また、定型発達者、発達障害者のいずれにおいても感情語の快-不快度の評定では、「喜び」が最も快と評価され、「怒り」と「嫌悪」は最も不快と評価された。そこで、「喜び」と「怒り」・「嫌悪」の感情間での混同について検討した。「音声のみ」では、快-不快の混同は定型発達者よりも多い傾向にあった。

## ② 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間の混同

定型発達者・発達障害者ともに「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間の混同が認められた。したがって、これらの混同が発達障害者のみに特徴的であるとは言えない。ただし、いずれの条件においても「悲しみ」を「嫌悪」と混同する傾向及び「嫌悪」を「怒り」と混同する傾向が発達障害者において顕著に高い。また、「表情のみ」条件では、「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と混同する傾向が認められた（「悲しみ」の50%以上が「怒り」または「嫌悪」と回答された）点は留意する必要がある。

なお、発達障害者においてみられた「他者が表出している感情をより不快度が高い方向に読み取る（「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み取る）傾向は、知的障害者においても同様に指摘されている（障害者職業総合センター調査研究報告書 №39, 2000）。したがって、正答率の高低に関わらず、知的障害を伴う者を含む発達障害者は、他者の感情をよりストレスの高い方向へ受け取る可能性があると言える。

## (3) コミュニケーション・タイプ

コミュニケーション・タイプは表2に示したように、「音声」と「表情」の回答傾向に特徴的な傾向の認められる①～⑧の8タイプと特徴的な傾向を有さないタイプの計9タイプに分類される（知的障害者のデータを参考として記載した：障害者職業総合センター調査研究報告書 №39, 2000）。

知的障害者との比較では、発達障害者の方が、(ア) 高受信タイプ、相補タイプが多く、低受信タイプが少ないこと、(イ) より識別力の高い条件を優先的に利用する際、発達障害者では「音声」に依存する傾向が強いこと、が示唆された。

表2 コミュニケーション・タイプ

		音声のみ	表情のみ	音声+表情	発達障害	知的障害
①	高受信タイプ	76%以上	76%以上	83%以上	19人	6人
②	低受信タイプ	59%以下	59%以下	64%以下	1人	18人
③	相補タイプ	「音声+表情」－「音声のみ」 「音声+表情」－「表情のみ」がともに 15%より大きい場合			25人	25人
④	相殺タイプ	「音声+表情」－「音声のみ」 「音声+表情」－「表情のみ」がともに-15%より小さい場合			1人	0人
⑤	音声依存・Tタイプ	「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。			17人	20人
⑥	音声依存・Fタイプ	「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は低い			1人	0人
⑦	表情依存・Tタイプ	「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は低い。			0人	1人
⑧	表情依存・Fタイプ	「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。			3人	14人
⑨	特定のタイプに分類されない	①～⑧のいずれにも分類されないタイプ			36人	64人
全体					103人	148人

知的障害者のデータは、（障害者職業総合センター調査研究報告書 №39, 2000）による

## 2. F&T 感情識別検査拡大版の結果が示唆すること

### (1) 曖昧刺激に対する評定：定型発達者と発達障害者の比較

F&T 感情識別検査拡大版の刺激に対する快-不快の評定に関して、定型発達者と発達障害者の比較を行った結果、「音声のみ」と「音声+表情」では、いずれも発達障害者の得点が低い（より不快に評定した）のに対し、「表情のみ」では、有意差は認められなかった。

次に、拡大版の構成上、同じ刺激が2回呈示されることから、定型発達者と発達障害者の1回目と2回目の呈示においてそれぞれ有意差が認められるかについて検討した結果、「音声のみ」「音声+表情」条件では、発達障害者の得点がいずれの場合も低く、“より不快に評定する傾向”は一貫していた。一方、「表情のみ」条件では、1回目の呈示の際は、発達障害者が定型発達者より不快に評定するのに対し、2回目の呈示では有意差は認められなかった。したがって、初めて会う人の曖昧に表出された感情に関して、発達障害者においては“より不快な傾向”に捉えることが明らかとなった。

障害の有無にかかわらず、短期間に繰り返し同一人物の音声や表情に触れると当該人物の表出した感情の不快感を低く評価する傾向がある。

### (2) 経験頻度と拡大版における評定との関連

7感情に関する主観的な経験頻度3群間とのF&T感情識別検査拡大版における「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の各呈示条件の得点について、定型発達者については有意な関連は認められなかった。こうした結果から、拡大版の各呈示条件において表出される感情の快-不快の評定に関して、直近（3か月以内）の主観的な経験が影響を与える可能性は低いと考えられる。

ただし、発達障害者に関しては、「恐怖」や「嫌悪」については主観的な経験が全刺激得点と、「恐怖」「嫌悪」「怒り」については主観的な経験が不快刺激とは評価されにくい低不快刺激得点と関連する可能性が示唆された点は、検査結果のフィードバックに際して留意する点である。

### (3) 発達障害者の感情認知・ストレス等に関する調査結果から明らかになったこと

① 感情語に関する快-不快感評定について、定型発達者と発達障害者の感情語に対する快-不快感評定の水準との間に大きな違いは認められなかった。具体的には、「喜び」がもっとも快であり、「怒り」「嫌悪」がもっとも不快である点では共通していた。ただし、不快感情（「悲しみ」「恐怖」「軽蔑」）の不快感に基づく並び順が異なっていた。

② 直近3か月間の感情経験の頻度について、「喜び」と「悲しみ」については、定型発達者の方が経験が多いと回答する傾向、「恐怖」に関しては、発達障害者の方が経験が多いと回答する傾向が示された。また、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「驚き」については、発達障害者の経験が定型発達者よりも少なく回答された。ただし、このことから、発達障害者においては、「日常生活において快の状況を経験することは少ないが、一方で不快の状況を経験することも少ない」と結論することには慎重さを要する。直近3か月の経験に限定したものであり、調査時点以前の在学中・求職活動中・在職中・その他における経験は、回答に反映されていないからである。

③ 感情の経験頻度と感情語の快-不快評定との関連について、発達障害者においては「悲しみ」の経験が多い場合、感情語の評定において「悲しみ」を“より不快に評定する傾向”が示唆された。

④ 「発達障害者は表情識別の際に口に注目しやすい傾向がある」という認知特性が示唆された。

ただし、発達障害者も「口」以外の顔の箇所を重視していないわけではなく、「喜び」や「怒り」を表現

した表情については、発達障害者の方が「眉」や「目」を着目箇所として挙げる人数の割合が多かった。

⑤ 「対人関係におけるストレス尺度」における〈意思疎通〉に関するストレスと〈自己の言動が他者に不快感を与える〉ことによるストレスに関しては、いずれも発達障害者の得点が高く、ストレスをより強く感じると評価した。なお、〈意思疎通〉を要求される場面でより強くストレスを感じることは、発達障害者が自身のコミュニケーションにおける困難をどのように評価しているかと関連している可能性がある。また、ストレスの原因について、〈他者の言動〉よりも〈自己の言動〉においてより強くストレスを感じる評価した点に関しても、発達障害者が自身のコミュニケーションの特徴をどのように捉えているかと関連している可能性がある。

なお、項目別にみると、定型発達者がより強くストレスを感じる項目と発達障害者がより強くストレスを感じる項目があり、尺度得点による評価とは別に、発達障害者の特徴として日頃の対人場面で留意して観察することが必要と言える。

⑥ 発達障害者においては、他者感情を正確に読み取るかどうかに関わらず、日常生活場面において、他者の音声や表情から表出される感情をより不快な傾向に読み取る傾向があることが示唆された。職場においても同様であり、支援者は同僚や上司との関係において、発達障害者が他者の感情をより不快な方向に捉えている可能性、すなわち、対人的なストレスが定型発達者よりも高い状態におかれている可能性があることを踏まえて支援する必要がある。

⑦ 感情に対して適切な感情名がラベリングされていることを確認することは、検査結果の解釈において重要である。

### 3. 発達障害者支援の課題と留意事項

#### － F&T 感情識別検査 4 感情版・拡大版の結果から－

##### (1) F&T 感情識別検査の活用等によって把握できること

発達障害者のコミュニケーションや対人態度の問題改善は、職場定着を図る上で緊要の支援課題となっている。発達障害者においては、言語的コミュニケーションのみならず、非言語的コミュニケーション（表情認知・他者感情の理解・視聴覚情報の処理等）の課題を持つことが指摘されており、これらの特性についての客観的評価は、支援・指導において有益な情報となる。

そこで、すでに開発されている F&T 感情識別検査 4 感情版を用いて発達障害者の特性を把握するとともに、F&T 感情識別検査拡大版の開発及び、発達障害者の特性に関する検討を行った。

F&T 感情識別検査 4 感情版では、快-不快の混同、不快感情間の混同の傾向について、さらにはコミュニケーション・タイプについて、把握することができることを明らかにした。以下に、F&T 感情識別検査 4 感情版の結果解釈のポイントを示す。

##### ① 快-不快の混同はないか

特に、「音声のみ」条件で快-不快の混同はないか

##### ② 正答率の低い呈示条件は何か

特に、「表情のみ」条件で正答率が低くないか

##### ③ 「他者が表出している感情をより不快度が高い方向に読み取る（「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み取る）」傾向はないか

特に、「表情のみ」条件で、「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み間違える傾向がないか

#### ④ コミュニケーション・タイプから特徴を読み取れているか

また、F&T 感情識別検査拡大版では、不快度評定の現れ方に注目することが重要である。以下に、結果解釈のポイントを示す。

##### ① より不快に評定する呈示条件は何か

特に、「音声のみ」と「音声+表情」条件では、より不快に評定する傾向が認められるか

また、1 回目の呈示の方が“より不快な評定をする傾向”があるか

##### ② 各条件において、“より不快な評定をする傾向”がある場合、不快に分類される感情語（悲しみ・軽蔑・恐怖・嫌悪・怒り）の評定に関して、“より不快な評定”が選択されていないか

##### ③ 各条件における評定について“より不快に評定する”傾向が認められる場合、「怒り」や「嫌悪」「恐怖」に関する直近の主観的な経験が影響していないか

さらに、発達障害の対人ストレスの状況を把握するために、「対人関係におけるストレス尺度」を作成し、発達障害者の特性に関する検討を行った。開発した F&T 感情識別検査拡大版の結果とも関連があることを見いだした。対人ストレスにおいては、ストレスの高い領域・項目に着目した支援が必要である。以下に、結果解釈のポイントを示す。

##### ① よりストレスの高い領域（対人関係におけるストレス因子の尺度）は何か

〈意思の疎通〉と〈自己の言動〉で、よりストレスが高いか

この場合、F&T 感情識別検査拡大版のいずれかの条件で評定値がより低い（より不快に評価する）か

##### ② よりストレスの高い項目（対人関係におけるストレス項目）は何か

「会議などで“何をしゃべったらいいのかわからなくなる”「嫌いな人と会話する」「話している人が自分に伝えたいことを、理解できない」「自分の言いたいことが、人に上手く伝わらない」「言い争いをする」「会議などで会話中に話の流れがわからなくなる」において、よりストレスが高いか

F&T 感情識別検査 4 感情版・拡大版の検査結果を踏まえて、発達障害者の特徴を分析する上では、その他の情報（感情語の快-不快評定や経験頻度、感情を喚起する場面と感情語との対応、表情識別の際の着目点、対人ストレスの評価など）について把握することが意味を持つとともに、感情と感情語の対応やラベリングの適切さの確認が求められる場合もあることを明らかにした。

## （2）残された課題

発達障害者の特性の検討に際して基準とした定型発達者のデータは、大学生・院生を対象として収集された。一方で、協力を得た発達障害者の範囲は 20 代から 50 代に及んでおり、F&T 感情識別検査拡大版においても、ストレス尺度得点においても、年代により回答傾向が異なることが明らかとなった。

年代別の検討は、発達障害者の就労支援に関しても重要であると考えられる。しかし、基準値となる定型発達者のデータを年代別に取得していないため、基準値に照らした年代別の検討については今後の課題として残されており、心理検査として提供するに当たり、基準値の年齢範囲を拡大し、詳細な検討を加える必要があるとの結論を得た。

発達障害者を対象とした F&T 感情識別検査の拡大版を完成して活用には、該当年齢層の一般成人による基準値を得た上で、発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価及び支援の課題を検討することが必要である。

## 第3節 本研究の課題

### 1. 問題の所在

非言語コミュニケーション・スキルに関する発達障害者支援の課題を明らかにする上では、F&T感情識別検査の結果を効果的に活用することが期待される。そのためには、(ア)「怒り」と「嫌悪」の混同の状況と対応の考え方、(イ)結果を踏まえた過去の経験の振り返り、(ウ)補完行動の提案と環境調整や支援の考え方、(エ)表情識別訓練の実施可能性と課題の検討、(オ)感情語の理解や経験等(対人ストレスの評価を含む)の確認、(カ)特性への配慮などの検討が必要である。

F&T感情識別検査の結果は、非言語コミュニケーション(他者感情の識別)における特徴に気づいている場合はもとより、気づいていない場合においても、支援の課題を特定する上で、重要な知見を提供するものである。また、こうした結果を解釈する上で、職場適応の状況や対人ストレスの特徴を併せて検討することが必要であることが示唆された。

ただし、以上の検討に際し、比較に用いた定型発達者は大学生・大学院生である一方、協力を得た発達障害者の範囲は20代から50代に及んでいた。分析の結果、年代により回答傾向が異なっており、今回作成したF&T感情識別検査拡大版の基準値は限られた年代層に対応する暫定版と位置付ける必要があった。年代を考慮することは発達障害者の就労支援に関しても重要であることから、幅広い年齢層にある定型発達者のデータに基づいた検討が必要となっている。

### 2. 課題解明の方法

発達障害者の非言語コミュニケーション・スキルについて、F&T感情識別検査4感情版・拡大版に基づいて把握することは、彼らの対人関係の質やトラブル等の原因を理解するためにも、また、実際にこれらの困難について支援を計画する際にも、有益な情報を提供することになると考えられる。

こうした現状認識にたち、F&T感情識別検査拡大版を開発するための調査を企画・実施し、職業経験を有する成人の定型発達者のデータに基づき、基準値の作成を行った。次いで、F&T感情識別検査4感情版・拡大版による発達障害者の特性把握のための調査、及び発達障害者のコミュニケーションに関連した情報収集のための調査を企画・実施した。

#### (1) F&T感情識別検査拡大版の基準値作成に関する調査

- ① 調査対象：定型発達成人(職業経験を有する者) 319人  
(男性:163人・女性:156人/年齢範囲 20代から50代)
- ② 調査時期：平成26年10月～平成28年8月
- ③ 調査内容：F&T感情識別検査拡大版：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の3条件における評定  
質問紙調査：感情語(喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑)に対応する快-不快の程度  
調査時点における直近3か月間の感情経験の頻度/感情場面と感情語の対応  
表情写真が表現する感情と注目箇所/対人関係におけるストレス 等
- ④ 調査方法：検査は個別又は小集団で実施/質問紙調査は自記式回答で検査と同日に実施

#### (2) 発達障害者の特性把握と結果説明のための調査

- ① 調査対象：発達障害者124人(男性:98人・女性:26人/年齢範囲 20代から50代)
- ② 調査時期：平成24年10月～平成28年10月(研究計画その1/研究計画その2：本研究)

- ③ 調査内容：F&T 感情識別検査4感情版：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の3条件における評定  
F&T 感情識別検査拡大版：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の3条件における評定  
質問紙調査：感情語(喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑)に対応する快-不快の程度  
調査時点における直近3か月間の感情経験の頻度／感情場面と感情語の対応  
表情写真が表現する感情と注目箇所／対人関係におけるストレス 等  
調査結果の説明とヒアリング(コミュニケーション・スキルの活用に関する聞き取り調査)
- ④ 調査方法：検査は個別又は小集団で実施／質問紙調査は自記式回答で検査と同日に実施

### (3) 調査結果の検討

本研究は、「発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究…… F&T 感情識別検査拡大版に基づく検討……」(障害者職業総合センター, 2014: 研究計画その1)に引き続き、職業経験のある成人を対象とした基準値作成と発達障害者対象調査を継続(研究計画その2)することにより、「新版 F&T 感情識別検査」を完成させることを目的としている。

このため、定型発達者データ(基準値)・発達障害者データともに、発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究(その1・その2)で収集した全データに基づく結果分析と報告を行うこととした。

なお、本研究の成果として支援者に提供する検査(ソフトウェアインストールDVD)の名称を「新版 F&T 感情識別検査」とし、「4感情評定版」(F&T 感情識別検査4感情版(2012)を一部改修)と「快-不快評定版」(F&T 感情識別検査 拡大版(2014)の基準値を再構成)とから構成される総合評価ツールと位置づけることとした。

このため、本報告書では第I部以降、新版 F&T 感情識別検査として「4感情版」を「4感情評定版」、「拡大版」を「快-不快評定版」と記述している。

本報告書は3部で構成されている。第I部では、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版について、定型発達者を対象とした調査結果の検討結果を概観し(第1章)、検査特性に関する検討を行う(第2章)。また、第II部では、発達障害者の感情認知特性について、発達障害者の感情語に関する理解、感情の経験頻度並びに表情識別の概要(第1章)、4感情評定版の結果からみた発達障害者の特性(第2章)、快-不快評定版の結果からみた発達障害者の特性(第3章)に関する検討結果を概観する。さらに、第III部では、発達障害者のコミュニケーション・スキルにおける課題と支援について、対人ストレスの側面から発達障害者の特性理解のための検討結果(第1章)を概観した上で、事例からみた発達障害者支援の課題(第2章)の検討を行うとともに、結果解釈のポイントを取りまとめた(第3章)。

また、新版 F&T 感情識別検査(4感情評定版・快-不快評定版)の手引(巻末資料)を作成した。

なお、研究その1の詳細については、障害者職業総合センター調査研究報告書 №119 を参照されたい。

【文献】

- Ekman, P. (1982) *Emotion in the human face* (2nd ed.) Cambridge: Cambridge University Press.  
(Cited from McAlpine et al., 1992)
- Mehrabian, A. (1981) *Silent messages: Implicit communication of emotion and attitudes*, California: Wadsworth Publishing Company. (西田司・津田幸男・岡村輝人・山口常夫共訳 1986 非言語的コミュニケーション 聖文社)
- 障害者職業総合センター (2000) 調査研究報告書 №39 知的障害者の非言語的コミュニケーションスキルに関する研究 .....F&T 感情識別検査の開発 .....
- 障害者職業総合センター (2012) F&T 感情識別検査－4 感情版－ (ソフトウェア インストール DVD)
- 障害者職業総合センター (2014) 調査研究報告書 №119 発達障害者のコミュニケーションスキルの特性評価に関する研究 .....F&T 感情識別検査拡大版の開発と試行に基づく検討 .....

# はじめに

## 1. 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版における基準値作成の考え方

成人同士のコミュニケーションにおいては、音声や表情で明確に感情が表現される機会は子ども同士ほど多くはない。そのため、感情が明確に表現されない曖昧な音声や表情に関する認知特性を把握することは、職業生活場面等の対人関係における適応を支援する上で重要である。こうした問題関心により、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版は、曖昧な感情表現に対する発達障害者の認知特性を評価するための検査として開発された。その結果、研究計画その1（障害者職業総合センター，2014）では、男女別の基準値を設定する必要があること、ただし、年代別検討を行う必要が残されていることを結論として得た。

このため、研究計画その2（本研究）では、男女別・年代別の基準値に関する検討を行うこととし、研究計画その1と同様の枠組みで定型発達者対象調査を企画することとした。

## 2. 調査の概要

- (1) F&T 感情識別検査拡大版の開発に関する調査（研究計画その1：障害者職業総合センター，2014）
  - ① 調査対象：定型発達成人（大学生・大学院生）149人（男性78人／女性71人）
  - ② 調査時期：平成24年10月～平成25年2月
  - ③ 調査内容：F&T 感情識別検査拡大版：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の3条件における評定  
質問紙調査：感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に対応する快-不快の程度  
調査時点における直近3か月間の感情経験の頻度／感情場面と感情語の対応  
表情写真が表現する感情と着目箇所／対人関係におけるストレス 等
  - ④ 調査方法：検査は個別又は小集団で実施／質問紙調査は自記式回答で検査と同日に実施
- (2) 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の基準値作成に関する調査（研究計画その2：本研究）
  - ① 調査対象：定型発達成人（在職中もしくは職業経験のある20代から50代の者）319人  
（男性163人／女性156人）
  - ② 調査時期：平成26年10月～平成28年8月
  - ③ 調査内容：F&T 感情識別検査拡大版：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の3条件における評定  
質問紙調査：感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に対応する快-不快の程度  
調査時点における直近3か月間の感情経験の頻度／感情場面と感情語の対応  
表情写真が表現する感情と着目箇所／対人関係におけるストレス 等
  - ④ 調査方法：検査は個別又は小集団で実施／質問紙調査は自記式回答で検査と同日に実施

## 3. 調査対象者の考え方

- (1) 一般成人を対象者とすることの意義

我が国では、通常、学校を卒業すれば「雇用」関係に入ることが求められる。ただし、労働に対する報酬によって成立する「雇用」の仕組みに適応することは、それまでの教育支援の仕組みに適応することとは異なる側面を持つ。したがって、学校卒業後に「雇用」関係に入り、適応していく過程で困難に遭遇するのは当然のことかもしれない。職業指導（学校では進路指導・キャリアガイダンス）が制度化されているのもこのためである。

しかし、進路先未決定のまま卒業した「無業者」や「フリーター」、卒業前に進路変更をした「中退者」など、“学校紹介<sup>\*</sup>”による移行システムに乗らない若者の増加傾向に対し、様々な青少年対策や若年雇用支援対策が策定・施行されてきた。ただし、こうした対策の対象となる年齢範囲は法令により異なるばかりでなく、時代によっても変わってきた経緯がある。例えば、第1次～5次勤労青少年福祉対策基本方針（昭和45年～平成7年）における「青年」は「おおむね25歳未満」、第6次～7次勤労青少年福祉対策基本方針（平成8年～17年）では「おおむね30歳未満」、第8～9次勤労青少年福祉対策基本方針（平成18年～27年）では「35歳未満」とされているが、これは、雇用への移行の問題の長期化と対応しているとみることができる。このことは、若年雇用支援対策の対象範囲とも対応しており、平成28年現在、例えば、新卒応援ハローワークの対象は「就職活動中の学生、既卒3年以内の者」、わかものハローワークでは「おおむね45歳未満」、若者応援企業宣言事業では「35歳未満」、キャリア形成促進助成金（若年人材育成コース）では「採用後5年以内かつ35歳未満」等とされている。

発達障害のある若者の就労も、こうした雇用への移行の枠組みの中でとらえていくことになる。問題となるのは、知的発達に遅れが顕著でない発達障害者の場合、障害児のための特別支援学級や特別支援学校における支援を選択せずに高等学校に進学すること、さらに高等教育に進学するケースもあること、しかし、彼らの在学中に障害特性を踏まえた的確な移行支援が用意されていない場合、障害特性に対応した雇用支援を選択することなく、一般の求職活動を選択した結果、学卒後の「無業」や「非正規就業」のみならず就業後の「離転職」への支援が必要となることが確認されている（障害者職業総合センター，2006；2009）。ここには、発達障害者の雇用への移行を支援する上で、特性理解（自己理解）に基づく支援機関の選択にかかる課題がある。

また、職業生活への適応の問題による「休職」や「失業」、「離転職」への支援が必要となることも確認されている（障害者職業総合センター，2006；2009）。こうした適応上の問題が顕在化する契機は様々である。入職後、初期の職場適応には対応できても、異動や配置転換、能力開発、業務の管理・運営等々のキャリア形成過程で、業務の変化や人間関係に対応できなくなるといった事態が起こっていた。こうしたケースでは、不適応を背景として生じるストレスによって問題が深刻化していくことが多い。ここには、発達障害者の適応を支援する上で、特性理解（自己理解）に基づく支援機関の選択にかかる課題がある。

成人の基準値データ収集に際しては、学生・院生データとは異なる点として、各年代において職業経験のある対象者であることとした。このとき、いわゆる「移行」をめぐる若年の就業環境の中にいる者と、初期の職場適応には対応できても異動や配置転換、能力開発、業務の管理・運営等々のキャリア形成過程で業務の変化や人間関係への「適応」をめぐる課題に直面する者とは、支援を必要とする背景や行動等が異なる

---

\* 学校を卒業する生徒が入職するときに利用する職業紹介の方法は、縁故等の紹介、公共職業安定所（ハローワーク）の紹介、学校の紹介、新聞広告等、に大別できる。わが国では、3月に学校を卒業し、4月に入職するという場合が圧倒的に多く、こうした生徒・学生は新規学卒と呼ばれている。新規学卒に対する職業紹介には、公共職業安定所の職業指導に学校が協力して行う場合（職業安定法第25条の2）と、公共職業安定所の職業紹介の業務を学校が一部分担する場合（同法第25条の3）、学校が無料職業紹介事業を行う場合（同法第33条）がある。

いわゆる“学校紹介”における第25条の2の含意は学校が公共職業安定所の業務に協力し、職業紹介を円滑に進めることにある。また、第25条の3の含意は学校が公共職業安定所の業務の一部を分担することにより、在学中の進路指導の一環として、また卒業後の追指導の一環として、進路先の選択・決定に携わることにある。こうした制度の対象は、学校教育法第1条の規定による学校（小学校、中学校、高等学校、大学、高等専門学校、盲学校、ろう学校、特別支援学校及び幼稚園）であり、認定を受けた専修学校もこれに含まれる。

第25条に規定された紹介であれ、第33条で規定された紹介であれ、新規学卒の入職に際し、学校は教育的立場からみて適切でない職業についての求人・求職の申込を限定でき、生徒・学生の希望に基づいて、公正な紹介をする点で共通している。また就職後に、職場適応を阻害する問題が起こった場合には、公共職業安定所に要請し、あるいは協力を仰いでその解決に関する指導を行う。こうした点は、縁故や広告による入職に比べて、制度的に保護された支援の仕組みである。

可能性がある。「移行」の問題と「適応」の問題が、必ずしも年齢区分と対応して起こるわけではないことは留意しておかなければならないが、標準的なライフサイクルでみたとき、初期の職場適応の成否は若年雇用対策の対象年齢範囲と対応し、その後のキャリア形成過程における経験とは区分されるものであるとみることができるだろう。

こうしたことを踏まえ、検査得点については、一般成人においても大学生・院生と同様に男女の違いが認められるか、また、若年成人（おおむね 35 歳未満）とそれ以降の年代の成人とで違いが認められるかが検討事項となる。その上で、男女別・年齢区分別に基準値が必要であるかが検討されることになる。

## （2）定型発達者の確認について

次に問題となるのは、一般成人のデータの中に発達障害者のデータが含まれていないかどうかという点であろう。現実には、診断はあっても開示せず、苦労はあっても工夫しながら一般求人により職場に適応しているケースはあるだろう。また、様々なストレスがあっても、一般求人による職場への適応を志向している未診断のケースもあるに違いない。しかし、成人期の早くない時期に診断されるまで、あるいは診断後に発達障害者として支援の場に現れることになるまでは、一般求人により職業及び職場への適応を志向していたケースもあった（障害者職業総合センター，2009；2014）。

データ収集に際しては、研究課題と研究協力の内容を説明し、データ提供の同意を得ることで当事者（発達障害者）ではないことの確認に代えることとした（事後の本人からの申告等により、提供されたデータを当事者データとして分析することの同意を得た事例はあった）。

しかし、快刺激（「喜び」の一致率が 100 % に極めて近い刺激）を不快に評定した者については、障害の有無とは別に、一般基準には適合しない「外れ値」として除外する必要があると判断し、分析対象者から外すこととした。曖昧刺激に対する快-不快の評定に関する基準値を作成するに際し、快-不快の判断基準において、分析対象として適切ではないと考えたためである。

この基準により、成人男性 163 人、女性 156 人のうち、男性 15 人（9.2 %）、女性 9 人（5.8 %）が一般基準値の検討から除外された。なお、こうした除外データは男性に多く出現していることが確認された。

第 I 部の分析対象者はこうした外れ値を除く男性 148 人、女性 147 人の各年代層で構成されている。

## 4. 第 I 部の構成

第 1 章では、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版について検査刺激の概要と手続きを説明した上で、定型発達者を対象とした調査結果の検討結果を概観し、性別・年代別の在職者の検査結果とそれに基づき作成した基準値を報告する。

また、第 2 章では、本検査を発達障害者に適用するに当たり、検査の特徴を明確にしておく必要があることから、定型発達者を対象としたデータの分析結果に基づき、感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に対する快-不快評定、及び各感情の経験頻度についての検討をとおし、感情語の評定や感情の経験頻度と快-不快評定版における評定値との関連について報告する。

さらに、第 3 章では、検査結果の表示及び解釈の考え方について、結果呈示表に基づき、得点の意味や解釈の枠組みについて述べる。

【文献】

- 障害者職業総合センター（2006）軽度発達障害のある学校から職業への移行支援の課題に関する研究  
調査研究報告書 №71 第1章・第2章 59-99
- 障害者職業総合センター（2009）発達障害のある青年・成人の現状と課題（その2）調査研究報告書  
№88『発達障害者の就労支援の課題に関する研究』第Ⅱ部 169-239
- 障害者職業総合センター（2012）F&T感情識別検査－4感情版－（ソフトウェア インストール DVD）
- 障害者職業総合センター（2014）調査研究報告書 №119 発達障害者のコミュニケーションスキルの特性評価に関する研究 .....F&T感情識別検査拡大版の開発と試行に基づく検討 .....

# 第1章 快-不快評定版の基準値の作成

第1章では、新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の基準値の作成過程について報告する。第1節では、快-不快評定版の概要を説明する。第2節では、まず、検査刺激の特性に基づいて、検査得点に反映させる刺激の再構成を行った経過を報告する。次いで、発達障害の診断がない在職中の成人について、快-不快評定版の検査得点を男性と女性で比較を行った結果を報告する。これは、本研究その1（障害者職業総合センター調査研究報告書 №119, 2014）において、大学生・大学院生については男女別の基準値を作成したと同様、在職中の成人についても性別に基準値を作成すべきかどうかを検討したものである。さらに、分析対象とした在職者について、年齢区分による検査得点の違い、及び呈示条件による検査得点の違いを比較することで、基準値の条件や検査得点の解釈に資する情報について検討した結果を報告する。最後に、こうした検討により確認された快-不快評定版の基本的特性を要約する。第3節では、第2節の結果に基づき作成した基準値について報告する。

## 第1節 快-不快評定版の概要

### 1. 検査刺激

検査刺激として用いた音声及び表情の動画は、F&T感情識別検査の開発のために撮影した動画（障害者職業総合センター調査研究報告書 №39, 2000）から作成した。動画には演技者が幸福（喜び）、悲しみ、怒り、嫌悪、驚き、恐怖、軽蔑のいずれかの感情をこめて刺激文を読んでいる様子が撮影されていた。

#### （1）演技者

演劇等で意図的な感情表出の訓練を積んだ20代の男・女、各1人と40代の男・女、各1人の計4人であった。

#### （2）刺激文

感情を喚起する意味を含まない、以下の8文であった。

「おはようございます」	「こんにちは」	「はさみをとってください」
「おつかれさまでした」	「さようなら」	「頼みたいことがあるんです」
「さあ、いきましょう」	「今日は、いい天気ですね」	

#### （3）動画の撮影範囲

胸部より上とし、顔の大きさは刺激間でほぼ同一となるように調節した。

#### （4）刺激の呈示条件

動画の音声だけを呈示する「音声のみ」条件、動画の映像だけを呈示する「表情のみ」条件、音声と映像の両方を呈示する「音声+表情」条件の3種類であった。

### (5) 刺激の選定手続き

感情が明確に表現されていない刺激（以下、「曖昧刺激」という）を選定する調査を 23-61 歳の成人 10 人（男性 4 人／女性 6 人）を対象に実施し、その調査結果に基づいて、曖昧刺激を各呈示条件につき 9 刺激ずつ選定した。具体的には、曖昧刺激は次の 2 つの条件を満たすものとした。第 1 に刺激から読みとれた感情を 7 感情（喜び、悲しみ、怒り、嫌悪、驚き、恐怖、軽蔑）から回答（複数回答可）させた結果、特定の感情が調査対象者の 50 %（「音声＋表情」条件については 60 %）以下の者にしか選ばれていない、第 2 に回答に関する確信度（3 段階評定）の平均が 2 以下という条件とした。なお、曖昧刺激の選定手続きの詳細は、障害者職業総合センター調査研究報告書 №119 に掲載している。

## 2. 刺激系列の構成

各呈示条件の刺激系列は 9（曖昧刺激）× 2（反復呈示）＋ 3（快刺激）＋ 2（分析対象外の曖昧刺激）＝ 23 刺激で構成した。快刺激とは上記（5）で言及した曖昧刺激の選定調査において、調査対象者全員が「喜び」を選択した刺激である。また、選定調査の結果、曖昧刺激から読み取れた感情として「喜び」よりも「怒り」「嫌悪」や「軽蔑」といった不快感情が選択されやすかったことが示され、曖昧刺激は不快感情を喚起しうることが分かった。そのような不快刺激を繰り返し呈示することは被検査者にストレスを与える可能性があるため、快刺激を検査の刺激系列に加えた。また、快刺激の直後には、前述の 9 刺激とは別の曖昧刺激を呈示し、快刺激ともに分析から除外した。これは、快刺激によるストレス緩和がその後の評定に及ぼす影響を抑えるためである。

## 3. 刺激呈示の概要

1 試行はチャイム音と刺激番号の呈示（5 秒間）→ 刺激の呈示（2-3 秒間）→ 回答時間（5 秒間）で構成した（図 1-1-1）。

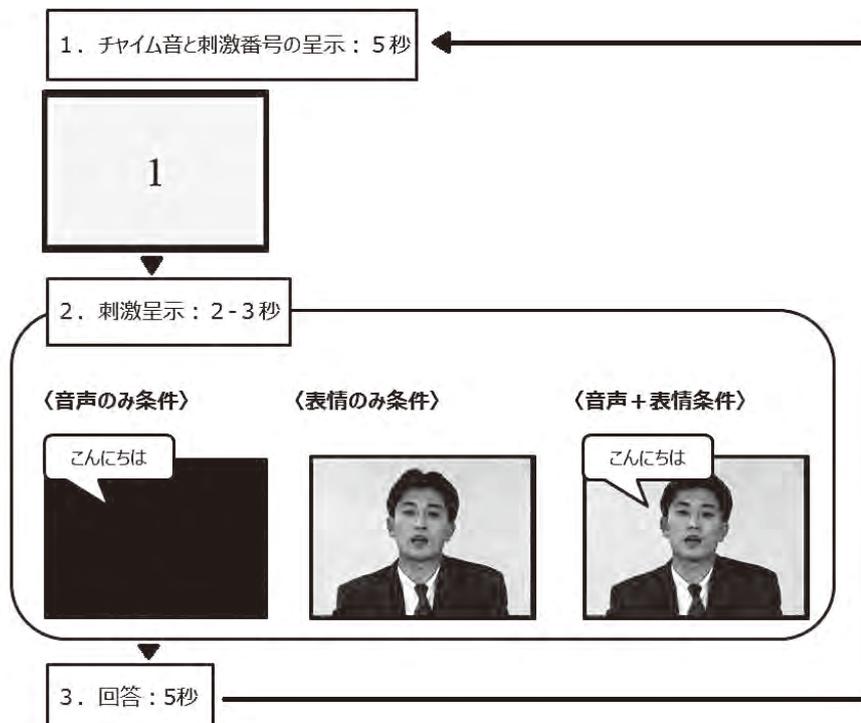


図1-1-1 快-不快評定版における1試行の構成

## 4. 回答方法

呈示された刺激から読み取れる快-不快の程度を9件法（「-4：非常に不快である」-「0：快でも不快でもない」-「+4：非常に快である」）で回答させ、それをその刺激の評定値（-4点～+4点）とする。回答は刺激消失後から5秒の間に回答用紙に記入させる。なお、各呈示条件の検査を実施する前に、調査対象者が回答方法を理解しているかを確かめるため、1試行ずつ練習試行を実施する。練習試行で呈示する刺激はいずれも快刺激である。

## 第2節 快-不快評定版の検査得点に関する検討

### 1. 目的

呈示条件別に選定した検査刺激について、不快度の高低により、刺激群を再構成して検査結果を呈示することが有効との観点から検査刺激の特性を評価する。その上で検査の構成について検討する。

次いで、発達障害の診断がない在職中の成人について、検査得点を男性と女性で比較することをとおして、性別に基準値を作成すべきかどうかを検討する。これは、発達障害の診断がない大学生・大学院生149人（男性78人／女性71人）の快-不快版の検査得点を分析したところ、「音声+表情」条件の得点について、女性が男性よりも有意に評定値が低かった（より不快に評定していた）ことから、性別に基準値を作成する必要があると報告したことに対応している（障害者職業総合センター調査研究報告書№119，2014）。

さらに、検査得点を年齢区分により比較し、年齢区分別に基準値を作成すべきかどうかを検討する。これは、発達障害者の快-不快版の検査得点を分析した結果、年齢によって回答傾向が異なる可能性を指摘し（障害者職業総合センター調査研究報告書№119，2014）、発達障害のない者においても検査得点の年齢差を検討した上で、基準値を作成する必要があることを課題として挙げたことに対応している。

また、刺激の呈示条件による検査得点の違いも検討する。これは、発達障害の診断がない大学生・大学院生の検査得点を呈示条件間で比較したところ、「音声+表情」条件>「表情のみ」条件>「音声のみ」条件の順に得点が低かった（より不快に評定していた）ことから、呈示条件別に基準値を作成する必要があると報告したことに対応している（障害者職業総合センター調査研究報告書№119，2014）。

### 2. 方法

#### （1）調査対象

調査時点で21-59歳（平均：39.4、標準偏差：10.3）の在職者（パート及びアルバイト除く）295人（男性148人、女性147人）であった。なお、検査得点の年齢区分による違いを検討する際に用いる年齢区分は次のとおりである。若年の年齢区分の考え方については、「第I部 はじめに」で述べたように時代によって異なっているが、ここでは、平成28年現在の若年雇用対策の対象範囲と対応させることとした。これは「雇用の構造に関する実態調査」<sup>\*1</sup>における若年労働者の定義である「調査日現在で満15～35歳

\*1厚生労働省が実施した統計調査の一つで、平成25年度調査においては、事業所における若年労働者の雇用状況、若年労働者の就業に関する意識など若年者の雇用実態について、調査を実施している。引用元：<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/4-21.html>

未満」とも対応しており、性別に年齢群の設定を行った。具体的には 35 歳未満の分析対象者からなる「34 歳以下群」（男性：60 人／女性：43 人）と 35 歳以上の分析対象者からなる「35 歳以上群」（男性：88 人／女性：104 人）とした。分析対象者の詳細を表 1-1-1 に示す。

表1-1-1 分析対象者

性別	年齢群	n	年齢			
			最小値	最大値	平均	標準偏差
男性	34歳以下	60	21	34	28.3	3.34
	35歳以上	88	35	59	45.3	7.35
女性	34歳以下	43	21	34	27.7	3.55
	35歳以上	104	35	59	45.7	6.82

### (2) 調査時期

2014 年 6 月-2016 年 8 月に実施した。

### (3) 手続き

快-不快評定版はパーソナルコンピュータ（以下、PC）のモニターで映像を呈示した個別実施と PC のモニターまたはスクリーンで映像を呈示した集団実施の 2 とおりで実施した。実施時間は各呈示条件につき約 7 分で、「音声のみ」条件 → 「表情のみ」条件 → 「音声+表情」条件の順に実施した。したがって、全 3 条件で計 21 分を要した。

## 3. 検査得点の算出

検査得点は、曖昧刺激の評定値における不快の程度が相対的に高い「高不快刺激」と低い「低不快刺激」を区別して算出した。これは、曖昧刺激の不快の程度によって、特に不快度の低い刺激に対する発達障害者の認知特性について、詳細に検討することが重要である場合を考慮したためである（障害者職業総合センター調査研究報告書 №119, 2014）。

高不快刺激と低不快刺激の分類は下記の①②の手続きで行った。

- ① 上記（1）で分析対象とした在職者 295 人と障害者職業総合センター調査研究報告書 №119 において分析対象とした大学生・大学院生 149 人の計 444 人（男性 226 人／女性 218 人）の検査結果を刺激の分類に用いた。まず、呈示条件ごとに各曖昧刺激の 1 回目と 2 回目の呈示時点の評定値の合計を算出した上で、その対象者間平均を算出した（表 1-1-2：「音声のみ」条件、表 1-1-3：「表情のみ」条件、表 1-1-4：「音声+表情」条件）。
- ② 呈示条件別に、曖昧刺激全 9 刺激についての対象者間平均の中央値を基準に、分析対象の曖昧刺激を高不快刺激と低不快刺激に分類した。具体的には、対象者間平均が中央値よりも低い（不快度が高い）刺激を「高不快刺激」（各呈示条件につき 4 刺激）とした。一方、対象者間平均が中央値よりも高い（不快度が低い）刺激を「低不快刺激」（各呈示条件につき 4 刺激）とした。なお、高不快刺激及び低不快刺激のそれぞれに属する刺激の内的整合性を確認するため  $\alpha$  係数を算出したところ、.64 から .80 の範囲であった（音声のみ条件の高不快刺激： $\alpha$  = .64、低不快刺激： $\alpha$  = .66、表情のみ条件の高不快刺激： $\alpha$  = .79、低不快刺激： $\alpha$  = .80、音声+表情条件の高不快刺激： $\alpha$  = .73、低不快刺激： $\alpha$  = .76）。

表1-1-2 「音声のみ」条件における各曖昧刺激の評定値についての対象者間平均・標準偏差 (n = 444)

刺激ID	高不快刺激					低不快刺激			
	B	I	E	D	F	G	H	C	A
平均値	-4.81	-2.15	-2.05	-1.83	-1.57	-0.82	-0.59	-0.45	-0.21
標準偏差	1.74	2.25	1.88	1.77	2.18	1.82	1.58	1.76	1.48

※ 刺激IDは刺激系列において1回目の呈示順序が早い順にアルファベットを付与した。

表1-1-3 「表情のみ」条件における各曖昧刺激の評定値についての対象者間平均・標準偏差 (n = 444)

刺激ID	高不快刺激					低不快刺激			
	A	D	C	G	H	E	B	F	I
平均値	-4.19	-3.97	-3.37	-2.81	-2.72	-2.69	-2.27	-1.97	-0.05
標準偏差	1.69	2.14	2.14	2.24	1.96	2.20	2.08	2.10	2.41

※ 刺激IDは刺激系列において1回目の呈示順序が早い順にアルファベットを付与した。

表1-1-4 「音声+表情」条件における各曖昧刺激の評定値についての対象者間平均・標準偏差 (n = 444)

刺激ID	高不快刺激					低不快刺激			
	A	E	F	B	I	C	D	G	H
平均値	-5.67	-5.54	-5.40	-4.29	-4.07	-4.01	-2.79	-2.48	-1.02
標準偏差	1.85	1.64	1.95	1.83	2.10	1.98	2.13	1.83	2.01

※ 刺激IDは刺激系列において1回目の呈示順序が早い順にアルファベットを付与した。

上記の手続きに基づき、高不快刺激に分類された曖昧刺激 4 刺激× 2 (反復呈示) の 8 刺激についての評定値の合計を高不快刺激得点とした。同様に、低不快刺激に分類された曖昧刺激 4 刺激× 2 (反復呈示) の 8 刺激についての評定値の合計を低不快刺激得点とした。なお、中央値を示した曖昧刺激 (各呈示条件につき 1 刺激) は検査得点の算出対象から除外した。

#### 4. 検査得点の性差

各検査得点の性差を検討するため、高不快刺激得点及び低不快刺激得点 (表 1-1-5) の男性と女性の差について、対応のない  $t$  検定を呈示条件別に実施した。その結果、「音声のみ」条件の低不快刺激、及び「表情のみ」条件の低不快刺激を除く、すべての条件の刺激において、女性が男性よりも有意に不快に評定していた (「音声のみ」条件の高不快刺激得点:  $t(293)=4.0$ ,  $p<.01$ , 「表情のみ」条件の高不快刺激得点:  $t(293)=3.1$ ,  $p<.01$ , 「音声+表情」条件の高不快刺激得点:  $t(293)=3.6$ ,  $p<.01$ 、低不快刺激得点:  $t(293)=3.1$ ,  $p<.01$ )。

以上より、快-不快版の検査得点には性差が認められたことから、基準値は性別に作成すべきことが示された。

表1-1-5 性別・呈示条件別の各検査得点の対象者間平均 (標準偏差)

性別	n	音声条件		表情条件		音声+表情条件	
		高不快刺激	低不快刺激	高不快刺激	低不快刺激	高不快刺激	低不快刺激
男性	148	-9.7 ( 4.68 )	-2.4 ( 4.42 )	-13.2 ( 6.27 )	-6.5 ( 7.30 )	-20.2 ( 5.52 )	-9.8 ( 6.60 )
女性	147	-12.1 ( 5.57 )	-2.6 ( 5.02 )	-15.5 ( 6.72 )	-8.0 ( 7.14 )	-22.5 ( 5.69 )	-12.1 ( 6.38 )

※ 網掛けは性別間で有意差 ( $p<.05$ ) のあった比較を示す。

## 5. 検査得点の年齢区分による差

### (1) 男性の場合

男性の分析対象者について、年齢区分別の検査得点の対象者間平均と標準偏差を表 1-1-6 に示した。検査得点の群間差について、対応のない  $t$  検定を呈示条件別を実施した結果、「音声のみ」条件の高不快刺激 ( $t(146)=2.4, p<.05$ ) 及び「表情のみ」条件の低不快刺激 ( $t(146)=2.0, p<.05$ ) について、34 歳以下群が 35 歳以上群よりも有意に不快に評定していた。

以上より、男性在職者については、快-不快評定版の検査得点に年齢区分による差が認められたことから、基準値は 34 歳以下の者と 35 歳以上の者について別々に作成する必要があることが示された。

表 1-1-6 男性における年齢群・呈示条件別の各検査得点の対象者間平均 (標準偏差)

年齢群	n	音声条件		表情条件		音声+表情条件	
		高不快刺激	低不快刺激	高不快刺激	低不快刺激	高不快刺激	低不快刺激
34歳以下	60	-10.8 ( 4.93 )	-2.4 ( 4.80 )	-14.3 ( 6.11 )	-8.0 ( 8.23 )	-20.3 ( 5.56 )	-10.6 ( 6.48 )
35歳以上	88	-9.0 ( 4.37 )	-2.4 ( 4.17 )	-12.5 ( 6.31 )	-5.5 ( 6.46 )	-20.1 ( 5.52 )	-9.3 ( 6.66 )

※ 網掛けは年齢区分間で有意差 ( $p<.05$ ) のあった比較を示す。

### (2) 女性の場合

女性の分析対象者について、年齢区分別の検査得点の対象者間平均と標準偏差を表 1-1-7 に示した。検査得点の群間差について、対応のない  $t$  検定を呈示条件別を実施した結果、有意な群間差はいずれの検査得点についても認められなかった。

以上より、女性在職者については、快-不快評定版の検査得点に年齢区分による差が認められなかったことから、在職中の成人全体の基準値を作成することとした。

表 1-1-7 女性における年齢群・呈示条件別の各検査得点の対象者間平均 (標準偏差)

年齢群	n	音声条件		表情条件		音声+表情条件	
		高不快刺激	低不快刺激	高不快刺激	低不快刺激	高不快刺激	低不快刺激
34歳以下	43	-12.8 ( 4.84 )	-2.5 ( 3.55 )	-15.9 ( 6.42 )	-7.9 ( 6.21 )	-21.5 ( 5.79 )	-10.7 ( 5.58 )
35歳以上	104	-11.8 ( 5.84 )	-2.6 ( 5.53 )	-15.4 ( 6.86 )	-8.1 ( 7.52 )	-22.9 ( 5.63 )	-12.8 ( 6.61 )

## 6. 検査得点の呈示条件による差

各検査得点の呈示条件による差を検討するため、高不快刺激得点及び低不快刺激得点 (表 1-1-8) の別に呈示条件を独立変数とした 1 要因の分散分析を実施した。この際、上記 4. 及び 5. の結果に基づき、基準値は男性については 34 歳以下の者と 35 歳以上の者を分けて作成し、女性については成人全体で作成することとしたため、これらの 3 群別に分析を実施した。

その結果、全ての群について、高不快刺激得点と低不快刺激得点の両方において有意な主効果が認められた (34 歳以下男性の高不快刺激得点:  $F(2, 118)=96.4, p<.01$ 、低不快刺激得点:  $F(1.8, 104.4)=53.0, p<.01$ 、35 歳以上男性の高不快刺激得点:  $F(2, 174)=178.5, p<.01$ 、低不快刺激得点:  $F(2, 174)=56.3, p<.01$ 、女性の高不快刺激得点:  $F(2, 292)=203.0, p<.01$ 、低不快刺激得点:  $F(2, 292)=152.8, p<.01$ )。Bonferroni 法 ( $p<.01$ ) による多重比較の結果、いずれの群についても高不快刺激得点と低不快刺激得点の両方におい

て、「音声+表情」条件<「表情のみ」条件<「音声のみ」条件の順に、有意に得点が低かった（より不快に評定していた）。以上より、快-不快評定版の検査得点は全ての呈示条件間において差が認められたことから、基準値は呈示条件別に作成すべきことが示された。

表1-1-8 群・呈示条件別の各検査得点の対象者間平均（標準偏差）

群	呈示条件	n	高不快刺激	低不快刺激
34歳以下男性	音声条件	60	-10.8 ( 4.93 )	-2.4 ( 4.80 )
	表情条件	60	-14.3 ( 6.11 )	-8.0 ( 8.23 )
	音声+表情条件	60	-20.3 ( 5.56 )	-10.6 ( 6.48 )
35歳以上男性	音声条件	88	-9.0 ( 4.37 )	-2.4 ( 4.17 )
	表情条件	88	-12.5 ( 6.31 )	-5.5 ( 6.46 )
	音声+表情条件	88	-20.1 ( 5.52 )	-9.3 ( 6.66 )
女性	音声条件	147	-12.1 ( 5.57 )	-2.6 ( 5.02 )
	表情条件	147	-15.5 ( 6.72 )	-8.0 ( 7.14 )
	音声+表情条件	147	-22.5 ( 5.69 )	-12.1 ( 6.38 )

※ 網掛けは呈示条件間で有意差 ( $p<.05$ ) のあった比較を示す。

## 7. まとめ

上記4. から6. までの検討により、在職の成人を対象とした場合の快-不快評定版の検査特性について、以下の点を確認できた。

### (1) 性差

「音声のみ」条件及び「表情のみ」条件については「高不快刺激得点」、「音声+表情」条件については「高不快刺激得点」と「低不快刺激得点」の両方について、女性の方が男性よりも得点が低く、不快に評定する傾向が認められた。女性が男性よりも不快に評定する傾向は、本研究その1（障害者職業総合センター調査研究報告書 №119, 2014）における大学生・大学院生を対象者についても「音声+表情」条件で認められている。以上のことから、概して女性の方が男性よりも快-不快評定版（特に「音声+表情」条件）の検査刺激を不快に評定する傾向があると言える。

### (2) 年齢区分による差

男性については、「音声のみ条件の高不快刺激得点」及び「表情のみ条件の低不快刺激得点」のそれぞれについて、34歳以下の者が35歳以上の者よりも得点が低く、不快に評定する傾向が認められた。しかし、女性については、年齢区分による差は認められなかった。なお、本研究その1（障害者職業総合センター調査研究報告書 №119, 2014）における大学生・大学院生を対象者については年齢区分による差を検討していない。以上のことから、少なくとも在職の成人男性については、年齢区分によって快-不快評定版の評定傾向に違いがあると言える。

### (3) 呈示条件による差

高不快刺激得点及び低不快刺激の両方について、在職の成人全体において、「音声+表情」条件<「表情のみ」条件<「音声のみ」条件の順に得点が低く、より不快に評定する傾向が認められた。同じ傾向は、本研究その1（障害者職業総合センター調査研究報告書 №119, 2014）における大学生・大学院生を対象者についても認められている。以上のことから、快-不快評定版においては「音声+表情」条件、「表情のみ」条件、「音声のみ」条件の順に、より不快に評定する傾向があると言える。

### 第3節 快-不快評定版の基準値

第2節の検討の結果、在職者についての快-不快評定版の基準値は「男性と女性の別に作成すべきこと」「男性については34歳以下の被検査者と35歳以上の被検査者の別に作成すべきこと」「女性については34歳以下の被検査者と35歳以上の被検査者とで同一のものを作成すること」「呈示条件別に作成すべきこと」が示された。したがって、在職中の成人を対象とした基準値として呈示条件別に3種類（34歳以下男性、35歳以上男性、女性）の基準値を作成した。

基準値には、第2節で分析対象とした在職者を基準集団とし、検査得点から換算したパーセンタイル順位を用いることとした。パーセンタイル順位とは、その検査得点が基準集団における検査得点の分布上のどの位置に該当するかを0から100の順位で示す指標である。快-不快評定版におけるパーセンタイル順位は、順位の数字が100に近いほど「曖昧刺激を快に」偏って判断する傾向が強く、0に近いほど「曖昧刺激を不快に」偏って判断する傾向が強いことを意味している。

検査得点をパーセンタイル順位に換算する表を、34歳以下の男性在職者については表1-1-9、35歳以上の男性在職者については表1-1-10、女性に在職者については表1-1-11にそれぞれ示した。高不快刺激得点から導出されるパーセンタイル順位は、感情が明確に表現されていないものの、比較的不快度が高い音声や表情からどのくらい快あるいは不快な感情を読み取っているかを表す指標として利用できる。一方、低不快刺激得点に基づき算出されるパーセンタイル順位は、感情が明確に表現されておらず、不快度が比較的低い音声や表情からどのくらい快あるいは不快な感情を読み取っているかを表す指標として利用できる。

表1-1-9 34歳以下の男性在職者の検査得点－パーセンタイル順位換算表

音声条件				表情条件				音声+表情条件			
高不快刺激		低不快刺激		高不快刺激		低不快刺激		高不快刺激		低不快刺激	
検査得点	パーセン タイル 順位	検査得点	パーセン タイル 順位	検査得点	パーセン タイル 順位	検査得点	パーセン タイル 順位	検査得点	パーセン タイル 順位	検査得点	パーセン タイル 順位
-22以下	0	-14以下	0	-30以下	0	-29以下	0	-30以下	0	-26以下	0
-21	1	-13	1	-29	1	-28	1	-29	1	-25	1
-20	1	-12	5	-28	3	-27	1	-28	5	-24	1
-19	3	-11	5	-27	3	-26	3	-27	11	-23	3
-18	5	-10	6	-26	4	-25	3	-26	15	-22	5
-17	10	-9	7	-25	5	-24	4	-25	16	-21	6
-16	13	-8	8	-24	6	-23	5	-24	20	-20	8
-15	18	-7	13	-23	10	-22	5	-23	28	-19	12
-14	25	-6	16	-22	11	-21	6	-22	45	-18	13
-13	28	-5	23	-21	12	-20	6	-21	54	-17	16
-12	33	-4	28	-20	13	-19	8	-20	55	-16	19
-11	44	-3	35	-19	20	-18	9	-19	59	-15	20
-10	50	-2	47	-18	22	-17	10	-18	66	-14	23
-9	62	-1	57	-17	25	-16	11	-17	69	-13	30
-8	67	0	67	-16	30	-15	15	-16	71	-12	35
-7	76	+1	77	-15	35	-14	20	-15	74	-11	42
-6	84	+2	83	-14	44	-13	22	-14	77	-10	49
-5	91	+3	89	-13	49	-12	28	-13	86	-9	54
-4	92	+4	91	-12	55	-11	32	-12	90	-8	59
-3	93	+5	94	-11	64	-10	37	-11	91	-7	62
-2	96	+6	94	-10	67	-9	40	-10	91	-6	69
-1	97	+7	98	-9	79	-8	47	-9	91	-5	74
0	98	+8	99	-8	84	-7	52	-8	91	-4	84
+1以上	100	+9以上	100	-7	91	-6	54	-7	91	-3	91
				-6	96	-5	57	-6	91	-2	93
				-5	98	-4	62	-5	91	-1	98
				-4	99	-3	71	-4	94	0	98
				-3以上	100	-2	74	-3	95	+1	99
						-1	77	-2	95	+2	99
						0	83	-1	96	+3以上	100
						+1	90	0	96		
						+2	91	+1	96		
						+3	94	+2	96		
						+4	95	+3	96		
						+5	95	+4	96		
						+6	96	+5	96		
						+7	96	+6	96		
						+8以上	100	+7	96		

表1-1-10 35歳以上の男性在職者の検査得点－パーセンタイル順位換算表

音声条件			
高不快刺激		低不快刺激	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-20以下	0	-14以下	0
-19	2	-13	1
-18	3	-12	1
-17	3	-11	1
-16	7	-10	2
-15	8	-9	5
-14	10	-8	6
-13	14	-7	12
-12	16	-6	14
-11	26	-5	20
-10	33	-4	25
-9	43	-3	35
-8	49	-2	42
-7	65	-1	51
-6	73	0	68
-5	78	+1	78
-4	87	+2	91
-3	93	+3	91
-2	95	+4	94
-1	96	+5	96
0	98	+6	97
+1以上	100	+7	98
		+8以上	100

表情条件			
高不快刺激		低不快刺激	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-29以下	0	-22以下	0
-28	1	-21	1
-27	2	-20	1
-26	3	-19	2
-25	3	-18	2
-24	5	-17	3
-23	5	-16	4
-22	6	-15	8
-21	8	-14	10
-20	10	-13	13
-19	12	-12	14
-18	12	-11	18
-17	17	-10	20
-16	20	-9	24
-15	27	-8	29
-14	37	-7	36
-13	42	-6	42
-12	45	-5	44
-11	55	-4	51
-10	57	-3	59
-9	65	-2	65
-8	77	-1	74
-7	79	0	82
-6	85	+1	85
-5	89	+2	89
-4	94	+3	90
-3	96	+4	94
-2	97	+5	96
-1	98	+6	97
0	99	+7	99
+1	99	+8	99
+2	99	+9	99
+3	99	+10以上	100
+4以上	100		

音声＋表情条件			
高不快刺激		低不快刺激	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-32	0	-27以下	0
-31	2	-26	1
-30	4	-25	2
-29	6	-24	4
-28	8	-23	4
-27	9	-22	5
-26	11	-21	7
-25	14	-20	7
-24	20	-19	8
-23	24	-18	8
-22	36	-17	9
-21	41	-16	11
-20	48	-15	12
-19	52	-14	14
-18	63	-13	25
-17	66	-12	26
-16	74	-11	29
-15	80	-10	37
-14	83	-9	43
-13	89	-8	51
-12	93	-7	56
-11	95	-6	66
-10	96	-5	78
-9	97	-4	81
-8以上	100	-3	85
		-2	89
		-1	94
		0	95
		+1	96
		+2	97
		+3	97
		+4	97
		+5	98
		+6	98
		+7	98
		+8	98
		+9以上	100

表1-1-11 女性在职者の検査得点—パーセンタイル順位換算表

音声条件				表情条件				音声+表情条件			
高不快刺激		低不快刺激		高不快刺激		低不快刺激		高不快刺激		低不快刺激	
検査得点	パーセン タイル 順位	検査得点	パーセン タイル 順位	検査得点	パーセン タイル 順位	検査得点	パーセン タイル 順位	検査得点	パーセン タイル 順位	検査得点	パーセン タイル 順位
-27以下	0	-17以下	0	-32	0	-27以下	0	-32	0	-28以下	0
-26	1	-16	1	-31	1	-26	1	-31	2	-27	1
-25	2	-15	1	-30	2	-25	1	-30	8	-26	1
-24	2	-14	2	-29	3	-24	1	-29	13	-25	2
-23	3	-13	2	-28	3	-23	4	-28	17	-24	2
-22	4	-12	3	-27	5	-22	4	-27	21	-23	3
-21	5	-11	3	-26	7	-21	4	-26	27	-22	4
-20	8	-10	4	-25	10	-20	5	-25	34	-21	6
-19	10	-9	6	-24	11	-19	6	-24	39	-20	10
-18	13	-8	10	-23	13	-18	8	-23	46	-19	14
-17	15	-7	12	-22	15	-17	9	-22	52	-18	17
-16	18	-6	16	-21	17	-16	12	-21	58	-17	21
-15	21	-5	24	-20	19	-15	16	-20	63	-16	23
-14	30	-4	33	-19	24	-14	18	-19	67	-15	30
-13	39	-3	41	-18	29	-13	19	-18	74	-14	36
-12	45	-2	50	-17	34	-12	24	-17	81	-13	39
-11	50	-1	58	-16	44	-11	31	-16	85	-12	45
-10	58	0	66	-15	48	-10	33	-15	89	-11	50
-9	66	+1	76	-14	54	-9	37	-14	90	-10	56
-8	72	+2	81	-13	62	-8	42	-13	93	-9	63
-7	80	+3	88	-12	64	-7	48	-12	95	-8	67
-6	85	+4	91	-11	69	-6	51	-11	97	-7	76
-5	92	+5	95	-10	76	-5	59	-10	98	-6	84
-4	96	+6	97	-9	82	-4	68	-9	99	-5	90
-3	97	+7	98	-8	87	-3	72	-8	99	-4	92
-2	99	+8	98	-7	90	-2	77	-7以上	100	-3	94
-1	99	+9	98	-6	93	-1	82			-2	97
0	99	+10	98	-5	95	0	89			-1	97
+1	99	+11	98	-4	96	+1	90			0	98
+2	99	+12	99	-3	97	+2	95			+1	98
+3	99	+13	99	-2	98	+3	97			+2	98
+4	99	+14以上	100	-1	99	+4	98			+3	98
+5	99			0以上	100	+5	98			+4	99
+6以上	100					+6	99			+5	99
						+7	99			+6	99
						+8	99			+7	99
						+9	99			+8	99
						+10以上	100			+9以上	100

## 第2章 快-不快評定版の検査特性に関する検討

第2章では、快-不快評定版で評価する「曖昧な感情表現からの他者感情の読み取りに関する特性」が、他者の感情認知に関わる他の認知特性や感情の経験とどのように関連しているのかについて検討した結果を報告する。新版 F&T 感情識別検査の結果をより良く活用する上で、このような認知特性や感情の経験に関する情報は、検査結果の補完情報としての意義を期待できる。

第1節では、「感情語に対応する快-不快度」という感情に関する知識と「感情の経験頻度」という感情の経験のそれぞれが快-不快評定版の検査得点とどのような関係があるかを検討した結果を報告する。第2節では、感情が喚起される場面と喚起される感情の種類との対応に関する知識の特徴を分析した結果を報告する。第3節では、表情から感情を読み取る際の着目箇所の特徴を分析した結果を報告する。

これらの情報を収集した質問紙調査の時間は、快-不快評定版実施前に行った調査が約5分、実施後に行った調査が約10分、合計でおおむね15分であった。

- ① 分析対象：第1章と同じ21～59歳の295人（男性148人／女性147人）の在職者
- ② 調査時期：2014年6月～2016年8月
- ③ 調査内容：感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に対応する快-不快度の評定  
調査時点における直近3か月間の感情経験の頻度／感情を喚起する場面と感情語の対応  
表情写真から読み取れる感情と着目箇所／対人関係におけるストレス 等
- ④ 調査方法：自記式回答

なお、対人関係におけるストレスに関する分析結果については、第Ⅲ部に掲載する。

### 第1節 感情語に対する快-不快評定と感情の経験頻度に関する検討

#### 1. 感情語に対応する快-不快度に関する評定

##### (1) 感情語に対応する快-不快度を評定する意義

定型発達者において、個別の感情が持つ快-不快の程度を把握することは、快-不快評定版における発達障害者の快-不快評定の基準が定型発達者と同様であるのかを判断する上で重要な指標となる。

第Ⅱ部では、こうした視点で検討を進めるが、ここでは「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「驚き」「恐怖」「軽蔑」の7種類の感情語について、それぞれどの程度、快あるいは不快であるかを「-4：非常に不快である」～「0：快でも不快でもない」～「+4：非常に快である」の9件法で回答させ、それをその感情語の得点（-4点～+4点）とした結果について報告する。この質問項目は、各感情語に対応する快-不快の程度に関して、一般に共有されている知識・理解を問うものであり、各個人がその感情語に対して抱く快-不快の程度を回答させるものではない。この点を明確にした上で回答を得るため、「この質問は、あなたが他の人を喜ばせたり、悲しませたり、軽蔑した時に感じる「快」もしくは「不快」の程度を答えるものではありません。」という教示を行った。したがって、不快感情（悲しみ・怒り・嫌悪・恐怖・軽蔑）に対して、快評定（「+1」から「+4」のいずれか）を行った男性4人は、感情語に対する理解が独特である者、または質問の意図を理解できていなかった者と判断し、以降の分析から除外した（有効分析対象者：291人）。なお、快感情である「喜び」に対して不快評定（「-1」から「-4」のいずれか）を行った者はいなかった。

(2) 感情語の快-不快度の基準

表 1-2-1 に感情語別の快-不快度の評定値の対象者間平均と標準偏差を示す。評定値に基づく、各感情語は、快の感情(喜び)、不快の感情(悲しみ・怒り・嫌悪・恐怖・軽蔑)、快でも不快でもない感情(驚き)、に分類できる。感情の種類によって、快-不快度に統計的な差が認められるかどうかを検討するために、感情の種類を独立変数とした1要因の分散分析を実施した。その結果、主効果が有意であった ( $F(5.1, 1467.2)=2077.9, p<.01$ )。Bonferroni 法 ( $p<.05$ ) による多重比較の結果、快-不快度は、不快度の低い方から順に、喜び > 驚き > 悲しみ > 軽蔑、恐怖 > 嫌悪、怒りであることが示された。なお、軽蔑と恐怖、嫌悪と怒り、それぞれの間には、有意差が認められなかった。なお、この傾向は障害者職業総合センター調査研究報告書 №119 (2014) で報告した大学生・大学院生を対象とした分析結果でも認められている。

表1-2-1 感情語に対する快-不快評定の対象者間平均と標準偏差 (n = 291)

感情語の種類	快 ←————→ 不快					
	喜び	驚き	悲しみ	軽蔑	恐怖	嫌悪・怒り
平均	3.6	-0.2	-2.2	-2.8	-3.0	-3.3
標準偏差	( 0.59 )	( 0.99 )	( 1.32 )	( 1.05 )	( 1.18 )	( 0.84 ) ( 0.90 )

次に、上記の傾向が性別により異なるかを検討した(表 1-2-2)。快-不快度の性差について感情語別に t 検定を行った結果(有効分析対象者：男性 144 人/女性 147 人)、「喜び」と「怒り」についてのみ、有意差が認められた(喜び： $t(276.6)=2.3, p<.05$ 、怒り： $t(289)=2.0, p<.05$ )。「喜び」については女性が男性より快に、「怒り」については女性が男性より不快に、それぞれ評定していた。なお、障害者職業総合センター調査研究報告書 №119 (2014) で報告した大学生・院生を対象とした分析結果では、このような性差は認められていない。したがって、感情語に対応する快-不快度の性差には職業経験が関連している可能性がある。

表1-2-2 性別の感情語に対する快-不快評定の対象者間平均(標準偏差)

性別	n	喜び	驚き	悲しみ	軽蔑	恐怖	嫌悪	怒り
男性	144	3.6 ( 0.64 )	-0.2 ( 0.92 )	-2.2 ( 1.29 )	-2.7 ( 1.08 )	-2.9 ( 1.20 )	-3.3 ( 0.86 )	-3.3 ( 0.87 )
女性	147	3.7 ( 0.53 )	-0.1 ( 1.05 )	-2.2 ( 1.35 )	-3.0 ( 1.02 )	-3.1 ( 1.15 )	-3.2 ( 0.83 )	-3.5 ( 0.92 )

※ 網掛けは性別間で有意差 ( $p<.05$ ) のあった比較を示す。

次に、快-不快評定版の検査結果の解釈に際し、感情語に対する快-不快評定に関する情報を参考にする場合に、年齢区分をどのように考慮すべきかを検討するため、基準値が年齢区分で異なる男性について、感情語別の快-不快評定の結果を年齢区分間で比較した(表 1-2-3)。男性の分析対象者を 34 歳以下と 35 歳以上に分け、年齢区分による差について、感情語別に t 検定を行った結果(有効分析対象者：34 歳以下 60 人/35 歳以上 88 人)、35 歳以上群が 34 歳以下群よりも「恐怖」をより不快に評定していた ( $t(3.6)=103.5, p<.01$ )。それ以外の感情語については有意な年齢区分による差は認められなかった。

表1-2-3 男性における年齢群別の感情語に対する快-不快評定の対象者間平均(標準偏差)

年齢	n	喜び	驚き	悲しみ	軽蔑	恐怖	嫌悪	怒り
34歳以下	60	3.5 ( 0.70 )	-0.2 ( 1.01 )	-2.1 ( 1.33 )	-2.7 ( 1.30 )	-2.5 ( 1.36 )	-3.3 ( 0.97 )	-3.2 ( 1.14 )
35歳以上	88	3.6 ( 0.60 )	-0.2 ( 0.91 )	-2.3 ( 1.29 )	-2.7 ( 1.02 )	-3.2 ( 1.03 )	-3.3 ( 0.81 )	-3.2 ( 1.02 )

※ 網掛けは年齢区分間で有意差 ( $p<.01$ ) のあった比較を示す。

## 2. 感情の経験頻度に関する評定

### (1) 感情の経験頻度を評定する意義

坂上（1999）は状況を特定しない曖昧な場面において、人物の感情を推測する際に回答者自身の感情の経験のしやすさが影響することを報告している。この知見に基づくと、曖昧刺激を使用している快-不快評定版の結果を解釈する上で、回答者自身の感情の経験のしやすさが評定に及ぼす影響を検討する必要がある。

ここでは「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「驚き」「恐怖」「軽蔑」の7種類の感情の経験頻度について、調査時点から遡って3か月間の間に、それぞれの程度の頻度で経験したかを「0：まったくなかった」－「2：月に1回あった」－「4：週に1回あった」－「6：毎日あった」の7件法で回答させた結果について報告する。

### (2) 感情の経験頻度の基準

感情の経験頻度を感情間で比較しやすくするために、7件法で評定させた頻度に基づき、対象者を経験頻度の水準が異なる3群に分けた（経験頻度低群：まったくなかった～ほとんどなかった、中群：月1回～数回程度あった、高群：週数回～毎日あった）。図1-2-1に感情の種類別に経験頻度に関する各群の人数の割合を示す（有効分析対象者：男性148人/女性147人）。

図から、直近3か月間の感情経験は、喜びの経験が多く、恐怖や軽蔑の経験は相対的に少ないことがみてとれる。この傾向は、障害者職業総合センター調査研究報告書№119（2014）で報告した大学生・大学院生を対象とした分析結果でも認められている。

次に、上記の傾向が性別により異なるかどうかを検討した。性別による経験頻度群の人数比について感情の種類別に $\chi^2$ 検定を行った結果（有効分析対象者：男性148人/女性147人）、どの感情についても有意な人数の偏りは認められなかった。なお、障害者職業総合センター調査研究報告書№119（2014）で報告した大学生・大学院生を対象とした分析結果では、「喜び」「悲しみ」「驚き」について男性の方が経験頻度が高い、という性差が認められていた。したがって、感情の経験頻度の性差は、職業経験の有無により、その様相が異なる可能性がある。

次に、快-不快評定版の検査結果の解釈に際し、感情の経験頻度に関する情報を参考にする場合に、年齢区分をどのように考慮すべきかを検討するため、基準値が年齢区分で異なる男性について、年齢区分による経験頻度群の人数比を検討した（図1-2-2）。男性の分析対象者を34歳以下と35歳以上に分けて（有効分析

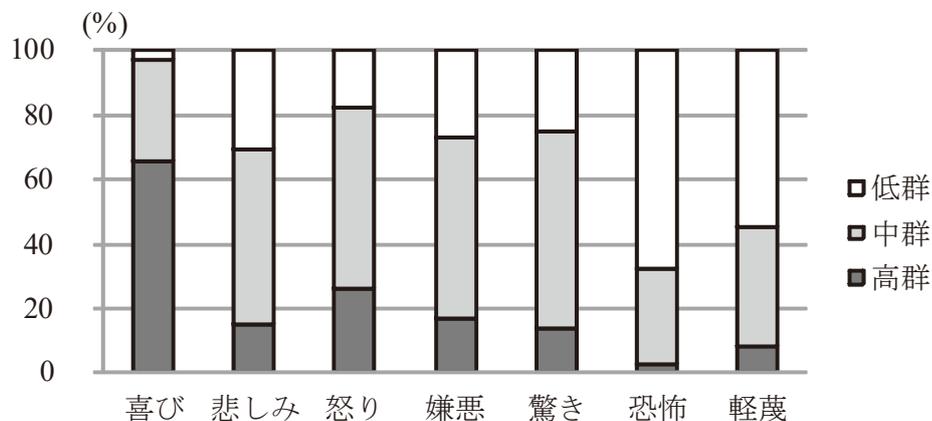


図1-2-1 感情の経験頻度による人数の割合 (n = 295)

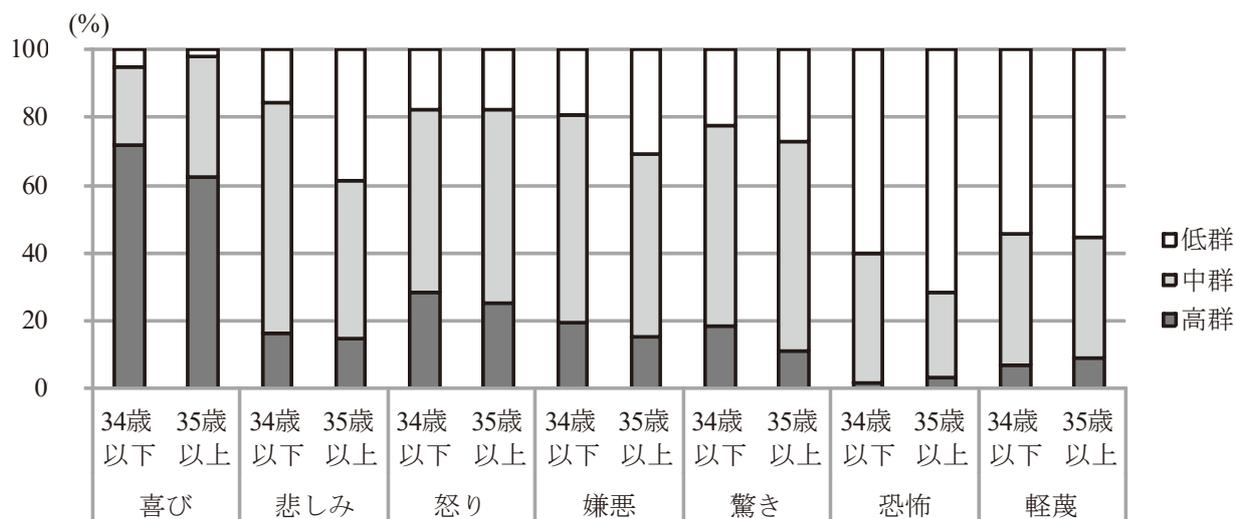


図1-2-2 男性における年齢区別の感情の経験頻度による人数の割合 (n = 148)

対象者：34歳以下 60人 / 35歳以上 88人)、経験頻度群の人数比について感情の種類別に  $\chi^2$ 検定を行った結果、「喜び」について、35歳以上群の方が34歳以下群よりも経験頻度が高い（低群の割合が少ない）ことが示された ( $\chi^2=6.8, df=2, p<.05$ )。

### 3. 感情語の快-不快評定、感情の経験頻度と快-不快評定版の検査得点との関連

#### (1) 感情語の快-不快評定と快-不快評定版の検査得点との関連

感情語に対応する快-不快度に関する評定値と快-不快評定版の検査得点との関連について検討（ピアソンの積率相関分析）を行った結果を表1-2-4に示す（有効分析対象者：291人）。有意に認められた相関であっても、相関係数の大きさからは弱い相関しか認められなかったことから、快-不快評定版の検査得点は、感情語の快不快度評定とはほとんど関連がないことが示唆された。同様の傾向は、障害者職業総合センター調査研究報告書 №119（2014）で報告した大学生・大学院生を対象とした分析結果でも認められていることから、発達障害の診断のない者においては、感情語に対応する快-不快度と快-不快評定版の検査得点の間には、ほとんど関連はないと言える。

表1-2-4 快-不快評定版の検査得点と感情語に対する快-不快評定とのピアソンの積率相関係数 (n=291)

快 - 不快評定版の検査得点		感情語の快 - 不快評定						
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
音声条件	高不快刺激	-.08	.15 *	.09	-.04	.03	.07	.08
	低不快刺激	-.08	.10	.09	-.07	.04	.03	.04
表情条件	高不快刺激	-.14 *	.12 *	.12 *	.02	.08	.02	.16 **
	低不快刺激	-.06	.19 **	.08	.03	.12 *	.06	.12
音声+表情条件	高不快刺激	-.18 **	.16 **	.11	-.04	.02	.07	.04
	低不快刺激	-.11	.23 **	.16 **	-.02	.02	.09	.08

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

(2) 感情の経験頻度と快-不快評定版の検査得点との関連

感情の経験頻度と快-不快評定版の検査得点との関連を検討するため、感情の経験頻度 3 群間の検査得点の差について 1 要因の分散分析を感情及び検査得点の種類別に実施した（有効分析対象者：295 名）。分析の結果、「怒り」「嫌悪」「恐怖」の 3 種類の不快感情の経験頻度について、検査得点との関連が有意に認められた（怒り： $F(2, 292)=5.2, p<.01$ 、嫌悪： $F(2, 292)=3.8, p<.05$ 、恐怖： $F(2, 292)=3.5, p<.05$ ）。Bonferroni 法 ( $p<.05$ ) による多重比較（ただし、等分散性が認められなかった「怒り」については Games-Howell 法）の結果、下記のような群間差が有意に認められた。

- ・怒り：音声+表情条件の低不快刺激を経験頻度高群が中群よりも不快に評定
- ・嫌悪：音声+表情条件の低不快刺激を経験頻度低群が中群よりも不快に評定
- ・恐怖：表情条件の低不快刺激を経験頻度高群が低群よりも不快に評定

図 1-2-3 に「怒り」、図 1-2-4 に「嫌悪」、図 1-2-5 に「恐怖」に関する結果をそれぞれ示す。

なお、障害者職業総合センター調査研究報告書 №119（2014）で報告した大学生・大学院生を対象とした分析結果では、上記のような感情の経験頻度と快-不快版の検査得点の関連は認められていなかった。したがって、感情の経験頻度と快-不快評定版の検査得点の関連性は、職業経験の有無により異なる可能性がある。

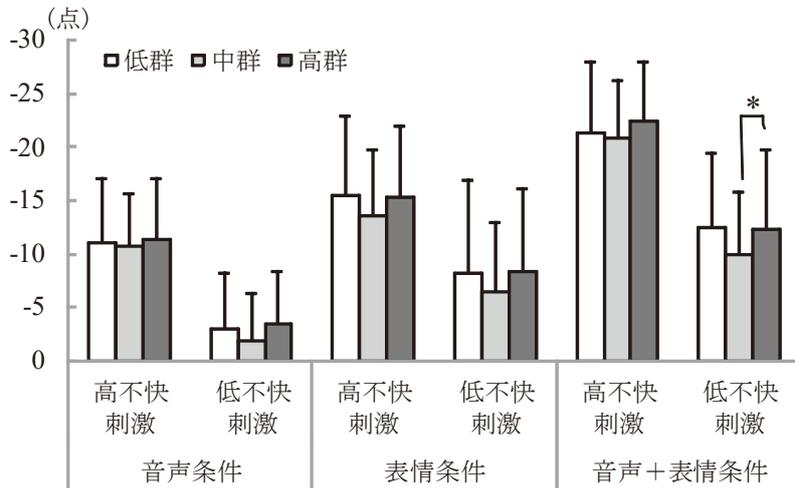


図1-2-3 怒りの経験頻度群別の快-不快評定版検査得点 ( $n = 295$ 、誤差棒は標準偏差) \* $p<.05$

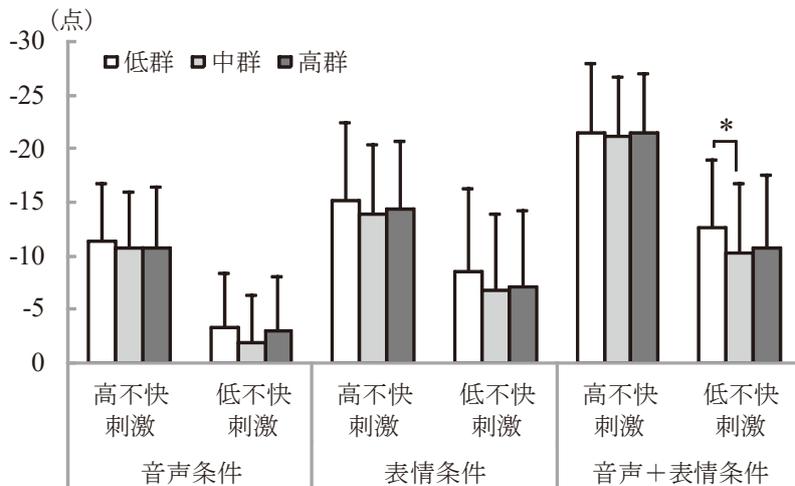


図1-2-4 嫌悪の経験頻度群別の快-不快評定版検査得点 ( $n = 295$ 、誤差棒は標準偏差) \* $p<.05$

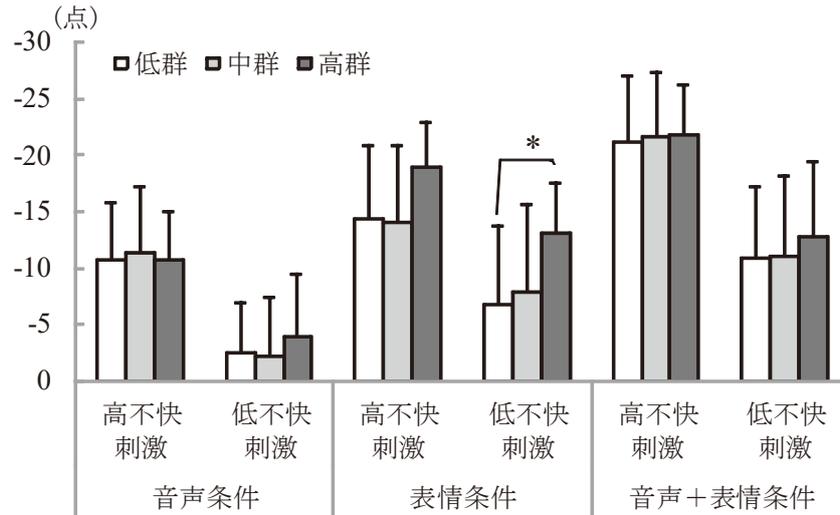


図1-2-5 恐怖の経験頻度群別の快-不快評定版検査得点 (n = 295、誤差棒は標準偏差) \*p<.05

#### 4. 快-不快評定版の特性について

感情語の快-不快評定について、「喜び」と「怒り」について性差が認められた一方で、年齢区分による差は認められなかった。具体的には、「喜び」については女性が男性より快に、「怒り」については女性が男性より不快に評定する傾向が見いだされた。このような傾向は、大学生・大学院生では認められなかったことから、感情語に対応する快-不快度の性差には職業経験が関連している可能性が示唆された。また、快-不快評定版の検査得点について年齢区分による差が認められた男性においては、35歳以上の在職者が34歳以下の在職者よりも「恐怖」をより不快に評定する傾向が認められた。しかし、感情語の快-不快評定と快-不快評定版の検査得点の間にはほとんど関連が認められなかった。

また、感情の経験頻度については、性差は認められなかった一方で、男性において「喜び」を35歳以上の在職者の方が34歳以下の在職者よりも多く経験しているという年齢区分による差が認められた。さらに、「怒り」「嫌悪」「恐怖」の3種類の不快感情の経験頻度については、快-不快評定版の検査得点との間に関連が認められた。注目すべき点は不快感情の経験頻度と関連が認められたのは「低不快刺激」についての検査得点であり、曖昧刺激の中でも特に不快度の低い刺激に対する認知特性（評定の特徴的な傾向など）については、経験のみならず、経験の質・量に関する確認などと併せて詳細に検討する必要性を確認できた。なお、このような感情の経験頻度と快-不快評定版の検査得点の関連は大学生・大学院生では認められていないことから、職業経験によって感情の経験頻度と快-不快評定版の関連性は異なることが示唆された。

こうした知見を踏まえ、発達障害者に快-不快評定版を適用するに当たり、以下の点の検討が必要である。

- ① 発達障害者における「感情語の快-不快評定の構造」は、障害の診断がない在職者と同様であるのか、
- ② 障害の診断がない在職者と同様に、感情語の快-不快評定と快-不快評定版の検査結果との関連は見いだされないのか、
- ③ 障害の診断がない在職者において認められた、感情の経験頻度と快-不快評定版の検査得点との関連は発達障害者においても同様に確認できるのか等を明らかにする必要がある。

## 第2節 感情場面に対応する感情語の選択に関する検討

感情が喚起される場面について、その場面で喚起される感情の種類を適切に選択できるかどうかは、快不快評定版を実施するに当たっての重要な確認事項である。場面と感情語との対応を把握するために、以下に示す14の場面を自分が経験した場合に、どのような気持ちになるのかについて、感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）を1つ選択させた（有効分析対象者：295人）。図1-2-6に回答の集計結果を示す。

1. 長い間、会っていなかった知人や友人と偶然出会ったとき
2. 他人に嫌がらせをしている人を見かけたとき
3. 試験に合格したとき
4. 苦手な生物（クモ・ヘビ・ゴキブリなど）を近くで見たとき
5. 仲の良い知人や友人が遠くに引っ越すことになったとき
6. いい加減な態度や無責任な態度をとる人を見たとき
7. 初対面の人に、なれなれしい言葉で話しかけられたとき
8. 階段から足を滑らせて落ちそうになったとき
9. 面倒な作業を人から押しつけられたとき
10. 知人や友人に嘘をつかれたとき
11. 時間をかけて作成したレポートや書類を誤って自分で削除したり、紛失したとき
12. 大きな地震が起こったとき
13. 努力して作成したレポートや書類を先生や上司にほめられたとき
14. 信頼していた知人や友人に約束を破られたとき

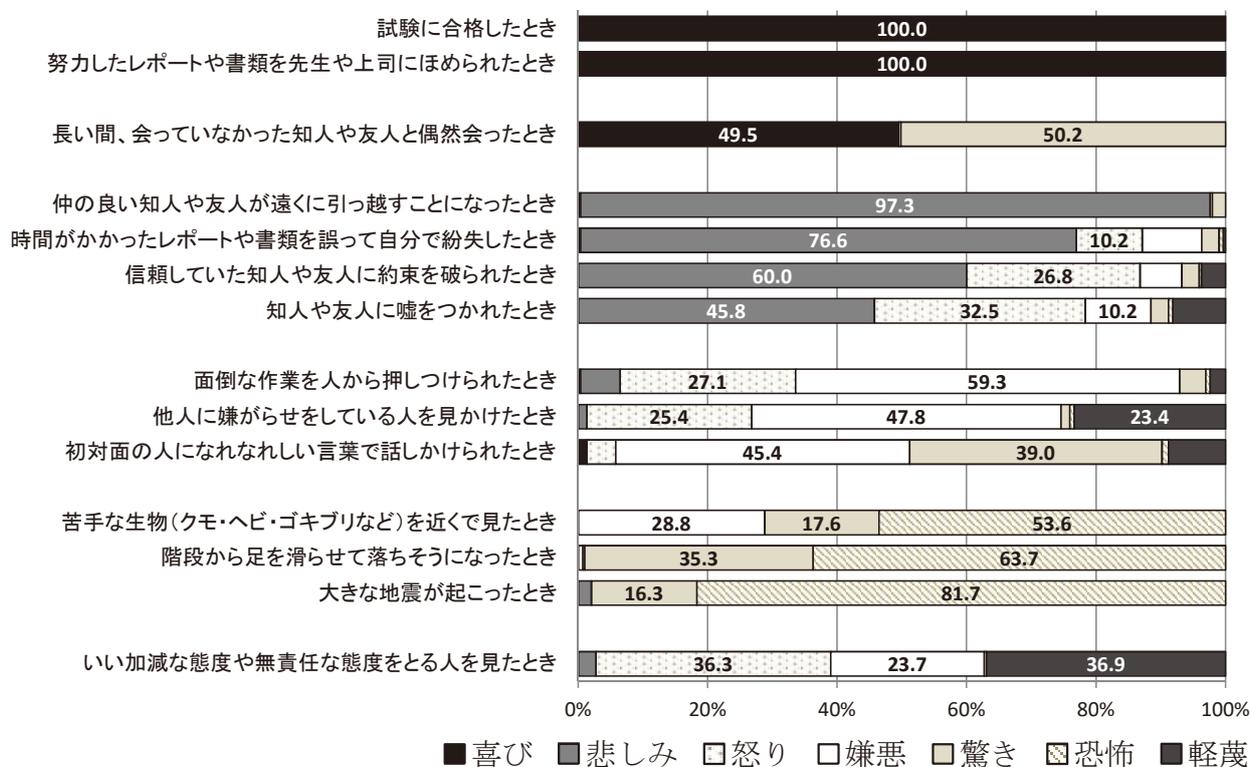


図1-2-6 各場面に対応する感情語の選択率

図からは、次の5点を指摘することができる。

(ア)「喜び」「悲しみ」については、回答者の9割以上が同一の感情を選択した場面があった。

- ・全員が「喜び」を選択： 「試験に合格したとき」  
「努力したレポートや書類を先生や上司にほめられたとき」
- ・9割以上が「悲しみ」を選択： 「仲の良い知人や友人が遠くに引っ越すことになったとき」

(イ) 回答者の9割以上が「驚き」「恐怖」のいずれかを選択：

- 「階段から足を滑らせて落ちそうになったとき」
- 「大きな地震が起こったとき」

(ウ) 回答者の9割以上が「喜び」「驚き」のいずれかを選択：

- 「長い間、会っていなかった知人や友人と偶然会ったとき」

(エ) ①②③以外の8場面では、いずれかの2種類の感情の選択率を合わせても9割を越える場面はなく、場面に対応する感情語として特定の感情語が極端に偏って選択されることはない場面であった。

(オ)「試験に合格したとき」「努力したレポートや書類を先生や上司にほめられたとき」「長い間、会っていなかった知人や友人と偶然会ったとき」以外の11場面では「喜び」が選択されることは全くないか、極めて稀であった。

上記の回答傾向が性別によって異なるかを検討するため、各選択肢を選択した人数の比率について場面別に $\chi^2$ 検定を行ったところ（有効分析対象者：男性148人／女性147人）、以下の場面について有意な男女差が認められた。なお、障害者職業総合センター調査研究報告書№119（2014）で報告した大学生・大学院生を対象とした分析結果では、このような性差は認められていないことから、感情喚起場面に対応する感情語の選択に関する傾向は職業経験によって異なる可能性がある。

- ・「他人に嫌がらせをしている人を見かけたとき」（ $\chi^2=11.8, df=5, p<.05$ ）
  - 「悲しみ」及び「驚き」の選択率： 男性 > 女性
- ・「苦手な生物（クモ・ヘビ・ゴキブリなど）を近くで見たとき」（ $\chi^2=17.2, df=2, p<.01$ ）及び「階段から足を滑らせて落ちそうになったとき」（ $\chi^2=21.7, df=5, p<.01$ ）及び「大きな地震が起こったとき」（ $\chi^2=17.8, df=2, p<.01$ ）
  - 「驚き」の選択率： 男性 > 女性
  - 「恐怖」の選択率： 男性 < 女性
- ・「初対面の人になれなれしい言葉で話しかけられたとき」（ $\chi^2=21.7, df=5, p<.01$ ）
  - 「怒り」及び「嫌悪」の選択率： 男性 > 女性
  - 「驚き」の選択率： 男性 < 女性
- ・「知人や友人に嘘をつかれたとき」（ $\chi^2=12.1, df=3, p<.01$ ）
  - 「軽蔑」の選択率： 男性 > 女性
  - 「悲しみ」の選択率： 男性 < 女性

また、回答傾向が年齢区分によって異なるかを検討するため、分析対象者を34歳以下と35歳以上に分けた上で（有効分析対象者：34歳以下103人／35歳以上192人）、各選択肢を選択した人数の比率について場面別に $\chi^2$ 検定を行ったところ、以下の場面について有意な年齢区分による差が認められた。

- ・「他人に嫌がらせをしている人を見かけたとき」 ( $\chi^2=11.2, df=5, p<.05$ )
  - 「怒り」の選択率： 34歳以下 < 35歳以上
- ・「階段から足を滑らせて落ちそうになったとき」 ( $\chi^2=9.7, df=3, p<.01$ )
  - 「驚き」の選択率： 34歳以下 > 35歳以上
  - 「恐怖」の選択率： 34歳以下 < 35歳以上

これらの結果は、被検査者が複数の項目にわたって不適切な回答をした場合、その者の特性の理解や結果のフィードバックに際し、注意を要することを示唆するものである。

具体的には、「喜び」が回答として期待される場面で、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「軽蔑」という回答があった場合や、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「軽蔑」が回答として期待される場面で、「喜び」という回答があった場合には、感情に対して適切な感情名が対応づけられていない可能性や回答の背景を検討する必要があることを意味している。

また、他者の感情を推測する上で、「人はどのような場面において、どのような感情を経験するか」といった知識は重要な手がかりになる。このような知識について、他者の認識とのずれが大きい場合は、コミュニケーションを阻害する原因となる。したがって、定型発達者と発達障害者のそれぞれがどのような「場面と感情の対応関係に関する知識」を持っており、どのように違っているかを明らかにすることは、発達障害者のコミュニケーションにおける課題の原因を特定する上で有益である。第Ⅱ部では、こうした視点で検討を進める。

### 第3節 表情識別の際の着目箇所に関する検討

発達障害者の表情認知に関する先行研究から、「目」をみて感情識別をすることには困難がある可能性が指摘されていること (Bal,E.他, 2010 ; Kirchner, J.C.他, 2011 ; Nakano,T.他, 2010 ; Spezio, M.L.他, 2007) から分かるように、顔の着目箇所に関する情報を整理しておくことは、表情による感情識別を苦手とする対象者支援にとって意味を持つ。

そこで、「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」のそれぞれの感情を1名の女性が表出した顔写真を呈示し、それぞれの表情から読み取れる感情として最も当てはまるものを「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「驚き」「恐怖」「軽蔑」から1つだけ選ばせた。その上で、選択した感情が強く表れている顔の部分で○で囲むよう、顔写真に直接記入させた。この際、○は複数箇所につけてもよいことを伝えた。表情写真の呈示順序は「嫌悪」「悲しみ」「喜び」「怒り」であった。

表 1-2-5 に呈示した表情写真別に、① 表情から読み取れる感情として選択した回答別の全対象者数に占める割合、② ①で選択した感情が強く表れているとして指摘された顔の箇所のそれぞれについて、全対象者数に占める割合を示した。②に関しては、表情を識別する際に手がかりとされることが多い顔の箇所である「眉」「眉間」「目」「鼻」「口」「鼻唇溝」のそれぞれについて、対象者が円で囲んでいたかどうかを本研究の担当者2人が各自判定した。なお、前述の6か所以外が円で囲まれていた場合は「その他」としてカウントした。また、評定者間で判定が異なっていた箇所については、別の研究担当者1人の判定により最終的な判定を確定した。2人の評定者間信頼性の指標として、ピアソンの積率相関係数を写真別及び顔の箇所別に算出したところ、.59～1.00の範囲であった。

表1-2-5 表情から読み取った感情と表情の着目箇所の選択率

顔写真	回答									
	感情	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑		
	全体	<b>99.7%</b>	0.3%							
	男性	<b>100.0%</b>								
	女性	<b>99.3%</b>	0.7%							
	注目箇所	眉	眉間	目	鼻	鼻唇溝	口	その他		
	全体	42.0%	7.8%	72.5%	16.3%	47.5%	<b>97.3%</b>	8.1%		
	男性	45.3%	10.1%	73.6%	18.9%	56.1%	<b>96.6%</b>	4.7%		
	女性	38.8%	5.4%	71.4%	13.6%	38.8%	<b>98.0%</b>	11.6%		
		感情		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
		全体			<b>89.2%</b>	0.3%	1.0%	1.0%	1.7%	6.8%
男性				<b>82.4%</b>	0.7%	1.4%	2.0%	1.4%	12.2%	
女性				<b>95.9%</b>		0.7%		2.0%	1.4%	
注目箇所		眉	眉間	目	鼻	鼻唇溝	口	その他		
全体		57.3%	13.9%	<b>91.9%</b>	1.4%	2.4%	25.1%			
男性		50.0%	14.2%	<b>91.9%</b>	1.4%	2.7%	23.6%			
女性		64.6%	13.6%	<b>91.8%</b>	1.4%	2.0%	26.5%			
		感情	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑	
	全体	0.3%		<b>85.4%</b>	2.7%	4.7%	1.4%	5.4%		
	男性	0.7%		<b>81.8%</b>	2.0%	5.4%	2.7%	7.4%		
	女性	0.0%		<b>89.1%</b>	3.4%	4.1%		3.4%		
	注目箇所	眉	眉間	目	鼻	鼻唇溝	口	その他		
	全体	83.7%	16.6%	<b>96.3%</b>	1.4%	2.0%	38.6%	0.7%		
	男性	84.5%	18.2%	<b>95.3%</b>	2.0%	3.4%	33.1%	0.7%		
	女性	83.0%	15.0%	<b>97.3%</b>	0.7%	0.7%	44.2%	0.7%		
		感情	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑	
全体			2.0%	0.7%	<b>69.8%</b>	0.3%	0.3%	26.8%		
男性			1.4%	0.7%	<b>71.6%</b>		0.7%	25.7%		
女性			2.7%	0.7%	<b>68.0%</b>	0.7%		27.9%		
注目箇所		眉	眉間	目	鼻	鼻唇溝	口	その他		
全体		53.6%	70.2%	<b>74.9%</b>	2.0%	7.5%	50.8%	1.7%		
男性		56.1%	61.5%	<b>74.3%</b>	3.4%	10.8%	55.4%	2.0%		
女性		51.0%	<b>78.9%</b>	75.5%	0.7%	4.1%	46.3%	1.4%		

※ 網掛けは性別間で有意差 ( $p<.05$ ) のあった比較を示す。

※ 性別に各感情・注目箇所において選択率が最大のものをボールド体で示す。

表情から読み取った感情の選択率については、以下の傾向を確認できる。

- ・「喜び」を表現した写真については、「喜び」以外の感情が選択されることは極めて稀であった。
- ・「悲しみ」を表現した写真については、約9割の回答者が「悲しみ」を選択した。
- ・「怒り」を表現した写真については、8割以上の回答者が「怒り」を選択した。
- ・「嫌悪」を表現した写真については、7割程度の回答者が「嫌悪」を選択したが、2割以上は「軽蔑」を選択した。

感情の選択率について性差が認められるかどうかを検討したところ（有効分析対象者：男性148人／女性147人）、「悲しみ」を表現した顔写真について男性の方が女性よりも「軽蔑」を選択した人数の割合が多かった一方で、「悲しみ」を選択した人数の割合は女性の方が多かった ( $\chi^2=18.7, df=5, p<.01$ )。なお、このような性差は障害者職業総合センター調査研究報告書 №119 (2014) で報告した大学生・大学院生を対象とし

た分析結果では認められていない。したがって、表情識別における性差は職業経験の有無によって異なる可能性が示唆された。

また、選択率が年齢区分によって異なるかどうかについても検討したが（有効分析対象者：34歳以下103人／35歳以上192人）、有意な差は認められなかった。

表情の着目箇所については、以下の傾向を確認できる。

- ・「喜び」を表現した写真については、「口」がほぼすべての回答者に選択され、「目」も約7割が選択
- ・「悲しみ」を表現した写真については、約9割の回答者が「目」を選択
- ・「怒り」を表現した写真については、約9割の回答者が「目」を選択し、「眉」も8割以上が選択
- ・「嫌悪」を表現した写真については、7割以上の回答者が「眉間」や「目」を選択

表情の着目箇所の回答傾向に性差が認められるかを検討するため、それぞれの表情の箇所が選択された人数の比率について  $\chi^2$ 検定を行った（有効分析対象者：男性148名／女性147名）。その結果、「怒り」を表現した写真以外のすべての写真について、以下の着目箇所の選択率に有意差が認められた。

- ・「喜び」を表現した写真の「鼻唇溝」の選択率( $\chi^2=8.9, df=1, p<.01$ ) : 男性 > 女性
- ・「喜び」を表現した写真の「その他」の選択率( $\chi^2=4.6, df=1, p<.05$ ) : 男性 < 女性
- ・「悲しみ」を表現した写真の「眉」の選択率( $\chi^2=6.4, df=1, p<.05$ ) : 男性 < 女性
- ・「嫌悪」を表現した写真の「眉間」の選択率( $\chi^2=10.7, df=1, p<.01$ ) : 男性 < 女性
- ・「嫌悪」を表現した写真の「鼻唇溝」の選択率( $\chi^2=4.8, df=1, p<.05$ ) : 男性 > 女性

なお、障害者職業総合センター調査研究報告書 №119（2014）で報告した大学生・大学院生を対象とした分析結果では下記のような性差が見いだされている。

- ・「悲しみ」を表現した写真の「口」の選択率： 男性 < 女性
- ・「嫌悪」を表現した写真の「鼻唇溝」の選択率： 男性 > 女性

以上から、「嫌悪」を表現した写真の着目箇所について「鼻唇溝」の選択率が男性の方が女性よりも高いという結果は大学生・大学院生と在職中の成人とで共通していたが、それ以外の傾向については異なっていた。したがって、表情の着目箇所についての性差は職業経験の有無によって異なる可能性がある。

次に、表情の着目箇所の回答傾向に年齢区分による差が認められるかを検討したところ（有効分析対象者：34歳以下103人／35歳以上192人）、「嫌悪」を表現した写真の「鼻」の選択率が34歳以下の対象者の方が35歳以上の対象者よりも有意に多かった（ $\chi^2=6.3, df=1, p<.05$ ）。しかし、これ以外には有意な差は認められず、年齢区分による着目箇所の違いはほとんどないことが示された。

以上から、表現された感情の種類に関わらず「目」は着目箇所として選ばれやすい傾向にあり、この傾向には性差や年齢区分による差が認められなかった。このことから、先行研究でも指摘されているとおり、目は感情を識別する際の重要な手掛かりになることが示された。したがって、表情からの感情識別に関する特性評価において、目の情報を表情識別に活用できるかどうかの確認は重要であろう。第Ⅱ部では、発達障害者について、感情識別の際の表情の着目箇所が定型発達者と同様なのかという視点から、障害特性についての検討を進める。

【文献】

- Bal, E., Harden, E., Lamb, D., van Hecke, A. V., Denver, J. W., & Porges, S. W. (2010). Emotion recognition in children with autism spectrum disorders: Relations to eye gaze and autonomic state. *Journal of Autism & Developmental Disorders*, **40**, 358-370.
- Kirchner, J. C., Hatri, A., Heekeren, H. R., & Dziobek, I. (2011). Autistic symptomatology, face processing abilities, and eye fixation patterns. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **41**, 158-167.
- Nakano, T., Tanaka, K., Endo, Y., Yamane Y., Yamamoto, T., Nakano, Y., Ohta, H., Kato, N., & Kitazawa, S. (2010). Atypical gaze patterns in children and adults with autism spectrum disorders dissociated from developmental changes in gaze behaviour. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences*, **277**, 2935-2943.
- 坂上裕子(1999). 感情に関する認知の個人差 : 感情特性と曖昧刺激における感情の解釈との関連. 教育心理学研究, **47**, 411-420.
- 障害者職業総合センター(2000). 調査研究報告書 №39 知的障害者の非言語的コミュニケーションスキルに関する研究 .....F&T感情識別検査の開発 .....
- Spezio, M. L., Adolphs, R., Hurley, R. S., & Piven, J. (2007). Abnormal use of facial information in high-functioning autism. *Journal of Autism & Developmental Disorders*, **37**, 929-939.

### 第3章 快-不快評定版による特性評価の指標

第3章では、快-不快評定版により「曖昧な感情表現からの感情の読み取りに関する特性」を評価する際に利用できる指標について説明する。新版 F&T 感情識別検査のソフトウェアでは、快-不快評定版の検査結果として図 1-3-1 のような図を出力する。この図には、(ア) 高不快刺激に対する評定についてのパーセンタイル順位、(イ) 低不快刺激に対する評定についてのパーセンタイル順位、(ウ) 快刺激に対して不快評定を行った回数、(エ) 高不快刺激に対して快評定を行った回数という 4 種類の指標が示される。なお、対象者が 1 試行でも制限時間内に回答を行わなかった場合は、その試行を算出対象に含む指標は表示されない。

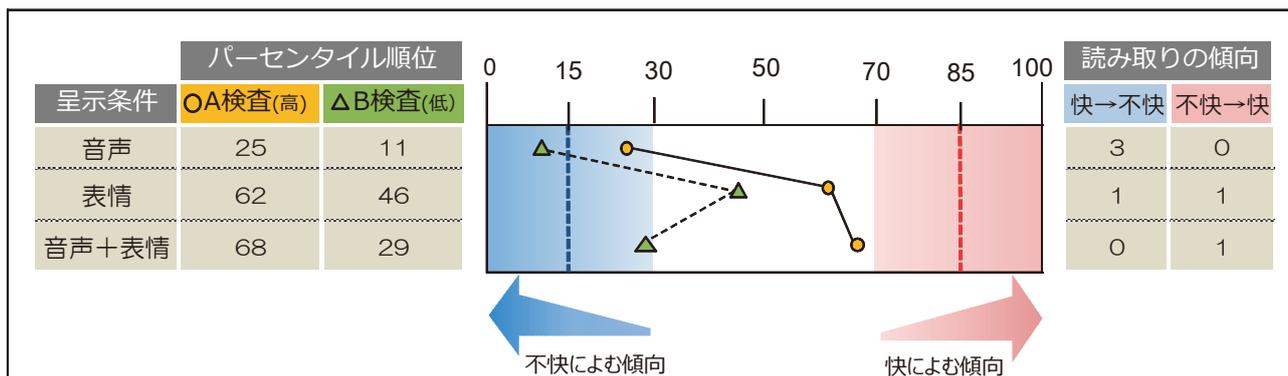


図1-3-1 快-不快評定版の検査結果の図（データは仮想のもの）

#### 【パーセンタイル順位】

「パーセンタイル順位」は「音声のみ」条件、「表情のみ」条件、「音声+表情」条件の各呈示条件において、曖昧に感情が表現された音声刺激や表情刺激から、どのくらい快、あるいは不快に偏って他者感情を読み取るかを示す指標である。この数値が「0」に近いほど、曖昧刺激から「不快」に偏って読む傾向が強いと言える。反対に、この数値が「100」に近いほど、曖昧刺激から「快」に偏って読む傾向が強いと言える。

パーセンタイル順位は呈示条件別に示されるため、図 1-3-1 のように音声からは不快に偏って読む傾向が認められるが、表情からは特徴的な読み取りの傾向は認められないといった呈示条件別の感情認知特性について知ることができる。

さらに、パーセンタイル順位には、A 検査と B 検査の 2 種類が存在する。A 検査は、曖昧刺激の中でも相対的に不快度の高い刺激（高不快刺激、詳細は第 I 部第 1 章第 2 節を参照）に対する読み取りの傾向を示す。一方、B 検査は、曖昧刺激の中でも相対的に不快度の低い刺激（低不快刺激、詳細は第 I 部第 1 章第 2 節を参照）に対する読み取りの傾向を示す。図 1-3-1 のように、音声と表情の両方から感情を読み取る場合、不快度の高い刺激に対しては特徴的な読み取りの傾向は認められない一方で、不快度の低い刺激に対しては不快に偏って読む傾向が認められるといった詳細な感情認知特性について知ることができる。

#### 【パーセンタイル順位のプロット図】

上記の呈示条件別・刺激の種類別のパーセンタイル順位全 6 種類が、0 から 100 までの数値軸上のどこに付置するのかを視覚的に理解できるように、図示したものである。パーセンタイル順位が低い（曖昧刺激から不快に偏って読む傾向が強い）ほど図の左側にプロットされ、パーセンタイル順位が高い（曖昧刺激から快に偏って読む傾向が強い）ほど図の右側にプロットされる。A 検査（高不快刺激）についてのパーセンタ

イル順位は黄色の○印で示され、呈示条件間のプロットが「直線」で結ばれる。一方、B 検査（低不快刺激）についてのパーセンタイル順位は緑色の△印で示され、呈示条件間のプロットが「点線」で結ばれる。

プロットされる領域は、パーセンタイル順位の範囲により、以下の5色で塗り分けられている。

- ・濃い水色：パーセンタイル順位が「0」から「15」の範囲
- ・薄い水色：パーセンタイル順位が「16」から「30」の範囲
- ・白色：パーセンタイル順位が「31」から「69」の範囲
- ・薄い赤色：パーセンタイル順位が「70」から「84」の範囲
- ・濃い赤色：パーセンタイル順位が「85」から「100」の範囲

どのパーセンタイル順位がどの領域にプロットされているかを確認することで、どのような状況において他者の曖昧な感情表現から快に偏って読む傾向（濃い・薄い水色の領域）、もしくは不快に偏って読む傾向（濃い・薄い赤色の領域）があるのかを知ることができる。

### 【読み取りの傾向】

パーセンタイル順位以外の読み取りの傾向を示す指標として、「快刺激に対して不快評定を行った回数」（図 1-3-1 では「快→不快」と表示）と「高不快刺激に対して快評定を行った回数」（図 1-3-1 では「不快→快」と表示）を示す。

#### 1. 快刺激に対して不快評定をした回数

快-不快評定版の刺激系列には、曖昧刺激とは別に、明確な快感情が表現された刺激（快刺激）が3つ含まれている（第I部第1章第1節を参照）。また、練習課題で使用する刺激も快刺激である。これらの4か所に配置された快刺激に対して、対象者が「-4」「-3」「-2」「-1」のいずれかの回答を選択した回数を示す。快感情を表現した声や表情から不快に偏って読むことは、コミュニケーションを阻害する原因となるため、このような読み取りの傾向を確認しておくことは、支援において重要な意味を持つ。

#### 2. 高不快刺激に対して快評定を行った回数

上述のとおり、高不快刺激は曖昧に感情が表現された刺激とはいえ、相対的に不快を読み取りやすい刺激である。この指標は、高不快刺激全8刺激について、対象者が「+4」「+3」「+2」「+1」のいずれかの回答を選択した回数を示す。不快を読み取りやすい声や表情から快感情を読み取ることも、相手の感情とは正反対の感情を読み取ることで対人トラブルに発展する可能性があるため、確認しておく必要がある。

これらの読み取りの傾向に関する指標も、呈示条件別に示すため、どの状況において、他者感情の読み取りの課題が生じやすいかを知ることができる。

新版F&T感情識別検査では、上記の各指標を対象者と支援者の双方が参照できる結果として算出するが、これとは別に、支援者のみが閲覧できる指標として「パーセンタイル順位についての詳細情報」を算出する。具体的には、(ア)呈示条件によるパーセンタイル順位の違い、(イ)刺激の不快度によるパーセンタイル順位の違い、という2種類の指標を示す。

#### 【呈示条件によるパーセンタイル順位の違い】

A 検査と B 検査の別に、下記の 3 種類のパーセンタイル順位の差の絶対値を算出する。

- ・ [「音声のみ」条件のパーセンタイル順位] - [「表情のみ」条件のパーセンタイル順位]
- ・ [「音声のみ」条件のパーセンタイル順位] - [「音声+表情」条件のパーセンタイル順位]
- ・ [「表情のみ」条件のパーセンタイル順位] - [「音声+表情」条件のパーセンタイル順位]

この指標は、その値が大きいほど、呈示条件による他者感情の読み取りの傾向の違いが大きいということを意味している。声と表情のうち、一方については読み取りの課題が大きく、他方については課題が認められない場合に、この指標の値は大きくなる。その場合、どちらの情報についての読み取りの課題が認められ、どちらについては課題が認められないのかについての留意が特に必要である。

また、声と表情のうち、一方については快に偏って読む傾向が強く、他方については不快に偏って読む傾向が強い場合にも、この指標の値は大きくなる。その場合、どの呈示条件において、快と不快のどちらを偏って読む傾向が強いのかを整理した上で、検査結果を相談支援等に活用する必要性が特に高いと言える。

なお、差を算出する対象である 2 つのパーセンタイル順位の両方について、快に読み取る傾向も不快に読み取る傾向も認められない場合でも、この指標の値は大きくなることがある（例：「音声のみ」条件のパーセンタイル順位が 40、「表情のみ」条件のパーセンタイル順位が 65）。その場合でも、状況によって読み取りの傾向が異なる、という対象者の特徴については留意が必要である。

#### 【刺激の不快度によるパーセンタイル順位の違い】

下記の 3 種類の A 検査と B 検査のパーセンタイル順位の差の絶対値を算出する。

- ・ [A 検査の「音声のみ」条件のパーセンタイル順位] - [B 検査の「音声のみ」条件のパーセンタイル順位]
- ・ [A 検査の「表情のみ」条件のパーセンタイル順位] - [B 検査の「表情のみ」条件のパーセンタイル順位]
- ・ [A 検査の「音声+表情」条件のパーセンタイル順位] - [B 検査の「音声+表情」条件のパーセンタイル順位]

この指標は、その値が大きいほど、曖昧刺激の不快度による他者感情の読み取りの傾向の違いが大きいことを意味している。高不快刺激と低不快刺激のうち、一方については読み取りの課題が大きく、他方については課題が認められない場合に、この指標の値は大きくなる。その場合、高不快刺激と低不快刺激のうち、どちらの刺激については読み取りの課題が認められ、どちらについては課題が認められないのかについて留意が必要である。

また、高不快刺激と低不快刺激のうち、一方については快に偏って読む傾向が認められ、他方については不快に偏って読む傾向が認められる場合にも、この指標の値は大きくなる。その場合は、どちらの刺激に対して、快と不快のどちらを偏って読む傾向があるかを整理した上で検査結果を特性評価に活用する必要性が特に高い。

なお、高不快刺激と低不快刺激のどちらについても、快に読み取る傾向も不快に読み取る傾向も認められない場合でも、この指標の値は大きくなることがある（例：A 検査のパーセンタイル順位が 40、B 検査のパーセンタイル順位が 65）。この場合でも、刺激の不快度によって読み取りの傾向が異なるという対象者の特徴について留意が必要であろう。

## 第 I 部の要旨とまとめ

発達障害者の支援に当たり、「音声」や「表情」から他者の感情をどのように読み取るかという非言語コミュニケーションの特性評価は対人コミュニケーションに困難がある発達障害者の支援において有効な情報となることが期待される。本研究その 1（障害者職業総合センター調査研究報告書 №119, 2014）では、感情が明確に表現されない曖昧な音声や表情に関する認知特性を把握するための検査として、新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版の開発を行った。さらに、その 2 においては、成人在職者を対象とした基準値に基づき、検査刺激の再構成と結果呈示の方法について検討した。

新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版は、検査刺激の選定、検査課題の作成及び基準値の作成等、検査の開発に必要な一連の過程を踏まえて開発され、その基本的特性が検討された（第 1 章）。

次いで、検査を発達障害者に適用するに当たり、検査の特徴を明確にしておく必要があることから、成人在職者（定型発達者）を対象としたデータの分析結果に基づき、感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に対する快-不快評定、及び各感情の経験頻度についての検討をとおり、感情語の評定や感情の経験頻度と新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版における評定値との関連が検討された（第 2 章）。

こうした検討に基づき、検査結果の呈示の考え方や結果を解釈する上で有効な情報についてまとめた（第 3 章）。

以下に、その概要を示す。

### 【 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版の構成 】

新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版はパソコン上で実施する形式で開発した。

#### 1) 検査実施の環境：

OS：Windows 7 / 8.1 / 10 CPU：Pentium(R)4 CPU 2.40GHz 相当以上。

ディスプレイ解像度：1024 × 768 以上 / ディスプレイサイズ：14 インチ以上。

ディスプレイ色数：32bit 以上 / 音声：スピーカーからの出力により実施。

2) 刺激の構成：選定した検査刺激は曖昧刺激\*であることから、不快感情に偏る。ただし、不快刺激を繰り返し呈示することは対象者にストレスを与える可能性がある。そこで、調査対象者全員が「喜び」を選択した快刺激を刺激系列に加えることでストレス緩和を図った。なお、快刺激の呈示箇所は刺激系列中 2 か所と刺激系列の最後の計 3 か所に配置した。また、快刺激の直後には、前述の 9 刺激とは別の曖昧刺激を配置し、快刺激とともに分析から除外することとした。これは、快刺激によるストレス緩和がその直後の評定に及ぼす影響を抑えるためである。

(※：どの感情に関しても一致率が 50 % (刺激選定調査対象者の半数) 以下であり (ただし、「音声 + 表情」条件については 60 % 以下)、かつ、確信度の平均が「とても自信がある」に分類されない)

こうしたことから、快-不快評定版の各条件を構成する刺激は下記の 23 刺激とした。なお、検査にかかる時間は 1 つの呈示条件につき約 7 分である。また、曖昧刺激 9 刺激は検査の前半と後半で 1 回ずつ呈示されるが、前半と後半の刺激の呈示順序は異なるように配置した。

検査刺激の構成 (各条件)

$9 \text{ (曖昧刺激)} \times 2 \text{ (反復呈示)} + 3 \text{ (快刺激)} + 2 \text{ (分析対象外の曖昧刺激)} = 23 \text{ 刺激}$

3) 回答方法：調査対象者には呈示された刺激が表現している快-不快の程度を「- 4：非常に不快である」—「0：快でも不快でもない」—「+ 4：非常に快である」の 9 件法で回答させ、それをその刺激の評定値（- 4～+ 4 点）とした。

4) 実施方法：モニターによる個別実施もしくはスクリーンで映像を呈示する小集団で実施した。

検査刺激の呈示

予鈴 → 刺激番号呈示（5秒間）→ 刺激呈示 → 評定時間（5秒間）

なお、刺激呈示は「音声のみ」条件、「表情のみ」条件、「音声+表情」条件の順に実施した。

実施時間は1つの呈示条件につき、約7分。「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の3条件で計21分である。

## 【 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版の基本的特性 】

### 1) 検査の構成

検査得点は、曖昧刺激の評定値における不快の程度が相対的に高い「高不快刺激」と低い「低不快刺激」を区別して算出した。具体的には、曖昧刺激9刺激のうち、中央値を除き中央値よりも不快度の高い刺激を「高不快 (A 検査)」・不快度の低い刺激を「低不快 (B 検査)」とした。

こうした手続きにより、高不快刺激に分類された曖昧刺激4刺激×2(反復呈示)の8刺激について、評定値の合計を高不快刺激得点、低不快刺激に分類された曖昧刺激4刺激×2(反復呈示)の8刺激について、評定値の合計を低不快刺激得点としている。

### 2) 新版 F&T 感情識別検査快-不快版による評定値の特徴

評定値については、以下の点が確認できた。

- ① B 検査の「音声のみ」条件及び「表情のみ」条件を除く、すべての条件で、女性が男性よりも有意に不快に評定していた。
- ② 曖昧刺激の評定値（不快度）は呈示条件によって異なるが、その並び順は A 検査と B 検査で共通であった。「音声+表情」条件 > 「表情のみ」条件 > 「音声のみ」条件の順に有意に高い。
- ③ 快-不快評定版の成人（在職者）基準値は「男性と女性の別に」作成すること、「男性については34歳以下と35歳以上の別に」作成すること、これに対し、「女性については年齢区分なく一括して」作成することが示された。
- ④ 曖昧刺激に対する評定は、感情語の快-不快評定の結果とはおおむね関連がない。一方、個人の主観的な感情の経験頻度とは関連が見いだされており、特に「怒り」「恐怖」の経験頻度が高い群は、B 検査（低不快）において、より不快に評定する傾向が認められている。したがって、経験の質だけでなく経験の量によって、検査結果は変動する可能性を含んでいる。なお、経験頻度との関連について、成人の結果は大学生・院生（障害者職業総合センター，2014）とは異なっており、職業経験の有無や年齢の効果による可能性もあることから、求職者・在職者・退職者の結果の解釈に際しては重要な情報となることが明らかとなった。

こうした基本的特性を踏まえ、検査別・呈示条件別・男女別・年齢段階別（在職の有無別を含む）に基準値の作成を行うとともに、検査得点が分布上のどの位置に該当するかを検査結果（パーセンタイル順位）と

して示すための評定値換算表を作成した。

検査結果は、「曖昧な感情表現に対して、どの程度「快」あるいは「不快」に偏って判断するか」（判定値が低いほど「快」に、また、高いほど「不快」に偏って判断する傾向が強い）を示す指標として活用できる。

（分析対象者：発達障害のない成人職者（定型発達者）295人：21歳-34歳の男性88人／35歳-59歳の男性60人／21歳-59歳の女性147人）。

## 【 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版を実施する上での留意事項 】

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版では、不快度評定の現れ方に注目することが重要である。以下に、結果解釈のポイントを示す。

- ① より不快に、もしくは快に偏って評定する呈示条件は何か  
また、より不快、もしくは快に偏って評定する傾向は、A 検査と B 検査で異なるか
- ② 各検査・呈示条件において、“より不快な評定をする傾向”がある場合、不快に分類される感情語（悲しみ・軽蔑・恐怖・嫌悪・怒り）の評定に関して、“より不快な評定”が選択されていないか
- ③ 各検査・呈示条件における評定について、“より不快に評定する”傾向が認められる場合、「怒り」や「嫌悪」「恐怖」に関する直近の主観的な経験の頻度などが影響していないか

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版で評価される曖昧な感情表現に対する回答の特徴が、他者の感情認知に関わる他の認知特性や主観的な経験とどのように関連しているのかについて検討することは、検査結果の解釈にとって重要な資料となる。

以下に示すデータを検査実施前後に収集しておくことは意義が大きい。すなわち、ある対象者が複数の項目にわたって特徴的なあるいは不適切な回答をした場合、その者の特性の理解や結果のフィードバックに際し、注意を要することを示すものとなる。

- ① 検査実施前の確認事項：  
感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に対応する快-不快の程度／  
感情場面と感情語の対応 等
- ② 検査実施後の確認事項  
調査時点における直近3か月間の感情経験の頻度／  
表情写真が表現する感情と着目箇所／対人関係におけるストレス 等

なお、成人（在職者）の場合、上記調査①②に要した時間は、合計でおおむね15分程度であった。



# はじめに

## 1. 発達障害者の感情認知の特性評価の考え方

新版 F&T 感情識別検査を用いて発達障害者の非言語コミュニケーションの特性評価を行うに当たり、発達障害の診断の有無によって、検査結果にどのような違いが現れるかを把握しておくことは、検査結果から対象者のコミュニケーションの課題を推定し、支援を講じるための資料として活用する上で重要である。

このため、まず、感情語に対する快-不快評定や感情の経験頻度、感情が喚起される場面の理解、表情識別の際の着目点等の特性について、発達障害者の特徴を確認しておく。

次に、発達障害者を対象としたデータの分析結果のうち、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の正答率やコミュニケーション・タイプについての検討をとおし、明確な感情表現による感情識別に関する認知特性について報告する。

さらに、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の評価結果を定型発達者（在職経験を有する成人）の結果と比較することで、曖昧な感情表現による感情識別に関する発達障害者の認知特性を概観した。

以上の知見を踏まえ、ここでは、発達障害者の感情認知に関する特性理解の検討結果の取りまとめを行う。

## 2. 調査の概要と対象者の概要

### (1) 調査の概要

発達障害者対象調査の概要は以下のとおりである。

- ① 調査対象：就労支援機関等を利用する発達障害のある成人 124 人（男性 98 人／女性 26 人）
- ② 調査時期：平成 24 年 10 月～平成 28 年 10 月（研究計画その 1／研究計画その 2：本研究）
- ③ 調査内容：新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版／快-不快評定版：

「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の 3 条件における評定

質問紙調査：感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に対応する快-不快の程度  
調査時点における直近 3 か月間の感情経験の頻度／感情場面と感情語の対応  
表情写真が表現する感情と着目箇所／対人関係におけるストレス 等

- ④ 調査方法：検査は個別又は小集団で実施／質問紙調査は自記式回答で実施

### (2) 分析対象者の性／年齢区分の概要

発達障害者の男女比がおおむね 4：1 であることから、男女別の違いを詳細に検討するには困難が伴う場合がある。また、対象者の年齢が 18 歳-61 歳に分布しており、快-不快評定版の結果における定型発達者との比較については、必要に応じて第 I 部で検討した基準値の年齢区分に即して検討を行うことになる。

ただし、対象者の年齢区分別の分布は以下のとおりであり、性別・年齢区分別の違いを詳細に検討するには困難を伴う場合がある。

	性 / 年齢区分		人数
本研究その 1 (計103人)	男性	34歳以下	62
		35歳以上	19
	女性		22
本研究その 2 (計21人)	男性	34歳以下	12
		35歳以上	5
	女性		4

### (3) 対象者の診断について

発達障害の診断に関する情報として、診断名及び診断を受けた年齢を自記式回答により取得した。なお、本人が診断名を把握していなかった場合は、本人の了解を得た上で支援者から情報を取得した。

第Ⅱ部における分析対象者は、知的障害を伴わない発達障害の診断・判断を有する 124 人（男性 98 人／女性 26 人）であり、成人期における診断が多数を占めていた。対象者の 84 %は、本研究でいうところの「自閉症スペクトラム」のある者が占めていた。単独診断において、さらに重複診断においても、「自閉症スペクトラム」の診断がないという者は全体の 15 %であり、診断名による結果の違いを検討できるほど十分な数の対象者のデータを取得できていないことから、本研究においては、診断名による違いは検討していない。

	男性	/	女性	全体	割合			
単独診断	広汎性発達障害	30	/	9	39	77.4%		
	アスペルガー障害・症候群	25	/	8	33			
	高機能自閉症	7	/	0	7			
	特定不能の広汎性発達障害	6	/	1	7			
	自閉症スペクトラム障害	5	/	3	8			
	自閉症	1	/	0	1			
	非定型自閉症	1	/	0	1			
重複診断	注意欠陥/多動性障害	6	/	3	9	8.1%		
	注意欠陥障害	1	/	0	1			
	学習障害	2	/	0	2		1.6%	
	受容—表出混合性言語障害	1	/	0	1			0.8%
重複診断	発達障害	3	/	0	3	10.5%		
	広汎性発達障害+注意欠陥/多動性障害	2	/	0	2			
	自閉症スペクトラム障害+注意欠陥/多動性障害	2		0	2			
	アスペルガー症候群+注意欠陥/多動性障害	2	/	0	2			
	アスペルガー症候群+注意欠陥障害	0	/	1	1			
	広汎性発達障害+注意欠陥障害	1	/	0	1			
	注意欠陥/多動性障害+学習障害	1	/	0	1			
注意欠陥/多動性障害+双極性障害Ⅱ型	0	/	1	1				
未診断	(専門家・支援者の判断による)			2	0	2	1.6%	
計				98	/	26	124	

なお、診断年齢の対象者間平均（標準偏差）は 25.5（10.24）歳であったが、最も早い診断年齢は 3 歳、最も遅い診断年齢は 60 歳であった。また、18 歳までに診断を受けていた男性は 19 人（20%）、女性は 3 人（12%）であった。

### 3. 第Ⅱ部の構成

第 1 章では、発達障害者の感情認知に関する調査結果を概観し、(1) 感情語に関する快-不快度評定の概要、(2) 感情の経験頻度の現状、(3) 感情の経験頻度と感情語の快-不快評定との関連、(4) 経験場面からみた感情語の選択、(5) 表情識別の際の着目点について報告する。また、第 2 章では、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果からみた発達障害者の特性として、(1) 正答率、(2) 混同の傾向、(3) コミュニケーション・タイプについて報告する。さらに、第 3 章では、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の結果からみた発達障害者の特性として、(1) 曖昧刺激に対する評定：一般成人と発達障害者の比較、(2) 感情語の快-不快評定及び経験頻度と曖昧刺激に対する評定について報告する。

# 第 1 章 発達障害者の感情語に関する理解、感情の経験頻度 及び表情識別の概要

第 I 部第 1 章及び第 2 章において報告した発達障害の診断のない在職中の成人（以下、定型発達者）を対象としたデータ収集と同様に、発達障害者を対象としたデータ収集においても、快-不快評定版の実施前後において質問紙調査を実施し、感情喚起場面と感情語の対応関係、感情語の快-不快度評定、表情の着目箇所といった認知特性及び感情の経験頻度に関するデータを収集した。これらのデータの集計結果を定型発達者と比較することで、発達障害者の特性を検討することとする。

## 第 1 節 感情語に対する快-不快評定と感情の経験頻度に関する検討

### 1. 感情語に対応する快-不快度に関する評定

#### (1) 感情語に対応する快-不快度を評定する意義

発達障害者の各感情が示す快-不快の程度を把握し、それを定型発達者と比較することは、快-不快評定版における発達障害者の快-不快評定の基準が定型発達者と同様であるのかを判断する上で重要な情報となる。そこで、「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「驚き」「恐怖」「軽蔑」の 7 種類の感情語について、それぞれの程度、快あるいは不快であるかを「-4：非常に不快である」—「0：快でも不快でもない」—「+4：非常に快である」の 9 件法で回答させた結果について報告する。

なお、この質問項目は、各感情語が持つ快-不快の程度に関して一般に共有されている知識・理解を問うものであり、各個人がその感情語に対して抱く快-不快の程度を回答させるものではない。この点を明確にした上で回答を得るため、「この質問は、あなたが他の人を喜ばせたり、悲しませたり、軽蔑した時に感じる「快」もしくは「不快」の程度を答えるものではありません。」という教示を行っている。

#### (2) 感情語に対応する快-不快度の評定結果

表 2-1-1 に感情語別の快-不快度の評定値の対象者間平均と標準偏差を示す。各感情語は、定型発達者と同様に、「快の感情：喜び」「快でも不快でもない感情：驚き」「不快の感情：悲しみ・怒り・嫌悪・恐怖・軽蔑」に分類できる。感情の種類によって、快-不快度に統計的に有意な差が認められるかを検討するために、感情の種類を独立変数とした 1 要因の分散分析を実施したところ、主効果が有意であった ( $F(5.2, 616.6)=705.6, p<.01$ )。Bonferroni 法 ( $p<.05$ ) による多重比較の結果、快-不快度は、不快度の低い方から順に「喜び」>「驚き」>「悲しみ・軽蔑・恐怖」>「嫌悪・怒り」であることが示された。

第 I 部で検討した定型発達者の結果と比較すると、発達障害者の快-不快度評定の水準との間に大きな違いは認められない。また、「喜び」がもっとも快であり、「怒り」「嫌悪」がもっとも不快である点では共通していた。ただし、定型発達者においては「悲しみ」と「軽蔑」の間には有意差が認められていたが、発達障害者においてはこれらの感情間に有意差は認められなかった。

また、発達障害者について、感情語の快-不快度評定に性差があるかどうかを対応のない  $t$  検定で確認したが（有効分析対象者：男性 93 人／女性 26 人）、有意な差は認められなかった。同様に、年齢差についても検討したが（有効分析対象者：34 歳以下 90 人／35 歳以上 29 人）、有意な差は認められなかった。

表2-1-1 感情語に対する快-不快度の対象者間平均と標準偏差

<定型発達者 (n = 291) >

感情語の種類	快 ←—————→ 不快					
	喜び	驚き	悲しみ	軽蔑・恐怖	嫌悪・怒り	
平均	3.6	-0.2	-2.2	-2.8	-3.0	-3.3
標準偏差	( 0.59 )	( 0.99 )	( 1.32 )	( 1.05 )	( 1.18 )	( 0.84 )

<発達障害者 (n = 124) >

感情語の種類	快 ←—————→ 不快					
	喜び	驚き	悲しみ・軽蔑・恐怖	嫌悪・怒り		
平均	3.6	-0.2	-2.4	-2.6	-2.7	-3.1
標準偏差	( 0.71 )	( 1.10 )	( 1.24 )	( 1.22 )	( 1.29 )	( 0.95 )

なお、感情語の快-不快評定において、快感情に不快評定を行っていたり、不快感情に快評定を行っていた者がどの程度いたかを検討するために、評定値ごとに度数を算出した。その結果、快感情に不快評定を行った者はいなかった。また、不快感情に快評定を行った者は、いずれの感情についても全対象者の 2%を超えなかった (表 2-1-2)。

表2-1-2 不快感情に快評定を行った人数及び割合

	悲しみ	怒り	嫌悪	恐怖	軽蔑
快評定をした人数	1	2	0	1	2
全対象者に占める割合	1%	2%	0%	1%	2%

以上の結果から、発達障害者の快-不快評定の基準は定型発達者と同様であると言える。しかし、発達障害者は「悲しみ」に対する不快度が軽蔑や恐怖と同程度に高いという特徴があることも示された。

## 2. 感情の経験頻度に関する評定

### (1) 感情の経験頻度を評定する意義

定型発達者において、不快感情である「怒り」「嫌悪」「恐怖」の経験頻度と快-不快評定版の検査得点の間に関連が認められたことから (第 I 部第 2 章第 1 節参照)、同様の関連が発達障害者においても認められるかを把握しておくことは、快-不快評定版の検査結果の解釈を行う上で重要となる。

ここでは「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「驚き」「恐怖」「軽蔑」の 7 種類の感情の経験頻度について、調査時点から遡って 3 か月間の間に、それぞれどの程度の頻度で経験したかを「0: まったくなかった」—「2: 月に 1 回あった」—「4: 週に 1 回あった」—「6: 毎日あった」の 7 件法で回答させた結果について報告する。

### (2) 感情の経験頻度の評定結果

感情の経験頻度を感情間で比較しやすくするために、7 件法で評定させた頻度に基づき、対象者を経験頻度の水準が異なる 3 群に分けた (経験頻度低群: まったくなかった～ほとんどなかった、中群: 月 1 回～数回程度あった、高群: 週数回～毎日あった)。図 2-1-1 に感情の種類別に経験頻度に関する各群の人数の割合を定型発達者のものと併せて示す。

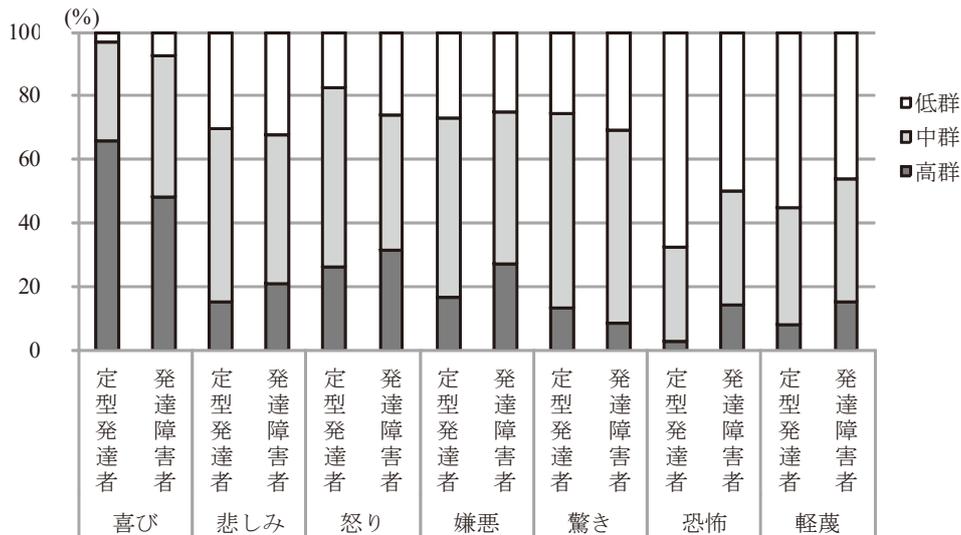


図2-1-1 感情の経験頻度による各群の人数の割合

図から直近3か月間の感情経験は喜びの経験が多く、恐怖や軽蔑の経験は相対的に少ないことがみとれる。なお、 $\chi^2$ 検定により、性差（有効分析対象者：男性98人／女性26人）及び年齢区分差（有効分析対象者：34歳以下94人／35歳以上30人）を検討したが、すべての感情について有意差は認められなかった。

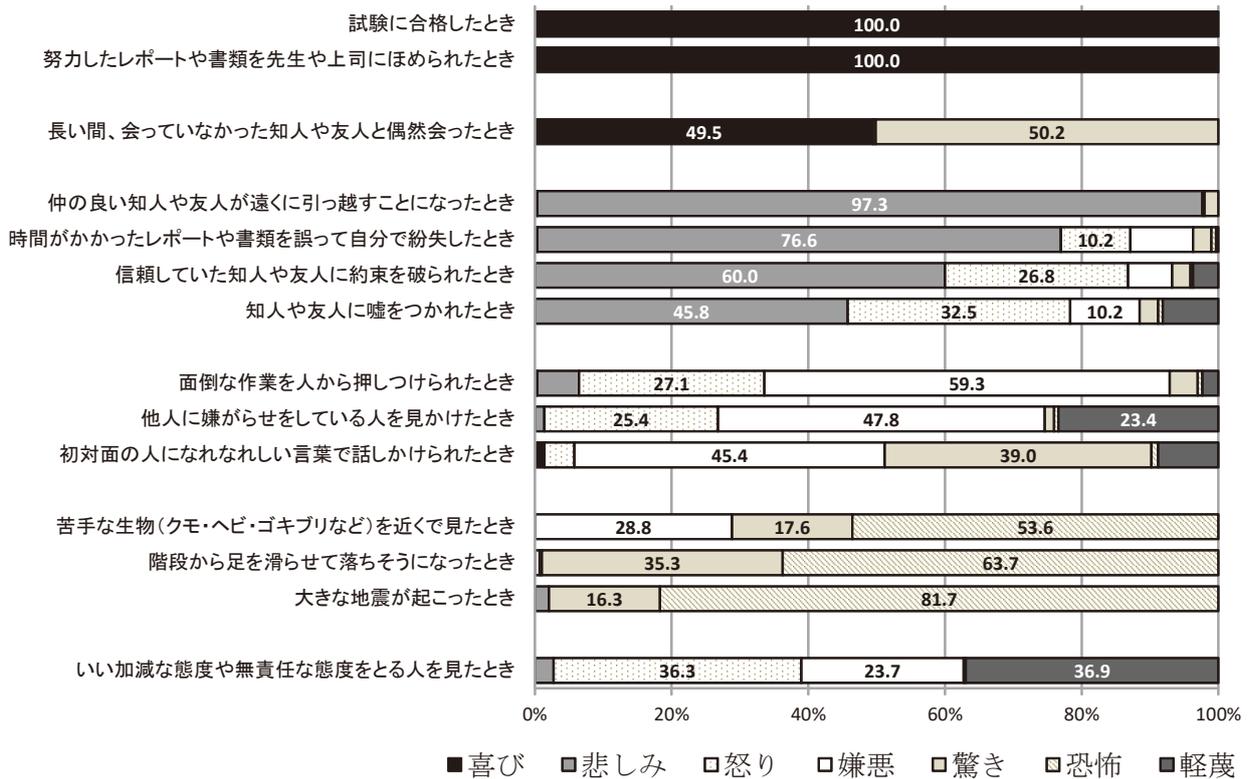
## 第2節 感情喚起場面に対応する感情語の選択に関する検討

快-不快評定版の実施に際し、感情が喚起される場面について、その場面で喚起される感情の種類を適切に選択できるかどうかは重要な確認事項である。場面と感情語との対応を把握するために、14の場面（第I部第2章第2節参照）を自分が経験した場合に、どのような気持ちになるのかについて、感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）を1つ選択させた。図2-1-2に定型発達者と発達障害者の回答の集計結果を示す。

回答傾向について、発達障害の診断の有無による違いを検討するため、各選択肢を選択した人数の比率について場面別に $\chi^2$ 検定を行った結果、以下の8つの場面について、群間に有意な違いが認められた（「長い間、会っていなかった知人や友人と偶然会ったとき」の有効分析対象者：定型発達者295人／発達障害者122人、「仲の良い知人や友人が遠くに引っ越すことになったとき」の有効分析対象者：定型発達者295人／発達障害者123人、それ以外の場面の有効分析対象者：定型発達者295人／発達障害者124人）。

- ・「長い間、会っていなかった知人や友人と偶然出会ったとき」( $\chi^2=16.5, df=4, p<.05$ )
  - －「嫌悪」「恐怖」の選択率： 定型発達者 < 発達障害者
- ・「試験に合格したとき」( $\chi^2=7.2, df=1, p<.01$ )
  - －「喜び」の選択率： 定型発達者 > 発達障害者
  - －「驚き」の選択率： 定型発達者 < 発達障害者
- ・「仲のよい知人や友人が遠くに引っ越すことになったとき」( $\chi^2=12.1, df=3, p<.01$ )
  - －「悲しみ」の選択率： 定型発達者 > 発達障害者
  - －「喜び」「驚き」の選択率： 定型発達者 < 発達障害者
- ・「初対面の人になれなれしい言葉で話しかけられたとき」( $\chi^2=21.2, df=6, p<.01$ )
  - －「怒り」「恐怖」「軽蔑」の選択率： 定型発達者 < 発達障害者

〈定型発達者〉



〈発達障害者〉

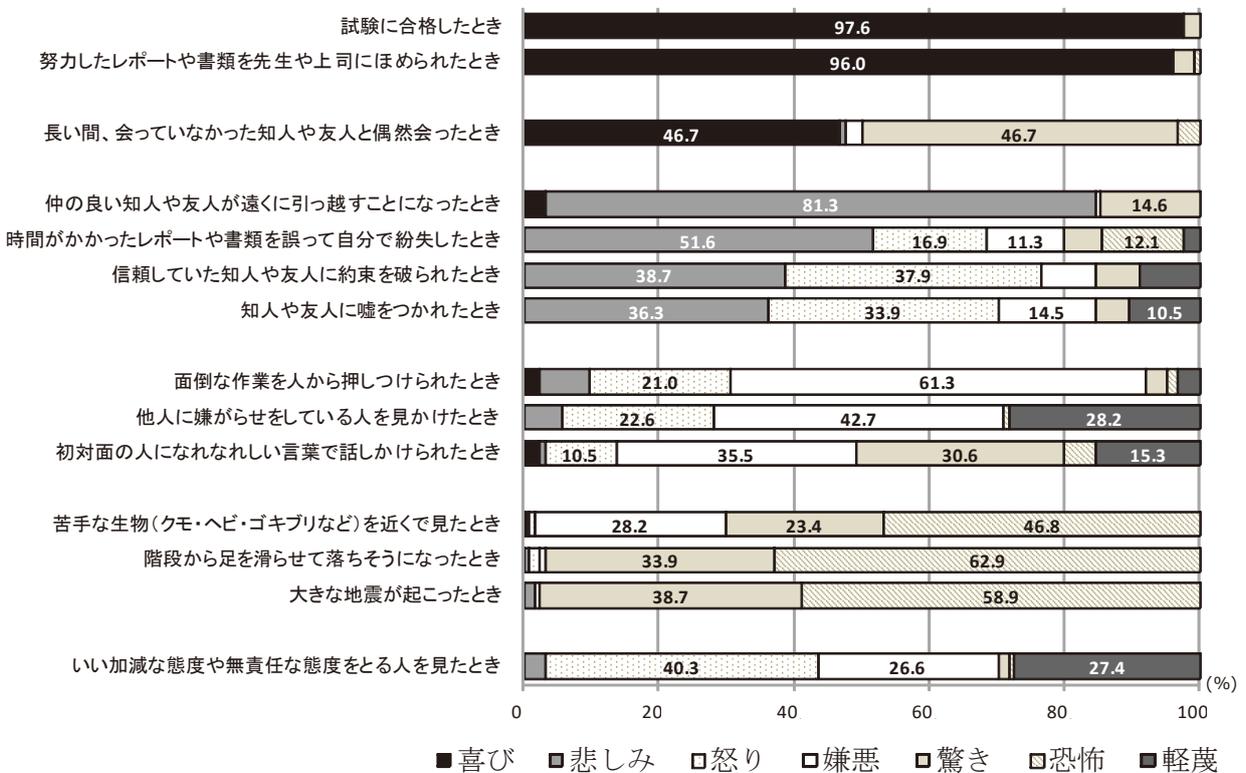


図2-1-2 各場面に対応する感情語の選択率

- ・「時間をかけて作成したレポートや書類を誤って自分で削除したり、紛失したとき」( $\chi^2=46.1, df=6, p<.01$ )
  - －「悲しみ」の選択率： 定型発達者 > 発達障害者
  - －「恐怖」「軽蔑」の選択率： 定型発達者 < 発達障害者
- ・「大きな地震が起こったとき」( $\chi^2=27.7, df=3, p<.01$ )
  - －「恐怖」の選択率： 定型発達者 > 発達障害者
  - －「驚き」の選択率： 定型発達者 < 発達障害者
- ・「努力したレポートや書類を先生や上司にほめられたとき」( $\chi^2=12.0, df=2, p<.01$ )
  - －「喜び」の選択率： 定型発達者 > 発達障害者
  - －「驚き」の選択率： 定型発達者 < 発達障害者
- ・「信頼していた知人や友人に約束を破られたとき」( $\chi^2=19.3, df=5, p<.01$ )
  - －「悲しみ」の選択率： 定型発達者 > 発達障害者
  - －「怒り」「軽蔑」の選択率： 定型発達者 < 発達障害者

なお、発達障害者の対象者の回答について、 $\chi^2$ 検定により性差（「長い間、会っていなかった知人や友人と偶然会ったとき」の有効分析対象者：男性 96 人／女性 26 人、「仲の良い知人や友人が遠くに引っ越すことになったとき」の有効分析対象者：男性 97 人／女性 26 人、それ以外の場面の有効分析対象者：男性 98 人／女性 26 人）及び年齢区分による差（「長い間、会っていなかった知人や友人と偶然会ったとき」の有効分析対象者：34 歳以下 92 人／35 歳以上 30 人、「仲の良い知人や友人が遠くに引っ越すことになったとき」の有効分析対象者：34 歳以下 93 人／35 歳以上 30 人、それ以外の場面の有効分析対象者：34 歳以下 94 人／35 歳以上 30 人）を検討したが、いずれについてもすべての場面について有意な差は認められなかった。

以上のとおり、発達障害者と定型発達者によって選択されやすい感情語が異なる場面が複数見いだされたことは、発達障害者と定型発達者の状況の理解の食い違いは少なくないことを示唆している。相談支援においてコミュニケーションの課題の原因分析を行う際に、当事者の状況の理解の仕方が独特ではないかを確認する必要性を示しているデータと言える。

### 第 3 節 表情識別の際の着目箇所に関する検討

表情から感情を識別する際の着目箇所に関する情報を整理しておくことは、表情による感情識別を苦手とする対象者支援にとって意味を持つ。表 2-1-3 に、呈示した表情写真別に、(ア) 表情から読み取れる感情として選択した回答別の全対象者数に占める回答者数の割合、(イ) (ア) で選択した感情が表れている箇所として指摘された顔の箇所について、全対象者数に占める回答者数の割合を定型発達者の結果と併せて示した（表情の着目箇所の回答の判定手続きについては、第 I 部第 2 章第 3 節を参照されたい）。

(ア) と (イ) それぞれについて、回答別の人数の割合について  $\chi^2$ 検定により群間差を検討した（「怒り」を表出した写真についての (ア) の有効分析対象者：定型発達者 295 人／発達障害者 122 人、(イ) の有効分析対象者：定型発達者 295 人／発達障害者 123 人、それ以外の写真についての (ア) 及び (イ) の有効分析対象者：定型発達者 295 人／発達障害者 124 人）。

表2-1-3 表情から読み取った感情と表情の着目箇所の選択率

顔写真	回答							
	感情	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
	定型発達者	<b>99.7%</b>	0.3%					
	発達障害者	<b>100.0%</b>	0.0%					
	注目箇所	眉	眉間	目	鼻	鼻唇溝	口	その他
	定型発達者	42.0%	7.8%	72.5%	16.3%	47.5%	<b>97.3%</b>	8.1%
発達障害者	46.0%	10.5%	74.2%	24.2%	51.6%	<b>96.0%</b>	8.9%	
	感情	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
	定型発達者		<b>89.2%</b>	0.3%	1.0%	1.0%	1.7%	6.8%
発達障害者		<b>89.5%</b>	0.0%	1.6%	0.0%	2.4%	6.5%	
	注目箇所	眉	眉間	目	鼻	鼻唇溝	口	その他
	定型発達者	57.3%	13.9%	<b>91.9%</b>	1.4%	2.4%	25.1%	0.0%
発達障害者	62.1%	25.8%	<b>84.7%</b>	3.2%	8.1%	37.1%	7.3%	
	感情	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
	定型発達者	0.3%		<b>85.4%</b>	2.7%	4.7%	1.4%	5.4%
発達障害者	0.0%		<b>84.4%</b>	5.7%	5.7%	1.6%	2.5%	
	注目箇所	眉	眉間	目	鼻	鼻唇溝	口	その他
	定型発達者	83.7%	16.6%	<b>96.3%</b>	1.4%	2.0%	38.6%	0.7%
発達障害者	83.7%	21.1%	<b>92.7%</b>	0.8%	4.9%	42.3%	2.4%	
	感情	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
	定型発達者	0.0%	2.0%	0.7%	<b>69.8%</b>	0.3%	0.3%	26.8%
発達障害者	4.0%	0.8%	3.2%	<b>66.9%</b>	0.0%	0.8%	24.2%	
	注目箇所	眉	眉間	目	鼻	鼻唇溝	口	その他
	定型発達者	53.6%	70.2%	<b>74.9%</b>	2.0%	7.5%	50.8%	1.7%
発達障害者	65.3%	61.3%	<b>71.0%</b>	7.3%	12.1%	62.1%	7.3%	

※ 網掛けは  $\chi^2$  検定により有意差 ( $p < .05$ ) のあった比較を示す。  
 ※ 群別に各感情・注目箇所において選択率が最大のものをポールド体で示す。

(ア) 表情から読み取った感情の選択率については、「嫌悪」を表出した写真について、発達障害者の方が「喜び」や「怒り」の選択率が定型発達者よりも多いことが示された ( $\chi^2=17.8, df=6, p<.01$ )。それ以外の写真については有意差は認められなかった。

(イ) 表情の着目箇所の選択率については、以下の違いが認められた。

・「悲しみ」を表出した写真

- － 「眉間」の選択率 ( $\chi^2=8.6, df=1, p<.01$ ) : 定型発達者 < 発達障害者
- － 「目」の選択率 ( $\chi^2=4.9, df=1, p<.05$ ) : 定型発達者 > 発達障害者
- － 「鼻唇溝」の選択率 ( $\chi^2=7.3, df=1, p<.01$ ) : 定型発達者 < 発達障害者
- － 「口」の選択率 ( $\chi^2=6.2, df=1, p<.05$ ) : 定型発達者 < 発達障害者
- － 「その他」の選択率 ( $\chi^2=21.9, df=1, p<.01$ ) : 定型発達者 < 発達障害者

・「嫌悪」を表出した写真

- －「眉」の選択率 ( $\chi^2=4.9, df=1, p<.05$ ) : 定型発達者 < 発達障害者
- －「鼻」の選択率 ( $\chi^2=6.9, df=1, p<.01$ ) : 定型発達者 < 発達障害者
- －「口」の選択率 ( $\chi^2=4.5, df=1, p<.05$ ) : 定型発達者 < 発達障害者
- －「その他」の選択率 ( $\chi^2=8.4, df=1, p<.01$ ) : 定型発達者 < 発達障害者

なお、発達障害者の回答について、 $\chi^2$ 検定により性差 ((ア)の有効分析対象者：男性 98 人(「怒り」についてのみ 97 人) / 女性 26 人(「怒り」についてのみ 25 人)、(イ)の有効分析対象者：男性 98 人(「怒り」についてのみ 97 人) / 女性 26 人) 及び年齢区分による差 ((ア)の有効分析対象者：34 歳以下 94 人(「怒り」についてのみ 93 人) / 35 歳以上 30 人、(イ)の有効分析対象者：34 歳以下 94 人(「怒り」についてのみ 92 人) / 35 歳以上 30 人) を検討したが、すべての表情について表情から読み取った感情に関する回答及び着目箇所に関する回答の傾向に有意差は認められなかった。

以上の結果から、次の 2 点を指摘できる。まず、「嫌悪」を表出した写真から読み取れる感情として「喜び」を選択した人数の割合は、発達障害者の方が定型発達者よりも多かったことから、発達障害者においては「不快」の感情表現から「快」の感情をよみ取る傾向(「快-不快」の混同傾向)がある場合には特に留意が必要ということである。次に、表情の着目箇所については、定型発達者が発達障害者よりも着目箇所として選択していた割合が多かった箇所は「目」に限られていたが、発達障害者が定型発達者よりも注目箇所として選択していた割合が多かった箇所は「口」や「眉」などの多岐に渡っていた。この結果は、発達障害者は定型発達者よりも表情識別に多くの顔の箇所を手がかりとして用いている、あるいは有効な手がかりを活用できていない可能性を示唆しており、表情識別に課題がある場合の原因分析において留意すべき事項と言える。

## 第2章 新版 F & T 感情識別検査 4 感情評定版の結果からみた 発達障害者の特性

感情が明確に表現された音声刺激や表情刺激を含む F&T 感情識別検査 4 感情評定版の検査結果から明らかになった発達障害者の非言語コミュニケーションの特性について報告する。

### 第1節 検査の概要と手続き

#### 1. 刺激の概要

- (1) 演技者：演技者は、演劇等で意図的な感情表出の訓練を積んだ 20 代の男・女、各 1 人と 40 代の男・女、各 1 人の計 4 人であった。
- (2) 刺激文：刺激として用いた文章は、以下の 8 文であった。

「おはようございます」	「こんにちは」	「はさみをとってください」
「おつかれさまでした」	「さようなら」	「頼みたいことがあるんです」
「さあ、いきましょ」	「今日は、いい天気ですね」	

- (3) 表出された感情：感情は、幸福（喜び）・悲しみ・怒り・嫌悪の 4 感情であった。  
なお、感情表出に当たっては、その背景として、表 2-2-1 の場面を想定した。

表2-2-1 感情表出のために想定した場面

感情	場 面
幸福（喜び）	おいしいものを食べたときの幸福（喜び）／プレゼントをもらったときの幸福（喜び）
悲しみ	親しい人や大切な人が亡くなったときの悲しみ
怒り	自分勝手な人やマナーの悪い人に対する怒り／ 自分に対して理不尽な行為をされたときに感じる怒り
嫌 悪	不潔なものや人を見たときに感じる嫌悪

- (4) 撮影範囲：胸部より上とし、顔の大きさは画面上でほぼ同一となるように調節した。
- (5) 刺激数：刺激の総数は、4（感情）× 4（人）＝ 16 刺激 であった。各刺激は前半と後半の 1 回ずつの計 2 回呈示されたが、その配列はランダムであった。

#### 2. 検査の手続き

- (1) 刺激呈示の概要：各刺激は、チャイム音 → 刺激番号呈示（5 秒間）→ 刺激呈示（2-3 秒間）→ 評定時間（6 秒間）に編集されたものが呈示された（図 2-2-1）。  
刺激は快-不快評定版と同様の刺激条件で被調査者に呈示された。具体的には、動画の音声だけをスピーカーから呈示する「音声のみ」条件、映像だけをスクリーンに呈示する「表情のみ」条件、音声と映像の両方を呈示する「音声+表情」条件の順に調査を実施した。
- (2) 調査方法：検査は PC のモニターで映像を呈示した個別実施とスクリーンで映像を呈示した集団実施

(5人程度)の2とおりであった。PCで実施する場合の映像の大きさは幅42cm×高さ32cmであり、モニターから被調査者までの距離は約50cmであった。スクリーンで実施する場合の映像の大きさは、幅1.85m×高さ1.43mであり、スクリーンから調査対象者までの距離は4-5mであった。

各刺激条件の検査時間は平均8分であった。したがって、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の3条件で計24分となる。

(3) 調査内容：対象者には、呈示された刺激が表現している感情として最も当てはまるものを「うれしい」「かなしい」「悲しい」「おこっている」「怒り」「いやだなあ」「嫌悪」という4つの感情ラベルの中から選択させた。回答は個別実施の場合は刺激消失後にPC画面に表示される感情ラベルが記されたボタンをマウスのクリック操作により選択することで行い、集団実施の場合は感情ラベルごとに用意された回答欄に○を記入することで行った。

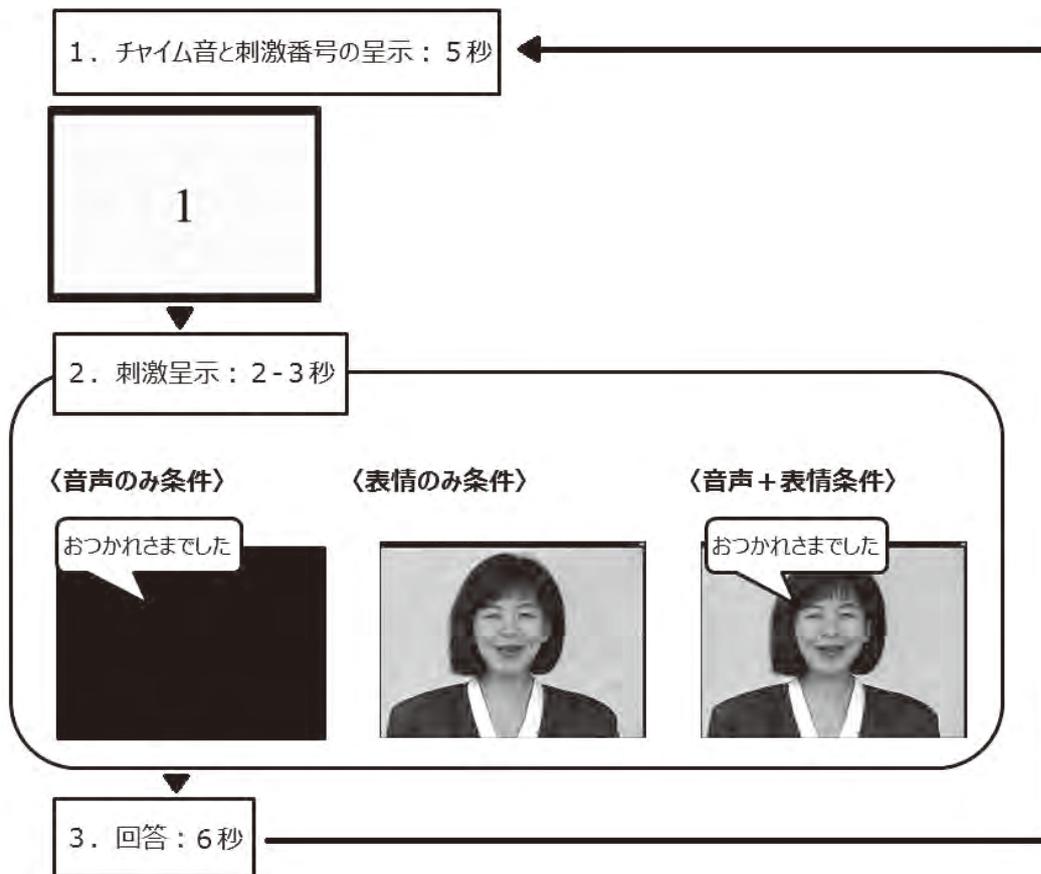


図2-2-1 新版F&T感情識別検査4感情評定版の流れ

## 第2節 正答率と混同の傾向

F&T感情識別検査4感情版開発時の定型発達者のデータ(障害者職業総合センター調査研究報告書№39, 2000)と発達障害者のデータについて比較した結果、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの呈示条件においても定型発達者の正答率は高く、特に「表情のみ」条件において、両者の正答率には10%以上の差が認められた(障害者職業総合センター調査研究報告書№119, 2014)。なお、ここで報告する定型発達者のデータは、大学生・大学院生128人(男58人・女70人)から構成されている。

## 1. 正答率について

### (1) データの再分析について

発達障害者の特性については、すでに検討されている（障害者職業総合センター調査研究報告書No. 119, 2014）が、今回、新しく 21 人のデータが追加されたことから、再分析に当たり、2014 年に実施した 103 人の各呈示条件における正答率と 2015 年～ 2016 年に実施した 21 人の各呈示条件における正答率に有意差があるかを t 検定を用いて検討した（表 2-2-2）。その結果、いずれの呈示条件においても有意差は認められなかった。

表2-2-2 発達障害者の呈示条件ごとの正答率（単位は%）

対象者	音声のみ	表情のみ	音声+表情
	平均正答率 (SD)	平均正答率 (SD)	平均正答率 (SD)
発達障害者 (21人)	78.9 (8.02)	70.6 (6.69)	87.0 (9.55)
発達障害者 (103人)	76.8 (9.57)	66.4 (10.75)	86.9 (10.04)

「音声のみ」条件 : t 値 = 0.910、df = 122、p < 0.364 (等分散の仮定)  
 「表情のみ」条件 : t 値 = 1.657、df = 122、p < 0.100 (等分散の仮定)  
 「音声+表情」条件 : t 値 = 0.037、df = 122、p < 0.971 (等分散の仮定)

また、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版に関しては、女性と男性を分けて、また、男性についてはさらに 34 歳以下と 35 歳以上で分けて異なったパーセンタイルを用いて評価している。この点を考慮し、この 3 群間において、呈示条件ごとに正答率に差が認められるかについて一元配置の分散分析により検討した。その結果、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれにおいても 3 群間での有意差 (5 %水準) は認められなかった (表 2-2-3)。

以上から、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版における発達障害者の特徴を分析する際には、124 人の発達障害者を年齢や性別によって分けることなく一括して分析することとした。ただし、「表情のみ」においては、10 %水準で有意傾向が認められた。またその後の Tukey を用いた多重比較によれば、女性の方が男性 (34 歳以下) よりも正答率が高いことが示唆された。この点に関しては、評価のフィードバックの際に留意しておきたい点である。

表2-2-3 発達障害者（男性34歳以下／男性35歳以上／女性）の呈示条件ごとの正答率（単位は%）

対象者	音声のみ	表情のみ	音声+表情
	平均正答率 (SD)	平均正答率 (SD)	平均正答率 (SD)
男性34歳以下 (69人)	77.6 (9.85)	65.3 (11.47)	85.6 (11.82)
男性35歳以上 (29人)	74.9 (8.83)	67.9 (9.64)	89.3 (6.81)
女性 (26人)	78.6 (8.24)	71.0 (8.63)	87.6 (6.35)

「音声のみ」条件 : F (2,121) 値 = 1.245、p = 0.292  
 「表情のみ」条件 : F (2,121) 値 = 1.245、p = 0.061  
 「音声+表情」条件 : F (2,121) 値 = 1.548、p = 0.217

### (2) 発達障害者の特性について

発達障害者と定型発達者のデータに関して比較したところ、いずれの呈示条件においても、定型発達者の正答率が 1 %水準で有意に高く、特に「表情のみ」条件においては、両者の正答率の差は、「音声のみ」「音

声+表情」条件よりも大きかった。

表2-2-4 定型発達者（大学生・大学院生）と発達障害者の呈示条件ごとの正答率（単位は%）

対象者	音声のみ	表情のみ	音声+表情
	平均正答率（SD）	平均正答率（SD）	平均正答率（SD）
定型発達者（128人）	85.9（6.90）	84.5（6.69）	94.7（5.55）
発達障害者（124人）	77.2（9.33）	67.1（10.69）	86.9（9.92）

「音声のみ」条件：t値 = 8.452、df = 226.479、 $p < 0.000$ （等分散の仮定をしない）  
 「表情のみ」条件：t値 = 15.438、df = 205.41、 $p < 0.000$ （等分散の仮定をしない）  
 「音声+表情」条件：t値 = 7.668、df = 191.85、 $p < 0.000$ （等分散の仮定をしない）

なお、対象者群別にみた呈示条件間の正答率の比較に関しては、それぞれの対象者群ごとに対象者内 1 要因分散分析（3 水準）を行った。その結果、定型発達者では、呈示条件の主効果 ( $F_{(2,127)}=104.337, p<.0001$ ) が認められた。また、その後の検定により呈示条件間では、「音声のみ」と「表情のみ」の間では有意差は認められなかったが、「音声のみ」「表情のみ」と「音声+表情」との間では、それぞれ 1 %水準で有意差が認められた。これに対し、発達障害者に関しては、定型発達者と同様に呈示条件の主効果 ( $F_{(2,123)}=217.891, p<.0001$ ) が認められただけでなく、その後の検定によりすべての呈示条件間でそれぞれ 1 %水準で有意差が認められた（「表情のみ」の正答率が最も低く、「音声+表情」の正答率が最も高いことが確認された）。

定型発達：「音声のみ」 = 「表情のみ」 < 「音声+表情」  
 発達障害：「表情のみ」 < 「音声のみ」 < 「音声+表情」

以上から、「発達障害者においては、音声または表情からの他者感情の読み取りに関して、定型発達者よりも困難が大きいこと、特に、表情の読み取りに関して、より困難が大きいことが示唆された」と言える。

この結果は、表 2-1-3 にみられる表情を識別する際に顔のどの部分に注目するかという点で、定型発達者と発達障害者において差が認められることと関連する可能性がある。一般に表情から感情を読み取る際には、その感情の特徴がより強く表れている箇所注目することが効果的である。この点に関して先行研究（太田智美 他, 2005）の結果に基づいて検討すると、発達障害者は定型発達者と比較して「悲しみ」の感情については、特徴が読み取りやすい「目」への選択率が有意に低かった。また、「嫌悪」の感情については、特徴が読み取りにくい「鼻」への選択率が有意に高かった（表 2-1-3：第Ⅱ部第 1 章）。しかしながら、「嫌悪」に関しては、特徴を読み取りやすい「眉」「口」への選択率が発達障害者において有意に高く、一貫して不適切な箇所に注目しているわけではない点は指摘しておかなくてはならない。

### （3）新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版を利用するに当たって

本研究では、「発達障害者の特性」として論じているが、対象者の診断名の内訳から分かるように、対象者の 84 % が本研究でいうところの「自閉症スペクトラム」に該当している点に注意が必要である。「自閉症スペクトラム」の診断がない者（単独・重複を含む）は全体の 15 % であり、ここでは、診断名による結果の違いを検討することは適切とは言えない。しかしながら、以降の新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の分析の際に明確な感情表現における感情識別の正確さが影響する可能性を考慮し、暫定的に、単独であれ、

重複であれ、「自閉症スペクトラム」を診断された 104 人と診断されなかった 20 人に関して、呈示条件ごとの正答率、及び「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の感情ごとの正答率に関して *t* 検定による比較を行った。その結果、いずれの呈示条件においても両群間に有意差は認められなかった。したがって、以下の分析においては、発達障害者として合算して検討するが、今後、「自閉症スペクトラム」以外の対象者のデータについては、対象者数を増やして検討する必要があるだろう。

## 2. 混同の傾向について

定型発達者並びに発達障害者の呈示条件ごとの回答について、表 2-2-5 に示す。

なお、この分析においては、混同の傾向について検討することから、平均正答率は回答された場合のみを対象とし、時間切れ等による無回答は含まれていない。そのため、表 2-2-4 とは異なっている。

表2-2-5 呈示条件ごとの発達障害者並びに定型発達者の回答（単位は％）

定型発達者（128人）					発達障害者（124人）				
呈示された	回 答（平均正答率 86.0％）				呈示された	回 答（平均正答率 78.8％）			
	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
音 声					音 声				
喜 び	84.4	14.8	0.3	0.6	喜 び	88.2	4.2	1.5	6.1
悲しみ	0.4	98.1	0.8	0.7	悲しみ	1.4	81.9	0.8	15.9
怒 り	0.8	1.1	85.5	12.7	怒 り	1.9	1.5	87.8	8.8
嫌 悪	0.6	13.9	9.8	75.8	嫌 悪	2.9	13.1	26.6	57.4

定型発達者（128人）					発達障害者（124人）				
呈示された	回 答（平均正答率 85.0％）				呈示された	回 答（平均正答率 71.4％）			
	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
表 情					表 情				
喜 び	99.8	0.2	-	-	喜 び	98.4	0.1	0.3	1.2
悲しみ	1.1	81.2	5.5	12.3	悲しみ	1.0	47.5	19.4	32.0
怒 り	0.1	21.0	72.5	6.5	怒 り	0.3	12.5	79.1	8.1
嫌 悪	-	0.5	14.8	84.7	嫌 悪	0.1	3.2	36.6	60.1

定型発達者（128人）					発達障害者（124人）				
呈示された	回 答（平均正答率 95.0％）				呈示された	回 答（平均正答率 87.7％）			
	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
音声+表情					音声+表情				
喜 び	98.6	0.7	0.3	0.4	喜 び	97.9	0.1	0.1	1.9
悲しみ	0.1	95.5	1.1	3.3	悲しみ	0.4	83.4	0.6	15.6
怒 り	0.2	0.6	91.7	7.5	怒 り	0.2	1.2	92.4	6.1
嫌 悪	0.2	2.6	4.3	92.9	嫌 悪	0.2	4.0	21.0	74.8

注) 濃い網掛けの部分は<正答>を表している。また、薄い網掛けの部分は「怒り」と「嫌悪」の<混同>を表している。「怒り」と「嫌悪」の<混同>については日常生活場面での支障が少ないと考えられることから、正答に準ずるものとする。

### (1) 快-不快の混同（「喜び」と「怒り」または「嫌悪」の混同）

定型発達者、発達障害者のいずれにおいても感情語の快-不快度の評定では、「喜び」が最も快と評価され、

「怒り」と「嫌悪」は最も不快と評価された。そこで、「喜び」と「怒り」・「嫌悪」の感情間での混同について検討した（表 2-2-6）。なお、快-不快の混同は、定型発達者・発達障害者ともに認められた。したがって、これらの混同が発達障害者のみに特徴的であるとは言えない。ただし、「音声のみ」では、快-不快の混同は定型発達者よりも多い傾向にあると言えよう。

表2-2-6 「喜び」と「怒り」「嫌悪」の混同率

呈示条件	対象者	快 → 不快			不快 → 快		
		喜び → 怒り	喜び → 嫌悪	合計	怒り → 喜び	嫌悪 → 喜び	合計
音声のみ	定型発達者	0.3%	0.6%	0.9%	0.8%	0.6%	1.4%
	発達障害者	1.5%	6.1%	<b>7.6%</b>	1.9%	2.9%	<b>4.8%</b>
表情のみ	定型発達者	—	—	—	0.1%	—%	0.1%
	発達障害者	0.3%	1.2%	1.6%	0.3%	0.1%	0.4%
音声+表情	定型発達者	0.3%	0.4%	0.7%	0.2%	0.2%	0.4%
	発達障害者	0.1%	1.9%	2.0%	0.2%	0.2%	0.4%

## (2) 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間の混同

定型発達者・発達障害者ともに「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間の混同が認められた（表 2-2-7）。したがって、これらの混同が発達障害者のみに特徴的であるとは言えない。ただし、いずれの条件においても「悲しみ」を「怒り」「嫌悪」と混同する傾向、及び「嫌悪」を「怒り」と混同する傾向が発達障害者において顕著に高かった（表中アンダーラインで示した）。また、「表情のみ」条件では、「悲しみ」を「怒り」と混同する傾向が認められた（表中アンダーラインで示した）。

なお、先行研究では、「自閉症スペクトラム」の者と定型発達者との間で不快感情の読み取りの正確さに差が認められなかったとする研究（Tracy, J.L.他, 2011）と、表情から「悲しみ」「嫌悪」「怒り」といった不快感情を読み取ることの正確さにおいて、「自閉症スペクトラム」の者が定型発達者よりも低い（Ashwin, C.他, 2006 ; Bal, E.他, 2010; Harms, M.B.他, 2010 ; Uono, S.他, 2013）とする研究があるが、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の刺激に関しては、「自閉症スペクトラム」を含む発達障害者群との間で差がある（発達障害者が定型発達者よりも低い）と言える。

また、4 感情評定版では「悲しみ」「嫌悪」「怒り」の3感情間の混同について検討できるが、前回、並びに今回の研究の結果からは、「他者が表出している感情をより不快度が高い方向に読み取る（「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み取る）傾向が確認できた。このことは、曖昧な刺激からより不快度を高く読み取ることによるストレスの存在を予想させる結果と考えられる。

なお、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版を用いた先行研究からは、発達障害者と知的障害者の正答率では、すべての呈示条件において、発達障害者の正答率が有意に高いこと（障害者職業総合センター調査研究報告書No. 119, 2014）、また、「他者が表出している感情をより不快度が高い方向に読み取る（「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み取る）傾向は、知的障害者、発達障害者ともに認められること（障害者職業総合センター調査研究報告書No. 39, 2000）が明らかとなっている。したがって、正答率の高低に関わらず、知的障害を伴う者を含む発達障害者に関しては、他者感情をよりストレスの高い方向へ受け取る可能性があると言える。

表2-2-7 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の混同率

呈示条件	対象者	悲しみ → 嫌悪	嫌悪 → 悲しみ	悲しみ → 怒り	怒り → 悲しみ	怒り → 嫌悪	嫌悪 → 怒り
音声のみ	定型発達者	0.7%	13.9%	0.8%	1.1%	12.7%	9.8%
	発達障害者	<b>15.9%</b>	13.1%	0.8%	1.5%	8.8%	<b>26.6%</b>
表情のみ	定型発達者	12.3%	0.5%	5.5%	21.0%	6.5%	14.8%
	発達障害者	<b>32.0%</b>	3.2%	<b>19.4%</b>	12.5%	8.1%	<b>36.6%</b>
音声+表情	定型発達者	3.3%	2.6%	1.1%	0.6%	7.5%	4.3%
	発達障害者	<b>15.6%</b>	4.0%	0.6%	1.2%	6.1%	<b>21.0%</b>

### 3. コミュニケーション・タイプについて

コミュニケーション・タイプは表 2-2-8 に示したように、「音声」と「表情」の回答傾向に特徴的な傾向の認められる①～⑧の8タイプと特徴的な傾向を有さないタイプの計9タイプに分類される。

表2-2-8 コミュニケーション・タイプ

		音声	表情	音声+表情	人数（構成比）	
①	高受信タイプ	76 %以上	76 %以上	83 %以上	25人	(20.1%)
②	低受信タイプ	59 %以下	59 %以下	64 %以下	1人	(0.8%)
③	相補タイプ	「音声+表情」－「音声のみ」 「音声+表情」－「表情のみ」がともに <u>15 %より大きい</u> 場合			28人	(22.6%)
④	相殺タイプ	「音声+表情」－「音声のみ」 「音声+表情」－「表情のみ」がともに <u>-15 %より小さい</u> 場合			1人	(0.8%)
⑤	音声依存・Tタイプ	「音声+表情」－「表情のみ」 「音声のみ」－「表情のみ」がともに <u>15 %より大きい</u> 場合  「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。			21人	(16.9%)
⑥	音声依存・Fタイプ	「音声+表情」－「表情のみ」 「音声のみ」－「表情のみ」がともに <u>-15 %より小さい</u> 場合  「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は低い			1人	(0.8%)
⑦	表情依存・Tタイプ	「音声+表情」－「音声のみ」が <u>15 %より大きく</u> 「音声のみ」－「表情のみ」が <u>-15 %より小さい</u> 場合  「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は低い。			0人	
⑧	表情依存・Fタイプ	「音声+表情」－「音声のみ」が <u>-15 %より小さく</u> 「音声のみ」－「表情のみ」が <u>15 %より大きい</u> 場合  「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。			3人	(2.4%)
⑨	特定のタイプに分類されない	①～⑧のいずれにも分類されないタイプ			44人	(35.5%)
全体					124人	(100%)

注 1) 高受信・低受信の基準値は、それぞれ一般基準の平均正答率の9割以上、7割以下を目安としている。

注 2) 「音声のみ」「表情のみ」条件における標準偏差の値に基づいて設定した。

表 2-2-8 から分かるように発達障害者では特徴的な傾向を持たない「不特定タイプ (44 人)」が全体の 35.5 % を占め、最も多い。次いで、相補タイプ（「音声のみ」「表情のみ」の単独の情報では正答率が低いものの、両方からの情報を相互補完的に利用することで、全体的な正答率が高まる）が、28 人で全体の 22.6 % を占める。相補タイプでは、視覚からの情報と聴覚からの情報を適切に統合して利用していると考えられ、情報の有効利用という点からは望ましいタイプと言える。ただし、単独では、混同も起こりうることから、会話は音声・表情の両方の情報が利用できるような向かい合って行うことが望ましいタイプである。一方、相補タイプに対し、「音声のみ」「表情のみ」の正答率が高いにも関わらず、両方の情報を利用可能な「音声+表情」で正答率が低い「相殺タイプ」には、1 人が分類された。

また、いずれの呈示条件においても定型発達の平均正答率の 9 割を超える「高受信タイプ」が 25 人と全体の 20.1 % を占め、3 番目に多いタイプとなった。これに対し、いずれの呈示条件においても定型発達の平均正答率の 7 割に満たない「低受信タイプ」は 1 人と少なかった。

また、音声依存・Tタイプ (21 人：16.9 %) と表情依存・Fタイプ (3 人：2.4 %) は、「音声」と「表情」の双方の情報が利用できる場合に、より識別力の高いチャンネルを利用している可能性の高いタイプである。これに対し、音声依存・Fタイプ (1 人：0.8 %) と表情依存・Tタイプ (0 人) は、「音声」と「表情」の双方の情報が利用できる場合に、より識別力の低いチャンネルを利用しているタイプと考えられる。これらのタイプを比較すると、前者のように、より識別力の高いチャンネルを優先的に利用することが妥当な選択であり、この方略を用いている発達障害者は 19.3 % を占めた。

なお、知的障害者との比較では、発達障害者の方が、① 高受信タイプ、相補タイプが多く、低受信タイプが少ないこと、② より識別力の高いチャンネルを優先的に利用する際、発達障害者では「音声」に依存する傾向が強いこと、の 2 点が確認されている（障害者職業総合センター調査研究報告書 №119, 2014）。

# 第3章 新版 F & T 感情識別検査快-不快評定版の結果からみた 発達障害者の特性

ここでは、感情が明確に表現されない曖昧な音声刺激や表情刺激を含む新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版（以下「快-不快評定版」という）の検査結果から明らかになった発達障害者の認知特性について報告する。あわせて、発達障害者における感情語の快-不快評定の強度並びに感情の経験頻度と快-不快評定版における評定値との関連性について検討する。

## 第1節 検査の概要と手続き

### 1. 検査刺激

検査刺激は第 I 部第 1 章第 2 節で報告した定型発達者を対象としたデータ収集において実施した快-不快評定版と同じものを使用した。なお、快-不快評定版は前章で報告した 4 感情評定版を実施した後に行った。

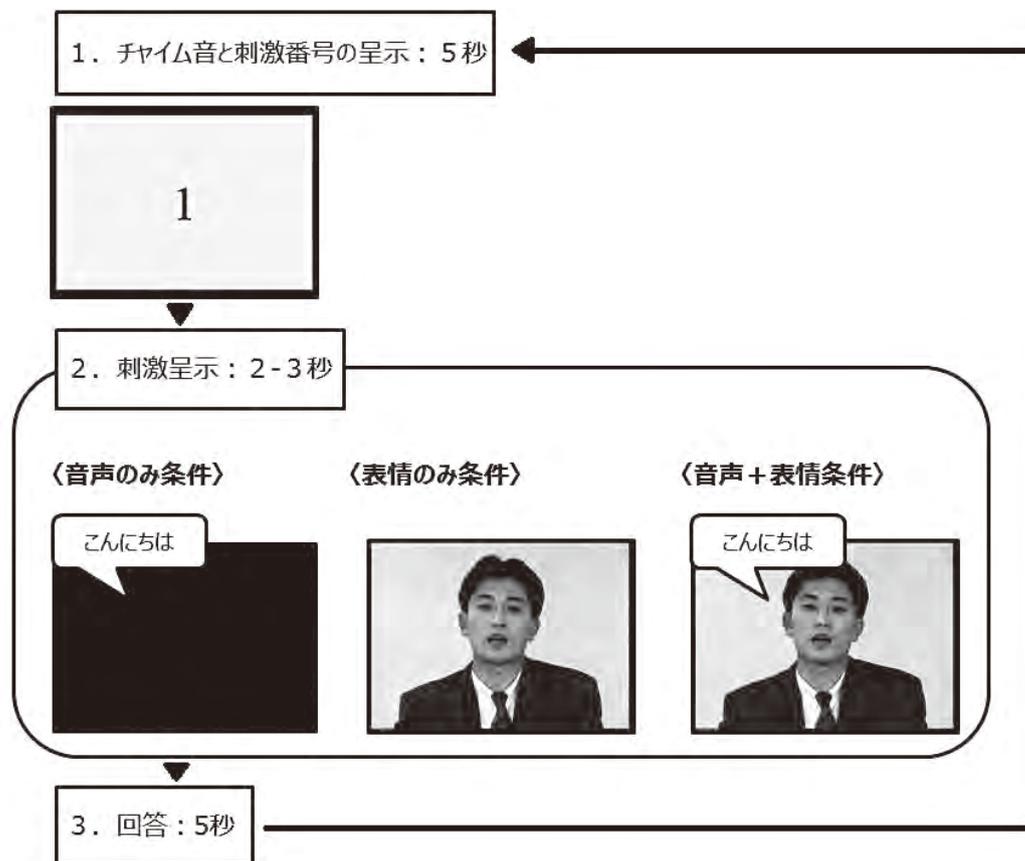


図2-3-1 新版 F & T 感情識別検査快-不快評定版における刺激呈示

### 2. 検査の手続き

(1) 調査方法：検査は PC のモニターで映像を呈示した個別実施と PC のモニターまたはスクリーンで映像を呈示した集団実施（5 人程度）の 2 とおりで実施した。

PC で実施する場合の映像の大きさやスクリーンで実施する場合の実施状況は前章の 4 感情評定版の実施状況と同じであった。

調査の実施時間は1つの刺激条件につき、約7分であった。したがって、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の3条件で計21分となる。

(2) 調査内容：対象者には呈示された刺激が表現している快-不快の程度を「-4：非常に不快である」—「0：快でも不快でもない」—「+4：非常に快である」の9件法で回答させ、それをその刺激の得点（-4～+4点）とした。

## 第2節 新版F&T感情識別検査快-不快評定版の結果

### 1. 曖昧な刺激に対する評定

(1) 定型発達者と発達障害者の比較（全体的な傾向）

新版F&T感情識別検査快-不快評定版の刺激に対する快-不快の評定（全体）に関して、*t*検定により定型発達者と発達障害者の比較を行った（表2-3-1）。その結果、「音声のみ」では、1%水準で有意差が認められ、発達障害者の得点が低かった（より不快に評定した）のに対し、「表情のみ」「音声+表情」では、有意差は認められなかった。

したがって、発達障害者においては音声からの情報に関して定型発達者よりも不快に感じやすい傾向があると言える。このことは「音声のみ」をとおした電話などのやりとりにおいて、よりストレスを感じやすい可能性を示唆している。

表2-3-1 定型発達者と発達障害者における呈示条件ごとの快-不快評定値（単位は点）

	対象者	平均値	標準偏差
音声のみ	定型発達 (295人)	-14.9	10.46
	発達障害 (124人)	-20.3	10.81
表情のみ	定型発達 (295人)	-24.3	14.36
	発達障害 (124人)	-22.9	11.61
音声+表情	定型発達 (295人)	-36.7	12.99
	発達障害 (124人)	-38.3	12.91

) 1%水準で有意

「音声のみ」条件 : *t* 値 = 4.821、*df* = 417、*p* < 0.000 (等分散の仮定)  
「表情のみ」条件 : *t* 値 = -1.044、*df* = 283.06、*p* = 0.298 (等分散の仮定をしない)  
「音声+表情」条件 : *t* 値 = 1.067、*df* = 417、*p* = 0.287 (等分散の仮定)

(2) 定型発達者と発達障害者の比較（高不快刺激／低不快刺激）

新版F&T感情識別検査快-不快評定版では、結果の解釈に際し、より特徴を明確に把握する目的で高不快刺激と低不快刺激に分けてプロフィールを算出する。そのため、高不快刺激／低不快刺激に関して、それぞれ呈示条件ごとに同様の分析を行った。

その結果、全刺激を対象とした分析で有意差が認められた「音声のみ」については、高不快刺激では有意差は認められず、低不快刺激に関して1%水準での有意差が認められた。具体的には、発達障害者がより不快に評価する傾向が明らかとなった。一方、全刺激を対象とした分析では有意差の認められなかった「表情のみ」「音声+表情」に関しても、「表情のみ」では高不快刺激に、「音声+表情」では低不快刺激にそれぞれ5%水準と1%水準で有意差が認められた。なお、「表情のみ（高不快刺激）」では、定型発達者の方がより不快に評価し、「音声+表情（低不快刺激）」では、発達障害者の方がより不快に評価する傾向が明らかとなった。

以上のことから、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版において高不快刺激・低不快刺激別にプロフィールを検討する際には、特に表 2-3-2 における網掛け部分（有意差が認められた部分）に関して、留意して検討する必要があると言えよう。

表2-3-2 定型発達者と発達障害者における呈示条件ごとの高不快刺激・低不快刺激の評定値の比較(単位は点)

呈示刺激	対象者	低不快刺激	高不快刺激
		平均評定値 (SD)	平均評定値 (SD)
音声のみ	定型発達 (295人)	-2.5 (4.73)	-10.9 (5.27)
	発達障害 (124人)	-5.1 (5.29)	-11.1 (4.92)
表情のみ	定型発達 (295人)	-7.3 (7.25)	-14.4 (6.59)
	発達障害 (124人)	-7.8 (5.58)	-12.6 (5.81)
音声+表情	定型発達 (295人)	-11.0 (6.58)	-21.3 (5.72)
	発達障害 (124人)	-13.0 (6.05)	-20.7 (5.98)

\*\* : 1%水準で有意 \* : 5%水準で有意

「音声のみ (低不快刺激)」条件 : t 値 = 4.905、df = 416、p < 0.01 (等分散の仮定)  
 「音声のみ (高不快刺激)」条件 : t 値 = 3.830、df = 417、p = 0.70 (等分散の仮定)  
 「表情のみ (低不快刺激)」条件 : t 値 = 0.814、df = 293.815、p = 0.42 (等分散の仮定をしない)  
 「表情のみ (高不快刺激)」条件 : t 値 = -2.199、df = 417、p < 0.05 (等分散の仮定)  
 「音声+表情 (低不快刺激)」条件 : t 値 = 2.90、df = 417、p < 0.01 (等分散の仮定)  
 「音声+表情 (高不快刺激)」条件 : t 値 = -0.99、df = 416、p = 0.32 (等分散の仮定)

## (2) 発達障害者の特徴 (群間の比較)

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版に関しては、女性と男性を分けて、また男性についてはさらに 34 歳以下と 35 歳以上で分けて異なったパーセンタイル基準を用いて考察する。これは、定型発達者における評定値の違いを考慮したものである。このような違いが発達障害者においても認められるかについて検討した。なお、女性に関しては、総数が 26 人と少ないことから年齢群を分けた分析からは除外したが、定型発達者の分析においては、年齢間での差が認められなかった。

### 1) 男女間の比較 (性差に関する分析)

プロフィールを考察する上で重要な高不快刺激/低不快刺激に限定して分析したところ、「音声のみ (低不快刺激)」「表情のみ (高不快刺激)」「音声+表情 (低不快刺激)」において有意差が認められた (表 2-3-3)。

表2-3-3 発達障害者における呈示条件ごとの高不快刺激・低不快刺激の評定値の比較 (男女別、単位は点)

呈示刺激	対象者	低不快刺激	高不快刺激
		平均評定値 (SD)	平均評定値 (SD)
音声のみ	男性 (98人)	-4.5 (5.15)	-10.7 (5.16)
	女性 (26人)	-7.4 (5.27)	-12.7 (3.52)
表情のみ	男性 (98人)	-7.3 (5.38)	-12.3 (5.91)
	女性 (26人)	-9.8 (6.02)	-15.1 (4.91)
音声+表情	男性 (98人)	-12.4 (6.17)	-20.4 (5.82)
	女性 (26人)	-15.0 (5.17)	-22.0 (6.33)

\*\* : 1%水準で有意 \* : 5%水準で有意

「音声のみ (低不快刺激)」条件 : t 値 = 2.502、df = 122、p < 0.05 (等分散の仮定)  
 「表情のみ (高不快刺激)」条件 : t 値 = 2.237、df = 122、p < 0.05 (等分散の仮定)  
 「音声+表情 (低不快刺激)」条件 : t 値 = 1.980、df = 122、p < 0.05 (等分散の仮定)

また、有意差の認められた組み合わせにおいては、いずれも女性の評定値が低かった (より不快に評価した)。

なお、この男女間の差に関しては、定型発達者を対象とした第I部第1章第2節においても同様の分析が行われ、有意差が認められた場合（「音声のみ（高不快刺激）」「表情のみ（高不快刺激）」「音声+表情（高不快刺激/低不快刺激）」）は、いずれも女性の評定値が低いことが明らかとなっている。したがって、障害の有無を問わず、女性は男性よりも他者によって表出された非言語的な情報をより不快に評価する傾向が確認された。一方で、「音声のみ」においては発達障害者では低刺激群に、定型発達者では高刺激群に有意差が認められた点には留意する必要がある。

## 2) 年齢区分による比較（男性のみ）

定型発達者においては、34歳以下と35歳以上において「音声のみ」の高不快刺激、「表情のみ」の低不快刺激で有意差が認められた。こうした差が発達障害者でも同様に認められるかについて検討した。その結果、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの呈示条件においても、また、高不快刺激及び低不快刺激のいずれにおいても有意差は認められなかった（表2-3-4）。

表2-3-4 発達障害者における呈示条件ごとの高不快刺激・低不快刺激の評定値の比較（男性：年齢別、単位は点）

呈示刺激	対象者	低不快刺激	高不快刺激
		平均評定値 (SD)	平均評定値 (SD)
音声のみ	34歳以下 (74人)	-4.3 (5.42)	-10.8 (5.34)
	35歳以上 (24人)	-5.0 (4.29)	-10.6 (4.51)
表情のみ	34歳以下 (74人)	-7.4 (5.57)	-12.4 (6.00)
	35歳以上 (24人)	-7.1 (4.85)	-11.8 (5.73)
音声+表情	34歳以下 (74人)	-12.7 (6.65)	-20.6 (6.00)
	35歳以上 (24人)	-11.4 (4.32)	-19.8 (5.53)

## 2. 感情語への評定及び経験頻度と曖昧な刺激に対する評定

### (1) 感情語に関する比較

定型発達者では、感情語の評定について性差が認められる感情語（喜び/怒り）、年齢（男性34歳以下/男性35歳以上）差が認められる感情語（恐怖）が確認されたが、発達障害者を対象とした分析においてはこうした差はいずれの感情語でも認められなかった。

そこで、ここでは、定型発達者と発達障害者の2群間の比較を行ったところ、「恐怖」と「軽蔑」に関してのみ有意差が認められ、いずれも定型発達者においてより不快に評定していた。

表2-3-5 感情語に対する快-不快度の対象者間平均と標準偏差

感情語の種類	喜び	驚き	悲しみ	軽蔑	恐怖	嫌悪	怒り
定型発達者 (295人)	平均 (標準偏差) 3.7 (0.59)	-0.2 (0.99)	-2.2 (1.32)	-2.8 (1.05)	-3.0 (1.18)	-3.3 (0.84)	-3.4 (0.90)
発達障害者 (124人)	平均 (標準偏差) 3.6 (0.71)	-0.2 (1.10)	-2.4 (1.24)	-2.6 (1.22)	-2.7 (1.29)	-3.1 (0.95)	-3.3 (1.05)

(快 ←————→ 不快)

「軽蔑」 : t値 = -2.420、 df = 200.057、 p < 0.05 (等分散の仮定をしない)  
「恐怖」 : t値 = -1.973、 df = 200.120、 p < 0.05 (等分散の仮定をしない)

(2) 経験頻度に関する比較

曖昧な刺激に対する評定が過去の経験と関連するののかについて検討した先行研究（障害者職業総合センター調査研究報告書No. 119, 2014）では、7感情のすべてに関して定型発達者と発達障害者では経験頻度に差が認められた。具体的には、回答傾向に1%水準で有意差が認められたのは、「喜び」「悲しみ」「驚き」「恐怖」の4感情であり、5%水準で有意差が認められたのは、「怒り」「嫌悪」「軽蔑」の3感情であった。

これに対し、定型発達者・発達障害者ともに対象者を追加し、再分析を行った結果を表 2-3-6 に示した。その結果、先行研究とは異なり、1%水準で有意差が認められたのは「喜び」「恐怖」、5%水準で有意差が認められたのは「怒り」「嫌悪」であり、「悲しみ」「驚き」に関しては残差分析も含めて有意差は認められなかった。

表2-3-6 定型発達者と発達障害者における感情の経験

対象者		経験頻度			
		低群	中群	高群	
喜び	定型発達 (295人) (調整済み残差)	3.1% -1.9	31.2% -2.6	65.8% 3.3	1%水準で有意
	発達障害 (124人) (調整済み残差)	7.3% 1.9	44.4% 2.6	48.4% -3.3	
悲しみ	定型発達 (295人) (調整済み残差)	30.5% -4.0	54.2% 1.0	15.3% 2.1	
	発達障害 (124人) (調整済み残差)	32.3% 4.0	46.8% -1.0	21.0% -2.1	
怒り	定型発達 (295人) (調整済み残差)	17.6% -1.9	56.3% 2.5	26.1% -1.1	5%水準で有意
	発達障害 (124人) (調整済み残差)	25.8% 1.9	42.7% -2.5	31.5% 1.1	
嫌悪	定型発達 (295人) (調整済み残差)	26.8% 0.4	56.6% 1.7	16.6% -2.5	5%水準で有意
	発達障害 (124人) (調整済み残差)	25.0% -0.4	47.6% -1.7	27.4% 2.5	
驚き	定型発達 (295人) (調整済み残差)	25.4% -1.1	61.0% 0.1	13.6% 1.3	
	発達障害 (124人) (調整済み残差)	30.6% 1.1	60.5% -0.1	8.9% -1.3	
恐怖	定型発達 (295人) (調整済み残差)	67.5% 3.4	29.8% -1.1	2.7% -4.6	1%水準で有意
	発達障害 (124人) (調整済み残差)	50.0% -3.4	35.5% 1.1	14.5% 4.6	
軽蔑	定型発達 (295人) (調整済み残差)	54.9% 1.7	36.9% 0.3	8.1% -2.2	10%水準 (残差のみ 5%水準で有意)
	発達障害 (124人) (調整済み残差)	46.0% -1.7	38.7% -0.3	15.3% 2.2	

※網掛け部分は残差が有意であることを示す

残差分析の結果に注目すると、「喜び」については、定型発達者の方が経験が多いと回答する傾向にあり、「嫌悪」「恐怖」に関しては、特に「恐怖」について発達障害者の方が経験が多いと回答する傾向にあるこ

とが示された。この傾向は、先行研究の結果とも一致している。「怒り」に関しては、残差分析において有意差のある箇所（「怒り」経験頻度中群）が認められたが、経験頻度が高いほど、あるいは低いほどといった傾向を読みとることはできなかった。なお、「軽蔑」に関しては、10%水準と傾向ではあるが、定型発達者において経験頻度高群の割合が高かった。

経験頻度に関しては、新たな対象者を追加したことにより全体としての分析結果が変化した。特に、定型発達者に関して学生・大学院生から在職者に変更された点は大きい。なお、経験頻度に関しては、対象者が異なるだけでなく、同一対象者であっても異なった時期に実施することで結果が変化することが予想される。そうした中で、「喜び」と「恐怖」に関する経験に関して一貫した傾向が認められた点は、発達障害者の特性を理解する上で留意する点と言える。すなわち、発達障害者は日常生活を送る上で、「喜び」と感じる経験が少なく、一方で「恐怖」と感じる経験が多いことから、ストレスを感じやすい状況にある可能性が示唆できるからである。ただし、感情語の評定において、「喜び」では有意差は認められなかったが、「恐怖」に関しては定型発達者の方がより不快に評価していた点を考慮した解釈が求められる。

### （3）経験頻度と快-不快評定版における評定との関連

7感情に関する主観的な経験頻度3群間において新版F&T感情識別検査快-不快評定版の評定値に違いがあるかを検討するために感情の種類別に分散分析を行った。その結果、定型発達者については、「怒り」「嫌悪」「恐怖」の3感情の経験頻度について快-不快評定版の評定値との間に関連が有意に認められた。

発達障害者においても同様に「嫌悪」「恐怖」の2感情に関しては有意な関連が認められた。具体的には、「嫌悪」に関しては、経験頻度高群では「表情のみ（高不快刺激/低不快刺激）」「音声+表情（低不快刺激）」において経験頻度中群よりも5%水準で有意に評定値が低い（より不快に評定する）結果となったが、一方で、経験頻度低群との間には有意差は認められなかった。また、「恐怖」についても「音声のみ（低不快刺激）」「表情のみ（低不快刺激）」において、経験頻度高群では経験頻度中群よりも5%水準で有意に評定値が低い（より不快に評定する）結果となったが、「嫌悪」の場合と同様、経験頻度低群との間には有意な差が認められなかった。

なお、先行研究においても「嫌悪」と「恐怖」に関しては一定の傾向が認められたものの、結果が必ずしも一致しているとは言えず、快-不快評定版の各呈示条件において表出される感情の快-不快の評定に関して、直近（3か月以内）の主観的な経験が影響を与える可能性は低いと考えられる。ただし、発達障害者に関しては、「嫌悪」「恐怖」の経験頻度が定型発達者と異なる可能性（表2-3-6）があることから検査結果のフィードバックに際して留意する点と言えよう。

## 第Ⅱ部の要旨とまとめ

新版 F&T 感情識別検査を用いて発達障害者の非言語コミュニケーションの特性評価を行うに当たり、発達障害の診断の有無によって、検査結果にどのような違いが現れるかを把握しておくことは、検査結果から対象者のコミュニケーションの課題を推定し、支援を講じるための資料として活用する上で重要である。

第Ⅱ部のまとめに当たり、まずは、感情語に対する快-不快評定や感情の経験頻度、感情が喚起される場面の理解、表情識別の際の着目点等の特性について、発達障害者の特徴を確認した（第1章）。

次いで、発達障害者を対象としたデータの分析結果のうち、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の正答率や混同の傾向、コミュニケーション・タイプについての検討をとおし、明確な感情表現による感情識別に関する認知特性について総括した（第2章）。

さらに、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の評価結果を定型発達者（成人職者）の結果と比較することで、曖昧な感情表現による感情識別に関する発達障害者の認知特性を概観した（第3章）。

以上の知見を踏まえ、ここでは、発達障害者の感情認知に関する特性理解の検討における到達点をまとめることとした。

なお、第Ⅱ部における分析対象者は、知的障害を伴わない発達障害の診断・判断を有する 124 人（男性 96 人／女性 26 人）であり、成人期における診断が多数を占めていた。また、対象者の 84 %は、本研究でいうところの「自閉症スペクトラム」のある者が占めていた。単独診断において、さらに重複診断においても、「自閉症スペクトラム」の診断がないという者は全体の 15 %であり、診断名による結果の違いを検討できるほど十分な数の対象者のデータを取得できていないことから、本研究においては、診断名による違いは検討していない。

一方、発達障害者の回答における男女別の違いについてはデータの男女比がおおむね 4 : 1 であることから、こうした検討には困難がある。また、定型発達者の年齢区分（男性において 34 歳以下／35 歳以上）に即した分析を行ったことを付記しておく。

### 1. 発達障害者の感情認知に関する結果が示唆すること

#### (1) 感情語に関する快-不快度評定に関する検討

定型発達者と発達障害者の評定水準には、大きな違いは認められなかった。しかし、定型発達者の快-不快度評定の特徴として、快から不快の方向に、「喜び」 > 「驚き」 > 「悲しみ」 > 「恐怖・軽蔑」 > 「怒り・嫌悪」の順に並ぶこと、「恐怖」と「軽蔑」との間、及び「怒り」と「嫌悪」との間には有意差が認められないこと、が確認されており、この傾向は大学生・院生を対象とした先行研究（障害者職業総合センター，2014）の結果と同様であった。一方、発達障害者については、「喜び」がもっとも快であり、「怒り」「嫌悪」がもっとも不快である点では定型発達者と共通していたが、不快感情（「悲しみ」「軽蔑」「恐怖」）の並び順は定型発達者のようには明確ではなかった。また、感情語の快-不快度評定に対する有意な性差、年齢区分差は認められなかった。

#### (2) 感情の経験頻度に関する検討

定型発達者の直近 3 か月間の感情経験は、喜びの経験が多く、恐怖や軽蔑の経験は相対的に少ないこと、この傾向は、学生・院生を対象とした先行研究（障害者職業総合センター，2014）の結果と同様であった。

また、「喜び」は、定型発達者の方が経験頻度が高い一方で、「恐怖」「軽蔑」については発達障害者の方

が経験頻度が高いことが示された。ただし、このことから、発達障害者においては、「日常生活において快の状況を経験することは少ないが、一方で不快の状況を経験することも少ない」と結論することには慎重さを要する。直近 3 か月の経験に限定したものであり、調査時点以前の在学中・求職活動中・在職中・その他における経験が回答に反映されているわけではないからである。

### (3) 経験場面からみた感情語の選択

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の実施に際し、感情に対して適切な感情名がラベリングされていることを確認することは重要である。感情と感情語との対応を把握するために、14 の場面を自分が経験した場合に、どのような気持ちになるのかについて、感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）を 1 つ選択させたところ、感情語の選択については定型発達者と発達障害者との間で、以下のような違いが見いだされた。

発達障害者と定型発達者によって選択されやすい感情語が異なる場面が複数見いだされたことは、発達障害者と定型発達者の状況理解の食い違いが少なくないことを示唆している。相談支援においてコミュニケーションの課題に関する検討を行う際に、対象者の状況理解が独特である可能性などを確認する必要性が明らかとなった。

・「長い間、会っていなかった知人や友人と偶然出会ったとき」	
－「嫌悪」の選択率：	定型発達者（成人在職者） < 発達障害者
・「試験に合格したとき」「努力したレポートや書類をほめられたとき」	
－「喜び」の選択率：	定型発達者（成人在職者） > 発達障害者
－「驚き」の選択率：	定型発達者（成人在職者） < 発達障害者
・「仲のよい知人や友人が遠くに引っ越すことになったとき」	
－「悲しみ」の選択率：	定型発達者（成人在職者） > 発達障害者
－「驚き」「喜び」の選択率：	定型発達者（成人在職者） < 発達障害者
・「初対面の人になれなれしい言葉で話しかけられたとき」	
－「怒り」「恐怖」「軽蔑」の選択率：	定型発達者（成人在職者） > 発達障害者
・「時間をかけたレポートを誤って自分で削除したり、紛失したとき」	
－「悲しみ」の選択率：	定型発達者（成人在職者） > 発達障害者
－「恐怖」「軽蔑」の選択率：	定型発達者（成人在職者） < 発達障害者
・「信頼していた知人や友人に約束を破られたとき」	
－「悲しみ」の選択率：	定型発達者（成人在職者） > 発達障害者
－「怒り」「軽蔑」の選択率：	定型発達者（成人在職者） < 発達障害者
・「大きな地震が起こったとき」	
－「恐怖」の選択率：	定型発達者（成人在職者） > 発達障害者
－「驚き」の選択率：	定型発達者（成人在職者） < 発達障害者

### (4) 表情識別の際の着目点：

先行研究の知見（序章参照：Bal,E.他，2010；Kirchner, J.C.他，2011；Spezio, M.L.他，2007）で指摘されていた「発達障害者は表情識別の際に口に着目しやすい傾向がある」という認知特性は、本研究で調査対象とした発達障害者にも認められることが示唆された。

定型発達者が発達障害者よりも着目箇所として選択していた割合が多かった箇所は「目」に限られていたが、発達障害者が定型発達者よりも注目箇所として選択していた割合が多かった箇所は「口」や「眉」などの多岐に渡っていた。この結果は、発達障害者は定型発達者よりも表情識別に多くの顔の箇所を手がかりとして用いている、あるいは有効な手がかりを活用できていない可能性を示唆しており、表情識別に課題があ

る場合の分析において留意すべき事項と言える。

## 2. 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果が示唆すること

ここでは、発達障害者の特性を明らかにするために、F&T 感情識別検査 4 感情版開発時のデータ（障害者職業総合センター調査研究報告書 №39, 2000）及び先行研究（障害者職業総合センター, 2014）のデータと比較検討を行った。先行研究のデータ群と本研究のデータ群との間で回答傾向を検討した結果から、有意差がないこと、4 感情評定版で把握できる発達障害者の傾向は安定していることが確認された。

なお、定型発達者のデータは、大学生・大学院生 128 名（男 58 名／女 70 名）から構成されている。

### （1）正答率の比較

「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の各呈示条件について、定型発達者と発達障害者の間で正答率に差が認められており、定型発達者の平均が有意に高かった。

なお、対象者群別にみた呈示条件間の正答率については、以下の関係が明らかとなった。

発達障害者においては、音声または表情からの他者感情の読み取りに関して、定型発達者よりも困難が大きいこと、特に、表情の読み取りに関して、より困難が大きいことが示唆された。

定型発達：「音声のみ」＝「表情のみ」＜「音声+表情」 発達障害：「表情のみ」＜「音声のみ」＜「音声+表情」
--

### （2）混同の傾向

#### 1) 快-不快の混同（「喜び」と「怒り」または「嫌悪」の混同）

快-不快の混同は、定型発達者・発達障害者ともに認められており、これらの混同が発達障害者のみに特徴的であるとは言えない。しかし、「喜び」（共通して最も「快」に評定）と「怒り」または「嫌悪」（共通して最も「不快」に評定）との感情間での混同について、「音声のみ」条件では、快-不快の混同は定型発達者よりも発達障害者に多い傾向が見いだされた。

#### 2) 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の 3 感情間の混同

定型発達者、発達障害者ともに「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の 3 感情間の混同が認められた。したがって、これらの混同が発達障害者のみに特徴的であるとは言えない。ただし、いずれの条件においても「悲しみ」を「嫌悪」と混同する傾向及び「嫌悪」を「怒り」と混同する傾向が発達障害者において顕著に高い。

また、「表情のみ」条件では、「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と混同する傾向が認められた（「悲しみ」の 50%以上が「怒り」または「嫌悪」と回答された）点には留意する必要がある。

### （3）コミュニケーション・タイプ

コミュニケーション・タイプは「音声」と「表情」の回答傾向に特徴的な傾向の認められる①～⑧の 8 タイプと特徴的な傾向を有さないタイプの計 9 タイプに分類される（障害者職業総合センター調査研究報告書 №39, 2000）。

知的障害者との比較では、知的障害のない発達障害者の方が① 高受信タイプ、相補タイプが多く、低受信タイプが少ないこと、したがって、② 「音声+表情」条件では正答率が高い対象者が多いこと、③ より識別力の高い条件を優先的に利用する際、発達障害者では「音声」に依存する傾向が強いことが示唆された。

### 3. 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の結果が示唆すること

#### (1) 曖昧刺激に対する評定

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の刺激に対する快-不快の評定に関して、定型発達者と発達障害者の比較を行った結果、「音声のみ」では、発達障害者の得点が低い（より不快に評定した）のに対し、「表情のみ」「音声+表情」では、有意差は認められなかった。

こうしたことから、発達障害者は音声からの情報に関して定型発達者よりも不快に感じやすい傾向があること、「音声のみ」で行う電話対応などにおいて、よりストレスを感じやすい可能性を示唆している。

次に、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版では、結果の解釈に際し、より特徴を明確に把握する目的で高不快刺激と低不快刺激に分けてプロフィールを算出する。そのため、高不快刺激／低不快刺激に関して、それぞれ呈示条件ごとに同様の分析を行った。

「音声のみ」「音声+表情」では、B 検査（低不快刺激）において発達障害者がより不快に評価する傾向が明らかとなった。これに対し、「表情のみ」では A 検査（高不快刺激）で定型発達者の方がより不快に評価する傾向が明らかとなった。

以上のことから、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版において A 検査（高不快刺激）・B 検査（低不快刺激）のプロフィールを検討する際には、こうした傾向に留意する必要があると言えよう。

#### (2) 性別・年齢区分別の特徴

男女間では、「音声のみ（B 検査：低不快刺激）」「表情のみ（A 検査：高不快刺激）」「音声+表情（B 検査：低不快刺激）」において有意差が認められた。定型発達者を対象とした第 1 章第 1 節において同様の分析が行われ、有意差が認められた場合「音声のみ（A 検査：高不快刺激）」「表情のみ（A 検査：高不快刺激）」「音声+表情（A 検査：高不快刺激／B 検査：低不快刺激）」、いずれも女性の評定値が低いことが明らかとなっている。したがって、障害の有無を問わず、女性は男性よりも他者によって表出された非言語的な情報をより不快に評価する傾向が確認された。一方で、「音声のみ」においては発達障害者では低刺激群に、定型発達者では高刺激群に有意差が認められた点には留意する必要がある。

また、定型発達者においては、34 歳以下と 35 歳以上において「音声のみ」の高不快刺激、「表情のみ」の低不快刺激間で有意差が認められた。こうした差が発達障害者でも同様に認められるかについて対応のない検討したが、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの呈示条件においても、また、A 検査（高不快刺激）及び B 検査（低不快刺激）のいずれにおいても有意差は認められなかった。

#### (3) 経験頻度と快-不快評定版における評定との関連

経験頻度に関しては、成人在職者を新たな対象者として追加したことにより、分析結果が変化した。「喜び」については、定型発達者の方が経験が多いと回答する傾向にあり、「嫌悪」「恐怖」に関しては、特に「恐怖」に関して発達障害者の方が経験が多いと回答する傾向にあることが示された。

ただし、経験頻度に関しては、対象者が異なるだけでなく、同一対象者であっても異なった時期に実施することで結果が変化することが予想される。そうした中で、「喜び」と「恐怖」に関する経験に関して一貫した傾向が認められた点は、発達障害者の特性を理解する上で留意する点と言える。すなわち、発達障害者は日常生活を送る上で、「喜び」と感じる経験が少なく、一方で「恐怖」と感じる経験が多いことから、ストレスを感じやすい状況にある可能性が示唆できるからである。

なお、先行研究（障害者職業総合センター，2014）においても「嫌悪」と「恐怖」に関しては一定の傾向

が認められたものの、結果が必ずしも一致しているとは言えず、快-不快評定版の各呈示条件において表出される感情の快-不快の評定に関して、直近（3 か月以内）の主観的な経験が影響を与える可能性は低いと考えられる。ただし、発達障害者に関しては、「嫌悪」「恐怖」の経験頻度が定型発達者と異なる可能性があることから検査結果のフィードバックに際して留意する点と言えよう。

#### 4. 新版 F&T 感情識別検査の結果解釈において留意すべきこと

個人の結果を解釈する上で、新版 F&T 感情識別検査以外の情報（感情語の快-不快評定や経験頻度、感情を喚起する場面と感情語との対応、表情識別の際の着目点など）について把握することが意味を持つ。

その上で、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版では、快-不快の混同、不快感情間の混同の傾向について、さらにはコミュニケーション・タイプについて、把握することができる。

(1) 快-不快の混同はないか

特に、「音声のみ」条件で快-不快の混同はないか

(2) 正答率の低い呈示条件は何か

特に、「表情のみ」条件で正答率が低くないか

(3) 「他者が表出している感情をより不快度が高い方向に読み取る（「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み取る）傾向はないか

特に、「表情のみ」条件で、「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み間違える傾向がないか

(4) コミュニケーション・タイプから特徴を読み取れているか

さらに、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版では、不快度評定の現れ方に注目することが重要である。

(1) 曖昧刺激に対する快-不快評定値は、一般基準の分布より不快もしくは快の方向に偏っていないか

“より不快に評定する”傾向が認められる場合、「怒り」や「嫌悪」「恐怖」に関する主観的な経験が影響していないか

(2) 不快度の高い曖昧刺激（A 検査：高不快刺激）への回答と不快度の低い曖昧刺激（B 検査：低不快刺激）への回答のプロフィールは、異なるか

(3) A 検査・B 検査それぞれの結果は、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の条件によって異なるか

(4) 読み取りにおいて、快-不快の混同があるか

① 快の感情を「不快」と読み誤る傾向があるか

② 不快度の高い曖昧刺激（A 検査：高不快刺激）を「快」と読み誤る傾向があるか

こうした、発達障害者の評定において、“より不快に評定する”“より快に評定する”などの傾向がある場合、感情語の快-不快評定や感情経験の多寡の他に、感情と感情語の対応やラベリングの適切さやユニークさの確認が求められる場合もある。

#### 【文献】

Ashwin, C., Chapman, E., Colle, L., & Baron-Cohen, S. (2006). Impaired recognition of negative basic emotions in autism: a test of the amygdala theory. *Social Neuroscience*, 1, 349-363.

Bal, E., Harden, E., Lamb, D., van Hecke, A. V., Denver, J. W., & Porges, S. W. (2010). Emotion recognition in children with autism spectrum disorders: Relations to eye gaze and autonomic state. *Journal of Autism &*

*Developmental Disorders*, **40**, 358-370.

Harms, M. B., Martin, A., & Wallace, G. L. (2010). Facial emotion recognition in autism spectrum disorders: A review of behavioral and neuroimaging studies. *Neuropsychology Review*, **20**, 290-322.

Kirchner, J. C., Hatri, A., Heekeren, H. R., & Dziobek, I. (2011). Autistic symptomatology, face processing abilities, and eye fixation patterns. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **41**, 158-167.

太田 智美・田村 真理子・有田 真理子・木曾 奈央子・佐伯 行一 (2005) エクマンにより提唱されている表情の特徴との比較検討 滋賀医科大学看護学ジャーナル Vol.3, No.120-24

障害者職業総合センター (2000) 調査研究報告書 №39 知的障害者の非言語的コミュニケーションスキルに関する研究 .....F&T 感情識別検査の開発 .....

障害者職業総合センター (2014) 調査研究報告書 №119 発達障害者の非言語的コミュニケーションスキルの特性評価に関する研究 .....F&T 感情識別検査拡大版の開発と試行に基づく検討 .....

Spezio, M. L., Adolphs, R., Hurley, R. S., & Piven, J. (2007). Abnormal use of facial information in high-functioning autism. *Journal of Autism & Developmental Disorders*, **37**, 929-939.

Tracy, J. L., Robins, R. W., Schriber, R. A., & Solomon, M. (2011). Is emotion recognition impaired in individuals with autism spectrum disorders? *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **41**, 102-109.

Uono, S., Sato, W. & Toichi, M. (2013). Common and unique impairments in facial-expression recognition in pervasive developmental disorder-not otherwise specified and Asperger's disorder. *Research in Autism Spectrum Disorders*, **7**, 361-368.



# はじめに

## 1. 発達障害者のコミュニケーション・スキルに関する支援の在り方に関する検討

第Ⅰ部・第Ⅱ部の検討により、「音声」や「表情」から他者の感情をどのように読み取るかという非言語コミュニケーションの特性評価は、対人コミュニケーションに困難がある発達障害者の支援において有効な情報となることを確認した。また、感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に対する快-不快評定、及び各感情の経験頻度、感情場面の理解、表情の着目箇所について把握することにより、非言語コミュニケーションの特性評価の結果を効果的に活用できることを明らかにした。ここでは、さらに、発達障害者の適応上の課題として適切な評価と理解が必要であると考えられる対人場面のストレスに焦点を当てるとともに、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の結果との関連を検討することをとおして発達障害者支援の課題を明らかにすることを試みる。

まず、対人関係のストレスに関する検討を行う。ここでは、ストレスを測定する意義や測定尺度の作成、及び作成した「対人関係におけるストレス尺度」で把握された定型発達者と発達障害者の結果についての検討を行うとともに、発達障害者の対人ストレスと曖昧な感情表現に対する認知特性からみた支援の課題について検討を行う。

さらに、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版・快-不快評定版と質問紙調査の結果に基づいて実施したヒアリング調査により、事例からみた発達障害者支援の課題について整理するとともに、新版 F&T 感情識別検査の結果を解釈する上での留意事項をまとめることとする。

## 2. 調査の概要

(1) 発達障害者の特性把握のための調査（分析結果については第Ⅱ部を参照のこと）

- ① 調査対象：就労支援機関等を利用する発達障害のある成人 124 人（男性 98 人／女性 26 人）
- ② 調査時期：平成 24 年 10 月～平成 28 年 10 月（研究計画その 1／研究計画その 2：本研究）
- ③ 調査内容：新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版／快-不快評定版：

「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の 3 条件における評定

質問紙調査：感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に対応する快-不快の程度  
調査時点における直近 3 か月間の感情経験の頻度／感情場面と感情語の対応  
表情写真が表現する感情と着目箇所／対人関係におけるストレス 等

- ④ 調査方法：検査は個別又は小集団で実施／質問紙調査は自記式回答で実施

(2) ヒアリング調査

上記（1）発達障害者対象調査において、ヒアリングへの同意が得られた発達障害者に協力依頼を行い、新版 F&T 感情識別検査の結果等に基づきコミュニケーション・スキルの活用に関する聞き取り調査を実施した。

- ① 調査対象：発達障害者 21 人（研究計画その 1／研究計画その 2：本研究）
- ② 調査時期：平成 25 年 8 月～平成 28 年 10 月
- ③ 調査内容：職歴や生活経験、コミュニケーションの課題等

以上をとおして、発達障害者のコミュニケーション・スキルに関する支援の在り方について総括することとする。

### 3. 第三部の構成

第1章では、対人関係のストレスに関する調査結果を概観し、対人関係におけるストレス尺度得点からみた発達障害者の対人ストレスの特徴について、(ア) 定型発達者のストレスの特徴、(イ) 発達障害者のストレスの特徴、(ウ) 発達障害者における対人ストレスと曖昧な感情表現に関する評価について報告する。

また第2章では、「事例からみた発達障害者支援の課題 ―ヒアリング調査の結果から―」として、(ア) 就職を目指す上でコミュニケーションに関する課題整理を図った事例、(イ) 離転職を繰り返す中でコミュニケーション上の問題に直面し、“適職”を探索している事例、(ウ) 就職後の適応に関する課題への対応を検討している事例、(エ) 異動・昇進による不応への課題への対応を検討している事例を取り上げ、新版 F&T 感情識別検査の結果に基づき検討したコミュニケーション・スキルに関する支援の在り方について報告する。

さらに、第3章では、コミュニケーション・タイプ別に4感情評定版と快-不快評定版の結果から結果解釈の留意事項をまとめる。

## 第1章 対人ストレスに関する検討

発達障害者のストレスについては、感覚的（聴覚・視覚・触覚等）ストレス、生理的（過労・睡眠不足等）ストレス、社会的（対人関係）ストレスの3つに分けて考える必要がある。感覚的ストレスについては、DSM-5の自閉症スペクトラム障害の診断基準にもみられるように、感覚の過敏・鈍麻に起因するストレスが考えられる。この点に関しては、環境の調整が最も妥当な対処法と言えよう。また、生理的ストレスに関しては、就労継続の視点から重要であるものの、その課題が生活面から生じている場合は、職場だけでなく家庭生活での対応が必要である。これに対して、対人関係に起因するストレスに関しては、職場で起こることも多く、また、離職の理由として挙げられることが多いことから、何らかの対応が必要と言える。なお、職場における対人関係のストレスに関しては、発達障害者に限らず、一般的にストレスとなっている。

特に発達障害者に関しては、対人的な場面での状況認知において定型発達者とは異なる可能性が指摘されている（冗談が分かりにくいなど）。その結果、対人的なトラブルに発展することもあるが、ここで重要なことは、ストレスが状況に対する認知的な評価の結果に基づくものであるという点である。認知的な評価の時点で異なっていれば、当然のことながら、同一の場面における定型発達者と発達障害者の行動やその際に感じるストレスは異なることが予想される。例えば、「忙しそうにしている人に仕事を頼む」などの場面では、多くの人がストレスを感じるが、「忙しそうにしている」という状況の認知に違いがあれば、実際の行動も、また、感じるストレスも異なったものになる。そのため、発達障害者のストレスについて検討する際には、状況認知とその後の評価に分けて考える必要があると言える。本研究では、この点に関して、質問紙を用いて状況を明示し、その場面を経験した場合のストレスを尋ねることで状況認知後のストレスに関する両者の違いを検討する。もし、両者に違いがあるとすれば、職場の対人関係について配慮する際に、場面状況を説明するだけでなく、その状況において一般的に感じるストレスの度合いなどについても考慮して伝える必要があるからである。

また、項目の策定に関しては、発達障害者へのフィードバックの観点から、方向性を重視することも必要と言える。ストレスは橋本（2003）が指摘しているように「負荷を与える（能動的）」場合と「負荷を与えられる場合（受動的）」がある一方で、両者に関わるケースもある。例えば、相手の話している内容が分からないと感じる場合、話し手の課題（具体的でない、前提が曖昧、論理的でない、など）なのか、聞き手の課題（文脈の理解が苦手、聴覚的な情報の理解が苦手、など）なのかに関わらず、ストレスを感じることになる。また、「自分の話している内容が相手に伝わらない」場合も同様である。実際の場面では、話し手と聞き手のどちらの課題が大きいのか、ある程度評価が可能であるが、もし発達障害者がこれらの課題をより自分側の困難として感じている場合は、こうした場面でのストレス評価は、定型発達者と異なる可能性があるからである。

こうしたことを背景に新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版はこの対人ストレスの一因について検討することを目的に開発された。第1章では、まず、第1節において定型発達者における対人ストレスの特徴について、次いで、第2節で発達障害者における対人ストレスの特徴について、それぞれ先行研究（障害者職業総合センター、2014）によって作成されたストレス尺度得点を基に検討する。なお、ストレス尺度は、ストレスの原因が主として他者の言動にある場合の尺度（〈他者の言動〉尺度）、主として自分の言動にある場合の尺度（〈自己の言動〉尺度）、そして、ストレスの原因が自分と他者の双方にある（両者の関係性においてある）場合の2尺度（〈孤立感〉尺度と〈意思疎通〉尺度）の計4尺度から構成されている。〈孤立感〉尺度と〈意思疎通〉尺度は両方ともストレスの原因は自分と他人との関係性が良好でないことに基づく

ストレスという点では共通しているものの、後者は前者よりもコミュニケーション・スキルとの関連が深い。  
 なお、第1節並びに第2節での結果を踏まえ、第3節では対人ストレスと新版F&T感情識別検査快-不快  
 評定版の結果に関して検討した結果について報告する。

## 第1節 ストレス尺度得点からみた定型発達者の対人ストレスの特徴

### 1. 方法

調査対象・時期：第I部と同様。

分析対象者：定型発達（成人職者）295人（男性148人、女性147人）

年齢範囲 21-59歳 平均 39.4歳（SD 10.4歳）

調査内容：ストレス尺度は新版F&T感情識別検査快-不快評定版のデータ収集を行った直後の質問紙調査  
 において実施した。回答は質問項目で指定された場面を自分が経験した場合、どの程度ストレス  
 を感じるかについて、「0：まったくない」—「4：非常に感じる」の5件法で評定させた（項目  
 得点：0点～4点）。また、項目で指定された場面の経験がないために評定できない場合は「経  
 験がないため回答できない」という回答欄に○を記入させ、得点の算出に当たっては欠損値とし  
 て除外した。したがって、以下の分析対象者の人数には若干の差が認められる。

表3-1-1 対人関係におけるストレス尺度の質問項目

- 
1. 同じことを何度も言わなければならない
  2. 会議や話し合いなど、グループでの会話中に「何をしゃべったらいいのか」わからなくなる
  3. 人が「あなたのことを嫌っているか」気になる
  4. 嫌いな人と会話する
  5. 忙しそうにしている人に、あなたの仕事の手伝いを頼む
  6. 所属しているグループで「自分が孤立している」と感じる
  7. 会話中に気まずい沈黙がある
  8. 「人が自分に気をつけて話している」と感じる
  9. 遅刻する人がいて、待たされる
  10. あなたの遅刻により、人を待たせる
  11. あなたがある人を嫌っていることを、本人に気づかれる
  12. 自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされる
  13. あなたが貸した物を期日までに返してくれない
  14. 気をつけて、人にあわせた会話をする
  15. 自慢話や愚痴を言いたいのに、誰も聞いてくれない
  16. 話している人が自分に伝えたいことを、理解できない
  17. 自分の言いたいことが、人に上手く伝わらない
  18. 忙しいときに、仕事を頼まれる
  19. テンポの合わない人と会話する
  20. 同じことを何度も言われる
  21. 言い争いをする
  22. 親しくなりたい人と、なかなか親しくなれない
  23. 借りた物を期日までに返せなかった
  24. 会議や話し合いなど、グループでの会話中に話の流れがわからなくなる
- 

〈他者の言動〉	1,4,9,12,13,14,18,19,20, (9項目)	〈自己の言動〉	5,10,23 (3項目)
〈孤立感〉	2,3,6,7,8,11,24 (7項目)	〈意思疎通〉	15,16,17,22 (4項目)

### 2. 定型発達者における対人ストレスの特徴（性差／年齢区分差）

まず、4尺度に関するストレスの程度を検討するために、尺度得点の被検査者間平均について、尺度を  
 独立変数とした1要因の分散分析を実施した。その結果、有意な主効果が認められた ( $F(3,293) = 127.0, p <$

01)。尺度得点は、〈自己の言動〉尺度 ( $M=2.8$ ,  $SD=0.80$ )、〈他者の言動〉尺度 ( $M=2.3$ ,  $SD=0.64$ )、〈孤立感〉尺度 ( $M=2.2$ ,  $SD=0.73$ )、〈意思疎通〉尺度 ( $M=1.9$ ,  $SD=0.72$ ) の順に高かった (図 3-1-1)。この順位に関しては、先行研究 (障害者職業総合センター、2014) の結果と一致する。なお、その後の Bonferroni 法 ( $p<.05$ ) による多重比較においては、〈他者の言動〉尺度と〈孤立感〉尺度の間に有意差が認められなかった以外、すべての組み合わせで 1%水準の有意差が認められた (図 3-1-1)。この結果は、先行研究において〈自己の言動〉尺度と〈孤立感〉尺度の間、そして、〈意思疎通〉尺度と他のすべての条件の間において有意差が認められたという結果とは異なった。この点に関しては、今回の対象者が在職者であることが影響している可能性が考えられる。

次に、性別によるストレスの特徴の違いを検査するために、尺度得点の被検査者間平均を性別に算出し、尺度ごとに尺度得点の性差について、独立したサンプルの  $t$  検定を実施した。その結果、すべての尺度について、5%水準で女性の方が男性よりも得点が高い (ストレスを感じる) 結果となった (図 3-1-2)。

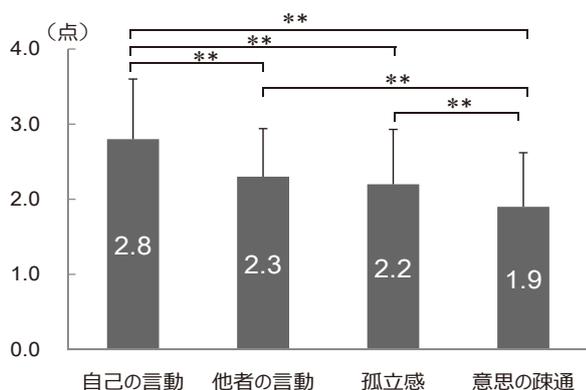


図3-1-1 定型発達者のストレス因子別の尺度得点 (\*\* $p<.01$ )

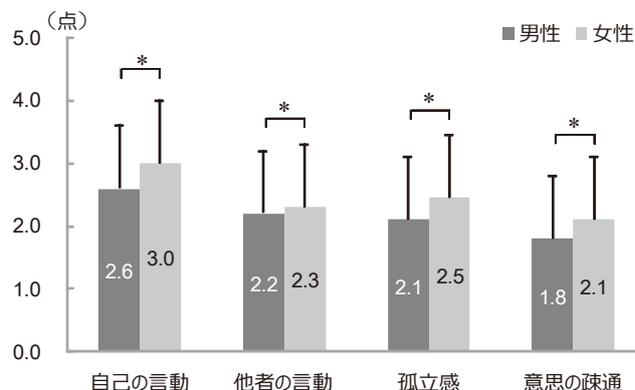


図3-1-2 定型発達者の男女別のストレス因子別の尺度得点 (\* $p<.05$ )

また、同様の分析方法にて、男性の 34 歳以下と 35 歳以上についても差が認められるか検討した。その結果、〈自己の言動〉尺度では 1%水準で ( $t$  値=3.376,  $df=97.736$ ,  $p<0.01$ )、また、〈孤立感〉尺度では 5%水準で ( $t$  値=2.510,  $df=146$ ,  $p<0.05$ ) 有意差が認められた (図 3-1-3)。なお、いずれにおいても 35 歳以上の得点が高く、同じ状況を経験した場合であってもより強くストレスを感じる可能性が示唆された。

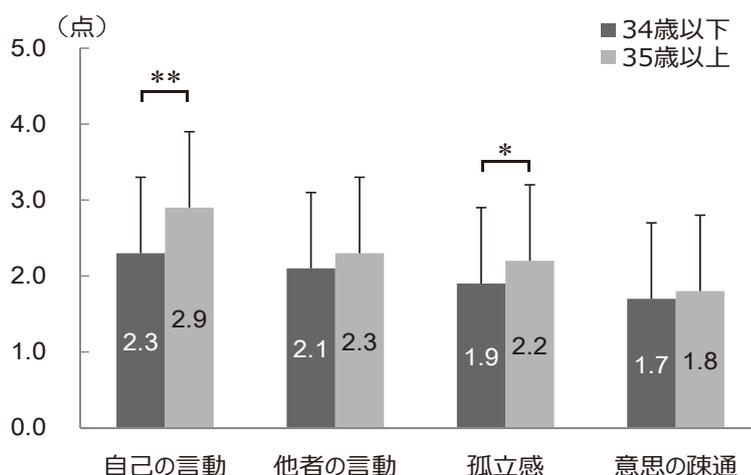


図3-1-3 定型発達者の男性34歳以下と35歳以上のストレス因子別の尺度得点 検査者間平均 (\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ )

以上に加え、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版においては、女性と男性を分けて、また、男性に関して 34 歳以下と 35 歳以上で分けて考察することとしている。そのため、ストレス尺度ごとにこの 3 群間で差

が認められるかについても一要因の分散分析を実施した。その結果、4 尺度のいずれにおいても群間の有意差（〈自己の言動〉尺度・〈孤立感〉尺度・〈意思疎通〉尺度では 1%水準、〈他者の言動〉尺度では 5%水準）が認められ、かつ、その後の多重比較において男性 34 歳以下と女性の間には有意差が認められた。一方、女性と 35 歳以上の男性との間では有意差は認められなかった。したがって、性差は主に 34 歳以下の男性の評価の影響を受けている可能性が示唆されるとともに、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版において、女性と男性を分けて、また男性に関して 34 歳以下と 35 歳以上で分けて考察することで、より発達障害者の特徴について詳細に分析できる可能性が示唆されたと言える。

## 第 2 節 ストレス尺度得点からみた発達障害者の対人ストレスの特徴

### 1. 発達障害者のストレス評定値について（尺度得点）

ここでは、ストレス尺度に関する評価について、定型発達者と発達障害者との間に違いが認められるかについて検討する。なお、発達障害者においても、4 尺度に関するストレスの度合いを検討するために、得点の被検査者間平均について、尺度を独立変数とした 1 要因の分散分析を実施した。その結果、有意な主効果が認められた ( $F(3,122) = 8.521, p < .01$ )。尺度得点は、〈自己の言動〉尺度 ( $M=2.7, SD=0.09$ )、〈他者の言動〉尺度 ( $M=2.5, SD=0.08$ )、〈孤立感〉尺度 ( $M=2.4, SD=0.07$ )、〈意思疎通〉尺度 ( $M=2.3, SD=0.08$ ) の順に高かった。この結果は、定型発達者の順位と同様である (図 3-1-4)。なお、その後の Bonferroni 法 ( $p < .05$ ) による多重比較においては、〈孤立感〉尺度と〈他者の言動〉尺度・〈意思疎通〉尺度の間にそれぞれ有意差が認められなかった以外、すべての組み合わせで 5%水準の有意差が認められた。

また、発達障害者の性差についても独立したサンプルの t 検定による分析を実施した。その結果、〈孤立感〉尺度 ( $t$  値=2.539,  $df=122, p < 0.05$ ) と〈自己の言動〉尺度 ( $t$  値=2.547,  $df=122, p < 0.05$ ) において 5%水準で有意差が認められ、いずれも女性の評定値が高い (ストレスを感じる) 結果となった。定型発達者の結果とは、一部異なるものの、女性の方が一貫して同じ状況を体験としたとしてもよりストレスを強く感じるという結果は共通していた (図 3-1-5)。この点は、発達障害の有無に関わらない特性として留意すべき点である。

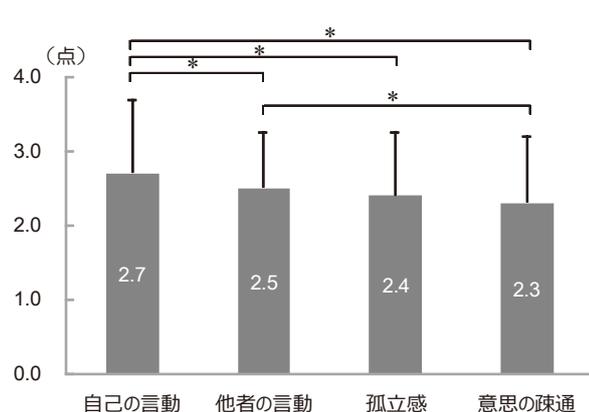


図3-1-4 発達障害者のストレス因子別の尺度得点 (\* $p < .05$ )

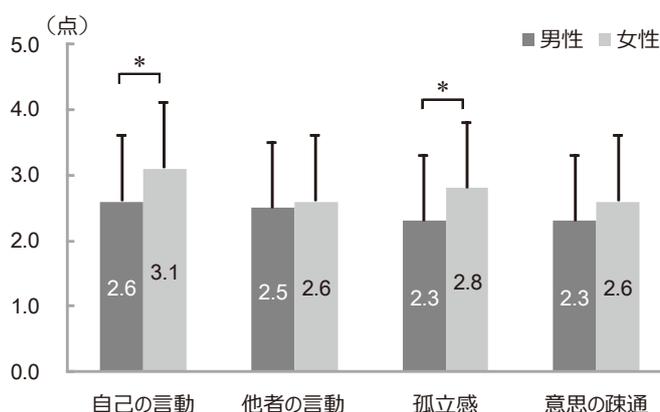


図3-1-5 発達障害者の男女別のストレス因子別の尺度得点 (\* $p < .05$ )

次に、男性の 34 歳以下と 35 歳以上で差が認められるかについて尺度ごとに独立したサンプルの t 検定を実施したところ、4 尺度のいずれにおいても有意差は認められなかった。

## 2. 定型発達者と発達障害者のストレス評価の違いについて（尺度得点）

定型発達者においては女性・男性 34 歳以下・35 歳以上の 3 群間でストレス尺度得点に差が認められた一方、発達障害者に関しては、性差は認められたものの年齢群間で有意差は認められなかった。そこで、男女別に発達障害者との違いを検討することとした。

### （1）男性（定型発達者／発達障害者）における尺度得点の差について

表 3-1-2 から分かるように〈他者の言動〉尺度と〈意思疎通〉尺度に関しては、いずれも発達障害者の得点が高く、ストレスをより強く感じると評価した。

表3-1-2 定型発達者と発達障害者における各尺度の得点（単位は点）

	対象者	平均値	標準偏差	
自己の言動	定型発達（148人）	2.6	0.87	
	発達障害（97人）	2.6	0.99	
他者の言動	定型発達（148人）	2.2	0.67	） 1%水準で有意
	発達障害（98人）	2.5	0.76	
孤立感	定型発達（148人）	2.1	0.71	
	発達障害（98人）	2.3	0.86	
意思疎通	定型発達（148人）	1.8	0.66	） 1%水準で有意
	発達障害（98人）	2.3	0.93	

〈自己の言動〉 : t 値=0.179、自由度=243、有意確率=0.862（等分散の仮定）  
 〈他者の言動〉 : t 値=-3.261 自由度=244、有意確率<0.01（等分散の仮定）  
 〈孤立感〉 : t 値=-1.797 自由度=244 有意確率=0.074（等分散の仮定）  
 〈意思疎通〉 : t 値=-4.587 自由度=160.989 有意確率<0.01（等分散の仮定をしない）

### （2）女性（定型発達者／発達障害者）における尺度得点の差について

表 3-1-3 から分かるように〈他者の言動〉尺度、〈孤立感〉尺度、〈意思疎通〉尺度の 3 尺度に関しては、いずれも発達障害者の得点が高く、ストレスをより強く感じると評価した。

表3-1-3 定型発達者と発達障害者における各尺度の得点（単位は点）

	対象者	平均値	標準偏差	
自己の言動	定型発達（147人）	3.0	0.70	
	発達障害（26人）	3.1	0.87	
他者の言動	定型発達（147人）	2.3	0.61	） 5%水準で有意
	発達障害（26人）	2.6	0.78	
孤立感	定型発達（147人）	2.3	0.73	） 5%水準で有意
	発達障害（26人）	2.7	0.76	
意思疎通	定型発達（147人）	2.1	0.75	） 1%水準で有意
	発達障害（26人）	2.5	0.75	

〈自己の言動〉 : t 値=-1.069、自由度=171 有意確率=0.287（等分散の仮定）  
 〈他者の言動〉 : t 値=-2.132、自由度=171 有意確率<0.05（等分散の仮定）  
 〈孤立感〉 : t 値=-2.269 自由度=171 有意確率<0.05（等分散の仮定）  
 〈意思疎通〉 : t 値=-3.036 自由度=171 有意確率<0.01（等分散の仮定）

### （3）発達障害者の特徴について

男性では、〈他者の言動〉尺度と〈意思疎通〉尺度の 2 尺度に関して、また、女性では〈他者の言動〉

尺度、〈孤立感〉尺度、〈意思疎通〉尺度の3尺度に関して有意差が認められ、かつ、いずれの場合であっても発達障害者の尺度得点が高かった。このことから、状況に関して同様に認知したとしても発達障害者の方がより強くストレスを感じる可能性が示唆された。特に、〈他者の言動〉及び〈意思疎通〉の2尺度には男女ともに有意差が認められていることから、発達障害者の対人ストレスにおける特徴の1つと考えられる。

なお、「意思疎通」を要求される場面でより強くストレスを感じることは、発達障害者が自身のコミュニケーションにおける困難をどのように評価しているかと関連している可能性がある。また、「他者の言動」がストレス一因となるものの、どのように対処することが適切に関するスキルが十分ではない場合、その状況はストレス下において継続することが予想される。他者の言動に関してストレスだと感じた場合にどのように対処するか、そのスキルの付与なども職業準備の活動において考慮される必要があると言える。

### 3. 定型発達者と発達障害者の項目ごとのストレス評定の違いについて（項目ごとの分析）

ここでは、24項目のそれぞれについて定型発達者と発達障害者で有意差が認められたかについて検討した。その結果、項目中表 3-1-4 にみられる 13 項目に関して有意差が認められた。定型発達者の方がより強くストレスを感じると評価したのは、「会議などで『何をしゃべったらいいのかわからなくなる（表中●印）の1項目のみで、他の 12 項目（表中○印）に関しては、発達障害者の方がより強くストレスを感じると評価した。なお、〈自己の言動〉尺度に含まれる項目（表中アンダーライン）に関しては、発達障害者と定型発達者の間で有意差が認められる項目はなかった。

したがって、これらの有意差が認められた項目に関しては、尺度得点による評価とは別に、発達障害者の特徴として、結果のフィードバックの際や日頃の対人場面で留意して観察することが必要と言えよう。

表3-1-4 定型発達者と発達障害者における各尺度の得点

1.	同じことを何度も言わなければならない			
●	2. 会議や話し合いなど、グループでの会話中に「何をしゃべったらいいのかわからなくなる			
○	3. 人が「あなたのことを嫌っているか」気になる			
	4. 嫌いな人と会話する			
	5. <u>忙しいようにしている人に、あなたの仕事の手伝いを頼む</u>			
○	6. <u>所属しているグループで「自分が孤立している」と感じる</u>			
	7. 会話中に気まずい沈黙がある			
	8. 「人が自分に気がつかって話している」と感じる			
	9. 遅刻する人がいて、待たされる			
	10. <u>あなたの遅刻により、人を待たせる</u>			
	11. <u>あなたがある人を嫌っていることを、本人に気づかれる</u>			
○	12. 自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされる			
○	13. あなたが貸した物を期日までに返してくれない			
○	14. 気がつかって、人にあわせた会話をする			
○	15. 自慢話や愚痴を言いたいのに、誰も聞いてくれない			
○	16. 話している人が自分に伝えたいことを、理解できない			
○	17. 自分の言いたいことが、人に上手く伝わらない			
○	18. 忙しいときに、仕事を頼まれる			
○	19. テンポの合わない人と会話する			
	20. 同じことを何度も言われる			
	21. 言い争いをする			
○	22. 親しくなりたい人と、なかなか親しくなれない			
	23. <u>借りた物を期日までに返せなかった</u>			
○	24. 会議や話し合いなど、グループでの会話中に話の流れがわからなくなる			
	〈他者の言動〉	1,4,9,12,13,14,18,19,20, (9項目)	〈自己の言動〉	5,10,23 (3項目)
	〈孤立感〉	2,3,6,7,8,11,24 (7項目)	〈意思疎通〉	15,16,17,22 (4項目)

### 第3節 対人ストレス尺度得点と新版F&T感情識別検査快-不快評定版の結果からみた発達障害者の特徴

第3節では、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の高不快刺激／低不快刺激（曖昧な感情表現）に対する評定値と対人ストレス尺度得点との関連について検討した結果を報告する。なお、結果の分析においては、男性と女性を分けて検討した。

#### 1. 定型発達者と発達障害者の比較（男性）

ストレス尺度得点と新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の高不快刺激／低不快刺激（曖昧な感情表現）に対する評定値との間に関連があるかについて、尺度ごとに Pearson の相関係数を求めた（表 3-1-5 ～表 3-1-8）。なお、相関係数の検定では、対象者数（サンプル数）の大きさに有意差の有無が左右される点は留意する必要がある。サンプル数が大きい（対象者数が多い）ときは、値が小さくても有意となるからである。

表3-1-5 ストレス尺度得点と曖昧な感情表現に対する評定値との関連  
定型発達者 男性 全体

	音声		表情		音声+表情	
	高不快	低不快	高不快	低不快	高不快	低不快
他者の言動	<b>-.144</b>	<b>-.177*</b>	<b>-.252**</b>	<b>-.198*</b>	<b>-.255**</b>	<b>-.273**</b>
	.080	.031	.002	.016	.002	.001
孤立感	<b>-.206*</b>	<b>-.219**</b>	<b>-.247**</b>	<b>-.205*</b>	<b>-.304**</b>	<b>-.275**</b>
	.012	.008	.003	.013	.000	.001
意思疎通	<b>-.264**</b>	<b>-.180*</b>	<b>-.309**</b>	<b>-.223**</b>	<b>-.251**</b>	<b>-.296**</b>
	.001	.029	.000	.006	.002	.000
自己の言動	<b>.039</b>	<b>-.019</b>	<b>-.083</b>	<b>-.085</b>	<b>-.078</b>	<b>-.096</b>
	.641	.818	.314	.302	.345	.244

\*\* : 1% 水準で有意 (両側)                      \* : 5% 水準で有意 (両側)  
上段 : 相関係数                                      下段 : 有意確率

表3-1-6 ストレス尺度得点と曖昧な感情表現に対する評定値との関連  
定型発達者 男性 (34歳以下)

	音声		表情		音声+表情	
	高不快	低不快	高不快	低不快	高不快	低不快
他者の言動	<b>-.308*</b>	<b>-.182</b>	<b>-.387**</b>	<b>-.234</b>	<b>-.351**</b>	<b>-.267*</b>
	.016	.160	.002	.069	.006	.038
孤立感	<b>-.278*</b>	<b>-.258*</b>	<b>-.322*</b>	<b>-.274*</b>	<b>-.252</b>	<b>-.211</b>
	.030	.045	.011	.033	.050	.103
意思疎通	<b>-.341**</b>	<b>-.146</b>	<b>-.368**</b>	<b>-.213</b>	<b>-.294*</b>	<b>-.282*</b>
	.007	.262	.004	.099	.021	.027
自己の言動	<b>.010</b>	<b>-.030</b>	<b>-.168</b>	<b>-.176</b>	<b>-.050</b>	<b>-.175</b>
	.937	.820	.196	.176	.701	.176

\*\* : 1% 水準で有意 (両側)                      \* : 5% 水準で有意 (両側)  
上段 : 相関係数                                      下段 : 有意確率

表3-1-7 ストレス尺度得点と曖昧な感情表現に対する評定値との関連  
定型発達者 男性 (35歳以上)

	音声		表情		音声+表情	
	高不快	低不快	高不快	低不快	高不快	低不快
他者の言動	<b>-.074</b>	<b>-.179</b>	<b>-.199</b>	<b>-.224*</b>	<b>-.195</b>	<b>-.310**</b>
	.495	.094	.063	.036	.068	.003
孤立感	<b>-.236*</b>	<b>-.196</b>	<b>-.248*</b>	<b>-.223*</b>	<b>-.355**</b>	<b>-.367**</b>
	.027	.067	.020	.037	.001	.000
意思疎通	<b>-.241*</b>	<b>-.214*</b>	<b>-.301**</b>	<b>-.272*</b>	<b>-.230*</b>	<b>-.328**</b>
	.024	.046	.004	.010	.031	.002
自己の言動	<b>-.044</b>	<b>-.006</b>	<b>-.071</b>	<b>-.085</b>	<b>-.111</b>	<b>-.086</b>
	.687	.953	.513	.430	.304	.426

\*\* : 1% 水準で有意 (両側)                      \* : 5% 水準で有意 (両側)  
上段 : 相関係数                                      下段 : 有意確率

表3-1-8 ストレス尺度得点と曖昧な感情表現に対する評定値との関連  
発達障害者 男性 全体

	音声		表情		音声+表情	
	高不快	低不快	高不快	低不快	高不快	低不快
他者の言動	<b>-.218*</b>	<b>-.070</b>	<b>-.123</b>	<b>-.123</b>	<b>-.254*</b>	<b>-.212*</b>
	.031	.491	.228	.228	.012	.036
孤立感	<b>-.304**</b>	<b>-.047</b>	<b>-.200*</b>	<b>-.294**</b>	<b>-.289**</b>	<b>-.303**</b>
	.002	.647	.048	.003	.004	.002
意思疎通	<b>-.342**</b>	<b>-.143</b>	<b>-.257*</b>	<b>-.376**</b>	<b>-.392**</b>	<b>-.411**</b>
	.001	.159	.011	.000	.000	.000
自己の言動	<b>-.268**</b>	<b>-.190</b>	<b>-.174</b>	<b>-.282**</b>	<b>-.225*</b>	<b>-.310**</b>
	.008	.063	.088	.005	.026	.002

\*\* : 1% 水準で有意 (両側)                      \* : 5% 水準で有意 (両側)  
上段 : 相関係数                                      下段 : 有意確率

結果からは、いずれも相関係数 (r) そのものは大きいとは言えず、有意である場合も弱い相関 (r=0.2 ~ 0.4) となった。この点を踏まえ、ストレス尺度得点と高不快刺激/低不快刺激の間で相関が有意であるかに注目した。その結果定型発達者では、34 歳以下 (60 人) と 35 歳以上 (88 人) で一部異なる箇所は認められるものの、いずれの場合も〈自己の言動〉尺度に関する相関は認められなかった。この傾向は、全数を合わせた (148 人) の結果においても同様であった。

これに対し、発達障害者の場合は、やはり弱い相関ではあるが、ほとんどの組み合わせ (24 組中 17 組) で 5% 水準以上で有意であった。特に、定型発達者において認められなかった〈自己の言動〉尺度において有意であった (「音声のみ」条件 : 低不快 / 「表情のみ」条件 : 高不快を除く)。

以上から、男性においては障害の有無を問わず、「他者の言動、孤立感、意思疎通のそれぞれの状況においてより強くストレスを感じる」と「表出された曖昧な感情をより不快に読み取る傾向」との間には関連があると言える。また、発達障害者では、さらに〈自己の言動〉に関しても弱い相関が認められた。状況の認知においてよりストレスを感じ、その時に表出される曖昧な非言語的情報 (音声/表情) に関してもより不快に評価するのであれば、職場における対人ストレスは一層強いものとなる可能性がある。

## 2. 定型発達者と発達障害者の比較（女性）

女性に関しても同様にストレス尺度得点と新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の高不快刺激／低不快刺激（曖昧な感情表現）に対する評定値との間に関連があるかについて尺度ごとに Pearson の相関係数を求めた（表 3-1-9～表 3-1-10）。なお女性に関しては、他の分析と同様に一群として分析をした。

表3-1-9 ストレス尺度得点と曖昧な感情表現に対する評定値との関連  
定型発達者 女性 全体

	音声		表情		音声+表情	
	高不快	低不快	高不快	低不快	高不快	低不快
他者の言動	<b>-.153</b>	<b>-.137</b>	<b>-.165*</b>	<b>-.129</b>	<b>-.294**</b>	<b>-.202*</b>
	.064	.097	.046	.120	.000	.014
孤立感	<b>-.165*</b>	<b>-.059</b>	<b>-.094</b>	<b>-.078</b>	<b>-.251**</b>	<b>-.107</b>
	.046	.479	.257	.349	.002	.197
意思疎通	<b>-.191*</b>	<b>-.098</b>	<b>-.067</b>	<b>-.064</b>	<b>-.254**</b>	<b>-.204*</b>
	.021	.239	.418	.443	.002	.013
自己の言動	<b>-.173*</b>	<b>-.068</b>	<b>-.236**</b>	<b>-.257**</b>	<b>-.211*</b>	<b>-.181*</b>
	.037	.415	.004	.002	.011	.029

\*\* : 1% 水準で有意 (両側)  
上段 : 相関係数

\* : 5% 水準で有意 (両側)  
下段 : 有意確率

表3-1-10 ストレス尺度得点と曖昧な感情表現に対する評定値との関連  
発達障害者 女性 全体

	音声		表情		音声+表情	
	高不快	低不快	高不快	低不快	高不快	低不快
他者の言動	<b>-.162</b>	<b>.003</b>	<b>-.391*</b>	<b>-.234</b>	<b>-.371</b>	<b>-.329</b>
	.428	.989	.048	.260	.062	.100
孤立感	<b>-.219</b>	<b>-.373</b>	<b>-.262</b>	<b>.031</b>	<b>-.320</b>	<b>-.336</b>
	.283	.066	.195	.881	.111	.093
意思疎通	<b>-.481*</b>	<b>-.414*</b>	<b>-.376</b>	<b>-.227</b>	<b>-.214</b>	<b>-.349</b>
	.013	.040	.058	.275	.293	.080
自己の言動	<b>-.128</b>	<b>-.168</b>	<b>.006</b>	<b>.092</b>	<b>-.271</b>	<b>-.278</b>
	.532	.422	.979	.662	.180	.169

\*\* : 1% 水準で有意 (両側)  
上段 : 相関係数

\* : 5% 水準で有意 (両側)  
下段 : 有意確率

結果からは、定型発達者は発達障害者よりも相関係数の検定において有意な組み合わせが多く確認された（定型発達者では、13 組、発達障害者では 3 組）。ただし、相関係数の検定では対象者数の多少が影響する可能性を無視できない。発達障害者（女性）は 26 人と少ないことから、参考値として考えることが妥当と言える。

一方、定型発達者に限ると、女性（147 人）は男性（148 人）よりも相関係数の検定において有意な組み合わせが少なかった（男性で 17 組／女性で 13 組）ことに加えて、男性にはみられなかった〈自己の言動〉に関して、「音声のみ」条件の低不快刺激を除き有意であった。このことは、ストレスについて考える際に性差を考慮することの必要性を示唆していると言えよう。

### 3. まとめ

厚生労働省の労働者健康状況調査（平成 24 年度）によれば、「現在の仕事や職業生活に関することで強い不安、悩み、ストレスとなっていると感じる事柄」がある労働者の割合は全体の 60.9 %であり、その内容（3つ以内の複数回答）についてみると、「職場の人間関係の問題」が 41.3 %と最も多く、次いで「仕事の質の問題」33.1 %、「仕事の量の問題」30.3 %となっている（表 3-1-11）。ここからは、職業生活におけるストレスが、仕事の質や量に関することよりも職場の人間関係に関する問題が大きいたことが分かる。加えて、発達障害者の場合、特に、対人関係の困難がその診断の基準に設けられている自閉症スペクトラム障害、社会的（実用）コミュニケーション障害などにおいては、さらに対人関係面でのストレスは大きなものとなる。

この点について、例えば、山岡（2008）は、発達障害者の離職理由について一般で雇用された場合であれ、手帳を利用した障害者雇用の場合であれ、対人的な困難が挙げられることを指摘している。具体的には、「対人関係で落ち込み、ストレスがたまる一方で退職を決めた」や「本人は、頑張っていたが、対人関係で落ち込み、うつ状態になった（その結果、離職した）」などである。また、保護者の視点からも「コミュニケーションがうまくいかないのが、職場での人間関係がうまくいかない。仕事もうまくいかずストレスがたまっている（就業・障害）」ことが離職の要因の1つとして挙げられている。

表 3-1-11 仕事や職業生活に関する強い不安、悩み、ストレスの有無及び内容別労働者割合

区 分	労働者計	強い不安・悩み・ストレスがある	強い不安、悩み、ストレスの内容(3つ以内の複数回答)												強い不安・悩み・ストレスがない	不明
			仕事の質の問題	仕事の量の問題	仕事への適性の問題	職場の人間関係の問題	昇進・昇給の問題	配置転換の問題	雇用の安定性の問題	会社の将来性の問題	老後の問題・定年後の仕事	事故や災害の経験	その他	不明		
			平成24年度	100	60.9	33.1	30.3	20.3	41.3	18.9	8.6	15.5	22.7	21.1		
男	100	60.1	34.9	33.0	19.6	35.2	23.2	8.7	12.8	29.1	22.4	2.3	6.0	—	39.9	—
女	100	61.9	30.9	27.0	21.0	48.6	13.7	8.3	18.7	15.0	19.6	1.9	11.0	—	38.1	—
(就業形態)																
一般社員	100	64.1	35.0	32.9	20.8	37.9	21.3	10.1	9.7	26.5	21.4	1.9	7.7	—	35.9	—
契約社員	100	62.7	26.4	25.8	21.2	40.4	18.7	2.2	44.2	12.0	29.4	4.2	8.5	—	37.3	—
パートタイム労働者	100	45.3	28.1	20.5	13.6	64.1	6.2	5.7	20.6	10.5	13.6	1.7	11.0	—	54.7	—
派遣労働者	100	68.1	27.1	13.0	35.7	37.3	9.6	0.0	60.4	3.8	15.7	1.7	7.1	—	31.9	—
臨時・日雇労働者	100	48.6	—	31.3	25.5	41.8	0.2	1.0	34.7	37.8	34.0	8.4	26.7	—	51.4	—
平成19年度	100	58.0	34.8	30.6	22.5	38.4	21.2	8.1	12.8	22.7	21.2	2.3	9.3	0.1	41.2	0.8

求職、職場適応、もしくは休職からの復職などの場面において職業上の課題、特に対人コミュニケーションに関連した課題に直面する発達障害者にとって、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版で把握された特徴

は、非言語的なコミュニケーションに関するストレスについて、より効果的な相談支援の方向性を示すものである。また、ストレス尺度を併用することで、より具体的に、どのような場面でストレスを感じるのかについても検討が可能であり、効果的、かつ、具体的な支援につながることを期待できる。

本研究で得られたこうした基礎的知見に基づき、発達障害者に関しては、どのようなスキル付与が対人関係やコミュニケーションをより円滑にするのか、また、職場にどのような情報を伝えていくことがよりストレスの少ない環境作りに役立つのか、支援目標や方法を個人の特性にあわせて具体化、明確化していくことが求められよう。

#### 【文献】

American Psychiatric Association (2013). The Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition, (DSM-5)

橋本剛 (2003). 対人ストレスの定義と種類：レビューと仮説生成的研究による再検討. 人文論集, 54, 21-57.

障害者職業総合センター (2014) 調査研究報告書 №119 発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究 ～F&T感情識別検査拡大版に基づく検討～.

山岡修 (2008). 発達障害のある人の就労の現状と課題：障害者権利条約への対応に向けて. 労働・雇用分野における障害者権利条約への対応の在り方に関する研究会（第5回）資料,

<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/09/dl/s0924-11c.pdf>

## 第2章 事例からみた発達障害者支援の課題

### —ヒアリング調査の結果から—

第1章では、発達障害者における快-不快評定版の評定値とストレス尺度得点の関連性や、職業経験の有無等により経験されるストレスが異なる可能性が示唆された。このことから、新版 F&T 感情識別検査を実施する上では、検査結果の解釈とフィードバックにおいて発達障害者個々の状況を考慮して進めることが期待されよう。そこで、第2章では、発達障害者対象調査（第Ⅱ部）においてヒアリングの同意が得られた発達障害者に協力依頼を行い、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版等の調査結果に基づいて、これまでの経歴やコミュニケーション・スキルの課題に関する聴き取り調査を実施することとした。

### 第1節 ヒアリング調査の概要

ヒアリング対象者は検査の実施と調査への協力依頼に同意の得られた者 21 人（男性 17 人、女性 4 人）であった。このうち、職業経験の有無、就職・復職に当たっての課題について、新版 F&T 感情識別検査の結果を踏まえて、男性 8 人を取り上げて記述することとした（表 3-2）。

対象者の診断時期は在学中や就職後など異なるが、不適応を契機として受診が行われた点で共通している。ヒアリング調査の実施時期は平成 26 年 6 月～平成 28 年 9 月であった。

表3-2 事例の概要

	年代	性別	診断名	診断年齢	経歴		手帳	就職・復職に向けた主な課題
					教育歴	職業経験		
a	20代	男性	広汎性発達障害 アスペルガー症候群	23歳	大学	なし	精神	コミュニケーションの課題についての自己理解
b	20代	男性	アスペルガー症候群	21歳	大学	アルバイトのみ	精神	
c	30代	男性	広汎性発達障害 アスペルガー症候群	38歳	大学	離転職あり	精神	就職に向けた適職の探索
d	20代	男性	発達障害	24歳	大学	初職休職中	なし	初職不適応の課題への対応
e	30代	男性	自閉症スペクトラム ADHD	31歳	大学院	初職休職中	なし	
f	30代	男性	ASD ADHD	33歳	大学	初職休職中	精神	
g	40代	男性	注意欠陥多動性障害 ADD	47歳	大学院	初職休職中	なし	異動・昇進による 不適応への対応
h	50代	男性	アスペルガー症候群 ADHD	50歳	大学	初職休職中	なし	

以下では、（ア）就職を目指す上でコミュニケーションに関する課題整理を図った 2 事例、（イ）離転職を繰り返す中でコミュニケーション上の問題に直面し、“適職”を探索している 1 事例、（ウ）就職後の適応に関する課題への対応を検討している 3 事例、（エ）異動・昇進による不適応への課題への対応を検討している 2 事例についてまとめている。なお、ヒアリングの結果に基づき、「学校・職場不適応の経過」「障害特性への気付きと対処」「他者感情の読み取りと感情識別の特徴」「コミュニケーションの課題と支援」に焦点を当て、可能な限り対象者の経歴と見解に即してまとめることとしたが、個人情報には配慮を行っていることを付記しておく。

## 第2節 事例検討からみた検査活用の意義と課題

### 1. 就職を目指すためコミュニケーションに関する課題整理を支援した事例

【就職活動でのつまづきを契機として障害特性や職業上の適性を検討している a さん】

#### (1) プロフィール

20代男性。診断名は広汎性発達障害・アスペルガー症候群（診断年齢23歳）。

大学4年時の卒業論文作成や就職活動が、同年の秋頃になっても思うように進まないことをきっかけに、参加予定のゼミを突然キャンセルしたり、無断で欠席するといった修学上の不適応が起こった。担当教員からの連絡で、離れて住む家族は初めて本人の状況を知ることとなる。教員は何度もメールや電話で a さんに連絡をしたが返答はほとんどなく、登校できなくなった。こうした事態をみかねた母親とともに a さんは学生相談室を訪ねることとなり、相談が継続的に行われる中、カウンセラーから紹介されたメンタルクリニックで診断を受けている。大学卒業後は、ハローワークを介しての職場実習や障害者職業センター等での就労移行支援を利用して就職・職業定着を目指している。

ただし、診断を受けた現在も、対人面や課題達成で困った経験が“発達障害”の理解と結びついていない状況にある。作業面では手際の悪さや手先・身体の動きのぎこちなさ等がみられるものの、認知面（注意力、言語理解等）については問題が観察されず、ストレスの少ない保護的な支援環境では不適応行動が表出しにくいことと対応していた。

このため、相談場面では得意・不得意の確認と整理を行っており、a さんは特性についてさらに詳細に理解しておきたいという希望が強い。

在学中の不適応行動に対する大学教員からの働きかけや学生相談室でのカウンセリングを契機とした医療機関での受診という経緯からみて、問題が表れてから診断・職業リハビリテーション機関の利用に至るまでが比較的短時間であった事例である。しかし、それが故に、本人にとってみれば課題の表出する機会が在学時と限定されていたことなどから、職業的な課題として表れる“障害特性”については検証が始まったばかりの状況にあると言える。

ここでは、感情識別の特性の一つである「音声や表情からの他者感情の読み取り」について、検査結果から読み取れる特性と課題に対し、a さんがどのように受け止めたのかに焦点を当てる。

#### (2) 他者感情の読み取りと感情識別の特徴

—非言語コミュニケーション・スキルとの関連で検討する—

##### ① 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「音声のみ」条件と「音声+表情」条件では一般基準と同等の正答率であったが、「表情のみ」ではやや低い正答率であった（表 3-2-1）。

また、「音声のみ」条件では「快-不快の感情間の混同」が認められたが、「表情のみ」「音声+表情」条件ではこうした混同は認められなかった。

一方、いずれの条件においても、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間で混同が認められた。

コミュニケーションに際しては、音声のみからの他者感情の読み取りについては、快-不快感情の混同が生じる可能性があるが、正答率は平均的である。表情を手がかりにした場合だと、読み取りの困難はさらに高くなり、正答率はやや低くなるが、快-不快の混同は起こりにくい。音声と表情の両方を活用すれば、読

み誤りは極めて少ないと考えられる（相補タイプ：「音声のみ」「表情のみ」の単独の情報では正答率が低いものの、両者の情報を相互補完的に利用することで、全体的な正答率が高まる）。

表3-2-1 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	7		1	
	悲しみ		8		
	怒り			8	
	嫌悪		3	2	2
	合計	7	11	11	2
正答率		78%			

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しい		3	5	
	怒っている			7	
	嫌だなぁ			4	4
	合計	8	3	16	4
正答率		69%			

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しい		8		
	怒っている			8	
	嫌だなぁ			2	6
	合計	8	8	10	6
正答率		94%			

② 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版

快-不快評定版では、A 検査（高不快）に関しては、「表情のみ」条件と「音声+表情」条件において「不快に」偏って読み取る傾向が強く、「音声のみ」条件においては、「快に」偏って読み取る傾向が強かった。一方、B 検査（低不快）で「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの呈示条件においても「不快に」偏って読み取る傾向があり、特に「表情のみ」条件と「音声+表情」条件についてはその傾向が強い。

こうしたことから、「表情のみ」「音声+表情」の条件では、「相手の感情をより深刻に受け取る（他者の評価を気にする）」などの構えを持っている可能性が示唆される。一方、「音声のみ」条件では曖昧な感情表現に関する評価のうち、A 検査の高不快刺激では“快”の方向へ、B 検査の低不快刺激では“不快”の方向へと、“刺激の持つ不快さ”と“本人の捉える不快さ”の方向が逆になっていることが分かる。このことは、4 感情評定版の「音声のみ」条件でみられた混同の傾向と関連している可能性がある。

相手の曖昧な感情を読み取る際に、「表情のみ」からでは必要以上に深刻に受け取る可能性があり、「音声のみ」の時には快か不快のいずれかに偏った受け取り方になる可能性がある（図 3-2-1）。

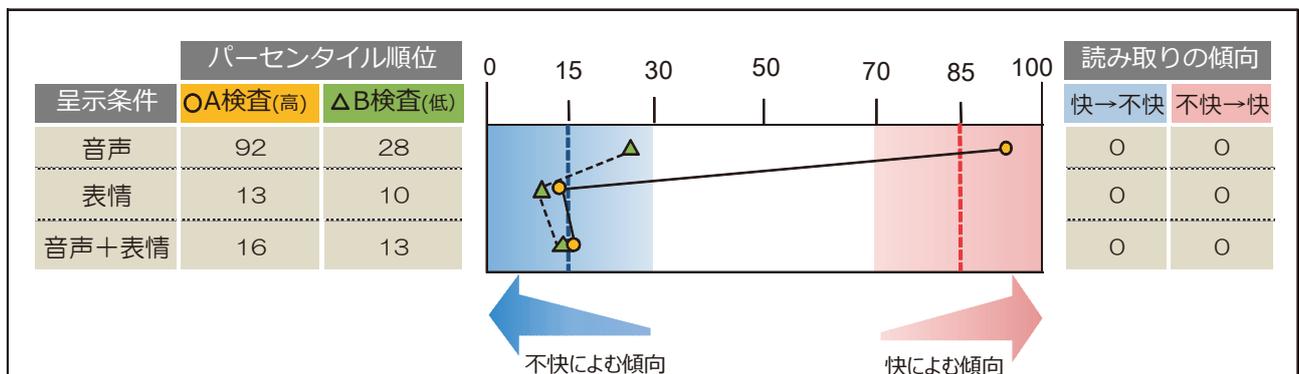


図3-2-1 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

③ 感情識別に関連する特性

ストレスに関する質問では、〈自己の言動〉〈他者の言動〉〈孤立感〉〈意思疎通〉のそれぞれに関する

ストレスについて、すべて“低い”という結果であった。ただし、「言い争いをする」項目のストレスが高いことから、他者との衝突や意見の対立といった状況に苦手意識を持っている可能性が示唆される。

### (3) コミュニケーションの課題の整理

感情識別や対人面で困り感を有しない a さんに対しては、検査結果を提示する上で、特性との関連付けを意識しながら、本人の理解を確認して進めていくことがポイントとなった。

4 感情評定版実施後の感想では、回答しやすいと感じた呈示条件は、順に「音声と表情」「音声のみ」「表情のみ」であった。正答率の高い順と対応していることから、本人の実感と結果は一致していた。

また、感情別の回答しやすさについては、「嬉しい」が最も分かりやすく、次いで「悲しい」「怒っている」「嫌だなあ」だったという。ただし、回答の結果からみれば「表情のみ」条件では、「悲しい」の正答数は8問中3問のみであり、感想と結果が一致していない。

また、自己評価としては「音声のみ」条件と「表情のみ」条件で70%～80%程度を、「音声と表情」条件では80%～90%程度の正答率を予想していた。これは各呈示条件の実際の正答率とほぼ一致していることから、結果は a さんの予測の範囲内であった。ただし、「表情のみ」条件の正答率が低いことについて、意外性を感じていたようである。

なお、表情識別と注目箇所について尋ねるアンケートでは、写真で示された4つの感情（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪）のうち不快感情（悲しみ・怒り・嫌悪）については注目箇所が目元に限定されていた。この結果は、表情からの感情識別の際に、着目点を理解することで感情を読み取りの正確さを高める可能性を示唆するものであったことから、「表情識別訓練セット」<sup>\*1</sup>の表情写真とプロンプトカードを用いて、表情の注目箇所を確認することとした。さらに、基本的な4感情について、表情の読み取りポイントが分かることで判断に自信を持てるようになる可能性があることを提案した。

“感情が識別できる”ということと、“相手の感情を受けた上で適切な対応ができる”という行動は必ずしも同時に可能となるわけではない。a さんについては、前者は実現が期待できるものの、職業生活は未経験という背景からは、職場での適切な対応が理解されているか確認が必要である。そこで、「嫌だなあというような相手の感じを察知し、それが自分に関係することかもしれないと思ったらどうしますか？」と尋ねた。a さんは、「考えたことがない」とのことだった。「これからあるかもしれないが、どうするか？」との問いには、「まあ・・・“すみません、何かありましたでしょうか”と、聞きます」と述べたが、できるかどうかについては「やってみないと分からない」ということであった。

適切な対処行動を知っているか（対処方法についての知識の有無の確認）、それを行動化できるか（行動化の可能性）といったことについては、支援者が a さんを理解することのみならず、a さん自身が自分の状況を理解する上で必要な確認事項である。

a さんは今後、職場実習等を通じて経験を積む中で、障害の現れ方と向き合うことになる。その時には、フィードバックで提案された対応や対処行動を取ることが当面の目標となっている。

<sup>\*1</sup> 障害者職業総合センター研究部門で2000年に開発された表情識別訓練プログラムを実施するためのツールである。知的障害者等の訓練場面における指導など、広く一般的に利用が可能なものとして開発された。表情識別訓練セットは、F&T感情識別検査（開発当時はVHSビデオによる）、表情写真（嬉しい、悲しい、怒っている、嫌だなあの表情が示された男女4人の写真）、プロンプトカード（表情の注目箇所が端的な台詞で示されたカード）、実施マニュアル等で構成される。中でも、表情写真とプロンプトカードは表情識別訓練（予備セッションー7つの訓練セッションー訓練後の効果測定のための査定セッションの9つから構成される表情識別訓練プログラム）に用いられる道具である。詳しくは、調査研究報告書No.39「知的障害者の非言語的コミュニケーション・スキルに関する研究ーF&T感情識別検査及び表情識別訓練プログラムの開発ー」を参照されたい。

【情報発信が苦手な他人にも関心は薄いですが、就職のために対応方法の獲得を目指す b さん】

(1) プロフィール

20 代男性。診断名はアスペルガー症候群（診断年齢 21 歳）。

4 年制大学に入学したが、3 年生の時に他大学へ編入している。編入は、在学時に診断を受けたことから自宅からの通学及び通院等を重視したことによる。その後、留年しつつも卒業に至る。在学中には複数のアルバイトを経験しているが、すべて期間満了で退職した。

b さん自身によると「他人にはあまり関心がなく、自分から他者と積極的に関わることはほとんどない」という。したがって、本を読んで一人で過ごすことが最も好ましい状況であるという。加えて、必要があっても質問はしないというような態度が、場所や相手を選ばず貫かれており、どうしても疑問を解決したい場合には、自分で本などで調べることでこれまでを切り抜けてきたという。

また、他者からの質問への反応には時間を要するため、一見、聞いていないかのような印象を他者に与えがちである点が支援機関において指摘されていた。

b さんは就職先が決まらないまま卒業しているが、在学時に診断を受けていることから支援機関の利用は比較的早期に開始された。ハローワークを介しての職場実習や障害者職業センター等での就労移行支援を利用して就職・職業定着を目指している。ただし、指摘されたことを必要以上に否定的に受け止めるだけでなく、「できた」といった振り返りにおける肯定的な指摘についても、b さんにとってそれは「当たり前のこと」でしかなく、特別に好ましいことではないという受けとめ方がある。

(2) 他者感情の読み取りと感情識別の特徴

—非言語コミュニケーション・スキルとの関連で検討する—

① 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

4 感情評定版の結果については、「音声のみ」条件と「表情のみ」条件で正答率は低く、「音声+表情」条件では著しく低いという結果であった（表 3-2-2）。

表 3-2-2 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果

音声		回答された感情				無回答
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	
呈示された感情	喜び	4				4
	悲しみ		5		2	1
	怒り			8		
	嫌悪		1	3	4	
	合計	4	6	11	6	5
		正答率 66%				

表情		回答された感情				無回答
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	
呈示された感情	喜び	8				
	悲しみ		1		2	5
	怒り			4		4
	嫌悪			3	5	
	合計	8	1	7	7	9
		正答率 56%				

音声+表情		回答された感情				無回答
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	
呈示された感情	喜び	4				4
	悲しみ		1		7	
	怒り			8		
	嫌悪			4	4	
	合計	4	1	12	11	4
		正答率 53%				

「快 - 不快の感情間の混同」は、いずれの条件でも認められなかったが、一方ですべての呈示条件において無回答が生じていた。特に、「喜び」については「音声のみ」と「音声+表情」で4問が無回答となっていた。また「悲しみ」については、「音声のみ」条件で1問、「表情のみ」条件で5問の無回答があった。さらに「怒り」は、「表情のみ」条件で4問の無回答があった。一方、いずれの呈示条件でも「嫌悪」につ

いては3感情間の混同が認められた。

感情別では、呈示条件ごとに読み取りの正確さが異なっており、「音声のみ」「音声+表情」では「怒り」が全問正解であり、「表情」では「喜び」が全問正解であった。

コミュニケーションに際しては、「音声のみ」「表情のみ」単独であれ、「音声+表情」のいずれの条件であれ正答率は低い（特定のタイプに分類されない（ただし、低受信タイプと類似した配慮が必要なタイプであると理解できる）：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても正答率が低い。相手の感情を知ろうとした場合、相手の感情が基本的な感情であったとしても、正しく理解されていない可能性が高い。）。

### ② 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版

快-不快評定版では、A 検査（高不快）のすべての呈示条件で、「快に」偏って読み取る傾向が強い。また、B 検査（低不快）の「音声のみ」条件を除いた他の呈示条件は「快に」偏って読む傾向がみられた。A 検査（高不快）は“不快度の高い”刺激だが、“刺激の持つ不快さ”については、一般基準に比しても顕著に偏って評定された(図 3-2-2)。

こうしたことから、曖昧な感情識別については、「相手の感情を必要以上に快の方向に偏って受け取る」などの構えを持っている可能性が示唆される。

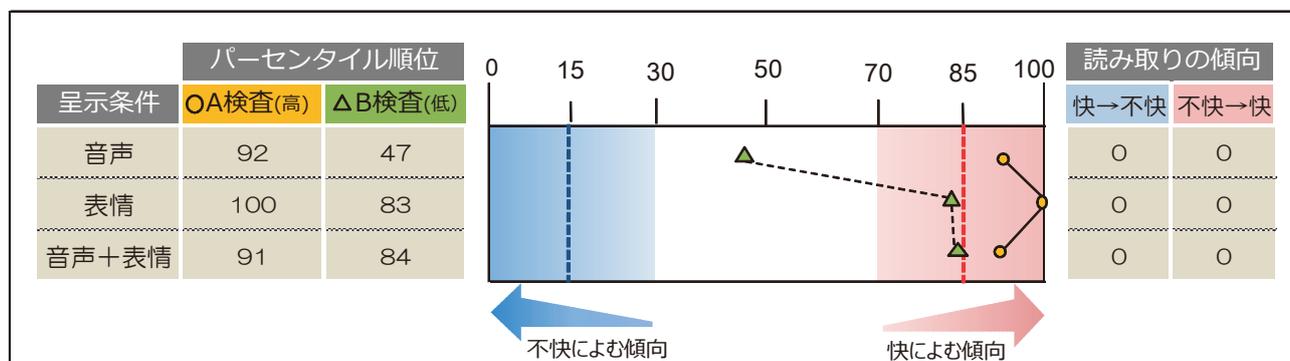


図3-2-2 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

### ③ 感情識別に関連する特性

対人ストレスの領域別の評価の結果、〈自己の言動〉によるストレスは高かったが、〈意思疎通〉に関するストレスは低かった。他者への関心が薄く、質問をするくらいなら自ら調べるといった行動を通常行っているbさんにとって、他者への関わり自体がストレスに感じられる傾向が結果に反映されていると言える。逆に、他者との関わりに必要を感じていないため、意思疎通も期待していないという点でストレスが低いという結果に対応しているとみることができる。

### (3) コミュニケーションの課題の整理

bさんの他者への関心の希薄さは、そもそもそれ自体が障害特性であるが、まずは感情識別の特性を把握することで、他者とのコミュニケーションで生じる課題をより細かく整理することが求められた事例である。

検査結果からみれば、bさんは音声からも表情からも、感情を識別することに困難を抱えていると言わざるを得ない。このような場合、音声や表情だけを頼りにして感情を識別することは、誤った判断を招く可能性もある。そこでフィードバックの主眼は、「音声や表情からの読み取りの特徴を整理し、得意な部分と苦手な部分の何かを知り、それが自身の特性であることを理解する」「感情の読み取りについては、何らかの手立てを持つことの必要性を理解すること」となった。

bさんは検査実施後の感想として、「（「音声のみ」条件について）声は声だけとして、（「表情のみ」条件について）顔は顔だけとして、それぞれ難しく感じました」と述べている。一方、「音声+表情」条件については、「音声のみ」条件と「表情のみ」条件を比較して「（「音声+表情」については）ある程度は、読めないという感じは減ったと思います」と回答した。しかし、結果として正答率が最も低かったのは「音声+表情」条件であり、本人の実感とは乖離が生じていることが明らかとなった。

また、無回答がすべての呈示条件で生じており、「嬉しい・悲しい・嫌だなあ」について、選択肢間で迷ったのではなく、「感情の動きが無いのではないかと思って」「どれにも当たらない」と発言している。別に選択肢があれば選ぶかどうかの問いには、「感情がどうなっている、というようなものがないので、あえて言うなら（この感情で）というものもないですね」と述べた。一般的には、誤って他の選択肢を選ぶ、あるいは無回答であっても迷って遅れた等、感情に対する何らかの識別・判断があつて回答に至るケースが多いが、bさんについては「喜び」であれ「悲しみ」であれ、無回答としたものについては、そこに感情は示されていないとして判断していることが明らかとなった。

「音声のみ」条件では「怒り」が全問正答であり、「表情のみ」条件では「喜び」が全問正解であったが、その結果を自身の得意な部分として肯定的に受け止めることはなかった。

一方、「上司が職場で怒っていることを察知したとして、bさんはどうするか」と尋ねてみると、「なぜ怒っているか考えてみる」「第一歩として距離を置くということになると思いますね」と答えている。また、職場で相手の嫌だなあという気持ちを察知したときの対応として、実際には経験のないことだが、「例えば、自分がやっていたことをやったり、やっていたことをやらないようにしたりで・・・相手の機嫌が良い方向に向かうというなら、それをするようにしますね」との考えを示した。その際、相手の機嫌を確認するために「相手のどこに注意を払うかと言えば・・・しゃべり方が平坦になったかどうかとか・・・そんな感じですかね」と述べた。相手の声の調子で感情が何も込められてないことが確認されたのならば、「安心できるというよりは、まあ・・・危険ではないとか、そういう言い方ですかね」と述べており、事態を深刻にしないための工夫は必要であると考えているようであった。さらに、自らが原因で相手を怒らせた場合については「そのような場合だと、避けるとかそういうことではなくて、対処するより他にない」と回答しており、実際に職場での経験はないとしても、bさんの考える対応は望ましいものであることが確認された。

しかし、人を不快にさせないための方策としては、「雑なものですが、そもそも関わらなければ、何事も起こらないというような感じですね」としており、初めから何も起きない環境に身を置くことで問題が起きないという考えを示した。職場で他者と関わらないわけにはいかない場合、どのような環境であれば心地よく仕事ができるかを尋ねたところ、「具体的に言うと難しいんですが・・・例えば、団体の中の一人として、その団体の目的に則った仕事をするにしても・・・あんまり個人的な・・・例えば・・・仕事と定められている時間以外での接触とか・・・そういうのは無しという感じです」と答えた。人との付き合いについての認識は「苦手というよりは、そういうものがない方が自分は楽だから・・・これで良い、という感じですね」としており、他者を避けるという強固な意志がbさんの特徴であるとみることができる。

「気をつかうとか、顔色うかがうとか、できることなら避けたいですね」「（相手の機嫌が良くないと）とにかく、その場から逃げたいとか、そういう風になりますね」といったように、相手の不快な感情からは逃れたい気持ちが大きい。また、「もっと言うと、怒っているとか困っているかより、さらに踏み込んで・・・どうだと困るから、どうしろって風なものがあったほうがいいですね」と、自らの感情の識別力を高めることよりも、相手からの言葉で状況の理解を補うことを希望していた。ある意味では、特性を補完する方法として適切な選択であると言えるだろう。

なお、快-不快評定版ではほとんどが快の方向に偏って認知されている点については、そもそも感情の識

別力が低いことに併せて、「少なくとも、他人の気持ちが強く嬉しいとかに向いていたとしても、どうでもいい。自分にとってはどうでもいい感じですね」といった、他者感情への関心の無さが、一定程度、不快な状況を不快と受け取っていない結果として表れたと言える。快-不快評定版は全体として不快な感情刺激で構成されていることから「快-不快という見方であれば、どちらともつかないと感じたものが多かったですね」というように、一般基準と比較すればbさんの回答は快傾向に偏っていることが発言からも確認された。

今後、就職を目指して行く中では、自身の特性を明らかにし、適応に結びつく働き方を探っていくことになるが、どのような配慮を求めて定着を確かなものにするかについては、bさん自身の適切な選択を支援する必要があると言えよう。

## 2. 離転職を繰り返す中でコミュニケーション上の問題に直面し、“適職”を探索している事例

### 【職場での対人関係でコミュニケーションの課題に直面し、配慮の必要性を感じたcさん】

#### (1) プロフィール

30代男性。診断名は広汎性発達障害・アスペルガー症候群（診断年齢38歳）。

cさんは4年制大学を卒業したが、就職先がなかなか決まらず、地元のスーパーでバックヤードのアルバイトを始めることになった。8年間勤めたところで契約が更新されず退職し、直後に事務職として就職するも、3年の契約期間満了により退職に至る。

その後は現在まで、就職活動は継続しながら「職を途切れさせない」ように意識して家業（アパートの経営管理、修理、掃除等）を手伝っていた。過去に解雇等の経験はないが、アルバイトや会社員として過ごした中では、「注意されると言い返す」、「客からクレームが出る」など対人トラブルも経験していることから、今後は障害を開示した上で理解と配慮が得られる仕事を希望している。

診断は、当初から障害を疑っていた家族の勧めが契機であった。cさんは診断にショックを受けたものの、診断に伴う説明が、自身の過去の経験を理解する手助けとなり、時間を置いて納得するに至ったという。診断時にはADHD傾向を指摘されており、日常的にも衝動的な行動やミスが発生が観察されることと合わせ、作業面、認知面について課題を整理することが必要となっている。

しかし、もっぱら資格取得のための勉強に励み、医師からの「知能検査では言語能力が高い」という特性の部分への説明を全体のこととして受け止めた上で、編集や事務に関する仕事が向いているのではないかと期待する等、自己の特性理解に関しては支援が必要な状況にあると言える。

#### (2) 他者感情の読み取りと感情識別の特徴

—非言語コミュニケーション・スキルとの関連で検討する—

##### ① 新版F&T感情識別検査4感情評定版

4感情評定版の結果については、「音声のみ」条件と「表情のみ」条件で正答率が低いが、「音声+表情」条件では平均的な正答率であった（表3-2-3）。「快-不快の感情間の混同」は、「音声のみ」条件で認められた。また、「音声のみ」条件で「喜び」に対して無回答（タイムオーバー）が生じていた。

また、すべての呈示条件で「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間の混同が認められた。ただし、「音声+表情」条件では「怒り」が全問正答、「嫌悪」も7問正答するなど、不快感情間の読み誤りが3つの条件の中で最も少ない。

コミュニケーションに際しては、「音声のみ」「表情のみ」からの他者感情の読み取りについては、不快感情の正答率がやや低いものの、音声と表情の両方を活用すれば、読み誤りは極めて少ないと考えられる（相補タイプ：「音声のみ」「表情のみ」の単独の情報では正答率が低いものの、両者の情報を相互補完的に利用することで、全体的な正答率が高まる）。

表 3-2-3 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情				無回答
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	
呈示された感情	喜び	7				1
	悲しみ	1	5		2	
	怒り			4	4	
	嫌悪		1	2	5	
	合計	8	6	6	11	1
		正答率		66%		

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		5	1	2
	怒り		1	5	2
	嫌悪			3	5
	合計	8	6	9	9
		正答率		72%	

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		5		3
	怒り			8	
	嫌悪		1		7
	合計	8	6	8	10
		正答率		88%	

② 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版

快-不快評定版では、A 検査（高不快）の「音声のみ」条件と B 検査（低不快）のすべての呈示条件で、「不快に」偏って読む傾向がみられた。一方、A 検査の「表情のみ」条件と「音声+表情」条件では特徴的な偏りは見いだされなかった。曖昧な感情識別についても音声や表情を単独ではなく、音声も表情も同時にみて聞くことで、より適切な感情の受け取りができる可能性がある(図 3-2-3)。

なお、「音声のみ」条件の快の刺激を不快に読み取った回答については4感情評定版の「音声のみ」条件における「快-不快の感情間の混同」として把握された特徴と対応している。

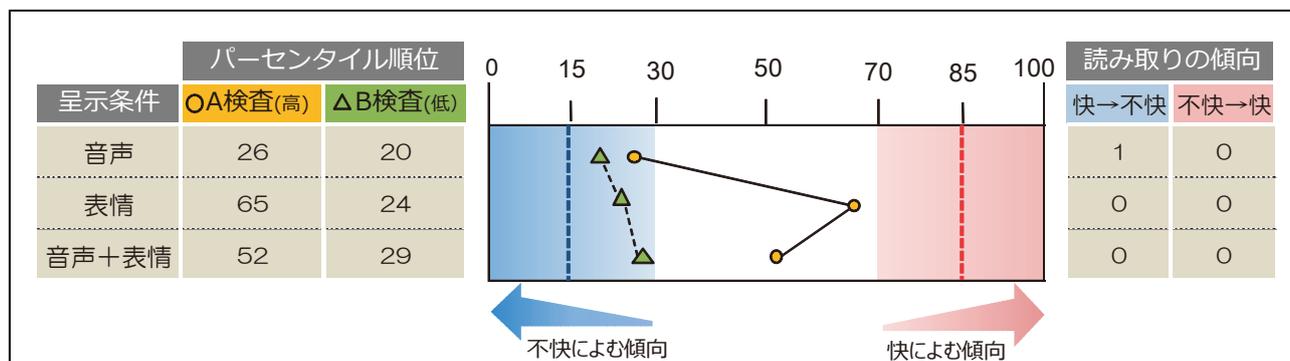


図3-2-3 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

③ 感情識別に関連する特性

c さんは、調査前アンケートで実施した「感情が持っている快もしくは不快の程度」を尋ねた項目において、「悲しみ」と「驚き」を平均よりも不快度の高い感情として回答していた。なお、対人ストレスについては、〈意思疎通〉について得点が高かったことから「自分の言いたいことが、人に上手く伝わらない」ことなど、対人コミュニケーションに関するストレスを感じやすい傾向にあることが示唆された。

### (3) コミュニケーションの課題の整理

アルバイトや会社員時代に対人トラブルを経験しているcさんにとって、検査と結果説明はコミュニケーション上の課題や対応を今一度整理する機会となった。フィードバックでは、4感情評定版から明らかとなった感情識別の特徴を確認しつつ、相手の感情を受け取った時の理解の仕方や職場での対応について確認することに加え、過去の経験に照らして、どのような対応が必要かを検討することが主眼になった。

4感情評定版の結果からcさんのコミュニケーションタイプは“相補タイプ”であり「音声+表情」条件の正答率からは、よくみて聞くことができれば、日常生活においてそれほど困ることはないと予想される。しかし、「電話」や「相手の顔をうかがう」といった感情を識別するための情報源が限定されている場面においては、読み誤りが発生する可能性が示唆された。

呈示条件別の回答のしやすさについては「音声と画像と両方あったほうが、答えやすかったです。答えにくかったのは画像だけでした」と述べており、答えやすい呈示条件は順に「音声+表情」「音声のみ」「表情のみ」とのことであった。正答率では「音声+表情」が最も高いことから、cさんの実感と一致していることが分かる。しかし、「音声のみ」と「表情のみ」条件の順序については、実際の正答率の高さとは一致していない。

感情別の答えやすさについては、「分かりやすいのは“嬉しい”で、分かりにくかったのは“いやだなあ”でした」「“怒っている”と“いやだなあ”は区別がしにくかったです」と述べている。結果をみた後にも「わりと納得しています。“嬉しい”か“怒っている”か、その両極端を区別するのはできるんですけど、それ以外はどっちだろうと・・・」という感想を持っていた。声だけや表情だけで他者感情を識別することについては「よっぽど、ストレートに相手が感情を出していないと、分からないです」というようにcさんの過去の経験に照らし、感情別の正答数(表3-2-3)がそれを反映していることについて理解したようであった。一方で、相手に不快な感情を抱かせないよう「自分自身は、不快な思いをできるだけ態度に出さない」ことを心がけていたという。また、怒りを顕わにした相手に対しては「それは、もう・・・落ち着いて・・・『申し訳ないです』というように・・・」といった行動は起こすものの、なぜ怒っているか分からない時には「そういうとき、なかなか、『どういことでしょうか』って聞けないです」と振り返っていることから、他者の不快感情に関わりを持つことについてストレスが高いことがうかがえた。

こうした行動の背景には、前の職場で「だまされたり、パワハラにあった」経験や「相手に反省がなかった」ことなどがあり、相手の表出する「不快さ」もさることながら、自らの怒りに対する「不快さ」とあいまって“怒り”は不快度の極めて高い感情と認識されていた。

一方で、他者の嫌悪と怒りへの職場での対応には、違いがないこと、cさんの振り返りにおける行動予測は冷静かつ適切であること、といった基本的な考え方を伝えると、「ああ、単純に今のお話で、気分が楽になりました。相手がそういう不快な表情をしていましたので、怒っているか、不快なのか、さあどっちなのかって、僕には分からない・・・けれど、『どうしたんですか』って事情を聞いてみる・・・あるいは、それが難しいみたいなら、他の人に聞いてみる・・・でいいんですね」と、“怒り”と“嫌悪”の対応の共通性に理解を深めていくことになった。

cさんは勇気が出ず相手に尋ねることを躊躇してしまうといった行動を取っていたが、自分からひとまず聞いてみるのが重要な確認行動であることに気付き、それを行動へ移すことについては前向きな発言があったことから、就職に向けて獲得すべき行動として認識されるに至った。

なお、快-不快評定版では必要以上に深刻に受け止める傾向がみられたことから、“慎重に捉えて不快になりすぎるよりも、ひとまず対応が適切であれば深刻に受け取っていないかどうかを自身で気にしてみる”を提案した。cさんは今後、障害を開示した就職にむけて、自身の適性を整理していくことになるが、

支援で提案された対処方法が、現場実習などで行動化されるか否かが今後の職場適応の鍵になると言えるだろう。

### 3. 初職不適応に関する課題への対応が必要な事例

#### 【行動面や対人面で現れた問題への対応を課題とする d さん】

##### (1) プロフィール

20代男性。診断名は発達障害（診断年齢23歳）。

dさんは、大学で心理学を専攻していたことから、就職先として子どもを対象とした支援機関を選んでいいる。しかし、同僚や児童、保護者への対応が攻撃的であるといった対人面の問題に加えて、パニックやヘッドバンギングなどの行動が顕著になってきたことから、職場内の健康管理室で相談すると同時に精神科を受診することとなった。

当初は「うつ」とみなされたものの、相談室長は背景に発達障害を疑っていたという。通院をするうちに、精神科でdさんは「発達障害疑い」を指摘されることとなる。その後、専門医の紹介を受け、発達障害を診断されることとなった。dさん自身は、在学中に履修した科目で発達障害に関する情報を得ており、自らに思い当たる点があることを当時から感じていたという。

現在は休職中であるが、健康管理室の紹介により職業リハビリテーションの専門支援を利用するに至っている。プログラムに参加しながら、社内の他職種への復職の他に、転職の道も検討している。

dさんの理解や行動面の課題として「処理速度の遅さ」が指摘されており、聞いてから咀嚼するまでに時間を要し、待たないと会話が進まないが、考えていないわけではない。また、対人面の課題としては、対話中に攻撃的な反応や発言が表出することがあり、例えば、「なぜそんなことを聞くのか」「なぜそう考えたのか」「どうするのか」等の発言がある一方で、「分かりません」といった回答があるなど、会話のルールを逸脱する状況もある。また、単独で作業する場面においては問題なく活動していることもあるが、過去の経験のフラッシュバックが起きて硬直状態が続いたり、グループワークの輪に入らず、見学席から場にそぐわない発言をするなど、集団場面での適応の問題が指摘されている。

##### (2) 他者感情の読み取りと感情識別の特徴

—非言語コミュニケーション・スキルとの関連で検討する—

###### ① 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「表情のみ」と「音声＋表情」条件については平均と比較しても十分に高い正答率である。

「快-不快の感情間の混同」はいずれの条件でも認められなかった。ただし、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間の混同は、すべての呈示条件で認められた(表 3-2-4)。

なお「音声のみ」条件においてのみ、「喜び」の感情で無回答（タイムオーバー）が2問発生していた。しかし、いずれの条件においても正答率が高いことから、日常的には感情の読み取りに大きな困難はないと言える（高受信タイプ：「音声のみ」「表情のみ」「音声＋表情」のいずれの条件においても正答率が高い。したがって、高受信タイプでは、対象者が相手の感情を知ろうとした場合は、基本的な感情であれば言葉による状況の説明がなくても十分に理解され特定のタイプに分類される特徴的な傾向は持っていない）。

表3-2-4 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情				無回答
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	
呈示された感情	喜び	6				2
	悲しみ		8			
	怒り			7	1	
	嫌悪		1		7	
	合計	6	9	7	8	2
正答率		88%				

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		5		3
	怒り			8	
	嫌悪				8
	合計	8	5	8	11
正答率		91%			

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		8		
	怒り			7	1
	嫌悪			1	7
	合計	8	8	8	8
正答率		94%			

② 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版

快-不快評定版からの評価では、A 検査（高不快）、B 検査（低不快）のすべての呈示条件において、「不快に」偏って読み取っていた、また、この傾向は B 検査（低不快）においてより顕著に表れていた(図 3-2-4)。

曖昧な感情を受け取る上では、呈示条件にかかわらず相手の感情をより深刻に受け取るという傾向については、4 感情評定版の結果による“感情を正しく読み取れていること”とは別に、相手の曖昧な気持ちに対する不安や、対人ストレス、過去のトラブルの経験等と関係している可能性が示唆される。

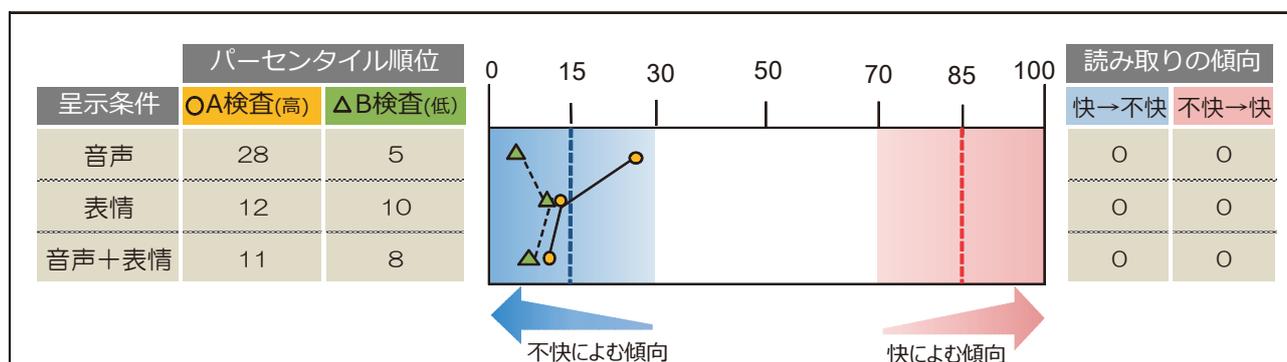


図3-2-4 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

③ 感情識別に関連する特性

対人ストレスを領域別に評価すると、自分の言いたいことが人に伝わらないなどによる〈意思疎通〉に関するストレスが“高く”、〈他者の言動〉によるストレスは低く、その他の領域のストレスについては平均的であった。この結果は、「相手の言っていることが分からない」「自分の言っていることがうまく伝わらない」といったようなコミュニケーションに関する失敗もしくは挫折経験と関連している可能性が示唆される。

(3) コミュニケーションの課題の整理

攻撃的な対人態度や、パニックやヘッドバンギングといった行動面の課題に加え、情緒面の不安定さが初職不適応の背景として指摘された d さんについては、感情識別の観点から問題を整理することで、職場での課題や対処方法について検討することがフィードバックの主眼となった。

4感情評定版の結果は、すべての呈示条件で正答率が高く、感情の読み取り自体に困難は少ないと推測される。ただし、dさん自身は、正答率を6～7割と予想していた。この結果はdさんにとって“想定外によかった”ことであり、とても驚いた様子であった。しかし、実際には読み取れているという事実と、読み取れていないという実感の乖離は、対人場面でのトラブルを喚起する可能性もある。

なお、「音声のみ」で生じた無回答は、時間がかかって正答できなかったことであり、瞬時に理解して対応する必要がある場合には、間に合わないこともある。また、快-不快を混同してしまう可能性があることについては、留意事項として伝えることとした。

表情の注目箇所に関するアンケートでは読み取りのポイントとなる「眉間のしわ」は選択されていないことが確認されたことから、表情の注目箇所を「表情識別訓練セット」<sup>\*2</sup>の表情写真とプロンプトカードで確認することとした。さらに、基本的な4感情について、表情の読み取りポイントが分かることで判断に自信を持てるようになる可能性があることを提案したことにより、「怒り」と「嫌悪」、「悲しみ」と「嫌悪」の違いを確認すると、注目点を「気にしてみるのはいいかもかもしれない」と理解は深まっていった。

快-不快評定版の結果で「不快に」偏っている結果については、「予想外（の結果）ではなかった」と回答した。相手の「不快」を察知したときの対応については「「怒り」の場合は「すみません」とひたすら言い続ける」が挙げられた。さらに「怒りの原因を指摘されない状況で相手の“不快”を察知した場合」では、「すみません、何かありましたか」が挙げられた。このときの「すみません」が、謝罪の意を込めたクッション言葉であること、ひたすらの謝罪とは意味合いが異なることについても了解されていた。

一方で、「嫌悪」という感情に対しては、“避ける”という行動を取ってきたというdさんは、その理由を「生理的に嫌だと言われたらどうしようもないから」と発言している。職場でそのような行動を取る人がいれば、「怒り」が察知されたときと同じように、何が原因かを聞いてみることを提案した。「嫌悪」と「怒り」が同じ対応でよいかどうかについて、学校時代のエピソード（鉛筆を落とした人に拾ってあげたが、その人はありがとうも言わずに受け取り、dさんの触れた鉛筆をティッシュで拭いた）では「すみません、何かありましたか」がベストな対応ではないことを主張したが、相手への攻撃的な言動は選択されなかった。

こうしたことを受け、相手の「不快」を察知したときは言葉で確認してみると、必要以上に深刻に受け取るということがなくなるかもしれない、そして、“マイナスの不快の方に偏っていたものが、不快度が弱まる”“感度を鋭くして構えなくても良い”等を思えると、気持ちが楽になるかもしれないことを提案した。

なお、〈意思疎通〉に関するストレスで得点が高かったことについて「・・・質問して自分が聞きたかったこととは違う答えが返ってきたりとか・・・」がエピソードとして思い出されるという。また、聞いたつもりとは違うことが返ってきたとしても、「聞いたり・・・あ、そうですかってそのまま流したり・・・（笑）・・・」「ま、いっか・・・」「あ～、こっちが聞き方悪かったのかなって、思いますね」といった反応が多く、時々聞き返すこともあったが、基本的には「聞くのが、めんどくさい・・・（笑）」とのことであった。dさんは会話中のやりとりでしばしば相手に驚きを与えていることが支援者により観察されていることから、会話のルールや対人スキルの確認と活用可能性の検討が、職場での適応を目指す上では優先されるべき課題であることがうかがえた。

---

\*2 障害者職業総合センター研究部門で2000年に開発された表情識別訓練プログラムを実施するためのツールである。知的障害者等の訓練場面における指導など、広く一般的に利用が可能なものとして開発された。表情識別訓練セットは、F&T感情識別検査（開発当時はVHSビデオによる）、表情写真（嬉しい、悲しい、怒っている、嫌だなぁの表情が示された男女4人の写真）、プロンプトカード（表情の注目箇所が端的な台詞で示されたカード）、実施マニュアル等で構成される。中でも、表情写真とプロンプトカードは表情識別訓練（予備セッションー7つの訓練セッションー訓練後の効果測定のための査定セッションの9つから構成される表情識別訓練プログラム）に用いられる道具である。詳しくは、調査研究報告書No.39「知的障害者の非言語的コミュニケーション・スキルに関する研究ーF&T感情識別検査及び表情識別訓練プログラムの開発ー」を参照されたい。

dさんは、他者感情を正しく識別できるものの、読み取った後の行動については自信が持てていない現状があった。加えて、“他者との意思疎通”という面においてストレスが高い。また、他者の感情を必要以上に不快に捉えてしまう傾向からは、日常生活のコミュニケーションそのものがdさんにとってストレスの高いものとなっていると言える。今後、復職を目指す上では自身のコミュニケーションの方法について課題を整理することで、対人態度の改善可能性を検討していくことが望まれる。

## 【自身の障害特性を“癖”と理解しているeさん】

### (1) プロフィール

30代男性。診断名はADHD、アスペルガー（診断年齢23歳）。

高校中退後、大検合格により大学・大学院に進学。大学院修了後は研究室の紹介で研究開発職に就職する。しかし、会社では開発経緯の判断や説明が困難であったり、注意を受けても理解できずイライラする、メールの書き方に注意を受ける等が起り、4年目に会社から不適応と障害の疑いを指摘されることとなった。しかし、eさん本人には不適応の自覚が無かったという。その後、受診した病院において、記憶の弱さ、言語想起・選択の不得意さを主訴として脳の断層撮影を依頼したものの、特段の所見が認められず、発達障害の診断に至ることとなった。

職業評価や行動観察からは、ワーキングメモリ、対人態度、生活面、障害理解の課題などが指摘されている。しかし、eさんは自身の特徴について「癖（障害でも特性でもない）への対処ができるようになりたい」といった言葉を用いて説明されており、診断が自己の特性理解に結びついていない状況にある。元職に復帰を望んでいるが、まずはコミュニケーションの課題や作業面・認知面の課題を整理し、自己理解を適正化することで、適職を検討することが必要となっている。

### (2) 他者感情の読み取りと感情識別の特徴

—非言語コミュニケーション・スキルとの関連で検討する—

#### ① 新版F&T感情識別検査4感情評定版

「音声のみ」条件と「音声+表情」条件の正答率は平均的であったが、「表情のみ」条件の正答率は低かった。また、「快-不快の混同」はいずれの呈示条件でも認められなかったが、「音声のみ」条件では無回答（タイムオーバー）が生じていた(表3-2-5)。

表3-2-5 新版F&T感情識別検査4感情評定版の結果

音声		回答された感情				無回答
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	
呈示された感情	喜び	7				1
	悲しみ		5		3	
	怒り			8		
	嫌悪			1	7	
	合計	7	5	9	10	1
正答率		84%				

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		1	4	3
	怒り		2	6	
	嫌悪			3	5
	合計	8	3	13	8
正答率		63%			

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		6		2
	怒り			8	
	嫌悪			1	7
	合計	8	6	9	9
正答率		91%			

一方、いずれの条件においても、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間で混同が認められた。特に

「表情のみ」条件においては「悲しみ」や「嫌悪」を「怒り」と読み取る誤りが多く認められる。表情から「怒り」を読み取りやすい傾向が強いことが示唆されている。

コミュニケーションに際しては、表情のみからの感情の読み取りにおいて、不快感情の正答率が低いものの、音声も併せて活用することで、読み誤りは少なくなると考えられる（音声依存タイプ：「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、双方を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は高い）。

### ② 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版

快-不快評定版では A 検査（高不快）の「表情のみ」条件では特徴的は偏りが見いだされないものの、「音声のみ」条件では「快に」偏って読み取る傾向がみられ、「音声+表情」条件ではその傾向が顕著である（図 3-2-5）。B 検査（低不快）では、「音声のみ」条件と「表情のみ」条件では、特徴的な偏りは見いだされないが、「音声+表情」条件で「快に」偏って読み取る傾向が強い。

音声と表情の両方を手がかりとした曖昧な感情の識別において、「快に」偏って読み取る傾向があると言える。

こうしたことから、「音声+表情」条件では、相手の状況を気にしてみる必要がある場面でも、その必要を感じなかったり、楽観的に捉えている可能性が示唆されている。

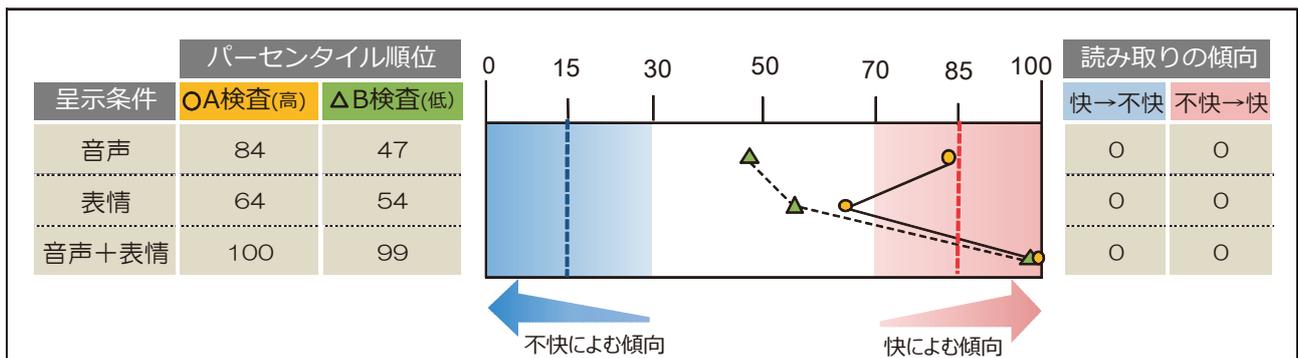


図3-2-5 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

### ③ 感情識別に関連する特性

対人ストレスを領域別に評価すると、〈自己の言動〉〈他者の言動〉〈孤立感や関係性の気付き〉〈意思疎通〉のすべてのカテゴリで、ストレスが“低い”という結果であった。

自らが他者に不快感を与えても、あるいは自らが他者から不快感を与えられても、さらには自らが周囲から孤立していたり、コミュニケーションが円滑でなくとも、それほどストレスに繋がっていない可能性がある。背景には他者への関心の薄さや、コミュニケーションへの独特な構えがある可能性が示唆される。

### (3) コミュニケーションの課題の整理

自身の様々な特徴を“癖”として理解している e さんについては、検査結果を提示する上で、過去に経験されたコミュニケーション場面でのトラブルと障害特性の関連を意識しながら、対応を検討していくことがポイントとなった。

検査実施後の感想として、4 感情評定版については、「顔だけ」が一番迷いが多く、答えやすかったのは「声だけ」「顔と声」だったという。また、4つの感情のうち、最も分かりにくかったものは「悲しみ」と「嫌だなあ」であり、「嬉しい」は間違いないと感じていたという。ただし、検査を終えた直後は「ここ最

近は人に会う機会も少なく、会社でも顔をみるような場面もなかったもので、久しぶりに・・・まじまじとみる時間があったなど・・・ひさしぶりの感覚と、ちょっと新鮮な感じがしました…」という感想であった。普段は人の顔を気にしないわけではないが、「気にした結果、それが行動にでるかどうかはちょっと分かんないですね」と、自信のなさがうかがえた。各呈示条件の正答率については、「音声のみ」では 70 %、「表情のみ」では 50 %、「音声+表情」では 60 %くらいと予想された。「試験（新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版）で出てきた方々の表情とか・・・見落としてそうだなと・・・いろいろ考えて・・・そんなに低めでもないと思います。で、それが、受け取れているかどうかに関しては、うん・・・まあ・・・自信がないので・・・自信がないというか・・・普段こうやって話しているときに、半分、人の表情を見落としていたら、それは読み取れていないと言ってもいいんじゃないかと思って・・・」と、日常場面で読み取れていない実感があることを述べた。

しかし、実際の結果については正答率が予想を上回っていたことに驚いた様子であり、特に「音声+表情」条件については、読み間違いが少ないことを納得するために多少の時間を要していた。コミュニケーションタイプが音声依存 T タイプに分類されていることから、「顔だけを手がかりにするシチュエーションはあまりないかもしれないけど・・・遠くの課長席やガラス戸の向こうにいて、声が聞こえてこないが何かあるかなという状況では気にしたほうがいくらいには（不快感情の読み取りは）当たっていないかもしれない」という説明に対して、上司の表情を読み取れずに失敗したエピソードを語った。皆が気を遣うシチュエーションにおいて「ぼく（e さん）だけ読めてなくて」ということが、思い出されたという。

表情の読み取りに苦手があることから、「表情識別訓練セット」<sup>\*3</sup>の表情写真とプロンプトカードを用いて、表情の注目箇所を確認することとした。確認後、表情から気配を察することについて、「気にしてみたとは思いますが・・・（中略）あの距離で見分けるのは大変だなあというのが・・・一つ・・・」と答えた。e さんによれば、彼の座席は職場の一番奥であったという。上司の顔を見分けるために分からないときには、周りに尋ねることはなかったという。

さらに e さんは、ある先輩社員の顔をみると「だんだん腹が立ってくるので、みないように・・・積極的にみないようにしているんです」と語った。e さんによればその先輩社員は質問した際に「すごい“嫌そうだな”・・・そんな顔をしなくてもいいんじゃないかと」いった表情を浮かべていたという。その理由を「仕事でもプライベートでも・・・ええ・・・なんで・・・えーとまあ、仕事でもまわりの人と話さないんで、誰かに聞いてみようという状況は浮かばない」と説明した。また、作業が始まると「会話が聞こえなくなっちゃうんですね・・・耳が遠くなるというか・・・」「電話が鳴っても気付くのにしばらくかかる・・・本当は、俺がとらなければならない電話なのに、先輩がとっちゃって・・・おまえのだから・・・というようなこともたびたび・・・」「そうすると、仕事での話さなければならないことは少ない・・・そういう・・・楽しい会話も、そっちが一生懸命やっていると聞こえない・・・で・・・とかとか・・・だんだん、その、（先輩と）疎遠になっていきまして」と、先輩社員との関係が悪化していった経緯が語られた。雑談に交わることにしても「めんどくさいというよりか、苦手意識ですね・・・僕の側の・・・」と、自身の苦手さがあることを挙げた。先輩社員に対する心理的な構えがあることは確からしいが、e さん自身の仕事上のミス

\*3 障害者職業総合センター研究部門で2000年に開発された表情識別訓練プログラムを実施するためのツールである。知的障害者等の訓練場面における指導など、広く一般的に利用が可能なものとして開発された。表情識別訓練セットは、F&T感情識別検査（開発当時はVHSビデオによる）、表情写真（嬉しい、悲しい、怒っている、嫌だなあ表情が示された男女4人の写真）、プロンプトカード（表情の注目箇所が端的な台詞で示されたカード）、実施マニュアル等で構成される。中でも、表情写真とプロンプトカードは表情識別訓練（予備セッションー7つの訓練セッションー訓練後の効果測定のための査定セッションの9つから構成される表情識別訓練プログラム）に用いられる道具である。詳しくは、調査研究報告書No.39「知的障害者の非言語的コミュニケーション・スキルに関する研究ーF&T感情識別検査及び表情識別訓練プログラムの開発ー」を参照されたい。

によって先輩社員からの指摘・指示が多発していることと対応しているのもまた事実であるという。したがって、ミスが減ることによって、先輩社員からの指摘が減ってくる可能性については検討が必要であろう。しかし、先輩社員と上司の指示・評価が異なる場面が生じることもあったことから、“判断に不安が生じたときには誰かに尋ねられると良い”という提案は打開の方法として検討できそうであった。

なお、快-不快評定版においては必要以上に「快に」偏って受け取る傾向が強いことから、深刻な事態を楽観的に読み過ぎると、必要な事態を見落とす可能性があることについては、経験と対応させて理解していたが、コミュニケーションの課題が、単なる“癖”ではなく、障害を背景とした特性であることへの理解を進めていく中で、対処行動を取れるか、配慮を職場に求めるか等を検討した上で、復職を目指すこととなる。

### 【他者への否定的な構えが強い f さん】

#### (1) プロフィール

30代男性。診断名はASD・ADHD（診断年齢33歳）。

大学卒業後、IT関連の開発職で就職した。しかし、職場のコミュニケーションにおいて「報告が無駄に長い」「簡潔すぎて分からない」といった上司からの指摘が相次ぐこととなる。作業報告や説明、進捗管理といった点でも課題が生じたことから、fさん自らコミュニケーションを取ることはなくなり、抑うつとなり、就職後8年目で休職に至る。産業医から受診を進められ、自ら発達障害の専門医を選択して診断に至る。

fさんは職場で経験したトラブルの原因が、自分自身のコミュニケーションの方法に関係していたことへの認識が十分ではない状況にあるが、障害を開示して障害者雇用により配慮を得た働き方で復職する、もしくは、新規就職することを希望している。また、事業主には一般枠での雇用継続の意向があり、配慮事項を明確化して、報告・連絡・相談といった基本的なスキルの必要性への理解を深め、行動化を促進することが重要であると認識されている。ただし、fさん自身は復職に強いこだわりはなく、無理なく仕事をする環境を求めている点で、双方の認識に開きがあるケースである。

#### (2) 他者感情の読み取りと感情識別の特徴

—非言語コミュニケーション・スキルとの関連で検討する—

##### ① 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「音声のみ」「音声+表情」条件の正答率は一般基準と同程度に高い。これに対し、「表情のみ」条件の正答率は低い（表3-2-6）。

表3-2-6 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		8		
	怒り			8	
	嫌悪			4	4
	合計	8	8	12	4
正答率		88%			

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		1	1	6
	怒り		1	7	
	嫌悪			6	2
	合計	8	2	14	8
正答率		56%			

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		8		
	怒り			8	
	嫌悪			4	4
	合計	8	8	12	4
正答率		88%			

特に、「表情のみ」条件では「悲しみ」について、より不快度の強い「怒り」や「嫌悪」に偏っていた。

なお、いずれの条件においても、快-不快の混同や無回答（タイムオーバー）は認められなかった。

コミュニケーションに際しては、表情のみからの他者感情の読み取りについては、不快感情の正答率が極めて低いものの、音声を手がかりにすると読み取りの困難は少なく、音声と表情の両方を活用すれば、読み誤りは極めて少ないと考えられる（音声依存Tタイプ：「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、双方を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は高い）。

### ② 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版

快-不快評定版では、「音声のみ」条件で「不快」に偏る傾向がみられ、A 検査（高不快）でその傾向が顕著である（図 3-2-6）。また、「表情のみ」条件では A 検査と B 検査いずれも特徴的な偏りは見いだされない。これに対し、「音声+表情」条件では「不快に」偏る傾向がみられ、B 検査（低不快）でその傾向が顕著であった。音声を手がかりとした曖昧な感情の識別において、「不快に」偏って読み取る傾向があると言える。

こうしたことから、「音声のみ」条件と「音声+表情」条件では、相手の状況を必要以上に深刻に捉える可能性が示唆されている。

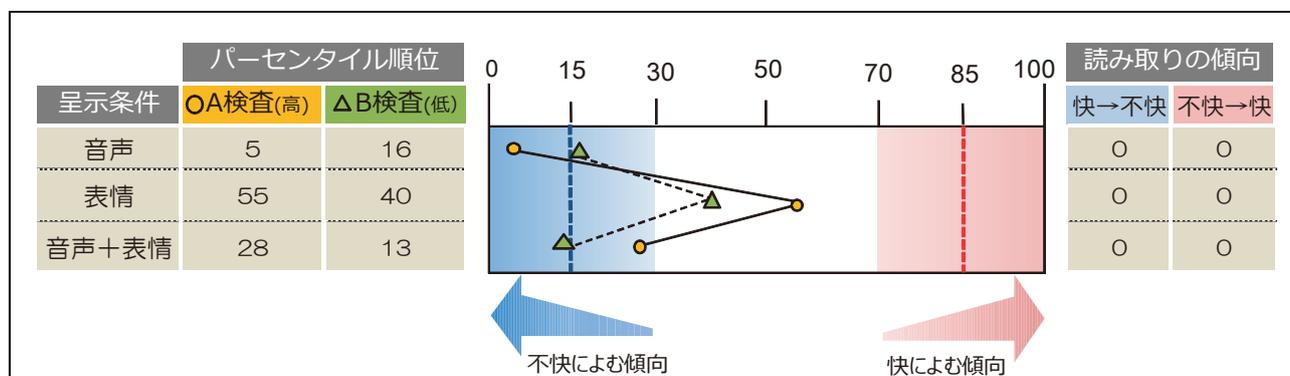


図3-2-6 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

### ③ 感情識別に関連する特性

対人ストレスを領域別にみると、〈他者の言動〉によるストレス、〈意思疎通〉に関するストレスについては“低い”。〈孤立感や関係性の気付き〉によるストレス、〈自分の言動が他者に不快感を与える〉ことによるストレスについては平均的であった。

「忙しい時に、仕事を頼まれる」「自分の言いたいことが、人に上手く伝わらない」ことが原因で生じるストレスが低いことから、他者との意思疎通やコミュニケーションが上手くいかなくても負担やストレスを感じにくい可能性がある。

### (3) コミュニケーションの課題の整理

fさんは職場で経験したトラブルの原因が、自身のコミュニケーションの方法に関係していたことへの認識が十分でない状況にあるが、復職に当たっては障害を開示して働きたいと考えている。このため、fさんのコミュニケーションに関する課題を整理しながら、障害による特性としての理解を進めるとともに、対応方法を検討することがポイントとなった。

4感情評定版実施後の感想では、難しかった呈示条件の順は「表情」「音声」「音声+表情」であった。また、「悲しい」と「嫌だなあ」の区別がつきにくく、ネガティブな感情は多くを「怒っている」と感じて

おり、「嬉しい」は最も回答しやすかったという。回答時には、人物が内面に様々な感情を隠しているような印象を持っており「複雑なものを感じながらやってみました」とのことであった。正答率については「音声」と「表情」で40%～70%、「音声と表情」では60%～90%を予想したが、その範囲は極めて広いと言える。

fさんは診断を受けた際、“発達障害の人は表情の読み取りが苦手”であることを説明されたが、自分自身に当てはめてみると「そうではない」という自覚があったという。しかし実際に検査を受けてみると、「やってみたら意外とできなかつたなあ・・・難しかったということですかね」という感想を持つこととなった。

表情識別に苦手さがあることから、「表情識別訓練セット」<sup>\*4</sup>の写真とプロンプトカードを用いて、表情の注目箇所を確認することとした。“嫌だなあ”と“怒っている”の違いに気付いたことから、続いて、着目点に注意して日常的に他者の表情を気にしてみることを提案したが、「まあ、してみたいとは思いますが、それでも、ちょっと、やっぱり難しいと思ってます」と自信を持っていない様子が見えられた。そこで、自分自身で表情識別訓練を計画した女性のケース（障害者職業総合センター調査研究報告書 №119 第三部 第2章第1節、2014）を紹介し、表情の注目箇所を絞ることで正答率が上がる可能性があること、検査をやってみて難しさを感じたことについてはそれ相応の理由があるということに対し、「着目点が間違っていたということですね」と応えたので、“間違っていたというよりも、整理されていなかった”と説明を加えた。しかし、正答率を高めることについては消極的であった。その理由として「あのお・・・なんか、むしろ読めなくて、深読みしすぎるみたいなの・・・普段はあまり強い感情出さないじゃないですか・・・隠されているだろうし・・・無表情にされてるし・・・怒ってないかなって・・・深読みするとかって、かなりありますね」と、ニュートラルな表情をみた時の捉え方が、ネガティブに偏っていることを説明した。そこで、“怒っている”顔を察知した時の対応を尋ねたところ、まずは「ちょっと猫背になって・・・弱そうな感じの・・・従順な感じの・・・雰囲気（自分が出す）」「声はかけないようにしますね・・・なるべく避けるというか、逃げる・・・」と述べた。仮に怒りがfさんに向けられた場合でも対応は基本的に同じであり、「呼ばれない限りは・・・逃げますね・・・」と回避的な考え方が示され、相手の嫌悪を察知したときには困惑して何をしたいかわからないと発言した。

また、職場では「何というかまあ・・・すごい嫌われてるんですよ・・・とにかく嫌われてるんですよ」と述べ、居心地をよくするために「ありがとうございます」「すみません」は言うようにしているものの、効果はなかったと感じているという。他者からみた場合に、実はそれ程までに嫌悪を抱かれていないことへの可能性については、「（嫌われていると）感じているというか、結果としてそうですね」「まあ、事実としてそうです」と頑なに受け入れられなかった。快-不快評価版の結果からは、必要以上にネガティブに捉える傾向があることから、そのような受け止め方が、快-不快評価版にもみられる傾向であることを伝えることとなった。fさんの他者から嫌われているという感覚は支援者にも適用されており、「少なくとも、スタッフは嫌ってないですよ」と強調したが、意に介せぬ様子であった。そこで、fさんを嫌っていない人を探ると、“母親”や“昔からの友人”が挙げられ、「嫌われない、までいっている人は・・・この・・・

<sup>\*4</sup> 障害者職業総合センター研究部門で2000年に開発された表情識別訓練プログラムを実施するためのツールである。知的障害者等の訓練場面における指導など、広く一般的に利用可能なものとして開発された。表情識別訓練セットは、F&T感情識別検査（開発当時はVHSビデオによる）、表情写真（嬉しい、悲しい、怒っている、嫌だなあ）の表情が示された男女4人の写真）、プロンプトカード（表情の注目箇所が端的な台詞で示されたカード）、実施マニュアル等で構成される。中でも、表情写真とプロンプトカードは表情識別訓練（予備セッションー7つの訓練セッションー訓練後の効果測定のための査定セッションの9つから構成される表情識別訓練プログラム）に用いられる道具である。詳しくは、調査研究報告書No.39「知的障害者の非言語的コミュニケーション・スキルに関する研究ーF&T感情識別検査及び表情識別訓練プログラムの開発ー」を参照されたい。

・ほんとうにこの全人口中で・・・世界を合わせて・・・本当に数人なんですよ・・・」と、その頑なさがさらに繰り返された。このとき、fさんの表情が「嫌悪」の特徴を表出していたことから、意図しないことであっても、人は表情からその人に対する「嫌悪」を読み取ることを挙げ、“メッセージの出し方”はコミュニケーションにとって重要であることを補足した。

今後、fさんは、コミュニケーションの課題となっている他者感情の受け止め方、自身からのメッセージの発信についてスキルを獲得を目指すことと併せて、自身の障害特性を整理し、復職に当たっての条件を検討していくこととなる。

#### 4. 異動や昇進による不適応の課題への対応が必要な事例

##### 【昇進により業務負担が顕在化したgさん】

###### (1) プロフィール

40代男性。診断名は注意欠陥多動性障害・ADD（診断年齢47歳）。

大学院修了後、技術職で就職。課長職に昇進したところで指示を忘れるといったミスが多発する。3年後不適応となりうつ症状を発症。それまで10年程服薬治療を受けていたが、上司からは「現在の治療が合っていないのではないか」との指摘もあったことから、就職直後に受診していた精神科を訪ねる。当初は認知症を疑われたものの、発達障害の診断を受けることとなった。gさんは診断前に発達障害に関する本を読み、特性が自分に合っているのではないかと心当たりを感じていたという。

職業評価や行動観察からは、言語理解に問題はないが、定型作業が続くとイライラする、集中力が途切れる、自分の作業を否定されるような指示や変更には抵抗感を示す、メモは取るが見直しをしない、考えずにスケジュールに取り組むといったような、対人態度や作業遂行上の問題が指摘されている。

###### (2) 他者感情の読み取りと感情識別の特徴

—非言語コミュニケーション・スキルとの関連で検討する—

###### ① 新版F&T感情識別検査4感情評定版

「音声のみ」条件と「音声+表情」条件は一般基準と同程度に高かった。ただし、いずれの条件でも「快-不快の感情間の混同」が生じていた。一方「表情のみ」条件の正答率はやや低いが「快-不快の混同」は認められなかった（表3-2-7）。

表 3-2-7 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情				無回答
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	
呈示された感情	喜び	6	1	1		
	悲しみ		8			
	怒り			8		
	嫌悪		1	3	4	
	合計	6	10	12	4	
正答率		81%				

表情		回答された感情				無回答
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	
呈示された感情	喜び	8				
	悲しみ		5		2	1
	怒り		2	6		
	嫌悪			3	5	
	合計	8	7	9	7	1
正答率		75%				

音声+表情		回答された感情				無回答
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	
呈示された感情	喜び	7			1	
	悲しみ		8			
	怒り			6	2	
	嫌悪				8	
	合計	7	8	6	11	
正答率		91%				

コミュニケーションに際しては、表情のみからの他者感情の読み取りについて、不快感情の正答率がやや低いものの、音声と表情の両方を活用すれば、読み誤りは極めて少ないと考えられる（特定のタイプに分類されない：「表情のみ」の単独の情報では正答率が低いものの、「音声」と「表情」両者の情報を相互補完的に利用することで、全体的な正答率が高まる）。

### ② 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版

快-不快評定版では、A 検査（高不快）の「音声のみ」条件と「表情のみ」条件において、「不快に」偏って捉える傾向がみられた(図 3-2-7)。「音声+表情」条件では特徴的な偏りは認められなかった。これに対し、B 検査（低不快）では「表情のみ」条件と「音声+表情」条件において、「不快に」偏って捉える傾向がみられたが、「音声のみ」条件では、特徴的な偏りは見いだされなかった。

こうしたことから、不快度の明確な音声と表情の両方がそろえば他者感情を偏って捉える特徴はないものの、それ以外の条件では概して「相手の感情をより深刻に受け取る（他者の評価を気にする）」などの可能性が示唆される。

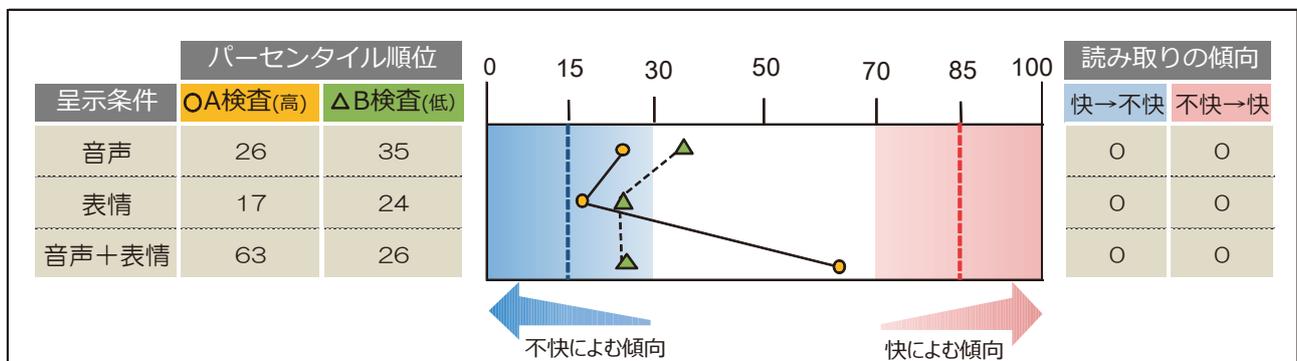


図3-2-7 新版F&T感情識別検査快-不快評定版の結果

### ③ 感情識別に関連する特性

対人ストレスを領域別にみると、〈自己の言動〉〈孤立感や関係性の気付き〉〈意思疎通〉に関するストレスが“高い”傾向にあった。一方で〈他者の言動〉に関するストレスは“低い”傾向にあった。

このことから、「自分自身が他者に不快を与えていないかどうか」「人が自分を嫌っていないか」「言いたいことが人に上手く伝わらない」といったことが原因でストレスが生じる可能性があり、職場での不適應の経験が関連している可能性が示唆される。

#### (3) コミュニケーションの課題の整理

就職直後から精神科を受診していたgさんは、昇進をきっかけに不適應が顕在化することとなった。指示を忘れるといった認知・作業面での課題は評価・観察されていたが、感情識別の特性を評価することでコミュニケーション上の課題を整理することと併せて、復職後の対応方法を検討していくことが必要となったケースである。

4 感情評定版実施後の感想として、まずは呈示条件別の分かりやすさを尋ねたところ、登場人物別の感想について説明され、問われた内容とは異なる回答をするといった注意の転導や、深く考えずに言語化する可能性が認められた。なお、呈示条件別の分かりやすさは順に「音声+表情」>「音声」>「表情」であったという。また、感情別では「嬉しい」がいずれの条件でも最も回答しやすく、次いで「怒っている」であり、「悲しい」と「嫌だなあ」はいずれも分かりにくかったという。特に表情だけの時は、「嬉しい」以外、すべて分かりにくいと感じていたという。正答率の予想は「音声のみ」で5割、表情のみでは「半分以下」、

音声と表情では「5割ちょっと」と、全体として難しいテストであると感じていたようであった。しかし、実際の結果はgさんの予想を上回っていたことから、意外性を感じるとともに安堵した様子があった。

表情による不快感情の識別について正答率が低いことから、「表情識別訓練セット」<sup>\*5</sup>の表情写真とプロンプトカードを用いて、表情の注目箇所を確認することとした。その結果、難しさを感じていた“悲しい”“嫌だなあ”の注目箇所の違いや、相手の“嫌だなあ”や“怒っている”の表情の違いに気付くことができた。上司が嫌悪の表情を示している時の行動については「なんで、いやなのか、怒ってるんだろうかと考えますね」「で、考えて、私が何か行動を取れることがあるんだったら、行動を取りますけれど……思いつかなかったら、そのまま……」であり、怒りを示している時は「こちらの場合も……怒られているわけだから……怒っている原因があるわけですね」「原因が分かれば、原因に対処……考えますね」「(原因が)分からなかったら……謝るだけです……申し訳ありませんと……」と述べ、そこで嫌悪と怒りへの対応が共通していることに気がつくこととなった。対応が同じであれば、読み取りにくい場合にあって区別をせずとも、混乱が少ないことが予想されたことから、音声のみ、表情のみの嫌悪と怒りの読み誤りは、大きな問題ではないことを伝えることとなった。むしろgさんについては、“どのようにこれからの生活をうまく過ごしていくかというところで、目標を持つ”ことが優先されることであり、そのために表情の注目ポイントを気にしてみることで、自信を持つことができる可能性を指摘することになった。

なお、快-不快評定版において「不快に」偏って読み取る傾向が認められたことから、「たぶんですね……私としては、相手が不快だと思……相手の態度をみて、今、不快に思っているのかと考えておけば、大事には至らないだろうと……なんか、そんなの(意識)が働いているんじゃないかと思うんですよ……」と、楽観的に捉えないように無意識に無難な方を取っていることを自覚していた。しかし、その場合も、“自分の基準と周りがどう受け取ったかを確認して照らしてみることで、自分の判断が厳しすぎないかが分かる”と伝え、まずは職員やスタッフに尋ねてみるころから始め、復職後には説明・確認・相談のできる人をみつけておくことを提案した。

gさんは、会社での不適応の原因は仕事のミスであると考えており「仕事のミスをなくすという……のが究極の目標で……あとは、減らすために、どういう仕事を手順を踏んで、何に注意して、仕事を進めていくか……進め方を今整理している」「失敗を減らせられれば……あの……厳しい見方を言われることは、なくなるんじゃないかと、僕、思っていて……」と、失敗を減らすことが他者の不快感情を喚起させないことに繋がると考えていた。

今後、gさんは復職を目指す上で、作業遂行上の課題やコミュニケーション上の対処方法を探索し、具体化していくこととなる。

## 【自己理解を深め自己肯定感を高めることで自信を持つことが目標となっているhさん】

### (1) プロフィール

50代男性。診断名はアスペルガー症候群・ADHD(診断年齢50歳)。

大学卒業後、開発職で就職。途中、異動することになるが、元々の専門領域とは異なる業務に携わること

\*5 障害者職業総合センター研究部門で2000年に開発された表情識別訓練プログラムを実施するためのツールである。知的障害者等の訓練場面における指導など、広く一般的に利用が可能なものとして開発された。表情識別訓練セットは、F&T感情識別検査(開発当時はVHSビデオによる)、表情写真(嬉しい、悲しい、怒っている、嫌だなあの表情が示された男女4人の写真)、プロンプトカード(表情の注目箇所が端的な台詞で示されたカード)、実施マニュアル等で構成される。中でも、表情写真とプロンプトカードは表情識別訓練(予備セッション7つの訓練セッション訓練後の効果測定のための査定セッションの9つから構成される表情識別訓練プログラム)に用いられる道具である。詳しくは、調査研究報告書No.39「知的障害者の非言語的コミュニケーション・スキルに関する研究—F&T感情識別検査及び表情識別訓練プログラムの開発—」を参照されたい。

となる。分からないことが生じたり、困った場面でも質問や助けを求めることができなかつたことから仕事が達成されず、メンタルヘルス不全となり、休職に至る。一度は復職したものの適応できず再び休職に至り、在職のまま職業リハビリテーションの専門支援の利用に至る。

職業評価や行動観察からは、認知面の特徴として聴き取りの苦手さ、言葉の理解について自分と他者の理解の一致を必要以上に確認する様子が頻回にみられたり、言葉で表現できない気持ちがあるときはモヤモヤ感が生じることを訴えたりと、自己肯定感の低さがうかがえる発言が指摘されている。

会社としては、hさんが自ら“SOSを出せるようになる”ことを期待しており、それさえ可能となるのであれば、障害者手帳を取得せずとも一般枠のまま復職を受け入れる考え方を持っている。

## (2) 他者感情の読み取りと感情識別の特徴

—非言語コミュニケーション・スキルとの関連で検討する—

### ① 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「音声のみ」条件と「表情のみ」条件で平均的な正答率である。「音声+表情」条件は平均と比較しても十分に高い(表 3-2-8)。「快-不快の感情間の混同」は、「音声のみ」条件で認められた。また、「音声のみ」条件のみ無回答(タイムオーバー)が発生していた。しかし、いずれの条件においても正答率が平均的かそれ以上であることから、日常的には感情の読み取りに大きな困難はないと言える(高受信タイプ:「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても正答率が高い。したがって、高受信タイプでは、対象者が相手の感情を知ろうとした場合は、基本的な感情であれば言葉による状況の説明がなくても十分に理解され特定のタイプに分類される特徴的な傾向は持っていない)。

表 3-2-8 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情				無回答
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	
呈示された感情	喜び	8				
	悲しみ		8			
	怒り	1		6		1
	嫌悪		1	2	5	
	合計	9	9	8	5	1
正答率		84%				

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		7	1	
	怒り			6	2
	嫌悪			2	6
	合計	8	7	9	8
正答率		84%			

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		8		
	怒り			8	
	嫌悪			2	6
	合計	8	8	10	6
正答率		94%			

### ② 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版

快-不快評定版では、A 検査(高不快)において特徴的な偏りは認められなかった。一方、B 検査(低不快)では、「表情のみ」条件でやや「不快に」偏って捉える傾向が、「表情のみ」条件で「快に」偏って捉える傾向が認められたが、「音声+表情」では特徴的な偏りは見いだされなかった(図 3-2-8)。

こうしたことから、不快度の明確な音声や表情については、他者感情を偏って捉える特徴はないものの、より不快度の低い音声については「必要以上に楽観的にとらえる」可能性が強く、同様に、より不快度の低い表情については、「必要以上に深刻にとらえる」可能性が示唆されており、不快度の低い刺激の読み取りには注意が必要である。

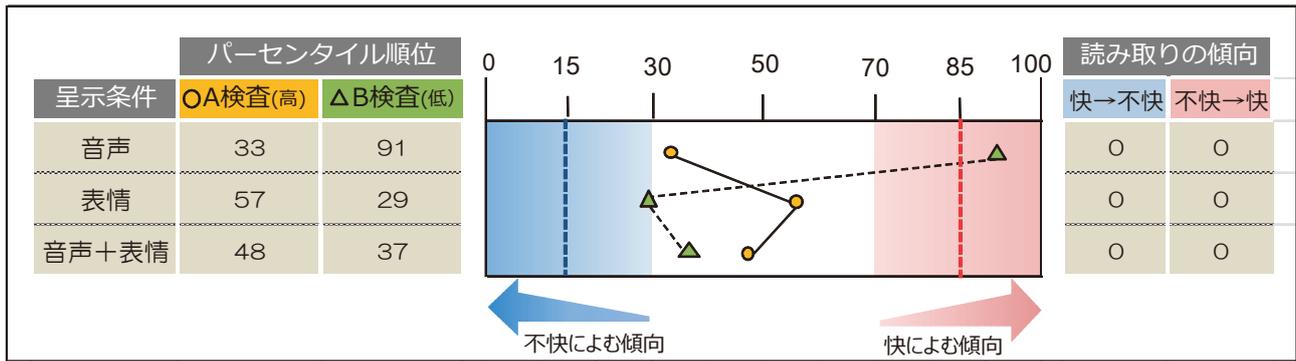


図3-2-8 新版F&T感情識別検査快-不快評定版の結果

### ③ 感情識別に関連する特性

対人ストレスを領域別にみると、〈自己の言動〉〈他者の言動〉〈孤立感や関係性の気付き〉〈意思疎通〉に関するストレスが“高い”傾向にあった。

このことから、「自分自身が他者に不快を与えていないかどうか」「忙しい時に、仕事を頼まれる」「人が自分を嫌っていないか」「言いたいことが人に上手く伝わらない」といったことが原因でストレスが生じる可能性があり、職場での不適応の経験が関連している可能性が示唆される。

#### (3) コミュニケーションの課題の整理

異動に伴う職場不適応によって休職をすることになったhさんについては、自己評価が低く、自己肯定感も低いことが観察されている。復職するための条件を検討する上で、自己の特性としてのコミュニケーションの課題を整理することが求められたケースである。

4感情評定版実施後の感想として、分かりやすい呈示条件は順に「音声+表情」条件、次いで「音声のみ」条件、「表情のみ」条件であったという。また、感情別の分かりやすさでは、「嬉しい」が最も分かりやすく、次いで「悲しい」「怒っている」「嫌だなあ」であった。ただし、「怒っている」と「嫌だなあ」ではよく迷っていたとのことである。さらに、各呈示条件の正答率は「音声のみ」条件で70%、「表情のみ」条件で50%、「音声+表情」条件で90%を予想された。実際の結果と比較すると、特に「表情のみ」条件で、予想を大きく上回っていたことについて、意外性が大きかったようであった。また、hさんは、40代男性の演技者の表情が分かりにくいことを強調し、顔の凹凸が深ければ、不快な表情にみえてしまうことを述べており、その際には口元に注目して台詞から感情を予想していたという。ただし、演技者による台詞は、感情的な意味を含まないものであること、さらに、様々な顔の登場人物から、確かに表情をみて感情を判断していたことから、台詞が感情識別の助けになったというよりも、hさん自身が正しく感情を読んでいたことを伝えることとなった。

また、正答率はhさんの予想に反して平均的であったにも関わらず、「プラスに受け止めちゃっていいんですかね？」という発言があったことから、正確な読み取りに対しては自信を持ってよいことを強調することとなった。しかし、「自信持てないですね。自信を持てないというか、自分に自信が持てないから、あの、できたことに数字として示されたら、確かに自信は持っていていいんですよって言われても、あの・・・ベースの自分が・・・全体的に自信が低い人なので・・・」とこだわっていた。

相手の気持ちが分かったときの行動としては、「嫌悪」や「怒り」がhさんに向けられていることを察知した時は、まず距離を置き、「どうレスポンスしていいか、判断つくまでは近づかない」「ちょっとタイムの後は・・・そういう人に近づいていくのはすごい苦手ですけど・・・あの、どうしましたか？って一声かけ

るしかないですね」「確かめるしか・聞くしかないです」「取る行動は一緒です」と「嫌悪」や「怒り」に共通する適切な対応が確認されたことから、両者の読み誤りを気にするよりも、適切な行動ができることこそが重要であること、苦手意識を持たなくて良いことについて伝えた。その結果、表情からの感情の識別について「苦手じゃないっぽいですね」「それが分かっただけでも、ありがたいですよね・・・」と肯定的に受け止めるに至った。

なお、快-不快評定版の結果において比較的ニュートラルな状況にあることについては、「ほぼほぼ、平凡にあるというか、穏やかというか、特にストレスを受けていない状態なんですかね」と理解され、現状としてストレスのない環境で落ち着いて過ごせていることと対応させて受けとめていた。会社に戻ると「ストレスは確かに増えるでしょうけど、たぶん、（快-不快に大幅に振れることは）ないと思います・・・（中略）だから、多少ストレスが掛かったくらいでは、それは振れないと思います」と安定への期待が認められた。hさんは復職の時機を図りながら自分自身の特性を整理し直しており、「一步一步、着実に、自分ができるところをやっていくしかない」「今回は今までとはちょっと違う・・・違うくらい自信がつけられると思いました」と、冷静に自己の課題をみつめることで、自信を深めて前進されている様子が確認された。

不適応の課題となっていた SOS の発信や対人場面でのコミュニケーションの課題が整理されつつある中で、提案された対処方法が、実際に行動化されることが期待される。

### 第3節 事例検討のまとめ

第2章では、ヒアリング調査の対象となった8事例について、就職を目指す上でコミュニケーションに関する課題整理を図った2事例、離転職を繰り返す中でコミュニケーション上の問題に直面し、適職を探索している1事例、就職後の適応に関する課題に基づき3事例、異動・昇進による不適応への課題に基づき2事例に分けて取りまとめを行った。

表3-2-9に事例の概要を示す。

表3-2-9 事例の概要

事例	年代	診断年齢	職業経歴	新版F&T感情識別検査4感情評定版						新版F&T感情識別検査 快-不快評定版- パーセンタイル順位						表情識別訓練
				正答率			混同傾向		コミュニケーション ・タイプ(※)	音声		表情		音声+表情		
				音声	表情	音声+表情	快-不快	不快間		A検査	B検査	A検査	B検査	A検査	B検査	
a	20代	23歳	なし	78%	69%	94%	音声	全条件	相補	92	28	13	10	16	13	○
b	20代	21歳	アルバイトのみ	66%	56%	53%	音声 音+表	全条件	特定のタイプに分類されない	92	47	100	83	91	84	
c	30代	38歳	離転職あり	66%	72%	88%	音声	全条件	相補	26	20	65	24	52	29	
d	20代	24歳	初職休職中	88%	91%	94%	-	全条件	高受信	28	5	12	10	11	8	○
e	30代	31歳	初職休職中	84%	63%	91%	音声	全条件	音声依存T	84	47	64	54	100	99	○
f	30代	33歳	初職休職中	88%	56%	88%	-	全条件	音声依存T	5	16	55	40	28	13	○
g	40代	47歳	初職休職中	81%	75%	91%	音声 音+表	全条件	特定のタイプに分類されない	26	35	17	24	63	26	○
h	50代	50歳	初職休職中	84%	84%	94%	音声	全条件	高受信	33	91	57	29	48	37	

※ 相補：「音声のみ」「表情のみ」の単独の情報では正答率が低いものの、両者の情報を相互補完的に利用することで全体的な正答率が高まる。  
音声依存T：「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、双方を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は高い  
高受信：「音声のみ」「表情のみ」の正答率が高い。また、双方を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率も高い。  
特定のタイプに分類されない：特定のタイプに分類される特徴的な傾向は持っていない。

取り上げた事例は20代から50代の男性で、診断年齢はいずれも最終学校在学中もしくは卒業後の成人期であり、在学時や職場での不応等経験により気づきと受診が行われた点で共通している。

本ヒアリング調査では、主に職業経験を有する発達障害者を中心として、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版を実施した。すでに先行研究（障害者職業総合センター、調査研究報告書No. 119）のヒアリング調査によって「表情識別に関する特徴を踏まえた対応に関する事例」「作業遂行上の課題への対応に関する事例」「雇用関係への適応上の課題への対応に関する事例」が取りまとめられているが、これらの知見を背景とし、本節では8つの事例について考察を行うこととする。

#### (1) 就職を目指す上でコミュニケーションに関する課題を整理し、自己理解を深める必要のある事例

aさんとbさんは、いずれも在学中の不応を契機に診断を受けたことと、職業経験を有しないという点で共通している。また、診断から支援機関への利用に至るまでの期間が比較的短時間であったことから、コミュニケーションに関する課題を障害特性や職業上の課題と対応させて整理をし、自己理解を深めていくことが必要となったケースである。

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版からは、aさんが相補タイプであり（情報を有効的に活用できているタイプ）、bさんは特定のタイプに分類されない（ただし低受信タイプに類似した配慮が必要なタイプ）という結果が得られた。二人のコミュニケーションタイプは異なるものの、自身にとって想定外の結果を得ることとなった点では共通していた。日常生活のコミュニケーションにおいて困難をあまり感じないaさんであれ、他者とのコミュニケーションに積極的でないbさんであれ、自らの感情識別の特徴を音声と表情に分けて考えることがなければ、必ずしも自身の受信の特徴や課題に気付いたり関心を持つわけではないことが確認された。このことから、検査結果が本人にとって予想範囲の内であれ外であれ、感情識別の特性を客観的に評価することにより、就職に向けて獲得されることが望ましい対処方法や補完方法について、事前に確認・選択できる可能性を高められることが示唆される。

なお、“嫌悪”と“怒り”の読み誤りは、aさんにもbさんにも生じていたが、これらの感情を察知した場合の対応は、aさんでは「・・・すみません、“何かありましたでしょうか”」と尋ねるものであり、bさんでは「避けるとかそういうことではなくて、対処するより他ない」と理解されていたことから、両者とも了解可能な対応を考えとして持っていることが確認された。さらに、これらの対応を実際に行動可能なものとするには、職場実習や体験的な場面が用意されることが望まれる。

aさんについて不応の課題は日常生活の場面で現れていないが、快-不快評定版の結果からは「快に」または「不快に」偏って読み取る傾向が認められた。曖昧な感情の受け取りの傾向が偏る背景には、高いストレス経験や他者への苦手意識などを持つ可能性が示唆される。

また、bさんについても「快に」偏って読み取る傾向が認められた。bさんは相手の機嫌を確認するために「声の調子の平坦さ」に注目しており、「気を使うとか、顔をうかがうこととか、できることなら避けたいですね」といった構えがありつつも、事態が深刻になることを避けるための方策は検討されていることが示唆された。これは、感情識別の正答率は低いものの、自らの感情の識別力を高めることよりも、相手からの言葉で状況の理解を補うことを希望するなど、適切な方法を選択していることと対応している。

aさんとbさんの事例にみられるような対人ストレスや曖昧なメッセージに対する構えの可能性については、相談・支援をとおしてさらに検討を進めることが必要であるが、職業経験のない時点では、まず自己の現状を捉えることを始めのステップとした上で、関連する課題を検討・整理することが重要であろう。また、必要以上に快もしくは不快に捉えている場合であっても職業経験を積み重ねることで状態が変容する可能性もあることから、この点についても結果説明において触れる必要があるだろう。

(2) 離転職を繰り返す中でコミュニケーション上の問題に直面し、“適職”を探索した事例

c さんの離職・転職の背景にはコミュニケーションに関わる対人トラブルがあり、障害特性の理解へのモチベーションが高い状態にあったものの、専門支援による特性評価の機会がなかったことから、特性について独自の理解（「知能検査では言語能力が高い」という医師の説明を、編集や事務の仕事に適性があると理解する等）が生じることとなっていた。このため、検査結果から障害特性について改めて整理することによって、障害特性に応じた対応方法の検討が求められたケースである。

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版からは相補タイプ（よくみて聞けば情報を有効に活用できるタイプ）であることから、「音声のみ」や「表情のみ」からの感情識別の特徴については気付きにくい状況にあったと考えられる。本人の実感として「答えにくかったのは画像（表情条件）だけでした」といったことから、改めて客観的に評価して確認することが必要であることが示唆される。

また、c さんの快-不快評定版の結果からは、背景に高いストレス経験を持つ可能性が示唆され、前の職場で「だまされたり、パワハラにあった」経験などが想起されていた。状況を把握することが必要だと思っても「勇気が出ず相手に尋ねることを躊躇してしまう」といった行動を取ることが多かったが、“ひとまず、聞いてみる”ことが重要な確認行動であることに気づき、行動に移すことについては前向きな発言もみられた。初職就職以前に特性理解を支援する機会があれば、特性に応じた職業が検討された可能性もあったことから、コミュニケーションに課題のある発達障害者に対して早期から特性評価を検討することの重要性が示唆されることとなった。

(3) 初職不適応の課題への対応が必要となった事例

d さん、e さん、f さんの進路選択はいずれも特性に照らして選択されたものではなく、大学在学時の所属学科に依拠しており、初職入職後、徐々に不適応の課題が顕在化した点で共通している。

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版では d さんが高受信タイプ（基本的な感情であれば言葉による状況の説明がなくても十分に理解されるタイプ）、e さんと f さんは音声依存 T タイプ（音声を手がかりにすれば情報を有効に活用できているタイプ）という結果が得られた。3 者とも情報を有効に活用できているタイプであることから、日常生活における他者からの感情識別自体に困難は少ないと考えられるものの、実際の正答率に対して本人らの予想は低い方向に見積もられることとなった。これは、d さんと e さんでは「音声のみ」条件においてタイムオーバーが生じていることや、e さんと f さんでは「表情のみ」条件で不快感情間の読み誤りが多発していることなどから、情報源が音声や表情のいずれかに限られた場合には、感情識別に困難が生じていることと対応している。

また職場不適応の一因である、d さんの同僚や児童、保護者への攻撃的な対応、e さんの注意を受けても理解できずイライラするといった対人態度、f さんのコミュニケーション場面における回避的行動等が、感情識別の確からしさについて自ら疑いを持つ背景要因となっている可能性がある。

一方で、e さんはコミュニケーション上の課題を“癖”として理解し、f さんにおいてはそもそも問題への認識すら十分ではなかったことなどから、職場でのコミュニケーション上の課題が必ずしも自己の障害特性と結びついて理解されていない場合もあり、コミュニケーションの“発信面”の課題も同時に整理し、障害特性として新たに理解を進めていくことが必要となった。

また、怒りや嫌悪を察知した場合の対応として、d さんでは「“怒り”の場合は『すみません』とひたすら言い続ける」が、“嫌悪”の場合は“避ける”行動を選択したことや、f さんでは「声はかけないようにしますね・・・なるべく避けるというか、逃げる」といった行動を取ることが回答されたことから、職場で必要な対人態度や行動様式が十分に獲得されていない状況が明らかになった。なお、不快感情を察知した

時に「言葉で確認する」といった対応の必要性について3者へ提案を要したことからは、職業経験によって必ずしも対処方法が獲得されるわけではないことが改めて確認された。

これらのことから、発達障害者においては、日常生活で他者感情を正しく読み取れたとしても、職業経験を重ねる中で獲得が期待される「職場での行動様式」や「組織における役割理解」等について、期待される水準に必ずしも到達しない可能性があることを想定する必要性が示唆された。

快-不快評定版についてはdさんとfさんは「不快に」偏って捉える傾向がみられ、eさんは「快に」偏って取られる傾向が認められた。3者とも職場でのコミュニケーションに関する失敗や挫折体験があったという点では共通しているが、ストレスの状態や対人コミュニケーションにおける構え等について、dさんでは意思疎通に高いストレスを持つ可能性が、eさんでは他者への関心の薄さが、fさんでは意思疎通が無くともストレスを感じにくい可能性がある等が3者それぞれに異なっていた。「不快に」または「快に」偏って捉えている場合には、背景となっているストレス経験等の情報について可能な範囲で聴き取っておくことが重要であると言えよう。

なお、初職の在職期間はdさんで約1年、eさんで4年、fさんで8年と、問題が表面化するまでに要した時間は個人によって異なっている。これらの年数は、個人の障害特性と職場環境との対応によって短くも長くもなる可能性はあるものの、検討すべきは、一般求人において就職し、職場不適応が生じて初めて発達障害が疑われる経緯があったという点である。そもそも、入職前の教育の段階においてコミュニケーションの課題を検討するといったことや、職業リハビリテーションの専門支援を利用する機会が設けられていれば、特性に応じた初職が選択された可能性があったことは言うまでもないだろう。

dさん、eさん、fさんは、職場不適応の原因となったコミュニケーションの課題等を整理することをおして、自己の障害特性を整理しているところであり、復職・就職に向けて新たな自己理解が始まったところである。

#### (4) 異動・昇進による不適応への対応を要した事例

gさんとhさんは、初職入職後、異動や昇進によって不適応の課題が顕在化した点で共通している。gさんは技術職で就職したが、課長職に昇進し管理的な職務においてミスが多発し、hさんは専門領域とは異なる部署に異動したことにより不適応となった。それまでの役職において問題は顕在化せず適応していたが、異動・昇進により担当可能な業務や役割の範囲を超えてしまったことで課題の存在が明らかとなった事例とみることができる。

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版では、gさんは「特定のタイプに分類されない（ただし「音声」と「表情」両者の情報を相互補完的に利用することで全体の正答率が高まるタイプ）」、hさんは「高受信タイプ（基本的な感情であれば言葉による状況の説明がなくても十分に理解されるタイプ）」という結果であり、日常生活での他者の感情識別という点での困難は少ないタイプである。しかし、検査の感想を尋ねたところでは、gさんは質問とは異なる内容に言及したり、hさんは結果に自信を持ってないことにこだわる発言を繰り返すなど、いずれにおいてもコミュニケーションの円滑さが阻害される反応がみられたことから、感情を正しく読み取れることとは別に、「注意の転導」や「こだわり」といった認知面の特性がコミュニケーション上の課題に対応していないかどうか検討することの必要性が示唆された。

また、「怒り」と「嫌悪」の混同は両者に認められたことから、これらの感情を察知したときの対応方法や考え方を確認したところ、gさんでは「私が何か行動を取ることがあるんだったら、行動を取りますけれど・・・」「原因が分かれば、原因に対処・・・考えます」といったことや、hさんでは「確かめるしか・・・聞くしかない」といったことなど、両者ともに了解可能な回答が聞かれることとなった。また、これ

らが具体的な職業経験に基づいて説明されていたことから、初期職場適応には問題が顕在化しなかった事例では仕事による実体験をとおして適切な行動の必要性が理解され、獲得される可能性が示唆された。

一方、自己の優先的課題として g さんでは「仕事のミスをなくす」「どういう仕事を、手順を踏んで、何に注意して、仕事を進めていくか」といった作業遂行上の課題への対応が、h さんでは「自分に自信が持てないから」といった自己肯定感の低さを修正する必要性が認識されていたことから、本人に自覚されている問題をコミュニケーションの課題と照らした上で、同時に整理・検討を進めることが重要であることも示唆された。

なお、快-不快評定版については、両者とも「不快に」または「快に」偏って捉える傾向が認められた。しかし、音声と表情の両方からの情報が揃うことで偏りが穏やかになることから、それぞれの情報を用いることが望ましいことに加え、g さんについては、「言葉での確認も併せて行うこと」、h さんについては「平均的な読み取りであることに自信を持つこと」が、各々の優先的課題に対応する補完手段や結果への考え方として伝達することとなった。

一般求人において雇用される場合、通常は勤続年数や経験に応じて昇進や異動が生じることとなる。g さんや h さんにおいても例外なくそのような事態を迎えることとなったものの、これを契機として不適応が生じることとなり、発達障害の診断を受けることとなった。しかしながら、g さんにおいては、就職直後から精神科への通院歴があることや、h さんにおいては休職を繰り返している点などから、2 事例とも将来に予期された不適応の兆しが現れていたことが予想される。このことから、障害者雇用を選択せずに就職した発達障害者について、入職後の相談支援や職業リハビリテーションサービスの利用可能性をどのように高めていくかを検討することの重要性が示唆されたと言えるだろう。

#### (5) 事例が示唆すること

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版の実施の結果は、対象者または支援者が予想していた結果と必ずしも一致しない場合もあった。コミュニケーションの困り感や日常生活場面での非言語コミュニケーションの課題についての本人の主訴とは別に、客観的な指標を用いて特性を適切に評価することの重要性が改めて示唆されたと言える。また、検査結果から得られた情報と併せて、対象者の職業経験やストレス体験等の情報を聴取することは、検査結果の理解に役立てるのみならず、コミュニケーションの課題を整理し、どのように課題解決に取り組んでいくかの手がかりとなりうるものであった。

また、コミュニケーションの課題を始めとする“障害特性”への理解は、8 事例すべてにおいて“不適応”という予期せぬ挫折体験によっていたが、そもそも必要以上のネガティブな経験はせずとも、早期に職業リハビリテーション等の専門支援や相談支援を利用することで、障害特性の理解を穏やかに進めていくことが期待できたはずである。これら 8 事例は、通常教育を経てきたために、専門支援を早期には選択しがたかった事例であるとみることができる。

なお、8 事例中 5 事例 (a さん、d さん、e さん、f さん、g さん) については、結果フィードバックに併せて表情識別訓練セットを用いた表情の注目箇所の確認を行った (表 3-2-9)。5 事例の「表情のみ」条件における正答率の範囲は広く、コミュニケーション・タイプも多様であるものの、いずれの事例においても表情の注目箇所が目元などの特定の箇所に限定されていたり、読み取る上で必要な箇所 (例：眉間のしわ) に注目されていない等があったことから、改めて注目箇所を確認することを意図して実施したものであった。注目すべき箇所が明確に示されることで着目点が理解された点は 5 事例に共通していたが、表情をみることに前向きになる事例 (d さん) もある一方で、写真では了解可能だが実際の対人場面において表情をみること自体に不安を感じる事例 (e さん、f さん) もあったことから、訓練による表情識別の正答率の向上を目

指すだけでなく、言葉で確認する等の補完手段を検討することについて、別途検討する必要性が改めて示唆されることとなった。

他方、快-不快評定版から得られた結果の背景にあるストレスについては、職業経験によってその状態が異なる可能性が示唆された。職業経験のない事例では学校等における修学上の不適応がストレスの主な背景となっている可能性がある一方で、職業経験のある事例では職場での作業遂行上の問題や対人場面でのトラブルが背景要因として考えられた。これらのことから、快-不快評定版で他者感情の読み取りに偏りが認められた場合の背景としてストレスを検討する上で、職歴の有無等による経験の違いを考慮する必要性が示唆されたと言える。このため、検査の実施と併せて本人から可能な範囲でストレス体験について聴取しておくことは結果の解釈にとって重要となることが多いと言える。

最後に、職業経験があったとしても必ずしも職場で期待される行動や役割の理解が獲得されるわけではない事例（dさん、eさん、fさん）があったことから、発達障害者における職場での“一般的な研修”や“自己研鑽”等によるスキルの獲得の可能性について、事前に十分検討することの必要性が示唆された。その一方で、職業経歴が比較的長く一定期間職場に適應していた事例（gさん、hさん）においては、了解可能な対応方法について具体的な説明でなされたことから、本人が適應できる環境において仕事の経験がなされることでこそ、期待される行動や役割理解の獲得可能性が高まることが示唆された。

発達障害者においては、抽象的な事柄への理解や、他者の立場に立って物事を判断したり、自分自身を客観的にみること等に苦手がある者も多いことから、“体験”を伴う学習や練習・訓練のできる場面や環境を用意し、それらの環境下で障害特性の理解や自己理解を補うといった手立てを講じることが重要であることは言うまでもない。新版 F&T 感情識別検査を用いて発達障害者を評価することにより、感情識別の特性を明らかにするのみならず、それに関連するコミュニケーションの課題やストレス体験等を整理することで優先課題を特定し、職場適應に向けた活動を明確化することもまた重要な視点であると言えるだろう。

なお、ヒアリング事例は 8 事例であり、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果やコミュニケーション・タイプ、快-不快評定版の結果についての様々な特徴を網羅しているわけではない。こうしたことから、研究協力において新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版を実施した事例については、第 3 章において検査結果の解釈における留意事項として取りまとめることとした。

### 第3章 結果解釈とフィードバックのために

本章では、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版を実施した際に行ったフィードバックにおいて、結果解釈に関して把握した課題に即し、検査結果の解釈と対応のための留意事項を取りまとめる。データ収集調査及びフィードバック実施時期は平成 25 年 5 月～平成 28 年 9 月であった。

ここで取り上げるケースは、第 2 章のヒアリングを実施した 8 事例とは別に、以下に示すコミュニケーション・タイプ（今回の調査では該当者のなかった表情依存 T を除く）に分類された者である。

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版の結果を解説するポイントに焦点を当て、結果を示すこととする。

表3-3 コミュニケーション・タイプ（第Ⅱ部第2章より一部を再掲）

		音声	表情	音声+表情	人数（構成比）
①	高受信タイプ	76 %以上	76 %以上	83 %以上	25 名 (20.1%)
②	低受信タイプ	59 %以下	59 %以下	64 %以下	1 名 (0.8%)
③	相補タイプ	「音声+表情」－「音声のみ」 「音声+表情」－「表情のみ」がともに <u>15 %より大きい場合</u>			28 名 (22.6%)
④	相殺タイプ	「音声+表情」－「音声のみ」 「音声+表情」－「表情のみ」がともに <u>15 %より小さい場合</u>			1 名 (0.8%)
⑤	音声依存・Tタイプ	「音声+表情」－「表情のみ」 「音声のみ」－「表情のみ」がともに <u>15 %より大きい場合</u>  「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。			21 名 (16.9%)
⑥	音声依存・Fタイプ	「音声+表情」－「表情のみ」 「音声のみ」－「表情のみ」がともに <u>15 %より小さい場合</u>  「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は低い			1 名 (0.8%)
⑦	表情依存・Tタイプ	「音声+表情」－「音声のみ」が <u>15 %より大きく</u> 「音声のみ」－「表情のみ」が <u>15 %より小さい場合</u>  「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は低い。			0 名
⑧	表情依存・Fタイプ	「音声+表情」－「音声のみ」が <u>15 %より小さく</u> 「音声のみ」－「表情のみ」が <u>15 %より大きい場合</u>  「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。			3 名 (2.4%)
⑨	特定のタイプに分類されない	①～⑧のいずれにも分類されないタイプ			44 名 (35.5%)
全体					124 名 (100 %)

注1) 高受信・低受信の基準値は、それぞれ一般基準の平均正答率の9割以上、7割以下を目安としている。

注2) 「音声のみ」「表情のみ」条件における標準偏差の値に基づいて設定した。

#### 第1節 新版F&T感情識別検査（4感情評定版／快-不快評定版）の結果から読み取れること

##### 1. 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果読み取りのポイント

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版においては、主として以下の解釈を行うこととしている。

(1) 「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」という基本的な感情について、正確に評定することができているか

(2) 評定において、快-不快の混同があるか

快の感情（「喜び」）を不快の感情（「悲しみ」「怒り」「嫌悪」）と読み誤る傾向があるか  
不快の感情（「悲しみ」「怒り」「嫌悪」）を快の感情（「喜び」）と読み誤る傾向があるか  
なお、第Ⅱ部第2章において、発達障害者の特徴として「音声のみ」条件では、快-不快の混同は一般基準よりも多い傾向にあることが指摘されている。

(3) 評定において、不快の感情（「悲しみ」「怒り」「嫌悪」）間の混同があるか

第Ⅱ部第2章において、発達障害者の特徴として「表情のみ」条件に関しては、「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み間違ふ傾向が強い（「悲しみ」の50%以上が「怒り」または「嫌悪」と回答された）点には留意する必要があることが指摘されている。

ただし、「怒り」と「嫌悪」の混同については日常生活場面での支障が少ないと考えられることから、受信後の行動（発信）が同一であることが確認できれば正答に準ずるものとする。

(4) コミュニケーションのタイプは何に分類されるか

## 2. 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版の結果読み取りのポイント

新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版においては、主として以下の解釈を行うこととしている。

(1) 曖昧刺激に対する快-不快評定値は、一般基準より不快もしくは快の方向に偏っていないか

不快度の高い曖昧刺激（快-不快評定版 A 検査：高不快刺激への回答）と不快度の低い曖昧刺激（快-不快評定版 B 検査：低不快刺激への回答）のプロフィールは、異なるか

それぞれの検査結果は、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の条件によって、異なるか

第Ⅱ部第3章において、快-不快評定版の各呈示条件における快-不快の評定に関し、直近（3 か月以内）の主観的な経験が影響を与える可能性は低いとされた。ただし、発達障害者に関しては、「嫌悪」「恐怖」の経験頻度が定型発達者と異なる可能性があることから検査結果のフィードバックに際して留意する点である。

また、発達障害者においては日常生活におけるストレス場面への評定の高低と非言語的に表出される曖昧な感情への快-不快の評定に関して一定の関連が認められている。一般基準より不快の評定をしている場合、特定のストレスの領域・項目が示すストレスは高くないかに留意する。

(2) 評定において、快-不快の混同があるか

快感情を表現した刺激から「不快」を読み誤る傾向があるか

不快度の高い曖昧刺激（A 検査（高不快））から「快」を読み誤る傾向があるか

以下では、まずは、「音声のみ」「表情のみ」条件の評定の特徴の如何に関わらず「音声+表情」条件の正答率が高いタイプとして「高受信」「相補」、次いで、「音声のみ」「表情のみ」条件のいずれか識別力の高い条件を優先的に利用することで「音声+表情」条件の正答率が高いタイプとして「表情依存 F」「音声依存 T」、さらに「音声のみ」条件の正答率が低く「表情のみ」条件の正答率の高さを利用できないことから「音声+表情」条件の正答率が低いタイプとして「音声依存 F」、「音声のみ」「表情のみ」条件の両方の特徴を利用できないことから「音声+表情」条件の正答率が低いタイプとして「相殺」、最後に「音声のみ」「表情のみ」条件の正答率に特徴的な優位性が認められないタイプとして「低受信」「特定のタイプ

に分類されない」の順に、回答結果に即して結果解釈のポイントを示すこととする。

なお、快-不快評定版の結果については、本研究の成果として得られた「年齢区分及び性別の基準値」によるため、大学生・大学院生の基準値に基づいて暫定的に報告した先の調査研究報告書（障害者職業総合センター，2014）とは異なる評価結果となっている部分があることに注意が必要である。これは、成人の基準値（年齢区分別・男女別）による結果解釈が必要かつ妥当であったことを示している。

## 第2節 結果解釈の留意点

### 1. 高受信タイプ

「音声のみ」、「表情のみ」、「音声+表情」のいずれの条件においても正答率が高い。したがって、高受信タイプでは、対象者が「相手の感情を知ろう」とした場合には、基本的な感情であれば、言葉による状況の説明がなくとも十分に理解されている可能性が高いと言える。

ただし、高受信タイプであっても、対人関係に困難が認められる対象者がいる。

その場合、以下のような問題があるかどうかについて、検討が必要である。

- ◆ 語彙が少ない、話すのが苦手などの理由で、相手に自分の意思や気持ち・感情を適切に伝えられない
- ◆ 状況や相手の気持ちに配慮できないなどの理由で、対人関係に問題が生じる

【20代男性 診断名：広汎性発達障害（診断年齢12歳）】

#### (1) 新版F&T感情識別検査 4感情評定版

「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」条件ともに、一般基準と同等の正答率であった（表3-3-1）。

快-不快の感情間の混同については、「音声のみ」条件で「喜び」を「悲しみ」に読み誤る混同が1件認められたが、「表情のみ」「音声+表情」条件ではこうした混同は認められなかった。

また、不快感情間の混同については、「音声のみ」条件で、「怒り」と「嫌悪」の混同が認められた。また、「表情のみ」条件では、「悲しみ」を「怒り」や「嫌悪」と評定する混同、及び「怒り」と「嫌悪」の混同が認められた。ただし、「音声+表情」条件では不快感情間の混同は全く認められなかった。

コミュニケーションに際しては、「音声のみ」「表情のみ」からの他者感情の読み取りについては、若干の読み誤りがあるものの、音声と表情の両方を活用すれば、読み誤りはないと考えられる。

表 3-3-1 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情				表情		回答された感情				音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪			喜び	悲しみ	怒り	嫌悪			喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	7	1			呈示された感情	喜び	8			呈示された感情	喜び	8				
	悲しみ		8				悲しみ		6	1		1	悲しみ		8		
	怒り			6	2		怒り			7		1	怒り			8	
	嫌悪			3	5		嫌悪			3		5	嫌悪				8
	合計	7	9	9	7		合計	8	6	11		7	合計	8	8	8	8
正答率		81%				正答率		81%				正答率		100%			

(2) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版

曖昧な感情表現に関する評価のうち、A 検査（高不快）ではいずれの条件においても快-不快の偏りは見いだされなかった。これに対し、B 検査（低不快）では「音声+表情」条件で「不快」に評定する傾向が見いだされた。また、不快度の低い刺激（B 検査（低不快））については、いずれの条件においても不快度の高い刺激（A 検査（高不快））に比べて、より不快に読み取る傾向があり、特に「音声+表情」条件で顕著であった。

こうしたことから、「音声+表情」条件では不快度の低い曖昧なメッセージに対し「相手の感情をより深刻に受け取る」構えを持っている可能性が示唆される（図 3-3-1）。

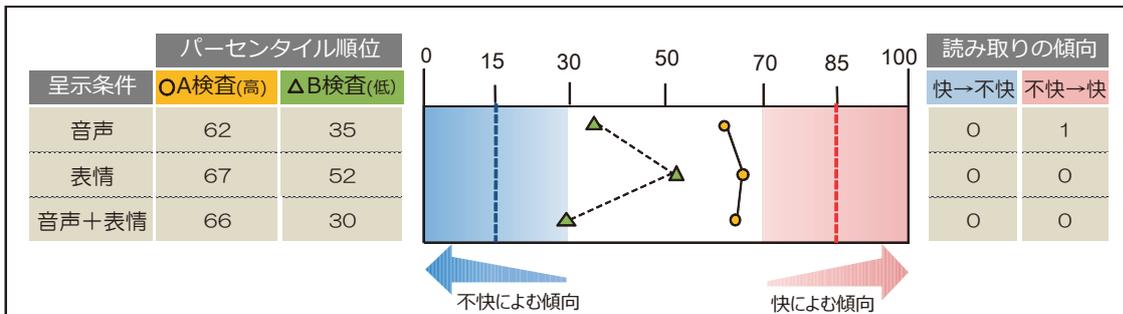


図 3-3-1 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

(3) 結果解釈のポイント

4 感情評定版の「音声のみ」「表情のみ」条件において発生していた「怒り」と「嫌悪」の混同については、正答に準ずるものと考えれば、読み誤りがあっても日常生活場面での支障が少ないと考えられることから、ほとんど問題にならないことになる。

このための確認として、「相手が怒っていると感じたときにどう対応するか」「相手が嫌な感情を持っていると感じたときどう対応するか」について回答を求めたところ、こうした場面を想定することに困難があり、「人とつきあうこと自体がないので考えたこともない」といった認識であることが明らかとなった。

相手の不快感情の理解（受信）と対応（発信）は関連づけて初めて対人関係が円滑に行われることになる。音声と表情の両方を活用した場合の正答率が 100 %である特徴とは別に、他者感情を把握した後の対応の考え方や行動化については、別途、こうした結果を踏まえた支援が計画される必要がある。

また、快-不快評定版の結果について、対人ストレスが高いなどの理由で、悲観的・自己否定的にとらえすぎる（「音声+表情」条件）ことで対人トラブルなどが生じていないかなど、検討事項が示唆された。ストレスの高い経験について検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

4 感情評定版でも快-不快評定版でも、「音声のみ」条件において快-不快の混同がみられた。電話応対等の経験を踏まえた検討を行う必要がある。

2. 相補タイプ

「音声のみ」、「表情のみ」の単独の情報では正答率が低いものの、両者の情報を相互補完的に利用することで、全体的な正答率が高まる。

この対象者は、会話をする際、音声、表情の両情報が利用できるように相手と向かい合う位置につくことが望ましい。

また、このタイプの対象者の場合、「音声のみ」と「表情のみ」において、それぞれ異なった回答傾向を一貫して持っている可能性がある。したがって、コミュニケーションに際しては、対象者の条件ごとの混同の特徴をよく把握しておく必要がある。

【 50 代女性 診断名：広汎性発達障害（診断年齢 53 歳）】

(1) 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「音声のみ」「表情のみ」条件の正答率は低いが、「音声+表情」条件では一般基準と同等の正答率であった（表 3-3-2）。

快-不快の感情間の混同については、「音声のみ」条件で「喜び」を「嫌悪」と読み誤る混同が認められたが、「表情のみ」「音声+表情」条件ではこうした混同は認められなかった。

また、不快感情間の混同において、「音声のみ」「表情のみ」条件では「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の混同が認められた。ただし、「音声+表情」条件では「悲しみ」を「嫌悪」と、また、「嫌悪」を「怒り」と読み誤る混同に限定されていた。

コミュニケーションに際しては、「音声のみ」「表情のみ」からの他者感情の読み取りについては、読み誤りがあるものの、音声と表情の両方を活用すれば、読み誤りは少なくなると考えられる。

表 3-3-2 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

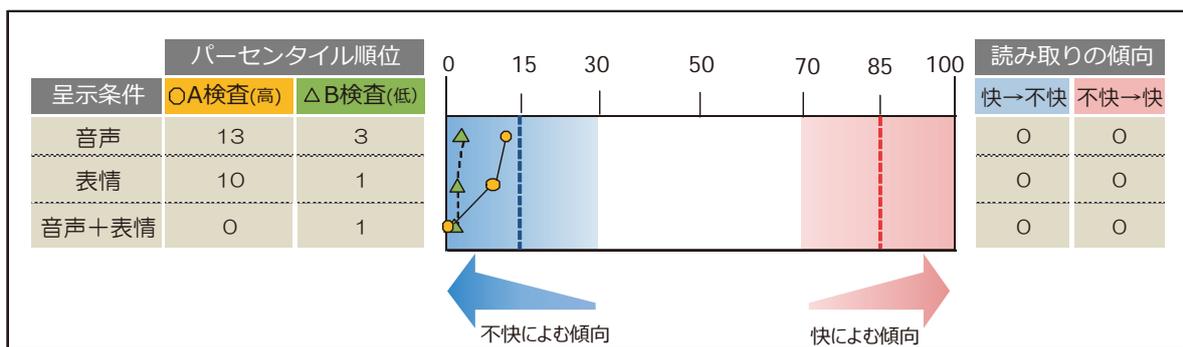
音声		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	6			2
	悲しみ		3		4
	怒り			8	
	嫌悪		1	2	5
	合計	6	4	10	11
		正答率 69%			

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		5		3
	怒り		2	5	1
	嫌悪			5	3
	合計	8	7	10	7
		正答率 66%			

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		6		2
	怒り			8	
	嫌悪			3	5
	合計	8	6	11	7
		正答率 84%			

(2) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版

曖昧な感情表現に関する評価では、A 検査（高不快）・B 検査（低不快）ともに、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、全体的に「不快」に評定する傾向が強い（図 3-3-2）。



また、A 検査（高不快）と B 検査（低不快）の回答傾向に、大きな違いは見いだされなかった。

こうしたことから、いずれの呈示条件においても、また、A 検査（高不快）、B 検査（低不快）にかかわらず曖昧なメッセージに対しては「相手の感情をより深刻に受け取る」構えを持っている可能性が示唆される。

(3) 結果解釈のポイント

4 感情評定版の結果は、いずれの呈示条件においても「95 %は正解していると思った」という本人の予想を大きく下回った。日常生活では他者感情の識別について、ほとんど問題を感じていなかったとみることができる。ここで注目すべきは、「怒りと嫌悪は一括の感情であり、日常、区別しない」という発言である。「怒り」と「嫌悪」を受信した際の対応が共通、かつ、適切であれば、両感情の識別に混同があっても生活上の困難は少ないとみてよいとしてきた。こうした日常的な対応は、生活経験の長さに関連している可能性があるだろう。

ただし、感情語の快-不快評定では「悲しみ」も「怒り」も「嫌悪」も最も不快度の高いレベルに評定しており、不快感情全体について区別していない可能性がある。

また快-不快評定版の結果について、対人ストレスが高いなどの理由で、悲観的・自己否定的にとらえずぎるなどが生じている可能性が示唆された。

日常的に「不快度」の高い状況がある可能性があり、その背景にあるストレスの高い経験などについて検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要があると言える。

【 2-2 30代男性 診断名：注意欠陥多動性障害（ADHD）（診断年齢 35 歳） 】

(1) 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「音声のみ」「表情のみ」条件の正答率は極めて低いが、「音声+表情」条件の正答率はやや低い（表 3-3-3）。

表 3-3-3 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	6			1
	悲しみ		4		4
	怒り	2		4	2
	嫌悪	4	2		2
	合計	12	6	4	9
正答率		50%			

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ			1	7
	怒り			6	2
	嫌悪			5	3
	合計	8	0	12	12
正答率		53%			

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		5		3
	怒り			7	1
	嫌悪			2	6
	合計	8	5	9	10
正答率		81%			

快-不快の感情間の混同については、「音声のみ」条件で著しい快-不快の混同が認められており、「喜び」を「嫌悪」と、「怒り」や「嫌悪」を「喜び」と、それぞれ読み誤っていた。しかし、「表情のみ」「音声+表情」条件では、快-不快の混同は認められなかった。

また「不快感情間の混同」において、「音声のみ」「表情のみ」条件では「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の間に混同が認められた。ただし、「音声+表情」条件では「悲しみ」を「嫌悪」と読み誤る混同の他に、「嫌悪」と「怒り」の間に双方向性の混同はあるものの、不快感情内の正答率は3条件内で最も高かった。

なお、「表情のみ」条件では「悲しみ」が1件も選択されなかった。

コミュニケーションに際しては、「音声のみ」「表情のみ」からの他者感情の読み取りについては、読み誤りが極めて多い。ただし、音声と表情の両方を活用すれば、読み誤りは少なくなると考えられる。

(2) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版

曖昧な感情表現に関する評価のうち、A 検査 (高不快) では「音声のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、「不快」に評定する傾向が強く、また、B 検査 (低不快) では「音声のみ」条件で「不快」に評定する傾向が強い (図 3-3-3)。

A 検査 (高不快) と B 検査 (低不快) では、「音声のみ」「表情のみ」条件の回答傾向に違いは見いだされなかったが、「音声+表情」条件では A 検査 (高不快) の方がより不快に読み取る傾向が強かった。

こうしたことから、不快度の高い曖昧なメッセージに対しては、「音声のみ」「音声+表情」の条件で「相手の感情をより深刻に受け取る」構えを持っている可能性が示唆される。

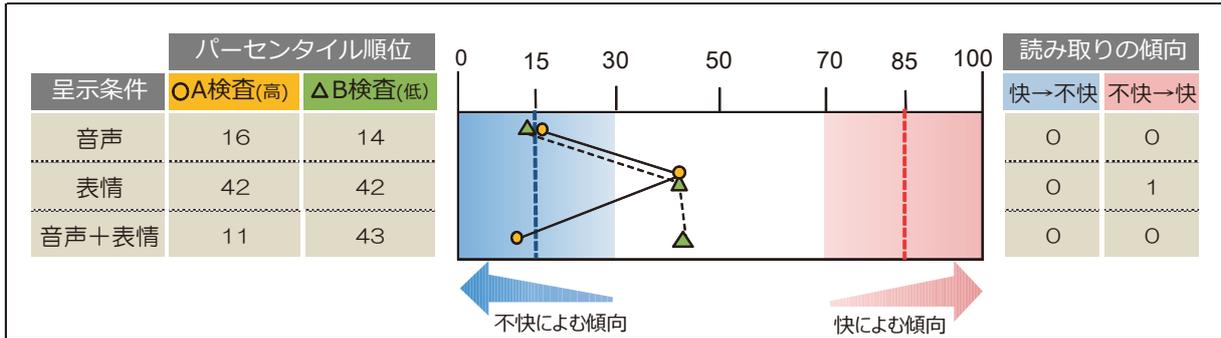


図 3-3-3 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

(3) 結果解釈のポイント

4 感情評定版の結果からは、特に「音声」だけが手がかりとなる場面で可能であれば「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動の必要性が示唆される。また、他者感情の識別に関しては、音声と表情の両方に注目すること、そのためには、相手と向かい合って情報を得ること（支援者は向かい合って伝えること）も留意事項となる。

また、快-不快評定版の結果について、「音声」がある場合（「音声のみ」「音声+表情」のいずれかの条件）には対人ストレスが高いなどの理由で、悲観的・自己否定的にとらえすぎるなどが生じている可能性が示唆された。日常的に「不快度」の高い状況やストレスの高い経験があるか、どのような場面かなどについて検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

なお、回答時の行動観察によれば、正解の回答にも時間がかかっていた。正解に対しては即時フィードバックによる強化が効果的である可能性があること、さらに、表情識別の際の注目箇所について訓練等を行うことなどで自信を持つことができる可能性があることなどに留意する必要がある。

3. 表情依存 F タイプ

「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、双方を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。また、その回答の傾向は「表情のみ」と類似していることも多い。

このタイプは、表情から他者の感情を識別することに優れているため、支援者が誉めたり、注意するとき、その時々感情に対応する表情で、対象者には「顔をよくみるように」伝え、その後、嬉しそうな声、あるいは、怒った声で、それぞれ、「いま、とても嬉しいです」あるいは「いま、とても怒っています」などと言葉で伝えることが効果的である。このように、音声と言葉とを一致させ、さらには、表情を一致させることで、「この表情の時は、この音声」という組み合わせを示して支援することが重要である。

【 20 代男性 診断名：アスペルガー症候群（診断年齢 20 歳）】

(1) 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「音声のみ」条件の正答率は低いが、「表情のみ」「音声+表情」条件の正答率は、一般基準と同等である（表 3-3-4）。

快-不快の感情間の混同については、「音声のみ」条件で著しい混同が認められており、「怒り」「悲しみ」「嫌悪」を「喜び」と読み誤る特徴が認められたが、「表情のみ」「音声+表情」条件ではこうした混同は認められなかった。

また、不快感情間の混同において、「音声のみ」「表情のみ」条件では若干の混同が認められた。ただし、「音声+表情」条件では「悲しみ」を「嫌悪」と読み誤る混同のみであった。

表 3-3-4 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ	1	7		
	怒り	1		7	
	嫌悪	3		3	2
	合計	13	7	10	2
		正答率 75%			

		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		6	1	1
	怒り			7	1
	嫌悪				8
	合計	8	6	8	10
		正答率 91%			

		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		6		2
	怒り			8	
	嫌悪				8
	合計	8	6	8	10
		正答率 94%			

コミュニケーションに際しては、「表情のみ」条件の正答率が高いだけでなく、「音声」と「表情」の双方の情報が利用できる場合に、識別力の高い「表情のみ」条件を利用している可能性が高いと考えられる。

(2) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版

曖昧な感情表現に関する評価では、A 検査（高不快）・B 検査（低不快）ともに、全体的に「快」に読む傾向がある（図 3-3-4）。

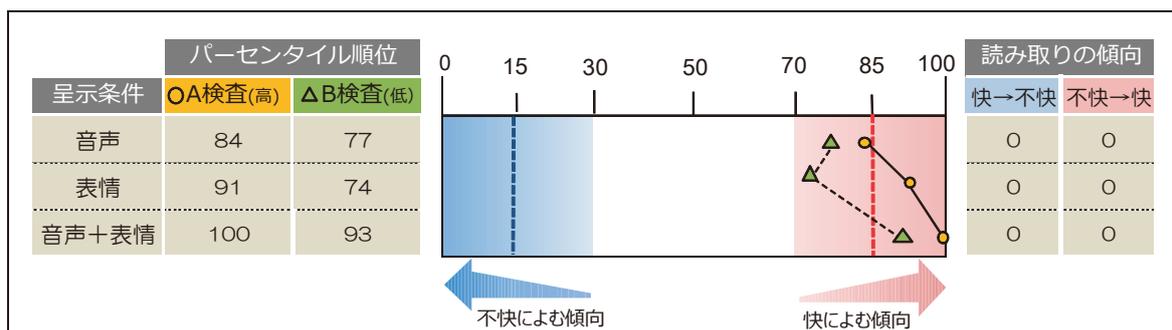


図 3-3-4 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

このうち、A 検査（高不快）では「表情のみ」「音声+表情」条件で、また、B 検査（低不快）では「音声+表情」条件で、「快」に評定する傾向が強い。ただし、「表情のみ」条件以外では、A 検査（高不快）と B 検査（低不快）の回答傾向に、大きな違いは見いだされなかった。

こうしたことから、いずれの呈示条件においても、また、不快度の高低にかかわらず曖昧なメッセージに対しては「相手の感情をより楽観的に受け取る」構えを持っている可能性が示唆される。

(3) 結果解釈のポイント

4 感情評定版の結果からは、特に「音声」だけが手がかりとなる場面では、可能であれば「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動の必要性が示唆される。また、他者感情の識別に関しては、表情に注目すること、そして、そのためには相手と向かい合って情報を得ること（支援者は向かい合って伝えること）も留意事項となる。さらには、音声（音調）と言葉と表情を一致させた情報提供及び経験場面の提供の必要性についても検討事項となろう。

一方、快-不快評定版の結果からは、曖昧なメッセージを楽観的・自己肯定的にとらえすぎるなどで対人トラブルが生じていないかどうかについて検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

こうした特徴は、例えば、訓練室で作業中、訓練参加者の一人が混乱状態に陥って大声を上げ、彼以外の参加者全員が驚いて総立ちになったにもかかわらず、彼は平然として作業を続けていたことに現れている。混乱は彼の背後で起こったために、表情はみえない位置におり、音調からは切迫した状況を察知できなかったと言える。他の利用者に関心がないなどの関係性の課題も検討事項ではあるが、検査結果を踏まえると、楽観的にとらえすぎるといった構えを含め、相談支援の課題に別の視点が浮かび上がる場合もあると言えるだろう。

4. 音声依存 T タイプ

「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、双方を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は高い。また、その回答の傾向は「音声のみ」と類似していることも多い。

このタイプでは、支援者は、日常生活においても誉めたり、注意するときに、嬉しそうな声、または、怒った声で、それぞれ、「いま、とてもうれしいです」あるいは「いま、とても怒っています」と言葉にして伝え、その後、それぞれの感情に対応する表情を対象者に示し、「この音声の時は、この表情」という組み合わせを示して支援することが効果的である。

【20代男性 診断名：アスペルガー症候群（診断年齢 23 歳）】

(1) 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「音声のみ」「音声+表情」条件の正答率はやや低いが、「表情のみ」条件の正答率は極めて低い（表 3-3-5）。

表 3-3-5 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	7			1
	悲しみ		6		2
	怒り			8	
	嫌悪	1	2	3	2
	合計	8	8	11	5
正答率		72%			

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		1	1	6
	怒り		1	6	1
	嫌悪			7	1
	合計	8	2	14	8
正答率		50%			

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ	1	3		4
	怒り			8	
	嫌悪			2	6
	合計	9	3	10	10
正答率		78%			

快-不快の感情間の混同については、「音声のみ」条件で「喜び」と「嫌悪」の間に双方向性の混同が、

「音声+表情」条件では「悲しみ」を「喜び」と読み誤る混同が認められたが、「表情のみ」条件ではこうした混同は認められなかった。

また、不快感情間の混同において、「音声のみ」「表情のみ」条件では、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の間に混同が認められた。ただし、「音声+表情」条件では「悲しみ」を「嫌悪」と、「嫌悪」を「怒り」と読み誤る混同に限定されていた。なお、「表情のみ」条件では「悲しみ」が極めて少なく、「怒り」が多いという特徴が認められた点は注意を要する。

コミュニケーションに際しては、「表情のみ」からの他者感情の読み取りについては、読み誤りが極めて多い。ただし、音声を活用すれば、読み誤りは少なくなると考えられる。

## (2) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版

曖昧な感情表現に関する評価では、A 検査 (高不快)・B 検査 (低不快) のいずれにおいても「音声+表情」条件で「不快」に評定する傾向があり、さらに、B 検査 (低不快) では「音声のみ」条件で「不快」に評定する傾向が強い (図 3-3-5)。

こうしたことから、特に、「音声+表情」条件において、不快度の高低にかかわらず曖昧なメッセージに対しては「相手の感情をより深刻に受け取る」傾向を持っている可能性が示唆される。また、「音声のみ」条件では、不快度の低い刺激 (B 検査 (低不快)) については不快度の高い刺激 (A 検査 (高不快)) に比べて、より不快に読み取る傾向が著しく強い。

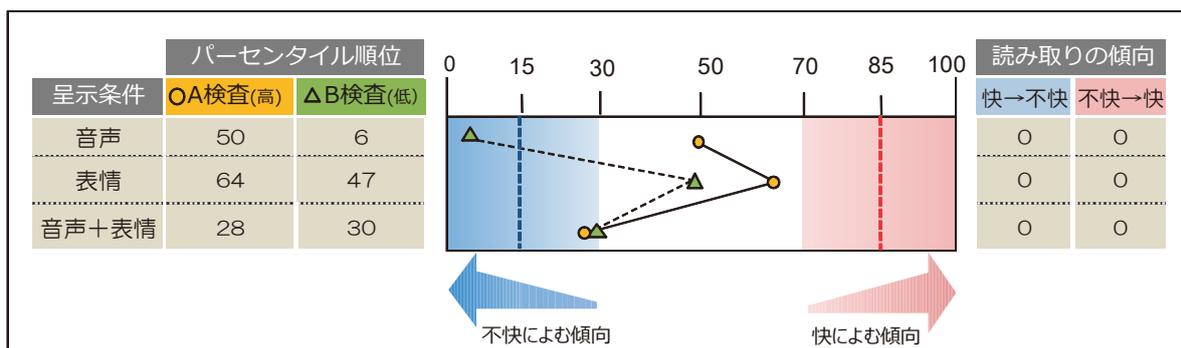


図 3-3-5 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

## (3) 結果解釈のポイント

4 感情評定版の結果からは、特に「表情」に注目する場面では、「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動の必要性が示唆される。また、他者感情の識別に関しては、音声に注意を向けることもまた留意事項となる。ただし、「音声の回答が一番難しかった」という発言があり、日常的に「悲しみ」と「嫌悪」は分かりにくいと感じていることも明らかとなった。加えて、音声に注意を向けた場合、曖昧な感情表現に対しては「相手の感情をより深刻に受け取る」傾向があることにも注意が必要となる。

また、快-不快評定版の結果について、より不快度の低い曖昧なメッセージを悲観的・自己否定的にとらえることが生じる可能性が示唆された。背景にストレスの高い、または、高すぎる経験がないかどうかについて検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

さらに、表情識別の際の注目箇所について訓練等を行うこと、その際、表情と音声 (音調) を対応させながら確認するように配慮することなどで、回答に自信を持つことができる可能性がある。回答傾向の特徴を踏まえた対応についても支援の課題として検討することが必要であると言える。

【20代男性 診断名：注意欠陥多動性障害（ADHD）（診断年齢 26 歳）】

(1) 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「音声のみ」条件の正答率は一般基準と同等であったが、「表情のみ」条件の正答率が低い。これに対し、「音声+表情」条件の正答率はやや低い（表 3-3-6）。

快-不快の感情間の混同については、「音声のみ」条件では「喜び」のタイムオーバーが 2 件、「表情のみ」条件では「喜び」と「嫌悪」の間に双方向性の混同、及び「喜び」を「怒り」と読み誤る混同が認められた。さらに、「音声+表情」条件では「喜び」と「嫌悪」の間に双方向性の混同、及び「悲しみ」を「喜び」と読み誤る混同が、それぞれ認められた。

また、不快感情間の混同では、いずれの条件においても「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の間に混同が認められた。

コミュニケーションに際しては、「表情のみ」からの他者感情の読み誤りが多い点について、音声を活用すれば、読み誤りは少なくなると考えられるが、快-不快の混同が「音声+表情」条件に多いという特徴については注意が必要である。

表 3-3-6 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	6			
	悲しみ		6		1
	怒り			8	
	嫌悪			2	6
	合計	6	6	10	7
正答率		81%			

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	6		1	1
	悲しみ		4	3	1
	怒り		2	4	2
	嫌悪	1		1	6
	合計	7	6	9	10
正答率		63%			

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	6			2
	悲しみ	1	6		1
	怒り			8	
	嫌悪	1	1	1	5
	合計	8	7	9	8
正答率		78%			

(2) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版

曖昧な感情表現に関する評価のうち、A 検査（高不快）では「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、「快」に評定する傾向が強く、B 検査（低不快）では「表情のみ」条件で「快」に評定する傾向が強い（図 3-3-6）。

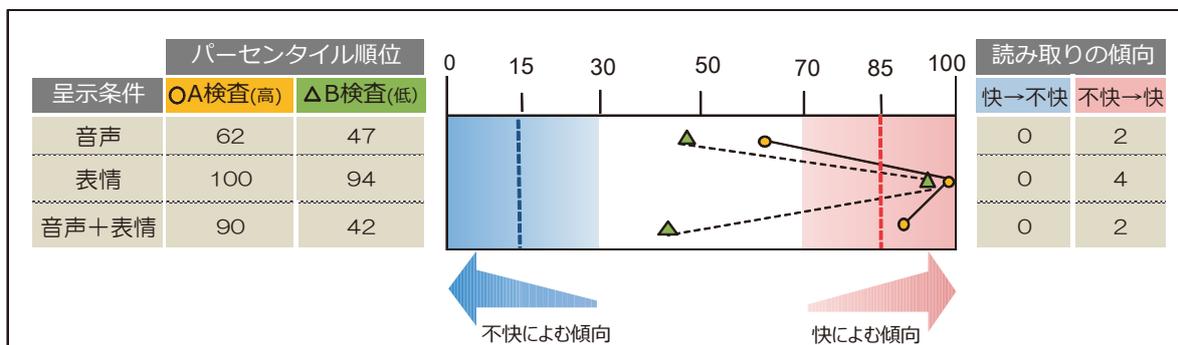


図 3-3-6 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

A 検査（高不快）と B 検査（低不快）では、「表情のみ」条件の回答傾向に違いは見いだされなかったが、「音声+表情」条件では、不快度の高い刺激（A 検査（高不快））について、不快度の低い刺激（B 検査（低不快））に比べて、快に読み取る傾向があり、「音声+表情」条件では A 検査（高不快）の方がよりこうした傾向

が強かった。

こうしたことから、不快度の高い曖昧なメッセージに対しては、「表情のみ」「音声+表情」の条件で「相手の感情をより楽観的に受け取る」構えを持っている可能性が示唆される。

### (3) 結果解釈のポイント

4 感情評定版の結果からは、特に「表情」に注目する場面では「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動の必要性が示唆される。また、他者感情の識別に関しては、「音声」に注意を向けることもまた留意事項となる。ただし、音声と表情を活用したとしても快-不快の混同が解消されない点に特徴がある。

一方、快-不快評定版の結果からは、曖昧なメッセージを楽観的・自己肯定的にとらえすぎるなどで対人トラブルが生じていないか、また、背景に感情の読み誤りに特徴的な傾向がないかどうかを検討する必要性が示唆されており、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

加えて、4 感情評定版でも快-不快評定版でも、呈示条件にかかわらず快-不快の混同がみられていることを考慮すれば、電話対応や対人関係のトラブルの経験等の状況についても検討する必要もあるだろう。

なお、「怒り」と「嫌悪」は類似の感情であるが、「嫌悪」は“ため込む”ので不快であるが、“怒り”は“爆発させる”ので快」といった理解をしており、感情と感情語について、独特の対応があると考えられる。こうしたことから、曖昧な感情表現に対しては「相手の感情をより深刻に受け取る」傾向はないとする解釈にも注意が必要となる。

さらに、表情識別の際の注目箇所について訓練等を行うこと、その際、表情と音声（音調）を対応させながら確認するように配慮することなどで、回答に自信を持つことができる可能性がある。こうした回答傾向の特徴を踏まえた支援の課題について検討することが必要である。その上で、「言語で表現する」などを事業所の配慮事項として調整する必要があるかどうかについて検討することも必要となる。

## 【20代男性 診断名：アスペルガー症候群（診断年齢 27歳）】

### (1) 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「音声のみ」「音声+表情」条件の正答率は一般基準と同等であったが、「表情のみ」条件の正答率がやや低い（表 3-3-7）。

表 3-3-7 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

		音声	回答された感情						表情	回答された感情						音声+表情	回答された感情						
			喜び	悲しみ	怒り	嫌悪				喜び	悲しみ	怒り	嫌悪				喜び	悲しみ	怒り	嫌悪			
呈示された感情	喜び		8						8							8							
	悲しみ			8						4	1	3					7		1				
	怒り		2		6						8							7	1				
	嫌悪			1		7					4	4						1	7				
	合計		10	9	6	7				8	4	13	7			8	7	8	9				
		正答率		91%						正答率		75%						正答率		91%			

快-不快の感情間の混同については、「音声のみ」条件で「怒り」を「喜び」と読み誤る混同が認められた。しかし、「表情のみ」「音声+表情」条件では快-不快の感情間の混同は、認められなかった。

また、不快感情間の混同では、「音声のみ」条件で「嫌悪」を「悲しみ」と読み誤る混同が認められた。加えて、「表情のみ」「音声+表情」条件では「悲しみ」を「怒り」「嫌悪」と読み誤る混同が、さらには、

「怒り」と「嫌悪」の間の双方向性の混同が認められた。

コミュニケーションに際しては、「表情のみ」からの他者感情の読み誤りが多い点について、音声を活用すれば、読み誤りは少なくなると考えられる。

(2) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版

曖昧な感情表現に関する評価のうち、A 検査 (高不快)・B 検査 (低不快) とともに、いずれの条件においても快-不快の偏りは見いだされなかった。また、「音声のみ」条件以外では、A 検査 (高不快) と B 検査 (低不快) の回答傾向に大きな違いは見いだされなかった (図 3-3-7)。

こうしたことから、「相手の感情をより深刻に受け取る」可能性や「楽観的に受け取る」可能性などの特徴は見いだされていない。

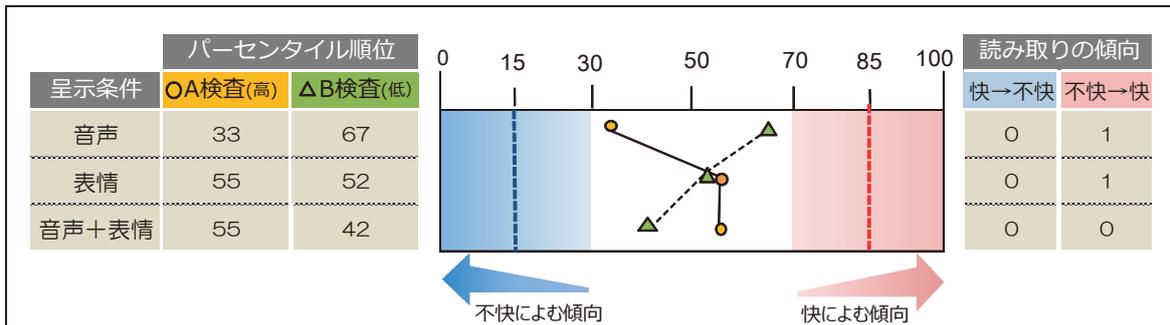


図 3-3-7 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

(3) 結果解釈のポイント

4 感情評定版の結果からは、他者感情の識別に関し、「音声」を手がかりにすれば読み誤りは少ないと考えられる。ただし、会社勤めを継続できなかった背景の一つに「怒られているのに対応が悪い。注意されていることへの深刻さがない。へらへらしている」などの指摘があった。他者感情を正確に読み取れているにもかかわらず、その後の対応が適切ではないといった問題については、支援が必要となる可能性が高い。

このため、感情を受信した後の行動について、「相手が怒っていると感じたときにどう対応するか」「相手が嫌な感情を持っていると感じたときどう対応するか」について回答を求めたところ、「怒り」に対して「スルーする」、「嫌悪」に対しては「逃げる」といった行動をとっていることが明らかとなった。

相手の不快感情の理解と対応は、関連づけて初めて、対人関係が円滑に行われる。音声と表情の両方を活用した場合の正答率が高いという特徴とは別に、他者感情を把握した後の対応に関する考え方や行動化については、別途、こうした結果を踏まえた支援が計画される必要がある。

なお、快-不快評定版の結果については、評定に関する特徴的な傾向は見いだされなかった。しかし、4感情評定版でも快-不快評定版でも、「不快 → 快」の方向の混同がみられたことを考慮すれば、電話応対や対人関係のトラブルの経験等の状況についても検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

5. 音声依存 F タイプ

「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、双方を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は低い。また、その回答の傾向は「音声のみ」と類似していることも多い。

しかし、「表情のみ」の正答率が良くとも、音声からの情報を主たる情報源として利用するという対象者

の傾向のために、全体として正答率が低く抑えられている可能性がある。したがって、支援者が誉めたり、注意するときに、必ず、対象者と向かい合い、その時々感情に対応する表情を示して、顔をよくみるように伝え、表情を手がかりに感情を読み取るようにさせることが重要である。

このタイプでは、支援者は、日常生活においても誉めたり、注意するときに、嬉しそうな声、または、怒った声で、それぞれ、「いま、とてもうれしいです」あるいは「いま、とても怒っています」と言葉にして伝え、その後、それぞれの感情に対応する表情を対象者に示し、「この音声の時は、この表情」という組み合わせを示して支援することが効果的である。

【 10代女性 診断名：広汎性発達障害（診断年齢 12 歳）】

(1) 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「表情のみ」条件の正答率は一般基準と同等であったが、「音声のみ」「音声+表情」条件の正答率が低い(表 3-3-8)。

快-不快の感情間の混同については、「音声のみ」条件で「喜び」を「悲しみ」や「嫌悪」と読み誤る混同が認められた。しかし、「表情のみ」「音声+表情」条件では快-不快の感情間の混同は、認められなかった。

また、不快感情間の混同では、「音声のみ」条件で「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の間の混同が認められた。また、「表情のみ」条件では「悲しみ」を「嫌悪」と読み誤る混同、「嫌悪」を「怒り」と読み誤る混同が認められた。さらには、「音声+表情」条件で「嫌悪」を「悲しみ」と読み誤る混同、「怒り」と「嫌悪」の間の双方向性の混同が認められた。

表 3-3-8 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情				表情		回答された感情				音声+表情		回答された感情				
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪			喜び	悲しみ	怒り	嫌悪			喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	
呈示された感情	喜び	5	2		1	呈示された感情	喜び	8				呈示された感情	喜び	8				
	悲しみ		6	1	1		悲しみ		7		1		悲しみ		8			
	怒り			5	3		怒り			8			怒り			3	5	
	嫌悪		1	1	6		嫌悪			2	6		嫌悪		1	2	5	
	合計	5	9	7	11		合計	8	7	10	7		合計	8	9	5	10	
正答率		69%				正答率		91%				正答率		75%				

コミュニケーションに際しては、「表情のみ」条件からの他者感情の読み誤りが少ない特徴があっても、表情からの情報を十分に活用できないことで、読み誤りが解消されないと考えられる。

(2) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版

曖昧な感情表現に関する評価のうち、A 検査 (高不快) では「音声のみ」条件で「不快」に評定する傾向があり、B 検査 (低不快) では「音声のみ」条件で「不快」に評定する傾向が強い (図 3-3-8)。また、「音声のみ」条件では、不快度の低い刺激 (B 検査 (低不快)) については不快度の高い刺激 (A 検査 (高不快)) に比べて、より不快に読み取る傾向がある。ただし、「表情のみ」「音声+表情」条件については特徴的な評定の偏りはなく、また、A 検査 (高不快) と B 検査 (低不快) の回答傾向に、大きな違いは見いだされなかった。

こうしたことから、特に、「音声のみ」条件において、不快度の高低にかかわらず曖昧なメッセージに対しては「相手の感情をより深刻に受け取る」構えを持っている可能性が示唆される。

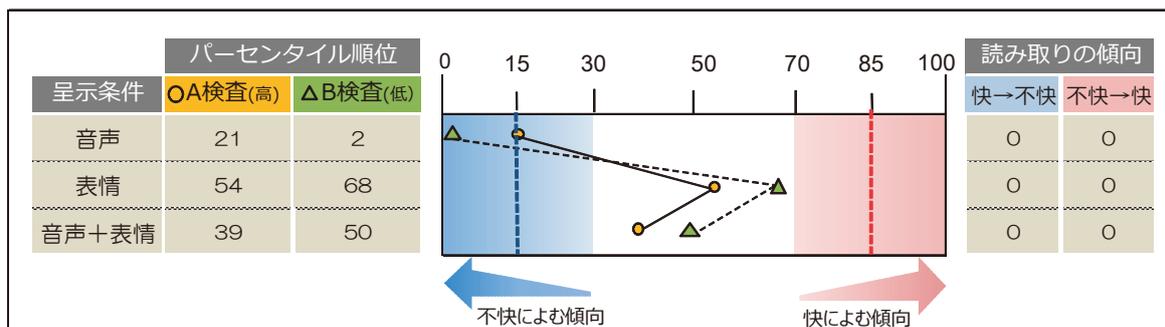


図 3-3-8 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

### (3) 結果解釈のポイント

4 感情評定版の結果からは、特に「音声」だけが手がかりとなる場面では、可能であれば「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動の必要性が示唆される。また、他者感情の識別に関しては、表情に注目すること、そのためには、相手と向かい合っただけで情報を得ること（支援者は向かい合っただけで伝えること）も留意事項となる。さらには、音声（音調）と言葉と表情を一致させた情報提供及び経験場面の提供の必要性についても検討事項となる。

「表情」を手がかりにすれば快-不快の混同が解消されることが期待できるが、その場合でも「怒り」と「嫌悪」の間の混同は解消されない。ただし、「怒り」と「嫌悪」の混同については、日常生活場面での支障が少ないと考えられることから、正答に準ずるものと考えれば、読み誤りがあってもほとんど問題にならない。このための確認として、「相手が怒っていると感じたときにどう対応するか」「相手が嫌な感情を持っていると感じたときにどう対応するか」について回答を求めたところ、それぞれ、「怒り」に対して「怒り返す」、「嫌悪」に対しては「家に帰って布団をかぶる」といった行動をとることが多いことが明らかとなった。

相手の不快感情の理解と対応は、関連づけて初めて、対人関係が円滑に行われることになる。音声と表情の両方を活用した場合の正答率が高いという特徴とは別に、他者感情を把握した後の対応の考え方や行動化については、別途、こうした結果を踏まえた支援が計画される必要がある。

また、快-不快評定版の結果について、「音声のみ」条件におけるより不快度の低い曖昧なメッセージを悲観的・自己否定的にとらえることが生じる可能性が示唆された。背景にストレスの高い、または、高すぎる経験がないかどうかについて検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

## 6. 相殺タイプ

「音声のみ」「表情のみ」の正答率が高いにも関わらず、双方の情報を利用可能な「音声+表情」で正答率が低い。

このタイプは、「音声のみ」と「表情のみ」において、それぞれ異なった回答傾向を一貫して持っている対象者の中に稀にみられる。例えば、「音声のみ」では、「嫌悪」を「悲しみ」と誤る傾向にあり、「表情のみ」では、「悲しみ」を「嫌悪」と誤る傾向にある対象者が、「音声+表情」において、それぞれの誤りを修正できず、混同の傾向がさらに増えるといった場合である。

したがって、コミュニケーションに際しては、条件ごとの混同の特徴をよく把握しておく必要がある。

【 20 代男性 診断名：自閉症（診断年齢 3 歳）】

(1) 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「音声のみ」「表情のみ」条件の正答率は、一般基準と比較して“やや低い”レベルであるのに対し、「音声+表情」条件の正答率は極めて低い（表 3-3-9）。

表 3-3-9 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	4	3		
	悲しみ	1	7		
	怒り			8	
	嫌悪		1	1	5
	合計	5	11	9	5
		正答率	75%		

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	7			1
	悲しみ		5		2
	怒り		1	5	2
	嫌悪			3	5
	合計	7	6	8	10
		正答率	69%		

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	3			5
	悲しみ		4	1	3
	怒り			8	
	嫌悪		1	7	
	合計	3	5	16	8
		正答率	47%		

快-不快の感情間の混同については、「音声のみ」条件で「喜び」と「悲しみ」の間の双方向性の混同が著しかった。また、「表情のみ」条件では「喜び」を「嫌悪」と読み誤る混同が認められた。これに対し、「音声+表情」条件では、「喜び」を「嫌悪」と読み誤る著しい混同が認められた。

不快感情間の混同では、「音声のみ」条件で「嫌悪」を「悲しみ」「怒り」と読み誤る混同が認められた。「表情のみ」条件では「悲しみ」を「嫌悪」と、「怒り」を「悲しみ」と読み誤る混同の他に、「嫌悪」と「怒り」の間の双方向性の混同が認められた。さらに「音声+表情」条件では「悲しみ」を「怒り」「嫌悪」と読み誤る混同、「嫌悪」を「悲しみ」「怒り」と読み誤る混同が認められており、混同の傾向は条件によって異なっていた。

コミュニケーションに際しては、「音声のみ」「表情のみ」からの他者感情の読み取りの情報を十分に活用できないこと、両条件の読み誤りが相乗した結果、混乱が大きくなったと考えられる。

(2) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版

曖昧な感情表現に関する評価のうち、A 検査（高不快）では「音声のみ」条件で「不快」に評定する傾向があり、「音声+表情」条件では「不快」に評定する傾向が強い。また、B 検査（低不快）では「音声のみ」条件で「不快」に評定する傾向が強く、「音声+表情」条件では「不快」に評定する傾向がある（図 3-3-9）。一方、「表情のみ」条件では A 検査（高不快）・B 検査（低不快）ともに特徴的な評定の偏りは見いだされない。

また、「音声のみ」条件では、不快度の低い刺激（B 検査（低不快））については不快度の高い刺激（A 検査（高不快））に比べて、より不快に読み取る傾向が強い。ただし、「表情のみ」「音声+表情」条件については A 検査（高不快）と B 検査（低不快）の回答傾向に、大きな違いは見いだされなかった。

こうしたことから、「音声のみ」「音声+表情」条件において、不快度の高低にかかわらず曖昧なメッセージに対しては「相手の感情をより深刻に受け取る」構えを持っている可能性が示唆される。

さらに、快-不快評定版でも快-不快の混同は著しく、特に「音声のみ」「表情のみ」条件で「快→不快」の読み誤りが顕著である。

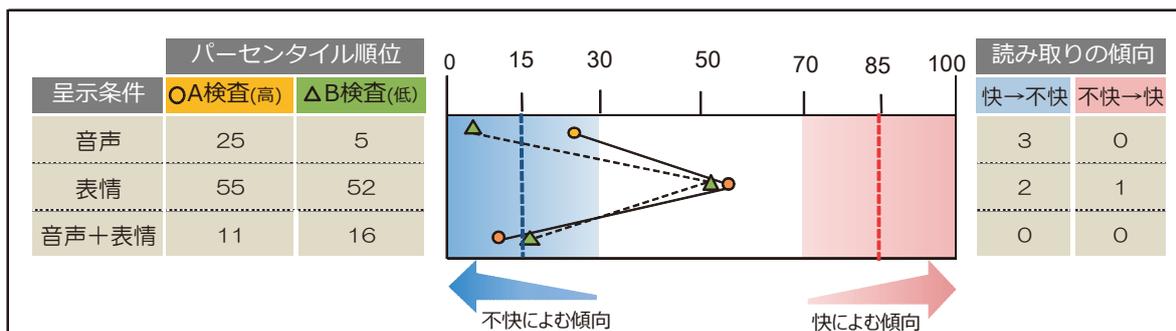


図 3-3-9 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

### (3) 結果解釈のポイント

4 感情評定版の結果からは、他者感情の識別に関し、音声からも表情からも情報を十分に活用できないことから、他者感情の識別に関しては支援が必要となる可能性が高い。「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動に加えて、回答傾向の特徴を踏まえた対応についても支援の課題として検討することが必要である。その上で、「言語で表現する」などを事業所の配慮事項として調整する必要があるかどうかについて検討することも必要となる。

また、快-不快評定版の結果について、「音声のみ」条件におけるより不快度の低い曖昧なメッセージを悲観的・自己否定的にとらえることが生じる可能性が示唆された。背景にストレスの高い、または、高すぎる経験がないかどうかについても検討することが必要と言える。

ただし、「人の表情をみたり、声を聞いたりするのは疲れる」「声を聞くときに雑音があると気をとられる」「電話は苦手」「クリアな(明確な)声は“喜び”でもしんどい、“怒り”も同じ」といった経験があり、音に対する感覚過敏との関連を分析する必要がある。

その上で、他者感情を受信することについては、補完行動の提案や環境調整等の支援が必要であるが、その後の対応の考え方や行動については、別途、こうした結果を踏まえた支援が計画される必要がある。

## 7. 低受信タイプ

「音声のみ」、「表情のみ」、「音声+表情」のいずれの条件においても正答率が低い。

このタイプでは、対象者が「相手の感情を知ろう」とした場合で、かつ相手の表出した感情が基本的な感情であったとしても、正しく理解されていない可能性が高い。この場合は、日常生活の中で修正できるように配慮するとともに、当面は、言葉を利用しながらのコミュニケーションを心がける必要がある。

ただし、低受信タイプであっても、対人関係が一見、円滑に維持されているように見受けられる対象者がいる。これらの対象者は、以下の特徴があるかどうかについて検討が必要である。

- a あまり強い意思表示をしない、もしくは、他者と積極的な関係を持つとしないなど、他者との関係がもともと希薄である。
- b 言語理解に優れている、もしくは、状況や場面理解に優れている等で情報を補完している。

a の場合は、対人関係が円滑に維持されているのではなく、終始受け身的な対応をしたり、対人関係そのものがもともと希薄であるために、問題点が目立たなくなっている状態と言える。これに対し、b の場合は、おおむね、対人関係は良好と言えるが、言語や状況・場面の理解が十分できない場合、誤解が生じていたとしても、表情や音声からの情報を適切に利用することが困難であるため、その修正が難しいことが予想される。

【 20代男性 診断名：注意欠陥多動性障害（ADHD）（診断年齢 26 歳）】

(1) 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版

「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」条件のいずれの正答率も極めて低い（表 3-3-10）。

快-不快の感情間の混同については、いずれの条件においても著しい混同が認められた。特に、「表情のみ」「音声+表情」条件では、「喜び」を「嫌悪」と読み誤っており、「喜び」は 1 件しか選択されなかった。

また、不快感情間の混同では、いずれの条件においても「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の混同が大きかった。

コミュニケーションに際しては、「音声のみ」「表情のみ」からの他者感情の読み取りが十分でないこと、加えて、両条件の読み誤りが相乗したことを考え合わせると、言葉で確認する等の補完行動の提案が求められる。

表 3-3-10 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	5	2		1
	悲しみ		3	2	3
	怒り	1	4	1	2
	嫌悪		3	3	1
	合計	6	12	6	7
正答率		31%			

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	1			7
	悲しみ		1	5	2
	怒り		3	3	2
	嫌悪		5		3
	合計	1	9	8	14
正答率		25%			

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	1			7
	悲しみ		6		2
	怒り		4	3	1
	嫌悪		4	1	3
	合計	1	14	4	13
正答率		41%			

(2) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版

曖昧な感情表現に関する評価のうち、A 検査（高不快）では「音声のみ」「表情のみ」条件で「不快」に評定する傾向があり、B 検査（低不快）では「音声のみ」条件で「不快」に評定する傾向が強く、「表情のみ」条件では「不快」に評定する傾向がある。これに対し、「音声+表情」条件では A 検査（高不快）・B 検査（低不快）ともに特徴的な評定の偏りは見いだされない（図 3-3-10）。

また、いずれの条件においても A 検査（高不快）と B 検査（低不快）の回答傾向に大きな違いは見いだされなかった。

こうしたことから、「音声のみ」「表情のみ」条件において、不快度の高低にかかわらず曖昧なメッセージに対しては「相手の感情をより深刻に受け取る」構えを持っている可能性が示唆される。

なお、快-不快評定版でも「音声+表情」条件で「快 → 不快」の読み誤りが顕著である。

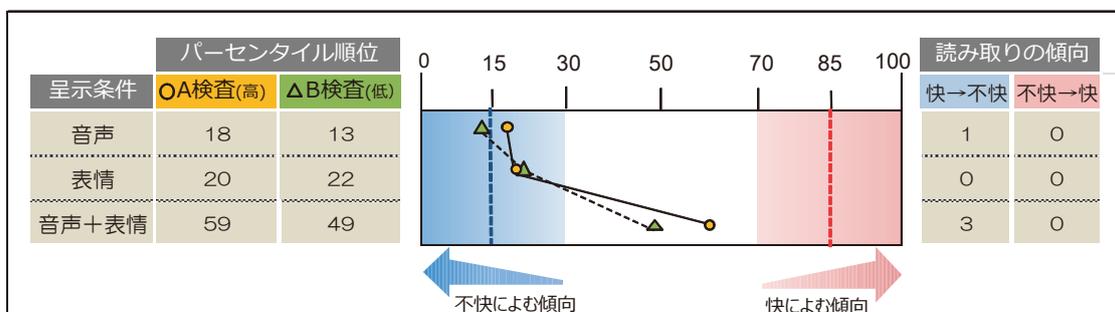


図 3-3-10 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

### (3) 結果解釈のポイント

4 感情評定版の結果からは、他者感情の識別に関し、音声からも表情からも情報を十分に活用できないことから、他者感情の識別に関しては支援が必要となる可能性が高い。「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動に加えて、回答の特徴を踏まえた対応についても支援の課題として検討することが必要である。その上で、「言語で表現する」などを事業所の配慮事項として調整する必要があるかどうかについて検討することも必要となる。

また、快-不快評定版の結果について、「音声のみ」「表情のみ」条件におけるより不快度の低い曖昧なメッセージを悲観的・自己否定的にとらえることが生じる可能性が示唆された。背景にストレスの高い、または、高すぎる経験がないかどうかについても検討することが必要と言える。

ただし、「考えすぎて頭がパンクした」「顔をみる方が得意で、併せて声を聞くと、どっちをとっていいか分からなかった」といった検査後の感想があったが、表情識別の際の注目箇所について訓練等を行うこと、その際、表情と音声を対応させながら確認するように配慮することなどで、回答に自信を持つことができる可能性がある。一方で、こうした提案自体が混乱の原因となる可能性もあることから、情報の入力と統合に関する詳細な特性把握を踏まえることが優先されるだろう。

なお、感情語の快-不快度評定の結果や経験場面に対する感情語の対応については、大きな問題がないことから、独特の構えを持っている可能性は少ないとみることができる。ただし、「長い間会っていなかった知人や友人と偶然に会った時」には「嫌悪」が選択されており、過去の交友関係等について否定的な経験もしくはストレスの高い状況がないかどうかについては検討が必要である。

こうしたことから、他者感情を受信することについて、補完行動の提案や環境調整等の支援が必要であるが、その後の対応の考え方や行動については、別途、検査結果や特性を踏まえた支援が計画される必要がある。

## 8. 特定のタイプに分類されない

このタイプに分類された対象者は、特定のタイプに分類される特徴的な傾向は持っていない。

対人関係に困難が認められる場合には、表情と音声の両方から情報を得るように心がけることに加え、以下のような問題があるかどうかについて、検討が必要である。

- ◆ 語彙が少ない、話すのが苦手などの理由で、相手に自分の意思や気持ち・感情を適切に伝えられない
- ◆ 状況や相手の気持ちに配慮できないなどの理由で、対人関係に問題が生じる

### 【20代女性 診断名：広汎性発達障害（診断年齢24歳）】

#### (1) 新版F&T感情識別検査 4感情評定版

「表情のみ」条件の正答率はやや低いが、「音声のみ」「音声+表情」条件では一般基準とほぼ同等の正答率であった（表3-3-11）。

快-不快の感情間の混同については、「音声のみ」条件で「悲しみ」を「喜び」と読み誤る混同が認められたが、「表情のみ」「音声+表情」条件ではこうした混同は認められなかった。

また、不快感情間の混同において、「音声のみ」「表情のみ」条件では「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の混同が認められた。ただし、「音声+表情」条件では、「悲しみ」を「怒り」と、また、「嫌悪」を「悲しみ」や「怒り」と読み誤る混同に限定されており、「音声のみ」「表情のみ」の各条件よりも正答率は上がっていた。

コミュニケーションに際しては、「音声のみ」「表情のみ」からの他者感情の読み取りについては、読み誤りがあるものの、音声と表情の両方を活用すれば、読み誤りは少なくなると考えられることから、相補タイプに準じたタイプの理解が可能である。

表 3-3-11 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

音声		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ	1	5		2
	怒り			8	
	嫌悪			3	4
	合計	9	5	11	6
正答率		78%			

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		6	2	
	怒り		1	5	2
	嫌悪			5	3
	合計	8	7	12	5
正答率		69%			

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		7	1	
	怒り			8	
	嫌悪		1	2	5
	合計	8	8	11	5
正答率		88%			

(2) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版

曖昧な感情表現に関する評価のうち、A 検査（高不快）では「音声のみ」条件で「快」に評定する傾向があり、「音声+表情」条件では「快」に評定する傾向が強い。また、B 検査（低不快）では「表情のみ」条件で「快」に評定する傾向がある（図 3-3-11）。

また、いずれの条件においても A 検査（高不快）と B 検査（低不快）の回答傾向に大きな違いが見いだされており、評定の傾向は逆転していた。

こうしたことから、特に「音声」が入る条件では、不快度の高い曖昧なメッセージに対しては「相手の感情をより楽観的に受け取る」構えを持っている可能性が示唆される。

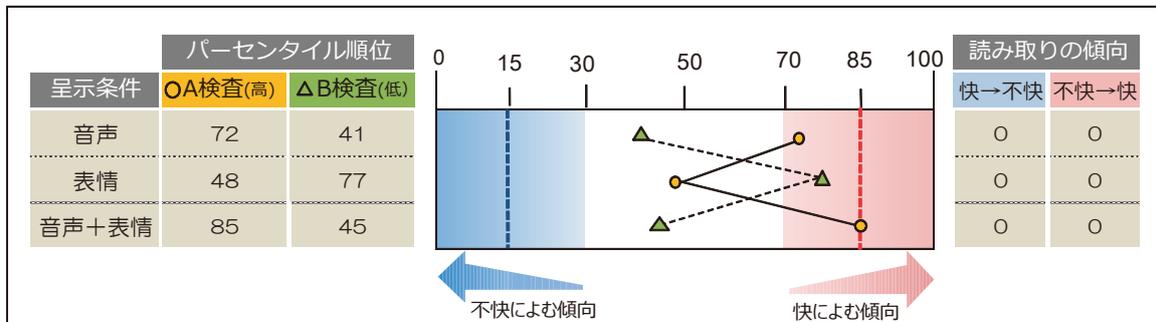


図 3-3-11 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果

(3) 結果解釈のポイント

4 感情評定版の結果からは、「音声」を聞くことと「表情」をみることについて、明確な優位性は認められない。しかし、他者感情の識別に関しては、音声と表情の両方に注目すること、また、そのためには、相手と向かい合っ情報を得ること（支援者は向かい合っ伝えること）については、留意事項となろう。

なお、回答している間の行動観察によれば、正解している選択についても自信がなく、回答に時間がかかっていた。正解に対しては即時フィードバックによる強化などで、回答に自信を持つことができる可能性があると言える。

また、快-不快評定版の結果について、曖昧なメッセージを楽観的・自己肯定的にとらえすぎるなどで対人トラブルが生じている可能性が示唆された。背景に感情の読み誤りに特徴的な傾向がないかどうか検討す

る必要性が示唆されており、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

ただし、検査後に「顔をみるのが怖い」という発言と「就職面接に失敗した経験が関連している」という訴えがあった。「みた方がよい」ということは分かっているが「できない時は無理をしない」ことが重要であり、「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動に加えて、回答の特徴を踏まえた対応についても支援の課題として検討することが必要である。その上で、「言語で表現する」などを事業所の配慮事項として調整する必要があるかどうかについて検討することも必要となる。

【20代男性 診断名：学習障害（診断年齢12歳）】

(1) 新版F&T感情識別検査 4感情評定版

「音声のみ」条件の正答率はやや低いが、「表情のみ」「音声+表情」条件では一般基準とほぼ同等の正答率であった（表3-3-12）。

表 3-3-12 新版F&T感情識別検査 4感情評定版の結果

		回答された感情						回答された感情						回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪			喜び	悲しみ	怒り	嫌悪			喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	7				呈示された感情	喜び	8			呈示された感情	喜び	8				
	悲しみ		8				悲しみ		5	2		1	悲しみ		7		1
	怒り			7	1		怒り			6		2	怒り			7	1
	嫌悪	1	3	2	2		嫌悪					8	嫌悪			2	6
	合計	8	11	9	3		合計	8	5	8		11	合計	8	7	9	8
		正答率 75%						正答率 84%						正答率 88%			

快-不快の感情間の混同については、「音声のみ」条件で「嫌悪」を「喜び」と読み誤る混同が認められたが、「表情のみ」「音声+表情」条件ではこうした混同は認められなかった。

また、不快感情間の混同において、「音声のみ」「表情のみ」条件では「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の混同が認められた。ただし、「音声+表情」条件では「悲しみ」を「嫌悪」と読み誤る混同と「嫌悪」と「怒り」の双方向の混同に限定されていた。

コミュニケーションに際しては、「音声のみ」「表情のみ」からの他者感情の読み取りについては、読み誤りがあるものの、音声と表情の両方を活用すれば、読み誤りは少なくなると考えられる。表情依存 F タイプに準じたタイプの理解が可能である。

(2) 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版

曖昧な感情表現に関する評価のうち、A 検査（高不快）では「音声のみ」「表情のみ」条件で「快」に評定する傾向があり、B 検査（低不快）では「音声のみ」条件で「不快」に評定する傾向がある（図 3-3-12）。また、「音声のみ」「表情のみ」条件では、不快度の低い刺激（B 検査（低不快））については不快度の高い刺激（A 検査（高不快））に比べて、より不快に読み取る傾向が強い。ただし、「表情のみ」「音声+表情」条件については特徴的な評定の偏りはなく、「音声+表情」条件については A 検査（高不快）と B 検査（低不快）の回答傾向に大きな違いは見いだされなかった。

こうしたことから、「音声のみ」条件において、不快度の高低によって「相手の感情をより深刻に受け取る」構えと「相手の感情をより楽観的に読み取る」構えの両方を持っている可能性が示唆される。

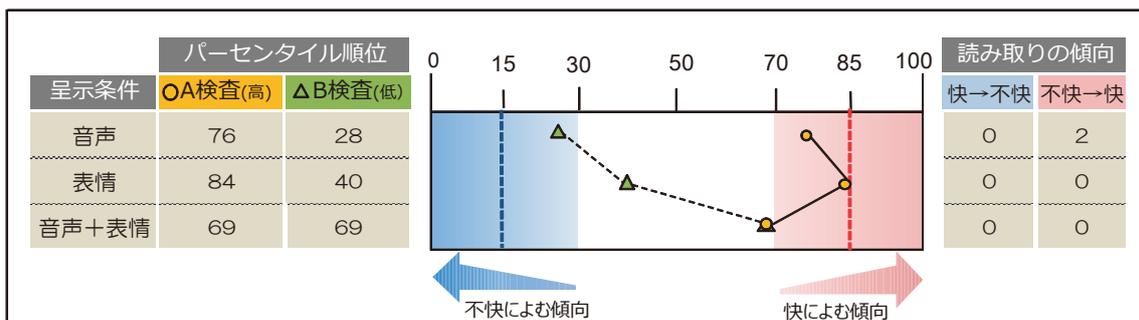


図 3-3-12 新版F&T感情識別検査 快-不快判定版の結果

### (3) 結果解釈のポイント

4 感情判定版の結果からは、「音声」を聞くことと「表情」をみることについて、明確な優位性は認められない。しかし、他者感情の識別に関しては、音声と表情の両方に注目すること、また、そのためには、相手と向かい合っただけで情報を得ること（支援者は向かい合っただけで伝えること）については、留意事項となる。

なお、感情語の快-不快度評定の結果については、快と不快の間の範囲が狭い※、「怒り」を「快でも不快でもない」とするなど、独特の構えを持っている可能性がある。さらに、経験場面に対する感情語の対応については「喜び」「悲しみ」「驚き」以外の感情（「怒り」「嫌悪」「軽蔑」「恐怖」）は選択されなかった。

※：+4 <最も快> ← -4 <最も不快> による9段階評定で「喜び」を「+2」に、「嫌悪」と「恐怖」を「-2」に評定

また、快-不快判定版の結果について、曖昧なメッセージを楽観的・自己肯定的にとらえすぎる場面と悲観的・自己否定的にとらえすぎる場面とが混在している可能性が示唆された。背景にストレスの高い、または、高すぎる経験がないかどうかについて検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

しかし、検査課題でなければ「視線を合わせたくない」といった発言があり、他者感情の受信に関する配慮が必要である可能性もある。「相手の気持ちは言葉で確認する」などの補完行動に加えて、回答の特徴を踏まえた対応についても支援の課題として検討することが必要である。その上で、「言語で表現する」などを事業所の配慮事項として調整する必要があるかどうかについて検討することも必要となる。

## 【20代男性 診断名：アスペルガー症候群（診断年齢9歳）】

### (1) 新版 F&T 感情識別検査 4 感情判定版

「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」条件のいずれも正答率は低い（表 3-3-13）。

快-不快の感情間の混同については、「音声のみ」条件で「喜び」を「嫌悪」と、また、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」を「喜び」と読み誤る混同が著しいが、「表情のみ」「音声+表情」条件ではこうした混同は認められなかった。

また、不快感情間の混同において、「音声のみ」「表情のみ」条件では「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の混同が顕著であった。これに対し、「音声+表情」条件では、「悲しみ」を「嫌悪」と読み誤る混同と「嫌悪」と「怒り」の間の双方向性の混同が認められた。なお、「悲しみ」を主として「怒り」もしくは「嫌悪」と読み誤る傾向が認められており、注意を要する。

コミュニケーションに際しては、「音声のみ」「表情のみ」からの他者感情の読み取りについては、読み誤りが多いものの、音声と表情の両方を活用すれば混同箇所が限定されていると考えられるが、低受信タイプに準じたタイプの理解が必要である。

表 3-3-13 新版F&T感情識別検査 4感情評価版の結果

音声		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	7			1
	悲しみ	1	1		6
	怒り	1		7	
	嫌悪	3	1	2	2
	合計	12	2	9	9
正答率		53%			

表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		2	2	4
	怒り		2	6	
	嫌悪		2	2	4
	合計	8	6	10	8
正答率		63%			

音声+表情		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		2		6
	怒り			7	1
	嫌悪			5	3
	合計	8	2	12	10
正答率		63%			

### (2) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評価版

曖昧な感情表現に関する評価のうち、A 検査（高不快）ではいずれの条件においても特徴的な評価の偏りは見いだされない。これに対し、B 検査（低不快）では「音声のみ」条件で「快」に評価する傾向が強く、一方で、「表情のみ」条件では「不快」に評価する傾向がある（図 3-3-13）。

また、「音声のみ」条件では、不快度の低い刺激（B 検査（低不快））については不快度の高い刺激（A 検査（高不快））に比べて、より快に読み取る傾向が強い。ただし、「表情のみ」「音声+表情」条件については A 検査（高不快）と B 検査（低不快）の回答傾向に、大きな違いは見いだされなかった。

こうしたことから、不快度の低い刺激（B 検査（低不快））については、「音声のみ」条件において「相手の感情をより楽観的に読み取る」構えが、「表情のみ」条件において「相手の感情をより深刻に読み取る」構えが混在している可能性が示唆される。

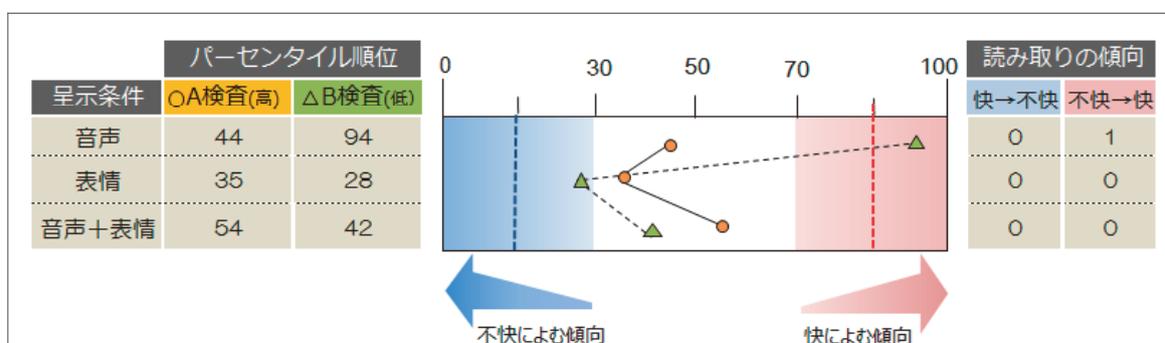


図 3-3-13 新版F&T感情識別検査 快-不快評価版の結果

### (3) 結果解釈のポイント

4 感情評価版の結果からは、「音声」を聞くことと「表情」をみることについて、明確な優位性は認められない。特に「音声」だけが手がかりとなる場面では、可能であれば「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動の必要性が示唆される。また、他者感情の識別に関しては、音声と表情の両方に注目すること、そのためには、相手と向かい合って情報を得ること（支援者は向かい合って伝えること）もまた留意事項となる。

なお、「音声+表情」条件においても正答率は低いが、検討すべき課題は 2 点に絞られる。まずは、「嫌悪」と「怒り」との間に双方向性の混同が認められた点である。「怒り」と「嫌悪」の混同については、日常生活場面での支障が少ないと考えられることから、正答に準ずるものと考えれば、読み誤りがあってもほと

んど問題にならない。このための確認として、「相手が怒っていると感じたときにどう対応するか」「相手が嫌な感情を持っていると感じたときどう対応するか」について回答を求めたところ、いずれも、「まず謝る。それから、何が悪かったか聞いてみる」といった行動をとることが明らかとなった。受信後にこうした対応が想定される場合、検査結果における正答率は低い、日常生活上の困難は少ないことから実質上の正答率はそれよりも高いと考えてよいことになる。

次に「悲しみ」の評定の問題がある。感情語の快-不快評定の結果や経験場面に対する感情語の対応については、大きな問題がないことから、独特の構えを持っている可能性は少ないとみることができる。したがって、表情識別の際の注目箇所について訓練等を行うこと、その際、表情と音声に対応させながら確認するように配慮することなどで、回答に自信を持つことができる可能性がある。その他、回答の特徴を踏まえた受信後の対応についても、支援の課題として検討することが必要であると言える。

また、快-不快評定版の結果について、曖昧なメッセージを楽観的・自己肯定的にとらえすぎる場面と悲観的・自己否定的にとらえすぎる場面とが混在している可能性が示唆された。背景にストレスの高い、あるいは高すぎる経験がないかについて検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

### 第3節 まとめ

#### —新版F&T感情識別検査（4感情評定版／快-不快評定版）の結果から—

##### 1. 受信の特徴に関する検討

4感情評定版において「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のそれぞれの条件における受信の特徴を知ることが、支援の課題を明らかにする上で、有効である。また、コミュニケーション・タイプは「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」条件の評定の特徴によっており、対象者の特徴に基づいた支援が可能となる。

なお、コミュニケーション・タイプは多様である。「音声のみ」条件における受信と「表情のみ」条件における受信を統合し、正答率の高低はあっても「音声+表情」条件において情報を活用できると考えられるタイプ（高受信・相補・表情依存F・音声依存T）もあるが、受信の困難や受信の統合の困難が大きく、「音声+表情」条件において十分に情報を活用できないと考えられるタイプ（低受信・相殺・表情依存T・音声依存F）もある。また、それぞれのタイプのような明確な受信と統合の特徴は見いだせない（特定のタイプに分類されない）ながら、準じた理解を必要とする多様性が含意となるタイプもある。さらに、「音声」と「表情」の双方の情報が利用できる場合に、より識別力の高い条件からの情報を利用している可能性の高いタイプ（表情依存F・音声依存T）や、より識別力の高い条件からの情報を利用していない可能性の高いタイプ（表情依存T・音声依存F）もある。こうした特徴を知ることによって、支援の課題を理解することができる。

加えて、快-不快評定版においても「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のそれぞれの条件における受信の特徴を知ることが、支援の課題を明らかにする上で、有効である。呈示条件別の回答傾向により「相手の感情をより深刻に受け取る」構え、もしくは「相手の感情をより楽観的に読み取る」構えを持っている可能性がある場合には、悲観的・自己否定的にとらえすぎる、逆に、楽観的・自己肯定的にとらえすぎるなどの傾向について、ストレスの経験等と関連させて対処の必要性を検討することが提案できる。

##### 2. 発達障害者支援の課題と留意事項

###### (1) 4感情評定版における「怒り」と「嫌悪」の混同について

受信後の対応が共通している点では、「怒り」と「嫌悪」の混同があったとしても、日常生活場面での支障が少ないと考えられることから、正答に準ずるものと判断することが基本である。ただし、対象者の中には、受信後の対応について支援が必要となる場合がある。

このための確認としては、例えば、「相手が怒っていると感じたときにどう対応するか」「相手が嫌な感情を持っていると感じたときにどう対応するか」について回答を求めることなどが重要となる。得られた回答は多様であり、「逃げる」「スルーする」「怒り返す」「謝る」「理由を聞く」の他に、「家に帰って布団をかぶる」といった行動がとられていることが明らかとなった。「怒り」と「嫌悪」の混同があったとしても、日常生活場面での支障が少ない対応としては、「まず謝る。それから、何が悪かったか聞いてみる」といった行動をとることが想定される場合に限定される。

なお、こうした場面を想定することに困難があったり、「人とつきあうこと自体がないので考えたこともない」といった受けとめ方もあることに注意が必要である。

相手の不快感情の理解と対応は関連づけて初めて対人関係が円滑に行われることになる。他者感情を把握した後の対応の考え方や行動化については、別途、こうした確認を踏まえた支援が計画される必要がある。

## (2) 結果の受け止め方

4 感情評定版では、「音声+表情」条件において読み誤りが多い場合であればともかく、「音声+表情」条件において正答率が高い場合、「音声のみ」条件や「表情のみ」条件における評定に関する特徴については、自覚されにくいという現状があった。だからこそ、「自信がなかった」という場合がある一方で、「正解していると思っていた」という場合には、日常生活では全く問題を感じていなかったことになる。結果をフィードバックすることで、結果の活用について検討する相談場面を設定することが可能となる。現実には、「電話でのやりとりがちぐはぐだったことがある」「怒られてばかりいると感じていたがそうではなかったのかもしれない」といった経験との対応が可能となり、振り返りによって特性を確認することになる例もあった。

また、正解している回答についても自信がなく、時間がかかる、タイムオーバーになるといったことも起こっていた。正解に対しては即時フィードバックによる強化が効果的支援となる可能性があること、さらに、表情識別の際の注目箇所について訓練等を行うことなどで、回答に自信を持つことができる可能性があること、などを踏まえた相談支援の必要性が浮かびあがる。

また、快-不快評定版では、楽観的に読む傾向であれ、悲観的に読む傾向であれ、対象者にとって想定外の偏りがある場合、結果のフィードバックは過去での経験を想起して結果と照らし合わせる好機となった。パーセンタイル順位による視覚的な結果表示は4感情評定版における正答率の高低と同様、「思い」とは別に「現実」と向き合うこととなったことから、振り返りによってストレス経験や対人対応の特徴を確認することになった例もあった。

加えて、曖昧な感情表現について不快に読む、または、逆に快に読む傾向が強い場合、背景にストレスの高い経験がないか、それはどのような経験か等を確認し、対人トラブルの経験の確認とともに相談支援の課題と受けとめることが求められる。

## (3) 補完行動の提案

回答傾向によって、「音声」だけが手がかりとなる場面では、可能であれば「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動の必要性が示唆される。あるいは、「表情」に注目する場面でも、必要に応じて「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動の必要性が示唆される場合もある。

また、他者感情の識別に関して、表情に注目すること、また、そのためには、相手と向かい合って情報を得ること（支援者は向かい合って伝えること）といった提案もまた、留意事項として挙げておきたい。さら

には、音声（音調）と言葉と表情を一致させた情報提供及び経験場面の提供の必要性についても検討事項となる。

その上で、事業所に伝えて、言語で表現することなどを配慮として求めるなどの調整の必要性についても検討が必要である。

#### （４）表情識別訓練の検討

表情から感情を判断する能力は、対人関係を維持する能力と関連性があることが指摘されている。このことは、表情から感情を判断する能力を高めることができれば、対象者の対人能力を高めることができるという可能性を示唆している。表情は言葉に依存しないコミュニケーション手段であり、訓練によるスキルの向上が望める領域であると考えられる。

また、表情識別のスキルは、知的な能力によるだけでなく、一部は、「経験」によって補うことができると言われている。したがって、表情識別能力を高めるためには「観察(経験)」に重点を置いた場面設定をすることが望ましい。表情識別の際の注目箇所について訓練等を行うこと、その際、表情と音声（音調）を対応させながら確認するように配慮することなどで、回答に自信を持つことができる可能性がある。視知覚の発達に困難がない対象者の場合、表情識別の訓練を提案することも検討事項である。訓練可能性の判定手続きについては巻末資料を参照のこと。また、訓練可能性の判定と実施については、障害者職業総合センター調査研究報告書 №39（2000）を参照されたい。

なお、表情識別訓練プログラムの目的は、「他者の感情に配慮しようという構えができること」であり、さらには「表情等から、的確に相手の感情を知り、それに対応した行動をとろうという動機を持つこと」である。しかし、表情をうまく読み取ることができれば、自動的にこの目標が達成されるわけではない。したがって、対人スキルの向上を目指す場合には、さらなるプログラムが必要となる対象者もいると言えるだろう。こうした点については、上記(1)における対応の考え方も重なるものである。

#### （５）感情語の理解や経験等の確認について

感情語の快-不快評定では「悲しみ」も「怒り」も「嫌悪」も最も不快度の高いレベルに評定している場合、不快感情全体について区別しない可能性がある。特に「悲しみ」を「怒り」や「嫌悪」と読み誤る回答傾向が指摘（第Ⅱ部第２章）されており、その背景に、ストレスの高い経験やつらい経験があるかどうか（第Ⅲ部第１章）、経験場面と感情語の対応に通常は起こらないような回答があるか（第Ⅱ部第１章）について検討を行う必要がある。

例えば、「怒り」を「快でも不快でもない」とするなど、独特の構えを持っている可能性がある。また、「怒り」と「嫌悪」は類似の感情であるが、「嫌悪」は“ため込む”ので不快であるが、“怒り”は“爆発させる”ので快」といった理解をしている場合など、感情と感情語について、独特の対応があると考えられる。結果の解釈に併せて、その他の情報を確認することもまた、支援の課題を確認する上で重要である。

#### （６）特性への配慮

「人の表情をみたり、声を聞いたりするのは疲れる」「声を聞くときに雑音があると気をとられる」「電話は苦手」「クリアな（明確な）声は“喜び”でもしんどい、“怒り”も同じ」といった経験がある場合、音に対する感覚過敏との関連を分析した上で支援の課題を検討する必要がある。

また、「考えすぎて頭がパンクした」「顔をみる方が得意で、合わせて声を聞くと、どっちをとっていいか分からなかった」といった検査後の感想があったが、表情識別の際の注目箇所について訓練等を行うこと、その際、表情と音声に対応させながら確認するように配慮することなどで、回答に自信を持つことができる

可能性がある。回答傾向の特徴を踏まえた対応についても支援の課題として検討することが必要であると言える。

さらには、「顔をみることが怖い」という発言については「就職面接に失敗した経験が関連している」という訴えがあった。「みた方がよい」ということは分かっているが「できない時は無理をしない」ことを伝えることが重要であり、「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動に加えて、回答傾向の特徴を踏まえた対応についても支援の課題として検討することが必要である。その上で、事業所に伝えて、言語で表現することなどを配慮として求めるなどの調整の必要性についても検討が望まれる。検査結果を知ることには関心があったが、検査課題でなければ「視線を合わせたくない」などもあり、他者感情の把握それ自体に配慮が必要である場合もある。

そのほか、他者感情の識別に関し、音声からも表情からも情報を十分に活用できないことから、他者感情の理解に関して支援が必要となる可能性が高い場合もある。「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動に加えて、回答傾向の特徴を踏まえた対応についても支援の課題として検討することが必要である。その上で、事業所に伝えて、言語で表現することなどを配慮として求めるなどの調整の必要性についても検討が望まれる。

## 第Ⅲ部の要旨とまとめ

新版 F&T 感情識別検査を用いて発達障害者の非言語コミュニケーションの特性評価を行うに当たり、発達障害の診断の有無によって、検査結果にどのような違いが現れるかを把握しておくことは、検査結果から対象者のコミュニケーションの課題を推定し、支援を講じるための資料として活用する上で必要である。

第Ⅲ部のまとめに当たり、まずは、対人関係のストレスについて、ストレスを測定する意義や測定尺度の作成、及び作成した「対人関係におけるストレス尺度」において、発達障害者の特徴を確認し、発達障害者の対人ストレスと曖昧な感情表現に対する認知特性からみた支援の課題について検討を行った（第1章）。

さらに、事例からみた発達障害者支援の課題について、新版 F&T 感情識別検査とその他の質問紙調査の結果に基づいて実施したヒアリング調査の結果（第2章）を取りまとめるとともに、特性理解と新版 F&T 感情識別検査結果を解釈する上での留意事項をまとめた（第3章）。

以上をとおして、発達障害者のコミュニケーション・スキルに関する支援の在り方について総括した。

### 1. 対人関係のストレスに関する検討

#### (1) 対人関係におけるストレス尺度からみた発達障害者の対人ストレスの特徴

「対人関係におけるストレス尺度」は、ストレスの原因が他者の言動であることから「他者の言動によるストレス因子」（以下、〈他者の言動〉因子）、孤立感や人との関係性に対する気付きが原因で生じるストレスであることから「孤立感や関係性の気付きによるストレス因子」（以下、〈孤立感〉因子）、意思疎通がうまくいっていないことに対する気付きが原因で生じるストレスであることから「意思疎通に関するストレス因子」（以下、〈意思疎通〉因子）、他者に不快感を与える自分の言動が原因で生じるストレスであることから「自分の言動が他者に不快感を与えることによるストレス因子」（〈自己の言動〉因子）と命名（障害者職業総合センター，2014）したが、この尺度で検討を行うこととした。

定型発達者の尺度得点は、自己の言動因子、他者の言動因子、孤立感因子、意思疎通因子の順に高かった。この順位に関しては、先行研究（障害者職業総合センター，2014）の結果と一致していた。ただし、在職者である本研究の対象者については、おおむね、すべての組み合わせで有意差が認められており、大学生・院生の結果よりも明確な違いがあると言える。この尺度得点の並び順は、発達障害においても定型発達者のものと同様であった。

また、発達障害者の性差について検討した結果、孤立感因子と自己の言動因子においていずれも女性の評定値が低い（ストレスを感じる）結果となった。定型発達在职者の結果とは一部異なるものの、女性の方が一貫してストレスを感じる結果は共通している。この点は、発達障害の有無に関わらない特性として留意すべき点である。また、男性の34歳以下と35歳以上で差は認められなかった。

#### (2) 発達障害者においてストレスの高い項目

定型発達者と発達障害者で有意差が認められた項目について検討したところ、定型発達者がより強くストレスを感じると評価したのは、「会議などで“何をしゃべったらいいのか”わからなくなる」の1項目のみで、他の12項目については発達障害者の方がより強くストレスを感じると評価した。

発達障害者が定型発達者よりもストレスを感じる項目は以下のとおりであった。

人が「あなたのことを嫌っているか」気になる  
所属しているグループで「自分が孤立している」と感じる  
自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされる  
あなたが貸した物を期日までに返してくれない  
気がつかって、人にあわせた会話をする  
自慢話や愚痴を言いたいの、誰も聞いてくれない  
話している人が自分に伝えたいことを、理解できない  
自分の言いたいことが、人に上手く伝わらない  
忙しいときに、仕事を頼まれる  
テンポの合わない人と会話する  
親しくなりたい人と、なかなか親しくなれない  
会議や話し合いなど、グループでの会話中に話の流れがわからなくなる

これらの有意差が認められた項目に関しては、尺度得点による評価とは別に、発達障害者の特徴として、日頃の対人場面で留意して観察することが必要である。

### (3) 発達障害者の対人ストレスの特徴からみた支援の課題

発達障害者においては、他者感情を正確に評定するかどうかに関わらず、日常生活場面において、他者の音声や表情から表出される感情をより不快な傾向に評定する傾向があることが示唆された。このことは、職場においても同様であり、支援者は同僚や上司との関係において、発達障害者が他者の感情をより不快な方向に捉えている可能性、すなわち、対人ストレスが定型発達者よりも高い状態におかれている可能性があることを踏まえて支援する必要がある。例えば、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版において他者感情をより不快な方向へ捉える傾向が強い発達障害者に対して、その傾向を伝えること、また、周囲の同僚や上司には、そうした傾向があることを伝えるとともに、必要に応じて「嬉しい気持ちでいること」や「不快な感情を持っていないこと」などを言語でも積極的に表現することを求めることになる。

## 2. 事例検討のまとめ

本研究で取り上げた 8 事例は 20 代から 50 代の男性で、診断年齢はいずれも最終学校在学中もしくは卒業後の成人期であり、在学時や職場での不適応等の経験により気付きと受診が行われた点で共通している。

職業経験を有する発達障害者を中心として、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版を実施したヒアリング調査の結果を取りまとめている。

### (1) 新版 F&T 感情識別検査の評価結果について

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版の実施の結果は、予想していた結果と必ずしも一致しない場合があった。コミュニケーションの困り感や日常生活場面での非言語コミュニケーションの課題についての本人の主訴とは別に、客観的な指標を用いて特性を適切に評価することの重要性が改めて示唆されたと言える。また、検査結果から得られた情報と併せて、対象者の職業経験やストレス体験等の情報を聴取することは、検査結果の理解に役立てるのみならず、コミュニケーションの課題を整理し、どのように課題解決に取り組んでいくかの手がかりとなりうるものであった。

また、コミュニケーションの課題を始めとする“障害特性”への理解は、8 事例すべてにおいて“不適応”という予期せぬ挫折体験によっていたが、通常教育を経てきたために、専門支援を早期には選択しがた

かった事例であるとみることができる。

#### (2) 表情の評定に際して注目するポイントについて

8事例中5事例については、表情の注目箇所を確認を行った。5事例の表情のみ条件における正答率の範囲は広く、コミュニケーション・タイプも多様であるものの、いずれの事例においても表情の注目箇所が目元などの特定の箇所に限定されていたり、評定する上で必要な箇所（例：眉間のしわ）に注目されていない等があった。

注目すべき箇所が明確に示されることで着目点が理解された点は5事例に共通していたが、表情をみることに前向きになる事例がある一方で、写真では了解可能だが実際の対人場面において表情をみること自体に不安を感じる事例もあったことから、表情識別の正答率の向上を目指すだけでなく、言葉で確認する等の補完手段を検討することについて、別途検討する必要性が改めて示唆された。

#### (3) ストレスに関する情報共有の必要性について

快-不快評定版から得られた結果の背景にあるストレスについては、職業経験によってその状態が異なる可能性が示唆された。職業経験のない事例では学校等における修学上の不適応がストレスの主な背景となっている可能性がある一方で、職業経験のある事例では職場での作業遂行上の問題や対人場面でのトラブルが背景要因として考えられた。これらのことから、快-不快評定版で偏りが認められた場合の背景としてストレスを検討する上で、職歴の有無等による経験の違いを考慮する必要性が示唆された。

#### (4) コミュニケーションの課題への対応のために

職業経験があったとしても必ずしも職場で期待される行動や役割の理解が獲得されるわけではない事例があったことから、発達障害者における職場での「一般的な研修」や「自己研鑽」等によるスキルの獲得の可能性について、事前に十分検討することの必要性が示唆された。その一方で、職業経歴が比較的長く、一定期間、職場に適応していた事例においては、本人が適応できる環境であれば期待される行動や役割理解の獲得可能性が高まることが示唆された。

#### (5) まとめ

抽象的な事柄への理解や、他者の立場に立って物事を判断したり、自分自身を客観的にみること等に苦手がある者も多いことから、「体験」を伴う学習や練習・訓練のできる場面や環境を用意し、それらの環境下で障害特性の理解や自己理解を補うといった手立てを講じることが重要であることは言うまでもない。新版F&T感情識別検査を用いて非言語コミュニケーションスキルの評価を行うことにより、感情識別の特性を明らかにするのみならず、関連するコミュニケーションの課題やストレス体験等を整理することで優先課題を特定し、職場適応に向けた目標達成を支援することもまた重要な視点であると言える。

### 3. 発達障害者支援における留意事項

—新版F&T感情識別検査(4感情評定版/快-不快評定版)の結果から—

「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のそれぞれの条件における受信の特徴を知ることが、支援の課題を明らかにする上で、有効である。また、コミュニケーション・タイプは、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」条件の評定の特徴によっており、対象者の特徴に基づいた支援が可能となる。

コミュニケーション・タイプは多様である。「音声のみ」条件における受信と「表情のみ」条件における受信を統合し、正答率の高低はあっても「音声+表情」条件において情報を活用できると考えられるタイプ

（高受信・相補・表情依存F・音声依存T）もあるが、受信の困難や受信の統合の困難が大きく、「音声+表情」条件において十分に情報を活用できないと考えられるタイプ（低受信・相殺・表情依存T・音声依存F）もある。また、それぞれのタイプのような明確な受信と統合の特徴は見いだせない（特定のタイプに分類されない）ながら、準じた理解を必要とする多様性が含意となるタイプもある。

また、「音声」と「表情」の双方の情報が利用できる場合に、より識別力の高い条件からの情報を利用している可能性の高いタイプ（表情依存F・音声依存T）や、より識別力の高い条件からの情報を利用していない可能性の高いタイプ（表情依存T・音声依存F）もある。こうした特徴を知ることによって、支援の課題を理解することができる。

非言語コミュニケーションスキルに関する発達障害者支援の課題を明らかにする上では、新版 F&T 感情識別検査の結果を効果的に活用することが期待される。そのためには、（ア）「怒り」と「嫌悪」の混同の状況と対応の考え方、（イ）結果を踏まえた過去の経験の振り返り、（ウ）補完行動の提案と環境調整や支援の考え方、（エ）表情識別訓練の実施可能性と課題の検討、（オ）感情語の理解や経験等（対人ストレスの評価を含む）の確認、（カ）特性への配慮などの検討が必要である。

# 本研究の課題と調査結果が示唆すること

## 1. 問題の所在

発達障害の特性からは、雇用に至る過程や雇用後の適応・定着において、支援の困難さが指摘されている。また、作業遂行やコミュニケーション、対人態度等への対応が就労支援や雇用管理の課題として重視されている。こうした現状を踏まえ、障害特性に配慮した環境整備や適応・定着支援等の在り方など、支援の方策について検討することが求められている。

本研究では、日常生活で行うコミュニケーションについて、非言語的な情報（例えば、表情・音声・姿勢・態度など）のやりとりが重要な役割を果たしているという指摘（例えば、Mehrabian,1981）を受け、発達障害者の非言語的なコミュニケーション・スキルの評価に焦点を当てている。

非言語的な情報の受信については、定型発達者であれば基本的な感情（幸福、悲しみ、怒り、嫌悪、恐怖、驚き）について、表情をみることで他者の感情を偶然以上の確率で正確に弁別できる（Ekman,1982）とされている。一方で、発達障害者が非言語的な情報の受信について基本的なスキルを有しているかどうかの評価は十分であるとは言えないことが多い。

発達障害者の特性を考慮した上で、これらの基本的なスキルの有無が検討できる評価手法の確立は急務と言える。F&T 感情識別検査 4 感情版（障害者職業総合センター，2000；2012）は、怒りや嫌悪などの“不快な感情”を表現している表情をみて（あるいは声を聞いて）、幸福などの“快の感情”であると読み間違い対象者や幸福・悲しみ・怒り・嫌悪の4感情のほとんどを特定の1つの感情（例えば、幸福あるいは嫌悪）として判断する対象者の特徴を明らかにすることができる検査として開発された。この検査は、さらに「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のそれぞれの条件における読み取りの特徴からコミュニケーションのタイプを明らかにすることができる。相手の感情を間違えて受け取っていけば、対応が適切なものとならないのは当然のことである。このように、「どのように振る舞うか（発信）」だけではなく、「どのように相手からの情報を受け取るか（受信）」について、発達障害の特性評価を検討することが必要となる。

加えて、職場のコミュニケーションにおいては、F&T 感情識別検査 4 感情版の刺激のような明確な感情表現を伴うことは少ないなど、職場で求められる非言語コミュニケーション・スキルの特性の詳細を把握するための評価もまた重要となる。こうしたことから、他者感情の受信に焦点を当て、読み取りの特徴やその条件を明らかにする等、特性把握のための評価を目的とした検査（F&T 感情識別検査拡大版）の開発を行うとともに、発達障害の特性を把握し、支援の課題について検討を行った（障害者職業総合センター，2014）。

ただし、この研究で発達障害者の特性の検討に際して基準とした定型発達者のデータは、主として大学生を対象として収集された。一方で、協力を得た発達障害者の年齢範囲は20代から50代に及んでおり、年代により回答傾向が異なることが明らかとなった（障害者職業総合センター，2014）。

年代別の検討は、発達障害者の就労支援に関しても重要であると考えられる。しかし、基準値となる定型発達者のデータを年代別に取得していないため、基準値に照らした年代別の検討については課題として残されており、心理検査として提供するに当たり、基準値の年齢範囲を拡大し、詳細な検討を加える必要があるとの結論を得た。

発達障害者を対象とした F&T 感情識別検査拡大版を完成し、より良く活用していくためには、該当年齢層の一般成人による基準値を得た上で、発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価及び支援の課題を検討することが必要である。

## 2. 課題解明の方法

発達障害者の非言語コミュニケーション・スキルについて、F&T 感情識別検査 4 感情版・拡大版に基づいて把握することは、彼らの対人関係の質やトラブル等の原因を理解するためにも、また、実際にこれらの困難について支援を計画する際にも、有益な情報を提供することになると考えられる。

こうした現状認識にたち、職業経験を有する成人の定型発達者のデータに基づき、基準値の作成を行った。次いで、F&T 感情識別検査 4 感情版・拡大版による発達障害者の特性把握のための調査、及び発達障害者のコミュニケーションに関連した情報収集のための調査を企画・実施した。

### (1) F&T 感情識別検査拡大版の基準値作成に関する調査

- ① 分析対象：定型発達成人(職業経験を有する者) 295 人  
(男性：148 人・女性:147 人／年齢範囲：20 代から 50 代)
- ② 調査時期：平成 26 年 10 月～平成 28 年 8 月
- ③ 調査内容：F&T感情識別検査拡大版「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の 3 条件における評定  
質問紙調査：感情語(喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑)に対応する快-不快の評定  
調査時点における直近 3 か月間の感情経験の頻度／感情場面と感情語の対応  
表情写真が表現する感情と注目箇所／対人関係におけるストレス 等
- ④ 調査方法：検査は個別又は小集団で実施／質問紙調査は自記式回答で検査と同日に実施

### (2) 発達障害者の特性把握と結果説明のための調査

- ① 調査対象：発達障害者 124 人 (男性：98 人・女性:26 人／年齢範囲：20 代から 50 代)
- ② 調査時期：平成 24 年 10 月～平成 28 年 10 月 (研究計画その 1 / 研究計画その 2 : 本研究)
- ③ 調査内容：F&T 感情識別検査 4 感情版：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の 3 条件における評定  
F&T 感情識別検査拡大版：「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の 3 条件における評定  
質問紙調査：感情語(喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑)に対応する快-不快の評定  
調査時点における直近 3 か月間の感情経験の頻度／感情場面と感情語の対応  
表情写真が表現する感情と注目箇所／対人関係におけるストレス 等  
調査結果の説明とヒアリング(コミュニケーション・スキルの活用に関する聞き取り調査)
- ④ 調査方法：検査は個別又は小集団で実施／質問紙調査は自記式回答で検査と同日に実施

### (3) 調査結果の検討

本研究は、「発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究…… F&T 感情識別検査拡大版に基づく検討……」(障害者職業総合センター, 2014 : 研究計画その 1) に引き続き、職業経験のある成人を対象とした基準値作成と発達障害者対象調査を継続(研究計画その 2) することにより、「新版 F&T 感情識別検査」を完成させることを目的とした。

このため、定型発達者データ(基準値)・発達障害者データについては、発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究(その 1・その 2)で収集した全データに基づく結果分析と報告を行うこととした。

なお、本研究の成果として支援機関・者に提供する検査(ソフトウェアインストール DVD)の名称を「新版 F&T 感情識別検査」とし、「4 感情評定版」(F&T 感情識別検査 4 感情版(2012)を一部改修)と「快-不快評定版」(F&T 感情識別検査 拡大版(2014)の基準値を再構成)とから構成される総合評価ツールと位置づけることとした。

本研究から得られた知見及び今後の課題について、以下の順にまとめて本研究の総括とする。

第1章では、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の概要を報告する。また、第2章では新版 F&T 感情識別検査を実施した結果から得られた知見をまとめる。第3章では、検査結果をより良く活用する上で必要となる情報について、本研究で用いた質問紙調査における結果の概要を踏まえ、情報収集と活用のポイントを概観する。最後に、こうした検討を踏まえ、研究の到達点の今後の課題について取りまとめた。検討結果の詳細については、該当する本文の各部各章各節を参照されたい。

## 第1章 新版F&T感情識別検査快-不快評定版の概要

発達障害者の支援に当たり、「音声」や「表情」から他者の感情をどのように読み取るかという非言語コミュニケーションの特性評価は対人コミュニケーションに困難がある発達障害者の支援において有効な情報となることが期待される。本研究では、感情が明確に表現されない曖昧な音声や表情に関する認知特性を把握するための検査として、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の開発を行った。

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版は、検査刺激の選定、検査課題の作成及び基準値の作成等、検査の開発に必要な一連の過程を踏まえて開発された。

検査を発達障害者に適用するに当たり、検査の特徴を明確にしておく必要があることから、定型発達者を対象としたデータの分析結果に基づき、検査の基本的特性を報告した。さらに、検査結果を解釈する上では、どのような結果呈示が行われるかについても基礎資料として報告した。

以下に、その概要を示す。

### 1. 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の構成

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版はパソコン上で実施する形式で開発された。

#### (1) 検査実施の環境：

OS：Windows 7 / 8.1 / 10 CPU：Pentium(R)4 CPU 2.40GHz 相当以上。

ディスプレイ解像度：1024 × 768 以上 / ディスプレイサイズ：14 インチ以上。

ディスプレイ色数：32bit 以上 / スピーカーからの出力により実施。

#### (2) 刺激の構成：

選定した検査刺激は曖昧刺激<sup>※1</sup>であることから、不快感情に偏る。ただし、不快刺激を繰り返し呈示することは対象者にストレスを与える可能性がある。そこで、調査対象者全員が「喜び」を選択した快刺激を刺激系列に加えることでストレス緩和を図った。なお、快刺激の呈示箇所は刺激系列中2か所と刺激系列の最後の計3か所に配置した。また、快刺激の直後には、前述の9刺激とは別の曖昧刺激を配置し、快刺激とともに分析から除外することとした。これは、快刺激によるストレス緩和がその直後の評定に及ぼす影響を抑えるためである。

こうしたことから、快-不快評定版の各条件を構成する刺激は下記の23刺激とした。なお、検査にかかる

---

※1 どの感情に関しても一致率が50%（刺激選定調査対象者の半数）以下であり（ただし、「音声+表情」は60%以下）、かつ、確信度の平均において「とても自信がある」に分類されない / 手続きの詳細は調査研究報告書 №119（障害者職業総合センター，2014）を参照されたい。

時間は1つの呈示条件につき約7分である。また、曖昧刺激9刺激は検査の前半と後半で1回ずつ呈示されるが、前半と後半の刺激の呈示順序は異なるように配置した。

検査刺激の構成(各条件)
$9(\text{曖昧刺激}) \times 2(\text{反復呈示}) + 3(\text{快刺激}) + 2(\text{分析対象外の曖昧刺激}) = 23 \text{ 刺激}$

### (3) 回答方法：

調査対象者には呈示された刺激が表現している快-不快の程度を「-4：非常に不快である」-「0：快でも不快でもない」-「+4：非常に快である」の9件法で回答させ、それをその刺激の評定値(-4~+4点)とした。

### (4) 実施方法：

モニターによる個別実施もしくはスクリーンで映像を呈示する小集団で実施した。

検査刺激の呈示
予鈴 → 刺激番号呈示(5秒間) → 刺激呈示 → 評定時間(5秒間)

なお、刺激呈示は「音声のみ」条件、「表情のみ」条件、「音声+表情」条件の順に実施した。実施時間は1呈示条件につき、約7分。「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の3条件で計21分とした。

## 2. 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の評定値(検査得点)について

### (1) 検査得点の構成

検査得点は、曖昧刺激の評定値における不快の程度が相対的に高い「高不快刺激」と低い「低不快刺激」に分けて算出している。具体的には、曖昧刺激9刺激のうち、中央値を除き中央値よりも不快度の高い刺激を「高不快刺激(A検査)」、不快度の低い刺激を「低不快刺激(B検査)」とした。

こうした手続きにより、高不快刺激に分類された曖昧刺激4刺激×2(反復呈示)の8刺激について、評定値の合計を高不快刺激得点、低不快刺激に分類された曖昧刺激4刺激×2(反復呈示)の8刺激について、評定値の合計を低不快刺激得点としている。

### (2) 快-不快評定版の評定値の特徴

- ① 曖昧刺激の評定値は呈示条件によって異なるが、その並び順はA検査とB検査で共通であった。「音声+表情」条件 < 「表情のみ」条件 < 「音声のみ」条件の順に有意に低い(不快に評定する)。
- ② 成人在職者における男女別の回答傾向では、B検査の「音声のみ」条件及び「表情のみ」条件を除くすべての条件で、女性の方が男性よりも有意に不快に評定していた。また、年齢区分別の回答傾向では、A検査の「音声のみ」条件及びB検査の「表情のみ」条件において、男性の34歳以下の者が35歳以上の者よりも有意に不快に評定していた。
- ③ 発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究(その1)で収集した学生データを合わせて検討した結果、基準値換算表は男性では3表(大学生・院生/34歳以下/35歳以上)/女性では2表(大学生・院生/在職者)を作成することとした(表4-1)。

表4-1 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版検査得点（性別・年齢区分別）

	「音声のみ」条件		「表情のみ」条件		「音声+表情」条件	
	A 検査	B 検査	A 検査	B 検査	A 検査	B 検査
男性 在職者88人 (35歳以上)	-9.0(4.37)	-2.4(4.17)	-12.5(6.31)	-5.5(6.46)	-20.1(5.52)	- 9.3(6.66)
60人 (34歳以下)	-10.8(4.93)	-2.4(4.80)	-14.3(6.11)	-8.0(8.23)	-20.3(5.56)	-10.6(6.48)
大学生・院生 78人	-10.6(5.03)	-1.6(3.81)	-13.6(5.90)	-6.1(6.50)	-19.2(5.12)	- 8.7(4.95)
女性 在職者 147人	-12.1(5.57)	-2.6(5.02)	-15.5(6.72)	-8.0(7.14)	-22.5(5.69)	-12.1(6.38)
大学生・院生 71人	-10.8(4.70)	-1.3(4.75)	-15.3(6.22)	-7.1(6.65)	-21.2(5.18)	- 9.7(5.40)

※ 在職者の年齢範囲：21歳～59歳 / 大学生・院生の年齢範囲：18歳～25歳  
網掛けは5%水準で有意（A検査の男性については、差の有意な組合せを括弧で示した）

④ 曖昧刺激に対する評定は、感情語の快-不快評定の結果とはおおむね関連がない。一方、個人の主観的な感情の経験頻度とは関連が見いだされており、「怒り」「恐怖」の経験頻度が高い群は、B検査（低不快）において、より不快に評定する傾向が認められている。したがって、経験の質だけでなく経験の量によって、検査結果は変動する可能性を含んでいる。なお、経験頻度との関連について、成人の結果は大学生・院生（障害者職業総合センター，2014）とは異なっており、職業経験の有無や年齢の効果による可能性があることから、求職者・在職者・休職者の結果の解釈に際しては重要な情報となることが明らかとなった。

また、ストレスの強さとも関連が見いだされており、職場における対人ストレスは求職者・在職者・休職者の結果の解釈に際して重要な情報となることが明らかとなった。

こうした基本的特性を踏まえ、検査別・呈示条件別・男女別・年齢区分別（在職の有無別を含む）に基準値の作成を行うとともに、検査得点が分布上のどの位置に該当するかを検査結果（パーセンタイル順位）として示すための基準値換算表を作成した。

また、新版 F&T 感情識別検査（ソフトウェア インストール DVD）は、検査実施時点の対象者の性・年齢・所属（職業経験の有無）を登録することにより、対応する基準値換算表から結果を自動的に算出し、結果表とコメントが呈示されるように作成された。ただし、結果表（パーセンタイル順位）は全条件を一連の順で行わなかった場合及び対象者の登録内容が設定された基準値の区分に対応しない場合には呈示されない。

在学生の場合は大学生・院生の基準値で結果が算出される。しかし、それ以下の年齢層の場合には、基準値が対応していないため、新たに基準値を作成して活用することが望ましい。

### 3. 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版実施上の留意事項

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版で評価される「曖昧な感情表現に対する回答」の特徴を把握することで、他者の感情認知に関わる他の認知特性や主観的経験、コミュニケーションの課題として受けとめていることとどのように関連しているのかについて検討する上で重要な資料となる。

#### （1）得点の意味とプロフィールについて

この検査の結果表で用いられている得点は各呈示条件ごとに成人基準値（男女別／年齢区分別／求職・在職の状況別）に基づいて換算した数値（パーセンタイル順位）として呈示される。

表 4-2 に、結果表に記載されるパーセンタイル順位の意味を示す。

表4-2 パーセンタイル順位の意味

パーセンタイル順位	意 味
0～15	曖昧感情を「不快に」評定する傾向が強い
16～30	曖昧感情を「不快に」評定する傾向がある
31～69	曖昧感情の評定に特徴的な偏りは見いだされない
70～84	曖昧感情を「快に」評定する傾向がある
85～100	曖昧感情を「快に」評定する傾向が強い

結果表は、パーセンタイル順位に換算した得点をプロフィールで示して視覚化した図、及び一般には起こることが稀であるとされる「快-不快の混同」の状況を示した表で構成されており、プロフィールは、A 検査（高不快刺激）と B 検査（低不快刺激）の結果及び検査間の関係を視覚化することを通して個人の特徴を把握できるように描かれる。

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版では、不快度評定の現れ方に注目することが重要である。このため、結果表については、以下のようなポイントに注目することで非言語コミュニケーションの特性を把握することが期待できる。

① プロフィールにおいて、特徴的なポイントがあるか

1) 曖昧刺激に対する快-不快評定値は、一般基準より不快もしくは快の方向に偏っていないか

偏りの有無については、表 4-2 の判定により、「不快に評定する傾向が強い」「不快に評定する傾向がある」「特徴的な偏りは見いだされない」「快に評定する傾向がある」「快に評定する傾向が強い」のいずれかで把握できる。

2) A 検査・B 検査それぞれの結果は、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の条件によって異なるか

呈示条件間の乖離の有無については、条件間の「違いが大きい（30 ポイント以上の差）」「違いがある（15-29 ポイントの差）」「違いは小さい（14 ポイント以下の差）」のいずれかで把握できる。

3) 不快度の高い曖昧刺激（A 検査：高不快刺激）への回答と不快度の低い曖昧刺激（B 検査：低不快刺激）への回答のプロフィールは、異なるか

結果の乖離の有無については、検査間の「違いが大きい（30 ポイント以上の差）」「違いがある（15-29 ポイントの差）」「違いは小さい（14 ポイント以下の差）」のいずれかで把握できる。

② 評定において、快-不快の混同があるか

快の感情表現から「不快」を読み取る傾向があるか。

不快度の高い曖昧刺激（A 検査（高不快）から「快」を読み取る傾向があるか

(2) 特徴的な結果例について

① 曖昧感情を深刻にとらえる事例

対人ストレスや対人トラブルなどとの関連で、「悲観的・自己否定的にとらえすぎる」傾向や行動が生じている可能性が示唆される。

A 検査と B 検査の違いや呈示条件別の違いは概して小さく、日常的に「不快度」の高い状況がある可能性があり、その背景にストレスの高い経験があるかどうかなどについては、アンケートや聴取

などで把握した上で、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

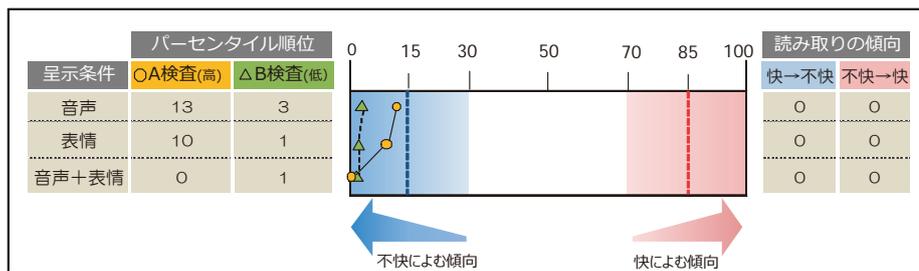


図 4-1 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果 (図3-3-2再掲)

② 曖昧感情を楽観的にとらえる事例

「楽観的・自己肯定的にとらえすぎる」傾向や行動により、対人トラブルが生じている可能性が示唆される。

A 検査と B 検査の違いや呈示条件別の違いは概して小さく、背景にストレスの高い経験や対人トラブルがあるかどうかなどについては、アンケートや聴取などで把握した上で、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

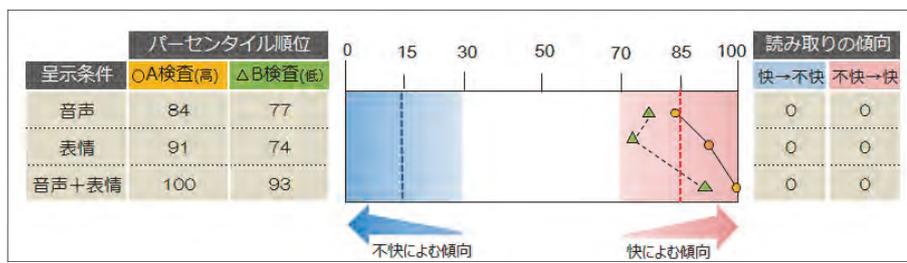


図 4-2 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果 (図3-3-4再掲)

③ 快の感情を不快にとらえる事例

「音声」の関係した環境において、対人ストレスや対人トラブルなどとの関連で、「悲観的・自己否定的にとらえすぎる」傾向や行動が生じている可能性が示唆される。

「音声のみ」条件以外では A 検査と B 検査の違いは小さいものの、「音声のみ」「音声+表情」条件と「表情のみ」条件とでは呈示条件間の違いが大きい。

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果と併せて正解のある検査の正確な読み取りの特徴及び混同の傾向について検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

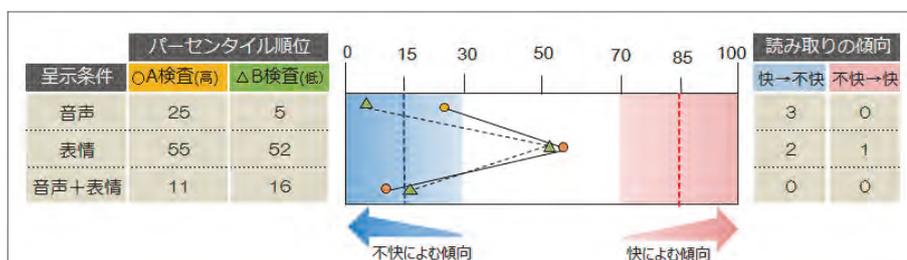


図 4-3 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果 (図3-3-9再掲)

④ 不快度の高い曖昧感情を快にとらえる事例

「表情」の関係した環境において、「楽観的・自己肯定的にとらえすぎる」傾向や行動、対人トラブル

ルの背景に、感情の読み誤りに特徴的な傾向がないかどうか検討する必要性が示唆される。

「表情のみ」条件では A 検査と B 検査の違いは小さいものの、「音声のみ」「音声+表情」条件では A 検査と B 検査の違いが「ある」もしくは「大きい」。また、呈示条件間の違いも大きい。

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果と併せて正解のある検査の正確な読み取りの特徴及び混同の傾向について検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要がある。

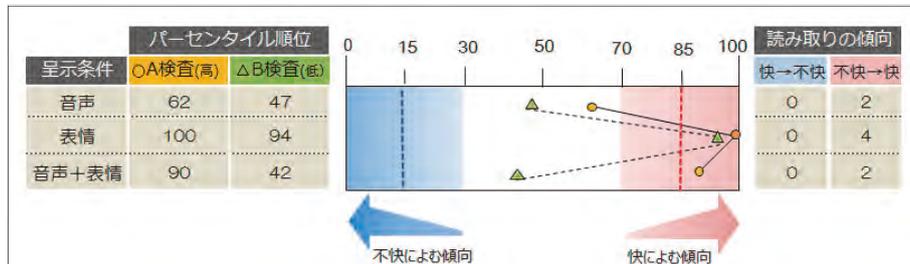


図4-4 新版F&T感情識別検査 快-不快評定版の結果 (図3-3-6再掲)

## 第2章 新版 F & T 感情識別検査から得られた知見

### 1. 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果が示唆すること

ここでは、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果から得られた発達障害者の特性をまとめておくこととする。

本研究では、まず、F&T 感情識別検査 4 感情版開発時のデータ（障害者職業総合センター調査研究報告書 №39, 2000）及び先行研究（障害者職業総合センター, 2014）のデータとの比較検討を行った。先行研究のデータ群と本研究のデータ群との間で回答傾向を検討した結果から有意な違いがないこと、したがって、4 感情評定版で把握できる発達障害者の傾向は安定していることが確認された。

なお、定型発達者のデータは、大学生・大学院生 128 名（男 58 名／女 70 名）から構成されている。

#### (1) 正答率の比較

「音声のみ」、「表情のみ」、「音声+表情」の各呈示条件について、定型発達者と発達障害者の間で正答率に差が認められており、定型発達者の平均が有意に高かった。

また、対象者群別にみた呈示条件間の正答率について、発達障害者においては、音声または表情からの他者感情の読み取りに関して、定型発達者よりも困難が大きいこと、特に、表情の読み取りに関して、より困難が大きいことが示唆された。

定型発達：「音声のみ」＝「表情のみ」＜「音声+表情」  
発達障害：「表情のみ」＜「音声のみ」＜「音声+表情」

#### (2) 混同の傾向

##### ① 快-不快の混同（「喜び」と「怒り」または「嫌悪」の混同）

快-不快の混同は、定型発達者・発達障害者ともに認められており、これらの混同が発達障害者のみに特徴的であるとは言えない。しかし、「喜び」（共通して最も「快」に評定）と「怒り」「嫌悪」（共通して最も「不快」に評定）の感情間での混同について、「音声のみ」条件では、快-不快の混同は定型発達者よりも発達障害者に多い傾向が見いだされた。

## ② 「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間の混同

定型発達者・発達障害者ともに「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの条件においても、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間の混同が認められた。したがって、これらの混同が発達障害者のみに特徴的であるとは言えない。ただし、いずれの条件においても「悲しみ」を「嫌悪」と混同する傾向及び「嫌悪」を「怒り」と混同する傾向が発達障害者において顕著に高い。

また、「表情のみ」条件では、「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と混同する傾向が認められた（「悲しみ」の50%以上が「怒り」あるいは「嫌悪」と回答された）点には留意する必要がある。

なお、発達障害者においてみられた「他者が表出している感情をより不快度が高い方向に読み取る（「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み取る）傾向は、知的障害者においても同様に指摘されている（障害者職業総合センター調査研究報告書 №39, 2000）。したがって、正答率の高低に関わらず、知的障害を伴う者を含む発達障害者は、他者の感情をよりストレスの高い方向へ受け取る可能性があると言える。

### (3) コミュニケーション・タイプ

コミュニケーション・タイプは表 4-3 に示したように、「音声」と「表情」の回答傾向に特徴的な傾向の認められる①～⑧の8タイプとこうした「特定のタイプに分類されない」タイプの計9タイプに分類される（知的障害者のデータを参考として記載した：障害者職業総合センター調査研究報告書 №39, 2000）。

知的障害者との比較では、知的障害を伴わない発達障害者の方が、「高受信タイプ、相補タイプが多く、低受信タイプが少ないこと」、「より識別力の高い条件を優先的に利用する際、知的障害を伴わない発達障害者では「音声」に依存する傾向が強いこと」が示唆された。

表4-3 コミュニケーション・タイプ

		音声	表情	音声+表情	発達障害	知的障害
①	高受信タイプ	76%以上	76%以上	83%以上	20.1%	4.1%
②	低受信タイプ	59%以下	59%以下	64%以下	0.8%	12.2%
③	相補タイプ	「音声+表情」－「音声のみ」 「音声+表情」－「表情のみ」がともに <u>15%より大きい場合</u>			22.6%	16.9%
④	相殺タイプ	「音声+表情」－「音声のみ」 「音声+表情」－「表情のみ」がともに <u>15%より小さい場合</u>			0.8%	—
⑤	音声依存・Tタイプ	「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。			16.9%	13.5%
⑥	音声依存・Fタイプ	「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は低い			0.8%	—
⑦	表情依存・Tタイプ	「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は低い。			—	0.7%
⑧	表情依存・Fタイプ	「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、両方からの情報を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。			2.4%	9.5%
⑨	特定のタイプに分類されない	①～⑧のいずれにも分類されないタイプ			39.5%	43.3%
全体					124人	148人

注1 高受信・低受信の基準値は、それぞれ一般基準の平均正答率の9割以上、7割以下を目安としている。

注2 「音声のみ」「表情のみ」条件における標準偏差の値に基づいて設定した。

注3 知的障害者のデータは、（障害者職業総合センター調査研究報告書 №39, 2000）による

「音声のみ」条件における受信と「表情のみ」条件における受信を統合し、正答率の高低はあっても「音声+表情」条件において情報を活用できると考えられるタイプ（高受信・相補・表情依存F・音声依存T）もあるが、受信の困難や受信した情報の統合の困難が大きく、「音声+表情」条件において十分に情報を活

用できないと考えられるタイプ（低受信・相殺・表情依存T・音声依存F）もある。また、それぞれのタイプのような明確な受信と統合の特徴は見いだせない（特定のタイプに分類されない）ながら、準じた理解を必要とする多様性が含意となるタイプもある。

また、「音声」と「表情」の双方の情報が利用できる場合に、より識別力の高い条件からの情報を利用している可能性の高いタイプ（表情依存F・音声依存T）や、より識別力の高い条件からの情報を利用していない可能性の高いタイプ（表情依存T・音声依存F）もある。こうした特徴を知ること、支援の課題を理解することができる。

なお、表情依存Tタイプについては、今回の対象者には該当者がいなかった。

## 2. 新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の結果が示唆すること

ここでは、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の結果から得られた発達障害者の特性をまとめておくこととする。

なお、定型発達者のデータは、成人職者 295 人（男 148 名／女 147 名）から構成されている。

### （1）曖昧刺激に対する評定：定型発達者と発達障害者の比較

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の刺激に対する快-不快の評定に関して、定型発達者と発達障害者の比較を行った結果、「音声のみ」では、発達障害者の得点が低い（より不快に評定した）のに対し、「表情のみ」「音声+表情」では、有意差は認められなかった。

こうしたことから、発達障害者は音声からの情報に関して定型発達者よりも不快に感じやすい傾向があること、「音声のみ」で行う電話対応などにおいて、よりストレスを感じやすい可能性を示唆している。

次に、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版では、結果の解釈に際し、より特徴を明確に把握する目的で A 検査（高不快刺激）と B 検査（低不快刺激）に分けて結果を呈示することになっているが、呈示条件ごとに見ると、「音声のみ」「音声+表情」では、B 検査（低不快刺激）において発達障害者がより不快に評価する傾向が明らかとなった。これに対し、「表情のみ」では A 検査（高不快刺激）で定型発達者の方がより不快に評価する傾向が明らかとなった。

以上のことから、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版において A 検査（高不快刺激）・B 検査（低不快刺激）のプロフィールを検討する際には、こうした傾向に留意する必要がある。

### （2）性別・年齢区分別の特徴

男女間では、「音声のみ（B 検査：低不快刺激）」「表情のみ（A 検査：高不快刺激）」「音声+表情（B 検査：低不快刺激）」において有意差が認められた。定型発達者を対象とした分析では、「音声のみ（A 検査：高不快刺激）」「表情のみ（A 検査：高不快刺激）」「音声+表情（A 検査：高不快刺激／B 検査：低不快刺激）」でいずれも女性の評定値が低いことが明らかとなっている。したがって、障害の有無を問わず、女性は男性よりも他者によって表出された非言語的な情報をより不快に評価する傾向が確認された。一方で、「音声のみ」においては、発達障害者では B 検査（低不快刺激）に、定型発達者では A 検査（高不快刺激）に特徴が現れた点は留意する必要がある。

また、定型発達者においては、34 歳以下と 35 歳以上において「音声のみ」の A 検査（高不快刺激）、「表情のみ」の B 検査（低不快刺激）で差が認められているが、発達障害者では「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれの呈示条件においても、A 検査（高不快刺激）及び B 検査（低不快刺激）のいずれにおいても年齢区分の差は認められなかった。

### (3) 経験頻度と快-不快評定版における評定との関連

曖昧刺激に対する評定は、個人の主観的な感情の経験頻度との関連が見いだされており、定型発達者においては「怒り」「恐怖」の経験頻度が高い群は、B 検査（低不快刺激）において、より不快に評定する傾向が認められた。また、発達障害者においては、「嫌悪」の経験頻度が高い群は、「表情のみ」条件の A 検査（高不快刺激）と B 検査（低不快刺激）、「音声+表情」条件の B 検査（低不快刺激）において、より不快に評定する結果であった。さらに、「恐怖」の経験頻度が高い群についても「音声のみ」条件と「表情のみ」条件の B 検査（低不快刺激）において、より不快に評定する傾向が認められた。いずれも経験の質や量が検査の評定と関連する可能性が示唆されている点は共通している。ただし、経験頻度に関しては、対象者が異なるだけでなく、同一対象者であっても異なった時期に実施することで結果が変化することが予想される。

加えて、発達障害者に関しては、「嫌悪」「恐怖」の経験頻度が定型発達者と異なる可能性があることから、検査結果のフィードバックに際して個別に留意する点と言える。

### (4) ストレスと快-不快評定版における評定との関連

曖昧刺激に対する評定は、個人のストレスの強さとの関連が見いだされており、ストレス尺度得点と A 検査（高不快刺激）／ B 検査（低不快刺激）の間での相関に注目してみると、男性においては障害の有無を問わず、「他者の言動」「孤立感」「意思疎通」のそれぞれの状況においてより強くストレスを感じることに「表出された曖昧な感情をより不快に読み取る傾向」との間には関連があると言える。また、発達障害者では、さらに「自己の言動」に関しても弱い相関が認められた。状況の認知においてよりストレスを感じ、また、その時に表出される曖昧な非言語的情報（音声／表情）に関してもより不快に評価するのであれば、職場における対人ストレスは一層強いものとなる可能性がある。

また、定型発達者に限ると女性は男性よりも相関のある組合せが少なかったことに加えて、男性にはみられなかった「自己の言動」に関しても相関が認められている（音声条件の B 検査（低不快刺激）を除く）。このことは、ストレスについて考える際に性差を考慮することの必要性を示唆していると言える。

## 3. 事例研究から得られた知見

就職を目指す上でコミュニケーションに関する課題整理を行った 2 事例、離転職を繰り返す中でコミュニケーション上の問題に直面し、“適職”を探索する 1 事例、就職後の適応に関する課題への対応を検討している 3 事例、異動・昇進による不適応への課題への対応を検討している 2 事例について、ヒアリング調査の結果を取りまとめた。

取り上げた事例は 20 代から 50 代の男性で、診断年齢はいずれも最終学校在学中もしくは卒業後の成人期であり、在学時や職場での不適応等の経験により気付きと受診が行われた点で共通している。

ヒアリングに際しては、「学校・職場不適応の経過」「障害特性への気付きと対処」「他者感情の読み取りと感情識別の特徴」「コミュニケーションの課題と支援」に焦点を当て、可能な限り対象者の経歴と見解に即して取りまとめた。

### (1) 新版 F&T 感情識別検査の評価結果の受け止め方について

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版の実施の結果は、予想していた結果と必ずしも一

致しない場合があった。コミュニケーションの困り感や日常生活場面での非言語コミュニケーションの課題についての本人の主訴とは別に、客観的な指標を用いて特性を適切に評価することの重要性が改めて示唆されたと言える。また、検査結果から得られた情報と併せて、対象者の職業経験やストレス体験等の情報を聴取することは、検査結果の理解に役立てるのみならず、コミュニケーションの課題を整理し、どのように課題解決に取り組んでいくかの手がかりとなった。

また、コミュニケーションの課題を始めとする“障害特性”への理解は、8事例すべてにおいて“不適応”という予期せぬ挫折体験によっていたが、通常教育を経てきたために専門支援を早期には選択しがたかった事例であるとみることができる。

#### (2) 表情の読み取りに際して注目するポイントについて

8事例中5事例については、表情の注目箇所の確認を行った。5事例の「表情のみ」条件における正答率の範囲は広く、コミュニケーション・タイプも多様であるものの、いずれの事例においても表情の注目箇所が目元などの特定の箇所に限定されていたり、読み取る上で必要な箇所（例：眉間のしわ）に注目されていない等があった。

注目すべき箇所が明確に示されることで着目点が理解された点は5事例に共通していたが、表情をみることに前向きになる事例がある一方で、写真では了解可能だが実際の対人場面において表情をみること自体に不安を感じる事例もあったことから、表情識別の正答率の向上を目指すだけでなく、言葉で確認する等の補完手段を検討することについて、別途検討する必要性が改めて示唆された。

#### (3) ストレスに関する情報確認と共有の必要性について

快-不快評定版から得られた結果の背景にあるストレスについては、職業経験によってその状態が異なる可能性が示唆された。職業経験のない事例では学校等における修学上の不適応がストレスの主な背景となっている可能性がある一方で、職業経験のある事例では職場での作業遂行上の問題や対人場面でのトラブルが背景要因として考えられた。これらのことから、快-不快評定版における評定の偏りの背景としてストレスを検討する上で、職歴の有無等による経験の違いを考慮する必要性が示唆された。

#### (4) コミュニケーションの課題への対応のために

職業経験があったとしても必ずしも職場で期待される行動や役割の理解が促進されるわけではない事例からは、発達障害者における職場での“一般的な研修”や“自己研鑽”等によるスキルの獲得可能性について、事前に十分検討することの必要性が示唆された。その一方で、職業経歴が比較的長く、一定期間、職場に適応していた事例においては、本人が適応できる環境であれば期待される行動や役割理解の獲得可能性が高まることが示唆された。

#### (5) まとめ

抽象的な事柄への理解や、他者の立場に立って物事を判断したり、自分自身を客観的にみること等に苦手がある者も多いことから、“体験”を伴う学習や練習・訓練のできる場面や環境を用意し、それらの環境下で障害特性の理解や自己理解を補うといった手立てを講じることが重要であることは言うまでもない。新版F&T感情識別検査を用いて非言語コミュニケーションスキルの評価を行うことにより、感情識別の特性を明らかにするだけでなく、関連するコミュニケーションの課題やストレス体験等を整理することで優先課題を特定し、職場適応に向けた目標達成を支援することもまた重要な視点である。

### 第3章 新版 F & T 感情識別検査のより良い活用のために

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版・快-不快評定版の結果解釈に際し、その他の認知特性や主観的経験に関する情報が重要となることから、以下に示す情報を検査実施前後に収集しておくことは意義が大きい。すなわち、ある対象者が複数の項目に渡って特徴的な回答や逸脱した回答をした場合、その特性の理解や結果のフィードバックに際し、注意を要することを示すものである。

また、快-不快評定版で評価する曖昧な感情表現に対する特性が他者の感情認知に関わる他の認知特性や主観的経験とどのように関連しているのかについて検討することは、検査結果のより良い活用を促進する情報としても重要である。そこで、第3章では検査結果をより良く活用する上で必要となる情報について、本研究で用いた質問紙調査と結果の概要を踏まえ、情報収集と活用のポイントを概観する。

本研究では、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版・快-不快評定版の前後で以下の項目について情報を収集している。

(1) 検査実施前の確認事項

感情語(喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑)に対応する快-不快の程度  
感情場面と感情語の対応 等

(2) 検査実施後の確認事項

調査時点における直近3か月間の感情経験の頻度/  
表情写真が表現する感情と着目箇所/対人関係におけるストレス 等

上記調査に要した時間は、合計でおおむね15分程度であった。

#### 1. 感情語の快-不快評定について

「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「驚き」「恐怖」「軽蔑」の7種類の感情語について、「-4:非常に不快である」—「0:快でも不快でもない」—「+4:非常に快である」の9件法で回答させた結果を表4-4-1~3に示す(質問紙は、資料2(検査前に実施する質問用紙3)を参照のこと)。

各感情語は、快の感情:喜び、不快の感情:悲しみ・怒り・嫌悪・恐怖・軽蔑、快でも不快でもない感情:驚きに評定された。なお、恐怖と軽蔑の間、怒りと嫌悪の間には、いずれも有意差が認められなかった。

また、男女間で回答傾向の違いは認められなかった(有効分析対象者:男性148人/女性147人)。

表4-4-1 感情の快-不快度評定の対象者間平均(SD):成人在職者(定型発達者)

快 ←							→ 不快	
喜び	驚き	悲しみ	軽蔑・恐怖		嫌悪・怒り			
3.6 (0.59)	-0.2 (0.99)	-2.2 (1.32)	-2.8 (1.05)	-3.0 (1.18)	-3.3 (0.84)	-3.4 (0.90)		

表4-4-2 感情の快-不快度評定の対象者間平均(SD):大学生・大学院生(定型発達者)

快 ←							→ 不快	
喜び	驚き	悲しみ	恐怖・軽蔑		怒り・嫌悪			
3.8 (0.47)	0.0 (0.71)	-2.1 (1.13)	-2.6 (1.21)	-2.8 (1.15)	-3.3 (0.94)	-3.4 (0.76)		

なお、大学生・院生においても、同様の結果であり、男女間で回答傾向の違いは認められていない（障害者職業総合センター，2014：有効分析対象者：男性72名／女性66名）。

こうした検討から、成人については、感情語の快-不快評定において、性や年齢区分に関わりなく同様の結果であることが明らかとなった。

表4-4-3 感情の快-不快度評定の対象者間平均（SD）：（発達障害者）

快 ←							→ 不快	
喜び	驚き	悲しみ	・ 軽蔑	・ 恐怖		嫌悪	・ 怒り	
3.6 (0.71)	-0.2 (1.10)	-2.4 (1.24)	-2.6 (1.22)	-2.6 (1.22)		-3.1 (0.95)	-3.3 (1.05)	

表4-4-1～3に示すとおり、定型発達者と発達障害者の評定水準に大きな違いは認められなかった。しかし、定型発達者の快-不快評定の特徴として、快から不快の方向に、喜び>驚き>悲しみ>恐怖・軽蔑>怒り・嫌悪の順に並ぶこと、恐怖と軽蔑との間、及び怒りと嫌悪の間には有意差が認められないこと、が確認されており、この傾向は大学生・院生を対象とした先行研究（障害者職業総合センター，2014）の結果と同様であった。これに対し、発達障害者については、「喜び」がもっとも快であり、「怒り」「嫌悪」がもっとも不快である点では定型発達者と共通していたが、不快感情（「悲しみ」「軽蔑」「恐怖」）の並び順は定型発達者のようには明確ではなかった。ただし、感情語の快不快度評定に対する有意な性差、年齢区分差は認められなかった。

こうした結果を踏まえると、ある対象者が「感情語の快-不快評定」に際し、特徴的な回答や逸脱した回答をした場合、その特性の理解や結果のフィードバックの留意事項となる。

## 2. 感情の経験頻度評定

「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「驚き」「恐怖」「軽蔑」の7種類の感情の経験頻度について、調査時点から遡って3か月間の間に、それぞれどの程度の頻度で経験したかを「0：まったくなかった」—「2：月に1回あった」—「4：週に1回あった」—「6：毎日あった」の7件法で回答させた（質問紙は、資料2（検査後に実施する質問用紙1）を参照のこと）。さらに、感情の経験頻度を感情間で比較しやすくするために、7件法で評定させた頻度に基づき、対象者を経験頻度の水準が異なる3群に分けた（経験頻度低群：まったくなかった～ほとんどなかった、中群：月1回～数回程度あった、高群：週数回～毎日あった）。

定型発達者（成人職者）の直近3か月間の感情経験は、喜びの経験が多く、恐怖や軽蔑の経験は相対的に少ない。この傾向は学生・院生を対象とした先行研究（障害者職業総合センター，2014）でも同様であった。ただし、経験頻度の回答に性差は認められなかった。一方、男性における年齢区分については、34歳以下の方が35歳以上よりも「悲しみ」の経験頻度が高いことが示された。

これに対し、発達障害者では、「喜び」は定型発達者の方が経験頻度が高い一方で、「恐怖」「軽蔑」については発達障害者の方が経験頻度が高いことが示された。また、すべての感情について男女の回答に差は認められなかった。ただし、このことから、発達障害者においては、「日常生活において快の感情を経験することは少ないが、一方で不快感情を経験することは多い」と結論することには慎重さを要する。直近3か月の経験に限定したものであり、調査時点以前の在学中・求職活動中・在職中・その他における経験が回答に反映されているわけではないからである。

こうした結果を踏まえると、ある対象者が「感情の経験頻度評定」に際し、特徴的な回答や逸脱した回答をした場合、その特性の理解や結果のフィードバックの留意事項となる。

### 3. 感情場面に対応する感情語の選択

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の実施に際し、感情に対して適切な感情名がラベリングされていることを確認することは重要である。感情と感情語との対応を把握するために、表 4-5 に示す 14 の場面を自分が経験した場合に、どのような気持ちになるのかについて、感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）を 1 つ選択させた（質問紙は、資料 2（検査前に実施する質問用紙 2）を参照のこと）。

表 4-5 経験場面に対応する感情語の選択

1. 長い間、会っていなかった知人や友人と偶然出会ったとき
2. 他人に嫌がらせをしている人を見かけたとき
3. 試験に合格したとき
4. 苦手な生物（クモ・ヘビ・ゴキブリなど）を近くで見たとき
5. 仲の良い知人や友人が遠くに引っ越すことになったとき
6. いい加減な態度や無責任な態度をとる人を見たとき
7. 初対面の人に、なれなれしい言葉で話しかけられたとき
8. 階段から足を滑らせて落ちそうになったとき
9. 面倒な作業を人から押しつけられたとき
10. 知人や友人に嘘をつかれたとき
11. 時間をかけて作成したレポートや書類を誤って自分で削除したり、紛失したとき
12. 大きな地震が起こったとき
13. 努力して作成したレポートや書類を先生や上司にほめられたとき
14. 信頼していた知人や友人に約束を破られたとき

感情語の選択は、正解が 1 つに定まるとは限らない。実際、複数の感情語が選択された場面と、9 割以上が同一もしくは 2 つの感情のいずれかを選択した場面が見いだされている。その上で、定型発達者と発達障害者との間で、以下のような違いが見いだされた（表 4-6）。

表 4-6 感情場面に対応する感情語の選択における特徴

・「長い間、会っていなかった知人や友人と偶然出会ったとき」	— 「嫌悪」の選択率：	定型発達者（成人職者） <	発達障害者
・「試験に合格したとき」「努力したレポートや書類をほめられたとき」	— 「喜び」の選択率：	定型発達者（成人職者） >	発達障害者
	— 「驚き」の選択率：	定型発達者（成人職者） <	発達障害者
・「仲のよい知人や友人が遠くに引っ越すことになったとき」	— 「悲しみ」の選択率：	定型発達者（成人職者） >	発達障害者
	— 「驚き」「喜び」の選択率：	定型発達者（成人職者） <	発達障害者
・「初対面の人になれなれしい言葉で話しかけられたとき」	— 「怒り」「恐怖」「軽蔑」の選択率：	定型発達者（成人職者） >	発達障害者
・「時間をかけたレポートを誤って自分で削除したり、紛失したとき」	— 「悲しみ」の選択率：	定型発達者（成人職者） >	発達障害者
	— 「恐怖」「軽蔑」の選択率：	定型発達者（成人職者） <	発達障害者
・「信頼していた知人や友人に約束を破られたとき」	— 「悲しみ」の選択率：	定型発達者（成人職者） >	発達障害者
	— 「怒り」「軽蔑」の選択率：	定型発達者（成人職者） <	発達障害者
・「大きな地震が起こったとき」	— 「恐怖」の選択率：	定型発達者（成人職者） >	発達障害者
	— 「驚き」の選択率：	定型発達者（成人職者） <	発達障害者

発達障害者と定型発達者によって選択されやすい感情語が異なる場面が複数見いだされたことは、発達障害者と定型発達者の状況理解の違いが少なくないことを示唆している。ある対象者が「経験場面に対応する感情語の選択」に際し、特徴的な回答や逸脱した回答をした場合、相談支援においてコミュニケーションの課題について検討する際に、対象者の状況理解が独特である可能性などを確認する必要がある。

#### 4. 表情写真が表現する感情と表情識別の際の着目箇所を選択

表情識別をする際の着目箇所に関する情報を把握しておくことは、表情による感情識別を苦手とする対象者支援にとって意味を持つ。そこで、「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」のそれぞれの感情を表出した女性の顔写真を呈示し、それぞれの表情から読み取れる感情として最も当てはまるものを「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「驚き」「恐怖」「軽蔑」から1つだけ選ばせた。その上で、選択した感情が強く表れている顔の部分で○で囲むよう、顔写真に直接記入させた（質問紙は、資料2（検査後に実施する質問用紙2）を参照のこと）。なお、この際、○は複数箇所につけてもよいことを伝えた。

定型発達者（成人職者）が発達障害者よりも着目箇所として選択していた割合が多かった箇所は「目」に限られていたが、発達障害者が定型発達者よりも注目箇所として選択していた割合が多かった箇所は「口」や「眉」などの多岐に渡っていた（表4-7）。

「喜び」という快の感情を表出した顔写真に対しては、「目」「口」「鼻唇溝」といった部分が注目されやすく、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」といった不快な感情を表出した顔写真に対しては、「目」や「眉」などの顔の上部が注目されやすい傾向があることが示された。

上記の回答傾向に男女差や年齢区分による違いが見いだされており、検査結果を理解する上で参考になると考えられる。

表4-7 表情写真が表現している感情と表情識別の際の注目箇所の選択における特徴

<p>① 「喜び」を表出した顔写真に対しては、すべての対象者が「喜び」を正しく選択していた。</p> <p>② 「悲しみ」を表出した顔写真に対しては、9割の対象者が「悲しみ」を正しく選択していた。 着目箇所の違い：  <ul style="list-style-type: none"> <li>・「口」「眉間」「鼻唇溝」の選択率： 定型発達者（成人職者） &lt; 発達障害者</li> <li>・「目」の選択率： 定型発達者（成人職者） &gt; 発達障害者</li> </ul> </p> <p>③ 「怒り」を表出した顔写真に対しては、9割の対象者が「怒り」を正しく選択していた。</p> <p>④ 「嫌悪」を表出した顔写真に対しては、7割の対象者が「嫌悪」と回答していた。 定型発達者には見いだされなかった回答として、発達障害者には「喜び」と回答した者がいた。 着目箇所の違い：  <ul style="list-style-type: none"> <li>・「鼻」「口」「眉」の選択率： 定型発達者（成人職者） &lt; 発達障害者</li> </ul> </p>
--

そこで、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の「表情のみ」条件の正答率が平均の8割以下であった発達障害者（42人）の回答を定型発達者と比較した結果について、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の表情写真別に、（ア）表情から読み取れる感情として選択した回答別の全対象者数に占める割合、（イ）（ア）で選択した感情が強く表れているとして指摘された顔の箇所のそれぞれについて、全対象者数に占める割合を示した（表4-8）。（イ）に関しては、表情を識別する際に手がかりとされることが多い顔の箇所である「眉」「眉間」「目」「鼻」「口」「鼻唇溝」のそれぞれについて、対象者が円で囲んでいたかどうか、を判定した。なお、前述の6か所以外が円で囲まれていた場合は「その他」としてカウントした。

表4-8 表情写真が表現している感情と表情の着目箇所の選択率

顔写真	感情	回答						
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
	定型発達 (成人 在職者)		89.2%	0.3%	1.0%	1.0%	1.7%	6.8%
	発達障害者 正答率低群		85.7%		2.4%			4.7%
	注目箇所	眉	眉間	目	鼻	鼻唇溝	口	その他
	定型発達 (成人 在職者)	57.3%	13.9%	91.9%	1.4%	2.4%	25.1%	
発達障害者 正答率低群	63.4%	26.8%	87.8%	7.3%	4.9%	41.5%	9.8%	
	感情	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
	定型発達	0.3%		85.4%	2.7%	4.7%	1.4%	5.4%
	発達障害低群			71.4%	7.1%	9.5%	2.4%	9.5%
	注目箇所	眉	眉間	目	鼻	鼻唇溝	口	その他
定型発達 (成人 在職者)	83.7%	16.6%	96.3%	1.4%	2.0%	38.6%	0.7%	
発達障害者 正答率低群	85.4%	31.7%	85.4%		2.4%	39.0%	2.4%	
	感情	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	鼻唇溝	口	軽蔑
	定型発達		2.0%	0.7%	69.8%	0.3%	0.3%	26.8%
	発達障害低群	11.9%	2.4%	2.4%	59.5%			23.8%
	注目箇所	眉	眉間	目	鼻	鼻唇溝	口	その他
定型発達 (成人 在職者)	53.6%	70.2%	74.9%	2.0%	7.5%	50.8%	1.7%	
発達障害者 正答率低群	73.2%	63.4%	70.7%	4.9%	14.6%	65.9%	2.4%	

定型発達者が着目箇所として選択していた割合が多かった箇所は「目」に集中していたが、発達障害者（「表情のみ」条件における正答率低群）が定型発達者よりも選択していた割合が多かった箇所は「口」や「眉」「眉間」などの多岐に渡っていた。表情からの他者感情の識別を苦手とする発達障害者は、表情識別に多くの顔の箇所を手がかりとして用いている、あるいは有効な手がかりを活用できていない可能性を示唆しており、表情識別に課題がある場合に留意すべき事項である。

この結果は、発達障害者は定型発達者よりも表情識別に多くの顔の箇所を手がかりとして用いている、あるいは有効な手がかりを活用できていない可能性を示唆しており、表情識別に課題がある場合の分析において留意すべき事項と言える。

## 5. 対人関係におけるストレスの把握

発達障害者の対人ストレスを測定する心理尺度を構成する質問項目は、発達障害者の認知特性に配慮するとともに、ストレスの原因となる言動の主体が他者の場合（例：遅刻する人がいて、待たされる）だけでなく、自分の場合（例：あなたの遅刻により、人を待たせる）について尋ねる対項目を含めて作成された（障害者職業総合センター，2014）。

回答は質問項目（表 4-9）で指定された場面を自分が経験した場合、どの程度ストレスを感じるかについて、「0：まったくない」—「4：非常に感じる」の5件法で評定させ、それをその項目の得点（0～4点）とした。また、項目で指定された場面の経験がないために評定できない場合は「経験がないため回答できない」という回答欄に○を記入させ、得点の算出に当たっては欠損値として除外した（質問紙は、資料2（検査後に実施する質問用紙3）を参照のこと）。

表4-9 対人関係におけるストレス尺度の質問項目

1. 同じことを何度も言わなければならない
2. 会議や話し合いなど、グループでの会話中に「何をしゃべったらいいのか」わからなくなる
3. 人が「あなたのことを嫌っているか」気になる
4. 嫌いな人と会話する
5. 忙しそうにしている人に、あなたの仕事の手伝いを頼む
6. 所属しているグループで「自分が孤立している」と感じる
7. 会話中に気まずい沈黙がある
8. 「人が自分に気をつけて話している」と感じる
9. 遅刻する人がいて、待たされる
10. あなたの遅刻により、人を待たせる
11. あなたがある人を嫌っていることを、本人に気づかれる
12. 自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされる
13. あなたが貸した物を期日までに返してくれない
14. 気をつけて、人に合わせた会話をする
15. 自慢話や愚痴を言いたいのに、誰も聞いてくれない
16. 話している人が自分に伝えたいことを、理解できない
17. 自分の言いたいことが、人に上手く伝わらない
18. 忙しいときに、仕事を頼まれる
19. テンポの合わない人と会話する
20. 同じことを何度も言われる
21. 言い争いをする
22. 親しくなりたい人と、なかなか親しくなれない
23. 借りた物を期日までに返せなかった
24. 会議や話し合いなど、グループでの会話中に話の流れがわからなくなる

コミュニケーション・スキルを定型発達者のように使用することが難しい発達障害者にとっては、自分の不適切な言動が相手を不快にさせ、相手からの不快感の表現がストレスの原因となる可能性を想定できる。これらの2種類のストレスを区別して測定することで、新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版によって評価される「曖昧な感情表現に対する快-不快度の評価傾向」を対人ストレスと関連づけて解釈する際の手がかりになることが期待できる。

尺度を構成する項目について、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、4因子を抽出した(表4-10)。

第Ⅰ因子は「忙しいときに、仕事を頼まれる」など、ストレスの原因が他者の言動であることから「他者の言動によるストレス因子」(以下、〈他者の言動〉因子)と命名した(全9項目)。第Ⅱ因子は「所属しているグループで“自分が孤立している”と感じる」「人が“あなたのことを嫌っているか”気になる」など、孤立感や人との関係性に対する気付きが原因で生じるストレスであることから「孤立感や関係性の気付きによるストレス因子」(以下、〈孤立感〉因子)と命名した(全7項目)。第Ⅲ因子は「自分の言いたいことが、人に上手く伝わらない」など、意思の疎通がうまくいっていないことに対する気付きが原因で生じるストレスであることから「意思の疎通に関するストレス因子」(以下、〈意思疎通〉因子)と命名した(全4項目)。第Ⅳ因子は「借りた物を期日までに返せなかった」など、他者に不快感を与える自分の言動が原因で生じるストレスであることから「自分の言動が他者に不快感を与えることによるストレス因子」(〈自己の言動〉因子)と命名した(全3項目)。

因子分析の結果から、今回作成した対人関係におけるストレス尺度は、ストレスの原因が他者の言動にあるのか(〈他者の言動〉因子)、自分の言動にあるのか(〈自己の言動〉因子)、それとも、両者の関係性(〈孤立感〉因子、〈意思の疎通〉因子)にあるのか、といった、ストレスの原因により因子が分類できることが示唆された。また、〈孤立感〉因子と〈意思の疎通〉因子は両方ともストレスの原因は自分と他人との関係性が良好でないことに基づくストレスという点では共通しているものの、後者は前者よりもコミュニケーション・スキルとの関連が深いことが推測できる。

表4-10 対人関係におけるストレス尺度の因子分析（主因子法、プロマックス回転）

番号 項目文	因子						
	I	II	III	IV			
20 同じことを何度も言われる	<b>.755</b>	-.271	.017	.081			
13 あなたが貸した物を期日までに返してくれない	<b>.663</b>	.157	-.163	.002			
1 同じことを何度も言わなければならない	<b>.592</b>	-.023	-.126	.065			
9 遅刻する人がいて、待たされる	<b>.581</b>	.293	-.170	.102			
19 テンポの合わない人と会話する	<b>.506</b>	-.175	.450	.164			
12 自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされる	<b>.488</b>	.181	-.005	-.176			
14 気をつかって、人にあわせた会話をする	<b>.441</b>	.031	.348	-.202			
18 忙しいときに、仕事を頼まれる	<b>.433</b>	-.091	.141	.132			
4 嫌いな人と会話する	<b>.186</b>	.159	.026	-.052			
6 所属しているグループで「自分が孤立している」と感じる	.111	<b>.662</b>	-.224	.033			
7 会話中に気まずい沈黙がある	.124	<b>.629</b>	.043	-.009			
3 人が「あなたのことを嫌っているか」気になる	-.312	<b>.466</b>	.315	.086			
2 会議や話し合いなど、グループでの会話中に「何をしゃべったらいいのか」わからなくなる	-.045	<b>.464</b>	.094	.026			
8 「人が自分に気をつけて話している」と感じる	.111	<b>.418</b>	.050	.256			
11 あなたがある人を嫌っていることを、本人に気づかれる	-.075	<b>.318</b>	.018	.233			
24 会議や話し合いなど、グループでの会話中に話の流れがわからなくなる	.212	<b>.224</b>	.151	.175			
17 自分の言いたいことが、人に上手く伝わらない	-.023	-.079	<b>.761</b>	.083			
16 話している人が自分に伝えたいことを、理解できない	-.171	-.009	<b>.641</b>	.060			
22 親しくなりたい人と、なかなか親しくなれない	.069	.227	<b>.430</b>	-.079			
15 自慢話や愚痴を言いたいのに、誰も聞いてくれない	.222	.160	<b>.394</b>	-.299			
10 あなたの遅刻により、人を待たせる	.081	.036	-.054	<b>.916</b>			
23 借りた物を期日までに返せなかった	.124	.128	.065	<b>.525</b>			
5 忙しいようにしている人に、あなたの仕事の手伝いを頼む	-.246	.208	.176	<b>.296</b>			
	因子寄与率 (%)	19.8	9.3	5.6	4.1		
第1因子：他者の言動		20,13,1,9,19,12,14,18,4,		第2因子：孤立感		6,7,3,2,8,11,24	
第3因子：意思疎通		17,16,22,15		第4因子：自己の言動		10,23,5	

ここでは、4種類のストレス因子のうち、どのストレスが相対的に高いかという定型発達者のストレスの特徴を明らかにするため、同じ因子に含まれる項目の評定値を平均した値を尺度得点として、因子別に算出した。

定型発達者の尺度得点は、自己の言動因子、他者の言動因子、孤立感因子、意思疎通因子の順に高かった。この順位に関しては、先行研究（障害者職業総合センター，2014）の結果と一致していた。ただし、在職者である本研究の対象者については、おおむね、すべての組み合わせで有意差が認められており、大学生・院生の結果よりも明確な違いがあると言える。この尺度得点の並び順は、発達障害においても定型発達者の順位と同様であった。

また、発達障害者の性差について検討した結果、孤立感因子と自己の言動因子においていずれも女性の評定値が低い（ストレスを感じる）結果となった。定型発達者・在職者の結果とは、一部異なるものの女性の方が一貫してストレスを感じる結果は共通している。この点は、発達障害の有無に関わらない特性として留意すべき点である。

次に、男性の34歳以下と35歳以上は4尺度のいずれにおいても有意差は認められなかった。

なお、定型発達者と発達障害者で有意差が認められた項目について検討したところ、定型発達者がより強くストレスを感じると評価したのは、「会議などで“何をしゃべったらいいのか”わからなくなる」の1項目のみで、他の12項目については発達障害者の方がより強くストレスを感じると評価した。

発達障害者が定型発達者よりもストレスを感じる項目は表4-11のとおりであった。

表4-11 発達障害者においてストレスの大きい項目

人が「あなたのことを嫌っているか」気になる
所属しているグループで「自分が孤立している」と感じる
自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされる
あなたが貸した物を期日までに返してくれない
気をつかって、人にあわせた会話をする
自慢話や愚痴を言いたいのに、誰も聞いてくれない
話している人が自分に伝えたいことを、理解できない
自分の言いたいことが、人に上手く伝わらない
忙しいときに、仕事を頼まれる
テンポの合わない人と会話する
親しくなりたい人と、なかなか親しくなれない
会議や話し合いなど、グループでの会話中に話の流れがわからなくなる

これらの有意差が認められた項目に関しては、尺度得点による評価とは別に、発達障害者の特徴として、日頃の対人場面で留意して観察することが必要である。

## 6. より良い活用のために

### —結果解釈における留意事項—

#### (1) 4感情評定版における「怒り」と「嫌悪」の混同について

受信後の対応が共通している点では、「怒り」と「嫌悪」の混同があったとしても、日常生活場面での支障が少ないと考えられることから、正答に準ずるものと判断することが基本である。ただし、対象者の中には、受信後の対応について支援が必要となる場合がある。

このための確認としては、例えば、「相手が怒っていると感じたときにどう対応するか」「相手が嫌な感情を持っていると感じたときどう対応するか」について回答を求めることなどが重要となる。得られた回答は多様であり、「逃げる」「スルーする」「怒り返す」「謝る」「理由を聞く」の他に、「家に帰って布団をかぶる」といった行動がとられていることが明らかとなった。「怒り」と「嫌悪」の混同があったとしても、日常生活場面での支障が少ない対応としては、「まず謝る。それから、何が悪かったか聞いてみる」といった行動をとることが想定される場合に限定される。

なお、こうした場面を想定することに困難があったり、「人とつきあうこと自体がないので考えたこともない」といった受け止め方もあることに注意が必要である。

相手の不快感情の理解と対応は関連づけて初めて対人関係が円滑に行われることになる。他者感情を把握した後の対応の考え方や行動化については、別途、こうした確認を踏まえた支援が計画される必要があると言える。

#### (2) 結果の受け止め方

4感情評定版では、「音声+表情」条件において読み誤りが多い場合であればともかく、「音声+表情」条件において正答率が高い場合、「音声のみ」条件や「表情のみ」条件における読み取りに関する特徴について

は、自覚されにくいという現状があった。だからこそ、「自信がなかった」という場合がある一方で、「正解していると思っていた」という場合には、日常生活では全く問題を感じていなかったことになる。結果をフィードバックすることで、結果の活用について検討する相談場面を設定することが可能となる。実際に、「電話でのやりとりがちぐはぐだったことがある」「怒られてばかりいると感じていたがそうではなかったのかもしれない」といった経験との対応が可能となり、振り返りによって特性を確認することになる例もあった。

また、正解している回答についても自信がなく、時間がかかる、タイムオーバーになるといったことも起こっていた。正解に対しては即時フィードバックによる強化が効果的支援となる可能性があること、さらに、表情識別の際の注目箇所について訓練等を行うことなどで、回答に自信を持つことができる可能性があることなどを踏まえた相談支援の必要性が浮かびあがる。

また快-不快評定版では、楽観的に読む傾向であれ、悲観的に読む傾向であれ、対象者にとって想定外の偏りがある場合、結果のフィードバックは過去での経験を想起して結果と照らし合わせる好機となった。パーセンタイル順位による視覚的な結果表示は4感情評定版における正答率の高低と同様、「思い」とは別に「現実」と向き合うこととなったことから、振り返りによってストレス経験や対人対応の特徴を確認することになった例もあった。

加えて、曖昧な感情表現について必要以上に不快に読む、あるいは、逆に必要以上に快に読む傾向が強い場合、背景にストレスの高い経験がないか、それはどのような経験か等を確認し、対人トラブルの経験の確認とともに相談支援の課題と受けとめることが求められる。

### (3) 補完行動の提案

回答傾向によって、「音声」だけが手がかかりとなる電話対応などの場面では、「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動の必要性が示唆される。あるいは、「表情」に注目する場面でも、必要に応じて「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動の必要性が示唆される場合もある。

また、他者感情の識別に関して、表情に注目すること、そのためには、相手と向かい合って情報を得ること（支援者は向かい合って伝えること）といった提案もまた、留意事項として挙げておきたい。さらには、音声（音調）と言葉と表情を一致させた情報提供及び経験場面の提供の必要性についても検討事項となろう。

その上で、事業所に伝えて、言語で表現することなどを配慮として求めるなどの調整の必要性についても検討が必要である。

### (4) 表情識別訓練の検討

表情から感情を判断する能力は、対人関係を維持する能力と関連性があることが指摘されている。このことは、表情から感情を判断する能力を高めることができれば、対象者の対人能力を高めることができるという可能性を示唆している。表情は言葉に依存しないコミュニケーション手段であることから、訓練によるスキルの向上が望める領域であると考えられる。

また、表情識別のスキルは、知的な能力によるだけでなく、一部は、「経験」によって補うことができるといわれている。したがって、表情識別能力を高めるためには「観察(経験)」に重点を置いた場面設定をすることが望ましい。表情識別の際の注目箇所について訓練等を行うこと、その際、表情と音声（音調）を対応させながら確認するように配慮することなどで、回答に自信を持つことができる可能性がある。視知覚の発達に困難がない対象者の場合、表情識別の訓練を提案することも検討事項である。訓練可能性の判定手続きについては巻末資料を参照のこと。訓練可能性の判定と実施については、障害者職業総合センター調査研究報告書 №39（2000）を参照されたい。

なお、表情識別訓練プログラムの目的は、「他者の感情に配慮しようという構えができること」であり、

さらには「表情等から、的確に相手の感情を知り、それに対応した行動をとろうという動機を持つこと」である。しかし、表情をうまく読みとることができれば、自動的にこの目標が達成されるわけではない。したがって、対人スキルの向上を目指す場合には、さらなるプログラムが必要となる対象者もいると言えるだろう。こうした点については、上記(1)における対応の考え方も重なるものである。

#### (5) 感情語の理解やストレス、経験等の確認について

感情語の快-不快評定では「悲しみ」も「怒り」も「嫌悪」も最も不快度の高いレベルに評定している場合、不快感情全体について区別しない可能性がある。特に「悲しみ」を「怒り」や「嫌悪」と読み誤る回答傾向が指摘されており、その背景に、ストレスの高い経験やつらい経験があるかどうか、経験場面と感情語の対応に通常は起こらないような回答があるかについて検討を行う必要があると言える。

例えば、「怒り」を「快でも不快でもない」とするなど、独特の構えを持っている可能性がある。また、「怒り」と「嫌悪」は類似の感情であるが、「嫌悪」は“ため込む”ので不快であるが、“怒り”は“爆発させる”ので快」といった理解をしている場合など、感情と感情語について、独特の対応があると考えられる。結果の解釈に併せて、その他の情報を確認することもまた、支援の課題を確認する上で重要である。

#### (6) 特性への配慮

「人の表情をみたり、声を聞いたりするのは疲れる」「声を聞くとときに雑音があると気をとられる」「電話は苦手」「クリアな（明瞭な）声は“喜び”でもしんどい、“怒り”も同じ」といった経験がある場合、音に対する感覚過敏との関連を分析した上で支援の課題を検討する必要がある。

また、「考えすぎて頭がパンクした」「顔をみる方が得意で、合わせて声を聞くと、どっちをとっていいかわからなかった」といった検査後の感想があったが、表情識別の際の注目箇所について訓練等を行うこと、その際、表情と音声に対応させながら確認するように配慮することなどで、回答に自信を持つことができる可能性がある。回答傾向の特徴を踏まえた対応についても支援の課題として検討することが必要であると言える。

さらには、「顔をみることが怖い」という発言については「就職面接に失敗した経験が関連している」という訴えがあった。「みた方がよい」ということは分かっているが「できない時は無理をしない」ことを伝えることが重要であり、「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動に加えて、回答傾向の特徴を踏まえた対応についても支援の課題として検討することが必要である。その上で、事業所に伝えて、言語で表現することなどを配慮として求めるなどの調整の必要性についても検討が望まれる。検査結果を知ることには関心があったが、検査課題でなければ「視線を合わせたくない」などもあり、他者感情の把握それ自体に配慮が必要である場合もある。

その他、他者感情の識別に関し、音声からも表情からも情報を十分に活用できないことから、他者感情の理解に関して支援が必要となる可能性が高い場合もある。「相手の気持ちを言葉で確認する」などの補完行動に加えて、回答傾向の特徴を踏まえた対応についても支援の課題として検討することが必要である。その上で、事業所に伝えて、言語で表現することなどを配慮として求めるなどの調整の必要性についても検討が望まれる。

# 結 語

## 1. 本研究の到達点

発達障害者のコミュニケーションや対人態度の問題改善は、職場定着を図る上で緊要の支援課題となっている。発達障害者においては、言語的コミュニケーションのみならず、非言語的コミュニケーション（表情認知・他者感情の理解・視聴覚情報の処理等）の課題を持つことが指摘されており、これらの特性についての客観的評価は、支援・指導において有益な情報となる。

本研究では、新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版における評価結果に基づき、発達障害者の特性に関する検討を行った。

4 感情評定版では、快-不快の混同、不快感情間の混同の傾向について、さらにはコミュニケーション・タイプについて、把握することができる。以下に、4 感情評定版の結果解釈のポイントを示す。

### (1) 快-不快の混同はないか

特に、「音声のみ」条件で快-不快の混同はないか

### (2) 正答率の低い呈示条件は何か

特に、「表情のみ」条件で正答率が低くないか

### (3) 「他者が表出している感情をより不快度が高い方向に読み取る（「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み取る）」傾向はないか

特に、「表情のみ」条件で、「悲しみ」を「怒り」または「嫌悪」と読み間違ふ傾向がないか

### (4) コミュニケーション・タイプから特徴を読み取れているか

また、快-不快評定版では、不快度評定の現れ方に注目することが重要である。以下に、快-不快評定版の結果解釈のポイントを示す。

### (1) 曖昧刺激に対する快-不快評定値は、一般基準の分布より不快もしくは快の方向に偏っていないか

“より不快に評定する”傾向が認められる場合、「怒り」や「嫌悪」「恐怖」に関する主観的な経験やストレスの状況が影響していないか

### (2) 不快度の高い曖昧刺激（A 検査：高不快刺激）への回答と不快度の低い曖昧刺激（B 検査：低不快刺激）への回答のプロフィールは、異なるか

### (3) A 検査・B 検査それぞれの結果は、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の条件によって異なるか

### (4) 読み取りにおいて、快-不快の混同があるか

快の感情を「不快」と読み誤る傾向があるか

不快度の高い曖昧刺激（A 検査：高不快刺激）を「快」と読み誤る傾向があるか

さらに、発達障害の対人ストレスの状況を把握するために、「対人関係におけるストレス尺度」に基づき発達障害者の特性に関する検討を行った。対人ストレスにおいては、ストレスの高い領域・項目に着目した支援が必要である。以下に、結果解釈のポイントを示す。

### (1) よりストレスの高い領域（対人関係におけるストレス因子の尺度）は何か

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版のいずれかの条件で評定値がより低い（より不快に評価する）傾向と関連があるか

### (2) よりストレスの高い項目（対人関係におけるストレス項目）は何か

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版・快-不快評定版の検査結果を踏まえて、発達障害者の特徴を分析する上では、その他の情報（感情語の快-不快評定や経験頻度、感情を喚起する場面と感情語との対応、表情識別の際の着目点、対人ストレスの評価など）について把握することが意味を持つとともに、感情と感情語の対応やラベリングの適切さの確認が求められる場合もあることを明らかにした。

## 2. 今後の課題

本研究において、障害者職業総合センターで開発した新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版及び快-不快評定版に基づく検討を行い、発達障害者の特性を把握し、支援の課題を明確化できることを明らかにした。また、成人職者の基準値を整備することにより、本研究の課題を達成することができた。こうした活動を取りまとめ、支援に活用できるツールとして「新版 F&T 感情識別検査」を完成させるとともに、活用のための手引「新版 F&T 感情識別検査（DVD 版）の実施に当たって」（資料 1 参照）を作成した。なお、この検査は、パソコンにインストールして実施するソフトウェアとして作成されている。

今後は、広く活用に使われるとともに、発達障害者のみならず、コミュニケーションに課題のある者の支援に役立つツールとして、さらにデータを蓄積していくことが求められる。

### 【文献】

Ekman, P. (1982) *Emotion in the human face* (2nd ed.) Cambridge: Cambridge University Press.

(Cited from McAlpine et al., 1992)

Mehrabian, A. (1981). *Silent messages: Implicit communication of emotion and attitudes*, California:

Wadsworth Publishing Company. (西田司・津田幸男・岡村輝人・山口常夫共訳 1986 非言語的コミュニケーション 聖文社)

障害者職業総合センター (2000) 調査研究報告書 №39 知的障害者の非言語的コミュニケーション・スキルに関する研究 .....F&T 感情識別検査の開発 .....

障害者職業総合センター (2014) 調査研究報告書 №119 発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究 .....F&T 感情識別検査拡大版の開発と試行に基づく検討 .....

障害者職業総合センター (2012) F&T 感情識別検査－4 感情版－ (ソフトウェア インストール DVD)

障害者職業総合センター (2017) 新版 F&T 感情識別検査 (ソフトウェア インストール DVD)

# 新版 F&T 感情識別検査（DVD 版）の実施に当たって

## 目 次

- I 新版 F&T 感情識別検査（4 感情評定版）の概要
  - I-1 新版 F&T 感情識別検査（4 感情評定版）実施上の留意事項
    - 1. 新版 F&T 感情識別検査（4 感情評定版）の実施に際して
    - 2. 検査適用者の範囲
    - 3. 環境設定
  - I-2 検査の実施に関する手続きと留意事項
    - 1. 検査前の準備
    - 2. 検査の実施
    - 3. 検査結果の印刷
    - 4. データ管理と個人情報の保護
  
- II 新版 F&T 感情識別検査（快-不快評定版）の概要
  - II-1 新版 F&T 感情識別検査（快-不快評定版）実施上の留意事項
    - 1. 新版 F&T 感情識別検査（快-不快評定版）の実施に際して
    - 2. 検査適用者の範囲
    - 3. 環境設定
  - II-2 検査の実施に関する手続きと留意事項
    - 1. 検査前の準備
    - 2. 検査の実施
    - 3. 検査結果の印刷
    - 4. データ管理と個人情報の保護
  
- III 検査結果の解説のために（支援者向け資料）
  - III-1 4 感情評定版
    - 1. 検査結果の解説について
    - 2. コミュニケーションタイプの解説
    - 3. 訓練可能性の評価について
  - III-2 快-不快評定版
    - 1. 検査結果の解説について
    - 2. 曖昧感情の評価について
    - 3. 快-不快評定版の基準値について

## I -1 新版 F&T 感情識別検査（4 感情評定版）実施上の留意事項

F&T 感情識別検査の開発は、2000 年に行われました。開発の過程に関わる詳細情報は、調査研究報告書 №39 「知的障害者の非言語的コミュニケーション・スキルに関する研究一 F&T 感情識別検査及び表情識別訓練プログラムの開発一」を御覧下さい（調査研究報告書並びに検査実施要領については、障害者職業総合センターのホームページからダウンロードすることができます）。

<http://www.nivr.jeed.go.jp/research/report/houkoku/houkoku39.html>

なお、F&T 感情識別検査（2000 年度版）は、「検査用ビデオ」を「再生用ビデオデッキによりスクリーンやモニター画面上に再生」し、回答者（被検査者）が回答を所定の用紙に記入する形式でした。このため、検査後の採点、回答結果の整理、コミュニケーションタイプの判定などの作業は、検査者がエクセル等を用いて行うこととなり、被検査者が多い場合など、作業が繁雑となることが課題として指摘されておりました。

そこで、ビデオからDVD形式に改修するとともに、検査実施から評価票作成までの一連の過程をすべてパソコン上で自動に行うための改訂を行いました。

具体的には、被検査者の回答方法に関して、所定の用紙に記入する形式から、マウスを用いて回答する形式に変更し、結果を検査終了後、即時に、画面上で確認できるようにしました。

このため、従来の F&T 感情識別検査（2000 年度版）とは、実施上の留意事項等が異なっておりますので、ご注意ください。

さらに、このたび「快-不快評定版」の新規開発と併せて、新版 F&T 感情識別検査を構成する検査として名称変更を行い「4 感情評定版」としました。また、個人情報保護や小集団実施の場合の結果表作成についてもパソコン上で行うための改修を加えましたが、検査については「4 感情版」からの変更はありません。

### 1. 新版 F&T 感情識別検査（4 感情評定版）の実施に際して

F&T 感情識別検査（2000 年度版）は、知的障害のある者を対象として開発されました。その後、発達障害のある者にも活用されておりますが、検査をパソコンで実施するに当たって、検査者（支援者）の操作説明等が活用可能性を左右します。

特に、マウスの操作が円滑に行えない場合には、パソコン版の利用を中止するか、「被検査者が回答を口頭で支援者に伝え、支援者がマウスで入力する」という形式で行うか、の判断が必要となります。

なお、パソコン版で実施する場合、回答は、必ずマウスを用いた入力形式で行うこととなりますが、この入力形式で行うと、採点と回答結果の整理、コミュニケーションタイプの判定が自動計算で得られ、また、画面上に示された情報をそのまま印刷することができます。

ただし、コミュニケーションタイプの判定については、全条件を所定の順序で1か月以内に行った場合にのみ呈示されますので、ご注意ください。実施順序の判定は、日時入力画面に入力していただいた日時に基づき、ソフトウェアが自動的に行います。

## 2. 検査適用者の範囲

新版 F&T 感情識別検査4感情評定版は「幸福（うれしい）」「悲しい」「怒り」「嫌悪」の4つの感情を弁別可能な者を対象としています。そのため、知的発達に遅れがない場合は、生活年齢で7歳以上を一応の目安としています。ただし、4感情の弁別ができる者であれば、対象者となります（5～6歳児にも適用可能な場合があります）。

また、知的発達に遅れが認められる場合は、4感情の弁別ができることが、検査を行う上での条件となります（適応範囲であるかどうかの査定については、調査研究報告書 №39の資料として掲載した実施手引を参照してください）。

ただし、本検査結果で参照している基準値は「成人」のデータですので、適用する対象者の年齢によっては、該当年齢の基準値をあらかじめ取得した上で実施する必要があります。

## 3. 環境設定

### （1）検査実施の推奨環境

OS：Windows 7 / 8.1 / 10 に対応します。

CPU：Pentium(R)4 CPU 2.40GHz 相当以上で動作環境が設定されています。

ディスプレイ：14インチ以上を推奨します。

DVDドライブ、マウスの装備、ヘッドホン端子の装備が必要です。

外部出力により実施する場合には、サウンド機能とスピーカーの装備が必要です。

### （2）検査実施の環境設定

ディスプレイ解像度：1024×768以上／ディスプレイ色数：32bit以上推奨

（解像度の設定は不要ですが、文字サイズの設定については確認が必要です。

「インストールマニュアル」を参照してください。）

Windows 7（32ビット版、64ビット版）、Windows 8.1（32ビット版、64ビット版）、Windows 10（32ビット版、64ビット版）のいずれかを指定してインストールします（シリアル番号が必要です。P.195の「問い合わせ先」にご連絡ください。）。

その他、検査実施に必要なインストールに関する留意事項等は、「インストールマニュアル」を参照してください。

### （3）インストール並びにデータの保存に関する事項

① インストールマニュアルは、DVD内に保存されています。

管理者権限及びデータに関する留意事項、ローデータの取り扱い等については、DVD内の操作マニュアルに保存されています。

インストールしたパソコンにおいては、ソースデータ並びにプログラムを隠しファイルとし、管理者以外がローデータにアクセスできないようになっています。

② ローデータ（累積データ）は、エクセルファイルにてダウンロード可能です。

結果表については管理者メニューから随時の閲覧と印刷が可能ですが、個人情報保護の点からファイルには出力されません。なお、データ一覧については、ダウンロードが可能（MS Excel2003形式）です。管理者の責任において適切に管理してください。

#### (4) 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の全体構成

##### (1) 検査メニューの選択

- 1) 検査メニュー画面
- 2) 被検査者情報入力画面
- 3) 被検査者情報入力確認画面
- 4) 回答形式の説明画面
  - 練習説明画面
  - 練習実施画面
  - 修正説明画面
  - 修正練習実施画面

##### (2) 検査実施画面

###### 検査選択画面

全条件一括実施と個別条件による実施の場合の選択画面

###### ① 「音声」条件回答方法説明画面

回答方法の説明画面

検査の注意画面

回答形式の説明画面

(練習説明画面／練習実施画面／修正説明画面／修正練習実施画面)

検査実施画面 (32 課題 × (番号呈示画面／刺激呈示画面／評定画面))

###### ② 「表情」条件回答方法説明画面

回答形式の説明画面

(練習説明画面／練習実施画面／修正説明画面／修正練習実施画面)

検査実施画面 (32 課題 × (番号呈示画面／刺激呈示画面／評定画面))

###### ③ 「音声+表情」条件回答方法説明画面

回答方法の説明画面

検査の注意画面

回答形式の説明画面

(練習説明画面／練習実施画面／修正説明画面／修正練習実施画面)

検査実施画面 (32 課題 × (番号呈示画面／刺激呈示画面／評定画面))

## I-2 検査の実施に関する手続きと留意事項

### 1. 検査前の準備

#### (1) 被検査者情報（ID（識別記号）と登録者データ）を登録します。

被験者登録画面に入力して新規登録を行います。

登録者データの中から実施者を選択して検査を行います。

ID（識別記号）はアルファベットと数字、スペースが使用できます（20文字以内）。

個人情報保護の点から、ID（識別記号）と氏名等の対応表は管理者の責任において別途管理していただくことをお勧めします。

入力エラー等については、操作マニュアルを参照してください。

#### (2) モニター画面の中心に示された ● に正対するように「いす」の高さを調整します。

#### (3) マウスを用いた回答の練習をします。

回答については、特にマウスによる回答が可能かどうかを判断してください。

練習には、「回答の練習」と「回答の変更（修正）の練習」の2種類がありますが、「全条件で実施」でも「条件ごとの実施」でも、冒頭に必ず1回は実施します。

回答練習（入力ボタンを押す）並びに修正練習（「入力した回答を修正する）」については、刺激呈示ではなく、音声（ナレーション）による指示で行いますが、個別に対応することが必要となる場面では、検査者（支援者）が適宜、教示・指示・説明を加え、操作方法が理解されていることを確認してください。

回答の練習（8 試行）と修正の練習（4 試行）は、マウスを使った回答方法によって「本検査が実施可能かどうか」を判定する意味を持っています。

回答の練習の結果は 8 試行実施後、修正の練習の結果は 4 試行実施後に呈示されます。全問正解の場合は、検査実施に進みます。

全問正解でなかった場合には、もう一度、練習 8 試行と修正練習 4 試行を繰り返し実施します。

それでも全問正解に至らなかった場合には、マウスによる回答は検査者が行い、被検査者は検査者に回答を口頭で伝える方法に変更します。

練習は以下のように編集されています。

(回答形式の練習：4 感情ランダム) × 2 試行

画面は以下を 8 回繰り返します。

「ナレーションでボタンの選択」→「選択したボタンのみ呈示」

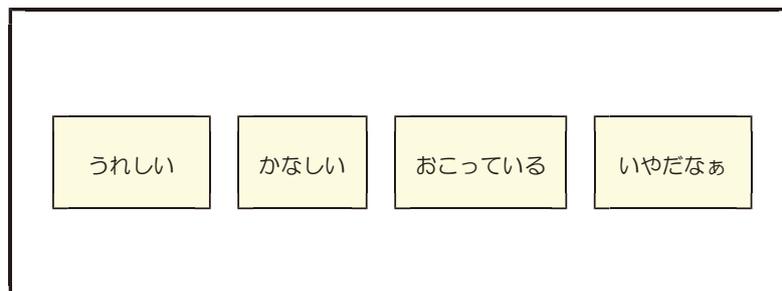
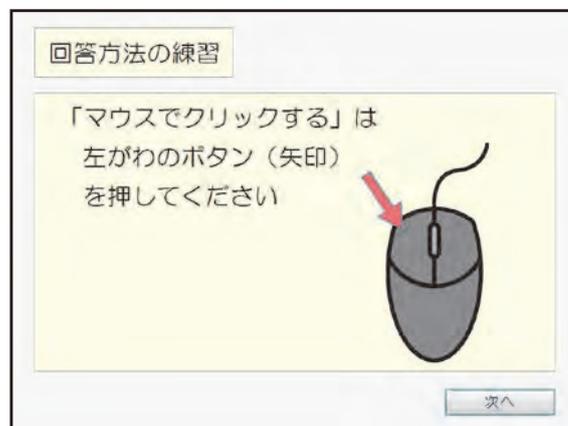
8 試行終わったところで「結果をフィードバック」→「修正の練習」

被検査者がボタンを選択する時間は 3 秒ですが、選択に時間がかかる場合には、**Esc キーで一時停止できます（ナレーションの間は停止できません）。**

一時停止した場合には、「再開する」か「終了する」かを選択できます。

ボタンの選択後 3 秒後に次のナレーションが入ります。

### 【練習（その 1）開始時の表示画面】



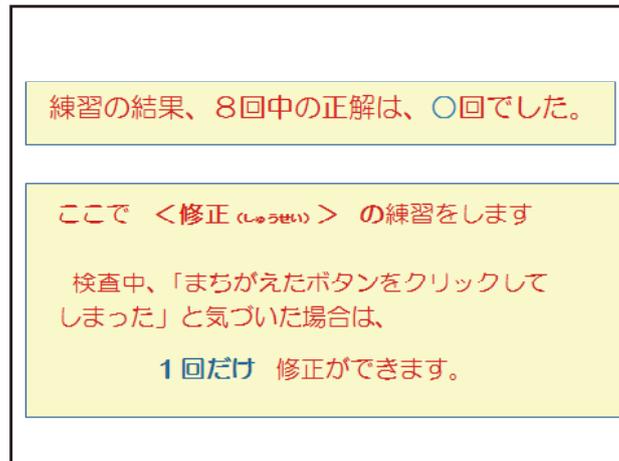
<ナレーションが入ります>

(4感情 ×2 セット=8 試行)

例： 「うれしい」をクリックしてください

「うれしい」をクリックしてください」と指示し、回答を選択させる。  
以下、4感情をランダムに選択させる（練習は4感情 ×2 セット=8 試行）。  
選択した感情以外は画面から消えます。

#### 【練習結果の表示画面】



#### (4) マウスを用いた回答の修正練習をします。

修正練習は以下のように編集されています (4感情 × 1 試行)。

画面は以下を4回繰り返します。

「ナレーションで修正指示：選択したボタンのみ呈示」 → 「4つのボタン呈示」 → 「ボタンの選択」 → 「選択したボタンのみ呈示」

4 試行終わったところで「結果をフィードバック」 → 「再練習」 or 「検査の実施」

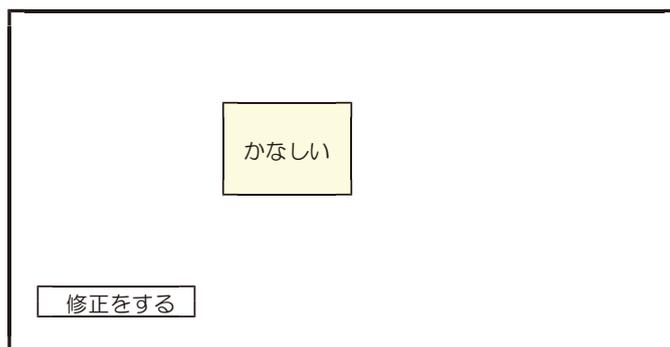
被検査者がボタンを選択する時間は3秒ですが、選択に時間がかかる場合には、

**Esc キーで一時停止できます。**

一時停止した場合には、「再開する」か「終了する」かを選択できます。

ボタンの選択後3秒後に次のナレーションが入ります。

### 【修正練習開始時の表示画面】



<ナレーションが入ります>

(4感情×1セット=4試行)

例：「うれしい」をクリックしたかったのですが、まちがって「悲しい」をクリックしてしまいました。  
【修正をする】をクリックすると選択画面にもどりますので、「うれしい」をクリックしてください。

選択した感情以外は画面から消えています。

選択した感情を修正したい場合には「修正をする」ボタンを押すと4感情のボタンが現れて、再度選択できるようになります。

修正選択した感情以外は画面から消えます。

回答の変更（修正）は、実際の検査場面でも1課題について1回だけできるように設定されています。

回答の練習（8試行）と修正の練習（4試行）で、マウスを使った回答方法によって「本検査が実施可能かどうか」を判定した結果から

「検査を実施する」「回答練習をもう1回実施する」「修正練習をもう1回実施する」のいずれかの画面に強制的に進むように設定されています。

検査者や被検査者の選択はできません。

全問正解 → 検査実施へ

練習と修正練習で不正解あり → 両方の練習を実施

練習のみに不正解あり → 回答練習をもう1回実施

修正練習のみに不正解あり → 修正練習をもう1回実施

## 【修正練習結果の表示画面】

(練習の結果： 8回中の正解は、○回でした)  
(修正の練習の結果： 4回中の正解は、○回でした)

(検査の実施に進みます)

(検査では、マウス操作は検査者にまかせてください。  
「うれしい」「悲しい」「怒っている」「嫌だなあ」のどれが  
あなたの回答かを、言葉で検査者に伝えてください)

回答方法を変える 検査を始める

選択によって  
表示文を  
変更

(5) 回答練習の結果によって、検査を実施するか、回答方法を変更するのかを決めます。  
なお、練習の場面だけでなく、検査実施中でも ESC により、「一時停止」→「再開」ができます。

回答の練習の結果： 8回中の正解は、○回でした。  
修正の練習の結果： 4回中の正解は、○回でした。

画面の指示にしたがって進んでください

(検査の実施に進みます)  
(もう1回練習をします)  
(もう1回修正の練習をします)

結果によって  
表示文を  
変更

「回答方法を変える」を選択すると、「支援者がマウス操作をする」を確認する場面が開きますので、「支援者がマウス操作をする」をクリックして検査を開始します。

## 2. 検査の実施

### (1) 実施条件の選択

基本的には「音声のみ」「表情のみ」「音声＋表情」の順に各 32 課題を実施します。

条件ごとに、日や時間帯を変えて実施することも可能ですが、コミュニケーションタイプを判定するには、3 条件を「音声のみ」「表情のみ」「音声＋表情」の順で実施します（「音声＋表情」のみを実施したいなどの場合は除きます）。なお、条件ごとに実施した場合、条件ごとの回答の傾向は呈示されますが、1か月以内に指定の順序で実施されていない場合は、コミュニケーションタイプは判定できません。

条件ごとに日や時間帯を変えて実施する場合、1か月以内であれば回答の練習をせずに検査を実施することも可能です。

### (2) 検査実施時の練習

検査実施前に、各条件に「練習する」が設定されていますので、練習が必要かどうかを被検査者に確認し、必要に応じて選択させてください（マウスの操作に不安がなければ、練習をとばして検査を実施して差し支えありません）。

なお、本検査で行う「練習」と「修正の練習」は、いずれも 4 試行ずつです。

### (3) 検査実施時の説明

検査の注意事項や進め方については、被検査者が適正に理解できるよう、必要に応じて支援してください。

以下の説明は、全条件実施の場合も、条件ごとに実施の場合も、共通です。

#### ① 「音声のみ」条件の具体的な回答方法の説明

これから、いろいろな人が、「うれしい気持ち」  
「かなしい気持ち」  
「おこっている気持ち」  
「いやだなあという気持ち」でセリフを言います。  
その声を聞いて、その人が今、どんな気持ちでいるかを教えてください。

#### 【検査の注意】

チャイム音 → 番号 → 『音声の呈示』 → 回答

「音声」の検査では、チャイムがなって番号が出ます。  
それから声が聞こえます。  
最後までよく聞いてから回答を選びます。

### 【回答形式の説明】

声を聞いて画面の「うれしい」「かなしい」「おこっている」「いやだなあ」の4つのボタンのうち、1つを選んでマウスでクリックします。

迷うこともあるかもしれませんが、答えは1つに決めます。

答えるのは、声を聞いたときのあなたの気持ちではありません。

声を出した人がどんな気持ちでいるかです。

### 【検査の実施】

検査は以下のように編集されています（「音声のみ」条件で32課題）。

チャイム音→ 番号呈示（5秒間）→ 『音声の呈示』 → 評定（6秒間）

### 【評定画面】

The screenshot shows a rectangular interface with four yellow buttons arranged horizontally. From left to right, the buttons are labeled: 'うれしい', 'かなしい', 'おこっている', and 'いやだなあ'. Below these buttons is a single white button with a black border labeled '修正をする'.

選択した感情以外は画面から消えます。

選択した感情を修正したい場合には「修正をする」ボタンを押すと4感情のボタンが現れて、再度選択できるようになります。

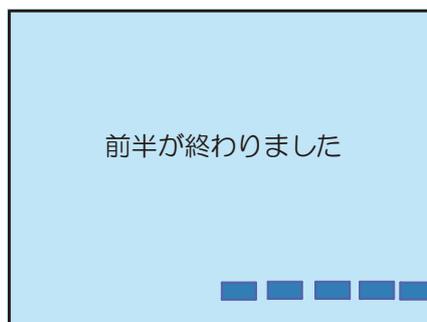
修正選択した感情以外は画面から消えます。

ただし、「修正する」を選択した場合には、4感情のボタンが画面に呈示されてから次の刺激呈示までの時間を自動的に3秒加算します。

16課題回答後、10秒間の休憩画面が入ります（被検査者には休憩の長さは伝えません）。

後半の5秒前からメータゲージがカウントダウンします。

静かに待つよう配慮してください。



## ②「表情のみ」条件の具体的な回答方法の説明

これから、いろいろな人が、「うれしい気持ち」  
「かなしい気持ち」  
「おこっている気持ち」  
「いやだなあという気持ち」の表情（顔）を見せます。

表情（顔）をよく見て、その人が今、どんな気持ちでいるかを答えてください。

### 【検査の注意】

チャイム音 → 番号 → 『表情の呈示』 → 回答

「表情」の検査では、チャイムがなって番号が出ます。  
「表情」の検査では、顔は見えますが声は聞こえません。  
最後までよく見てから回答を選びます。

### 【回答形式の説明】

顔を見て画面の「うれしい」「かなしい」「おこっている」「いやだなあ」の4つのボタンのうち、1つを選んでマウスでクリックします。

まよふこともあるかもしれませんが、答えは1つに決めます。

答えるのは、画面に出ている人の表情を見たときのあなたの気持ちではありません。  
画面に出ている人がどんな気持ちでいるかです。

### 【検査の実施】

検査は以下のように編集されています（「表情のみ」条件で32課題）。

チャイム音 → 番号呈示（5秒間） → 『表情の呈示』 → 評定（6秒間）

回答方法については、「音声のみ」条件と同じです。

## （3）「音声＋表情」条件の具体的な回答方法の説明

これから、いろいろな人が、「うれしい気持ち」  
「かなしい気持ち」  
「おこっている気持ち」  
「いやだなあという気持ち」を表情と声で表現します。

声を聞き、画面の表情（顔）を見て、その人が今、どんな気持ちでいるか答えてください。

## 【検査の注意】

チャイム音 → 番号 → 『音声と表情の呈示』 → 回答

「音声+表情」の検査では、チャイムがなって番号が出ます。

「音声+表情」の検査では、声が聞こえ、同時に表情（顔）を見せます。

最後までよく聞き、よく見てから回答を選びます。

## 【回答形式の説明】

声を聞き、顔を見て画面の「うれしい」「かなしい」「おこっている」「いやだなあ」の4つのボタンのうち、1つを選んでマウスでクリックします。

まよふこともあるかもしれませんが、答えは1つに決めます。

答えるのは、声を聞き、画面の表情を見たときのあなたの気持ちではありません。

画面に出ている人がどんな気持ちでいるかです。

## 【検査の実施】

検査は以下のように編集されています（「音声+表情」条件で32課題）。

チャイム音→番号呈示（5秒間）→『音声+表情の呈示』→評価（6秒間）

回答方法については、「音声のみ」条件と同じです。

## 3. 検査結果の印刷

被検査者用個別結果は以下の2種類です。管理者メニューから印刷できます。

- 新版 F&T 感情識別検査（4感情評定版）結果その1 回答結果
- 新版 F&T 感情識別検査（4感情評定版）結果その2 コミュニケーションタイプと  
タイプの説明

結果表示画面の印刷ボタンを押すとプリントアウトできます。

いずれもA4判（横）に印刷する形式です。

その他、ローデータや支援者用解説も管理者メニューから印刷できます。

結果表にはID（識別記号）が印刷されますが、利用者用結果を説明する際には被験者氏名を書いて呈示できるよう「氏名欄」を設けてありますので、必要に応じてご利用ください（記入は手書きです）。

全条件を一連の検査として実施しない場合は、コミュニケーションタイプを判定することはできないように設定してあります。

条件ごとに実施した結果からタイプを算定する場合、以下の実施手引きにしたがって判定することは可能ですが、検査条件が変わることなどを考慮すると、あくまでも参考程度にとどめていただくことが必要です。

<http://www.nivr.jeed.go.jp/research/report/houkoku/houkoku39.html>

## 4. データの管理と個人情報の保護

データをダウンロードしたファイルは、「個人情報」として適切に管理してください。

### (1) 検査結果の閲覧・印刷：被検査者用

ID（識別記号）を選択すると、当該被検査者の結果が表示されます。

### (2) 検査結果の閲覧・印刷・入力：検査者（管理者）用

支援者（データ管理者）が複数の被検査者のデータを閲覧・印刷する場合、管理者権限により、以下の手順でデータの確認ができます。

- ① 【Ctrl + M】のキー操作でパスワードを入力する画面が開きます（管理者メニュー以外からは検査結果をみることはできません）。
- ② パスワードを入力して被検査者情報を閲覧・印刷してください（パスワードが必要です／P.195の「問い合わせ先」にご連絡ください。また、パスワードの取得及び変更については、操作マニュアルをご覧ください）。
- ③ 管理者用のデータファイルでは、複数の被検査者のローデータが累積してID（識別記号）で示されています。

「ID（識別記号）」または「ID（識別記号）の登録日」で検索ができます。閲覧したいデータを選択すると、結果の画面が開き、印刷可能となります。

なお、累積データファイルでは、回答が数値化されて表示されています。

（1：うれしい／2：かなしい／3：おこっている／4：いやだなあ）

また、累積データファイルには、マウス操作を検査者に変更して実施した場合、その情報が記載されています。

なお、制限時間内に回答が選択できなかった場合、累積データファイルでは【－】で示されます。また、「結果その1」のマトリクスで示された数字は合計しても32になりません。

一方、小集団実施をした場合、所定の方法でデータの入力を行うと、その情報が累積データに記載され、自動計算された結果の閲覧と印刷ができます。手順については、操作マニュアルをご覧ください。

なお、小集団実施を行う場合には、スクリーン等に投影し、被検査者が個別に回答用紙に記入する形式で行います。回答用紙は検査に同梱されています。

### (3) 被検査者情報のデータファイルの取り扱い

被検査者の累積データファイルには、ID（識別記号）で一覧が記載されています。

なお、ファイルにID（識別記号）に対応した個人情報が格納されていますので、パソコンを廃棄する等の場合、新版 F&T 感情識別検査を適切にアンインストールする必要があります。

個人のローデータには、本検査の各条件における正解が記載されています。  
管理者のみ利用可能なデータです。  
そのため、管理者以外の者がみること並びに配布等を禁止しています。

累積データにはすべての実施ログが残るように設定されていますので、一時停止により中断した結果についてもみることができます。

シリアル番号及び管理者メニューのパスワードについてのお問い合わせ

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構

障害者職業総合センター 研究企画部 企画調整室

電話 043-297-9067

電話でお問い合わせください

## Ⅱ-1 新版 F&T感情識別検査（快-不快評定版）実施上の留意事項

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版の開発は、2014 年に行われました。開発の過程及び基準値作成に関わる詳細情報は、調査研究報告書 №119 「発達障害者の非言語的コミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究 — F&T 感情識別検査拡大版の開発と試行に基づく検討—」及び調査研究報告書 №136 「発達障害者の非言語的コミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究（その2）—新版 F&T 感情識別検査に基づく検討—」を御覧下さい（調査研究報告書並びに検査実施要領については、障害者職業総合センターのホームページからダウンロードすることができます）。

<http://www.nivr.jeed.go.jp/research/report/houkoku/houkoku119.html>

<http://www.nivr.jeed.go.jp/research/report/houkoku/houkoku136.html>

なお、新版 F&T 感情識別検査は、このたび新規に開発した「快-不快評定版」と 2000 年に開発した「4 感情評定版」（p.182 ～ p.195）から構成されており、他者感情の識別に関する評価を踏まえ、支援の課題を明らかにする上で活用が期待されています。

### 1. 新版 F&T 感情識別検査（快-不快評定版）の実施に際して

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版は、発達障害のある者を主な対象として開発されました。

4 感情評定版と同様、知的障害のある者にも活用可能ですが、検査をパソコンで実施するに当たって、検査者（支援者）の操作説明等が活用可能性を左右します。

特に、4 感情評定版を実施した際にマウスの操作が円滑に行えないなどで、「被検査者が回答を口頭で支援者に伝え、支援者がマウスで入力する」という形式で行った場合には、快-不快評定版においても同様に支援者が入力するか、パソコン版の利用を中止して紙筆検査として実施し、管理者メニューによってデータ入力を行うことで結果を得ることができます。

この検査を一連の順序で行った場合、採点と回答結果の整理、パーセンタイル順位の判定が自動計算で得られ、また、画面上に示された情報をそのまま印刷することができます。

ただし、パーセンタイル順位の判定については、全条件を所定の順序で連続して行った場合のみ呈示されますのでご注意ください。

### 2. 検査適用者の範囲

新版 F&T 感情識別検査快-不快評定版は 18 歳以上の在学中または職業経験のある成人を対象として基準値を整備した検査です（検査結果で参照する基準値は 5 区分（p.214-217）です）。したがって、適用する対象者の年齢が 17 歳以下であると、ローデータは記録されますがパーセンタイル順位を算出できません。

また、9 段階の快-不快の評定が求められますので、快-不快の弁別ができることが、検査を行う上での条件となります。（快-不快の弁別可能性の評価については本報告書の資料2に掲載した「検査前に実施する質問用紙の調査項目3」が参考となります）

### 3. 環境設定

#### (1) 検査実施の推奨環境

OS：Windows 7 / 8.1 / 10 に対応します。

CPU：Pentium(R)4 CPU 2.40GHz 相当以上で動作環境が設定されています。

ディスプレイ：14 インチ以上を推奨します。

DVD ドライブ、マウスの装備、ヘッドホン端子の装備が必要です。

外部出力により実施する場合には、サウンド機能とスピーカーの装備が必要です。

#### (2) 検査実施の環境設定、

ディスプレイ解像度：1024×768 以上 / ディスプレイ色数：32bit 以上推奨

(解像度の設定は不要ですが、文字サイズの設定については確認が必要です。

「インストールマニュアル」を参照してください。)

Windows 7 (32 ビット版、64 ビット版)、Windows 8.1 (32 ビット版、64 ビット版)、Windows 10 (32 ビット版、64 ビット版) のいずれかを指定してインストールします (シリアル番号が必要です / P.204 の「問い合わせ先」にご連絡ください)。

その他、検査実施に必要なインストールに関する留意事項等は、「インストールマニュアル」を参照してください。

#### (3) インストール並びにデータの保存に関する事項

① インストールマニュアルは、DVD 内に保存されています。

管理者権限及びデータに関する留意事項、ローデータの取り扱い等については、DVD 内の操作マニュアルに保存されています。

インストールしたパソコンにおいては、ソースデータ並びにプログラムを隠しファイルとし、管理者以外がローデータにアクセスできないようになっています。

② ローデータ (累積データ) は、エクセルファイルにてダウンロード可能です。

結果表については管理者メニューから随時の閲覧と印刷が可能です。個人情報保護の点からファイルには出力されません。

なお、データ一覧については、ダウンロードが可能 (MS Excel2003 形式) です。管理者の責任において適切に管理してください。

#### (4) 新版 F&T 感情識別検査 快-不快評定版の全体構成

##### (1) 検査メニューの選択

- 1) 検査メニュー画面 (4 感情評定版と共通)
- 2) 被検査者情報入力画面 (4 感情評定版と共通)
- 3) 被検査者情報入力確認画面 (4 感情評定版と共通)

##### (2) 検査実施画面

###### 検査選択画面

###### ① 「音声」条件回答方法説明画面

回答方法の説明画面

検査の注意画面

回答形式の説明画面

(練習説明画面／練習実施画面／修正説明画面／修正練習実施画面)

練習実施画面 (1 課題 × (番号呈示画面／刺激呈示画面／評定画面))

検査実施画面 (23 課題 × (番号呈示画面／刺激呈示画面／評定画面))

###### ② 「表情」条件回答方法説明画面

回答形式の説明画面

練習実施画面 (1 課題 × (番号呈示画面／刺激呈示画面／評定画面))

検査実施画面 (23 課題 × (番号呈示画面／刺激呈示画面／評定画面))

###### ③ 「音声+表情」条件回答方法説明画面

回答方法の説明画面

練習実施画面 (1 課題 × (番号呈示画面／刺激呈示画面／評定画面))

検査実施画面 (23 課題 × (番号呈示画面／刺激呈示画面／評定画面))

## Ⅱ-2 検査の実施に関する手続きと留意事項

### 1. 検査前の準備

(1) 被検査者情報（ID（識別記号）と登録者データ）を登録します。

被験者登録画面に入力して新規登録を行います。

登録者データの中から実施者を選択して検査を行います。

ID（識別記号）はアルファベットと数字が使用できます。個人情報保護の点から、ID（識別記号）と氏名等の対応表は管理者の責任において別途管理していただくことが必要です。

入力エラー等については、操作マニュアルを参照してください。

(2) モニター画面の中心に示された ● に正対するように「いす」の高さを調整します。

### 2. 検査の実施

(1) 実施条件の選択

基本的には「音声」「表情」「音声＋表情」の順にそれぞれ練習1課題＋ 23 課題を実施します。

なお、快-不快評定版は条件ごとに実施することはできません。検査を中断した場合、それまでの回答の結果は記録されますが、パーセントイル順位は自動計算では判定できません。

実施順が指定されています（順不同には実施できません。「音声＋表情」を実施後、検査が終了します）。

4感情評定版でマウス操作を検査者に変更して実施した場合には、快-不快評定版でも同様にマウス操作を検査者に変更して実施してください。

## (2) 検査実施時の練習

検査実施前に、各条件に「練習」が設定されていますが、練習課題も結果評価に反映されますので、必ず実施します。

## (3) 検査実施時の説明

検査の注意事項や進め方については、被検査者が適正に理解できるよう、必要に応じて支援してください。

### ①「音声のみ」条件の具体的な回答方法の説明

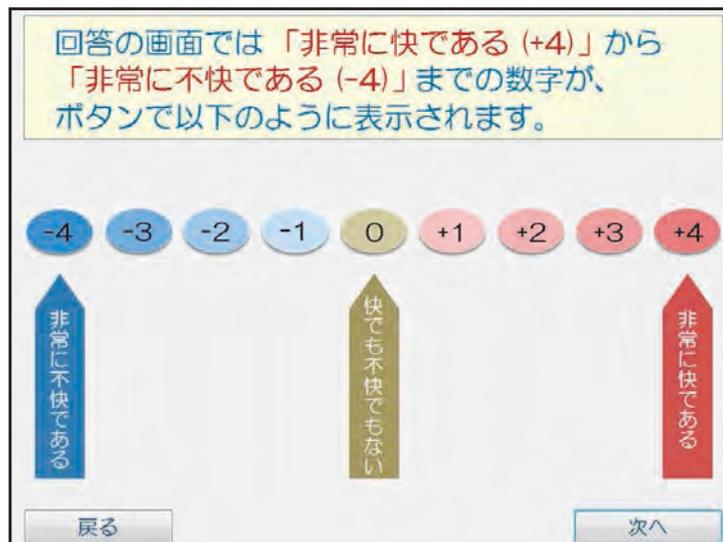
これから、いろいろな人がセリフを言います。  
その声を聞いて、その人が今、どの程度、快または不快なのか、を教えてください。

#### 【検査の注意】

チャイム音 → 番号 → 『音声の呈示』 → 回答

「音声」の検査では、チャイムがなって番号が出ます。  
それから声が聞こえます。  
最後までよく聞いてから回答を選びます。

#### 【回答形式の説明】



検査中、間違えたボタンをクリックした場合は1回だけ修正ができます。  
修正する時は「修正をする」のボタンをマウスでクリックします。  
ボタンが再び表示されるので、クリックし直して下さい。

答えるのは、声を出した人の「快-不快の程度」です。  
声を聞いたときのあなたの気持ちではありません。

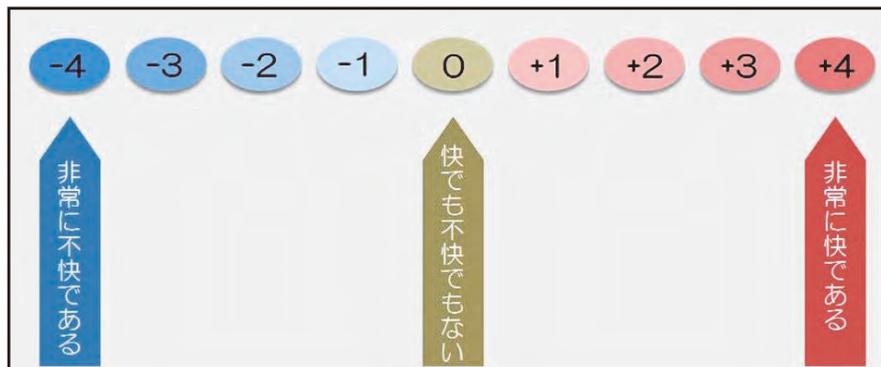
また、回答には時間制限があります。  
時間が来ると次の課題に進みますので、時間内にボタンをクリックしてください。

## 【検査の実施】

検査は以下のように編集されています（「音声」条件で練習 1 課題 検査 23 課題）。

チャイム音 → 番号呈示（5秒間） → 『音声の呈示』 → 評定（5秒間）

## 【評定画面】



### <ナレーションが入ります>

選択したボタン以外は画面から消えます。

選択したボタンを修正したい場合には、選択後の画面に現れる「修正をする」ボタンを押すと9つの「数字」ボタンが現れて、再度選択できるようになります。

修正選択したボタン以外は画面から消えます。

ただし、「修正する」を選択した場合には、9つの数字ボタンが画面に呈示されてから次の刺激呈示までの時間を自動的に3秒加算します。

## ②「表情のみ」条件の具体的な回答方法の説明

これから、いろいろな人の表情（顔）を見せます。  
表情（顔）をよく見て、その人が今、どの程度、快または不快なのか、を教えてください。

## 【検査の注意】

チャイム音 → 番号 → 『表情の呈示』 → 回答

「表情」の検査では、チャイムがなって番号が出ます。  
「表情」の検査では、顔は見えますが声は聞こえません。  
最後までよく見てから回答を選びます。

### 【回答形式の説明】

答えるのは、画面に出た人の「快-不快の程度」です。  
画面に出た人の表情（顔）を見たときのあなたの気持ちではありません。

また、回答には時間制限があります。  
時間が来ると次の課題に進みますので、時間内にボタンをクリックしてください。

### 【検査の実施】

検査は以下のように編集されています（「表情のみ」条件で練習 1 課題 検査 23 課題）。

チャイム音 → 番号呈示（5秒間） → 『表情の呈示』 → 評定（5秒間）

回答方法については、「音声のみ」条件と同じです。

### （3）「音声+表情」条件の具体的な回答方法の説明

これから、いろいろな人が声と表情（顔）で気持ちを表現します。  
声を聞き、画面の表情（顔）をよく見て、その人が今、どの程度、快または不快なのか、  
を教えてください。

### 【検査の注意】

チャイム音 → 番号 → 『音声と表情の呈示』 → 回答

「音声+表情」の検査では、チャイムがなって番号が出ます。  
「音声+表情」の検査では、声が聞こえ、同時に表情（顔）を見せます。  
最後までよく聞き、よく見てから回答を選びます。

### 【回答形式の説明】

答えるのは、声を聞き、画面の表情を見たときのあなたの気持ちではありません。  
画面に出ている人がどんな気持ちでいるかです。

また、回答には時間制限があります。  
時間が来ると次の課題に進みますので、時間内にボタンをクリックしてください

### 【検査の実施】

検査は以下のように編集されています（「音声+表情」条件で練習 1 課題 検査 23 課題）。

チャイム音 → 番号呈示（5秒間） → 『音声+表情の呈示』 → 評定（5秒間）

回答方法については、「音声のみ」条件と同じです。

### 3. 検査結果の印刷

被検査者用個別結果は以下の1種類です。管理者メニューから印刷できます。

新版 F&T 感情識別検査（快-不快評価版）パーセンタイル順位結果

結果表示画面の印刷ボタンを押すとプリントアウトできます。

その他、ローデータや支援者用結果（パーセンタイル順位）その1・その2も管理者メニューから印刷できます。

いずれもA4判（横）に印刷する形式です。

全条件を一連の検査として実施しない場合、また、制限時間内に回答できなかった場合、パーセンタイル順位を判定することはできないように設定してあります。

### 4. データの管理と個人情報の保護（4感情評価版と共通）

データをダウンロードしたファイルは、「個人情報」として適切に管理してください。

#### （1）検査結果の閲覧・印刷：被検査者用（4感情評価版と共通）

ID（識別記号）を選択すると、当該被検査者の結果が表示されます。

#### （2）検査結果の閲覧・印刷・入力：検査者（管理者）用

支援者（データ管理者）が複数の被検査者のデータを閲覧・印刷する場合、管理者権限により、以下の手順でデータの確認ができます。

- ① 【Ctrl + M】のキー操作でパスワードを入力する画面が開きます（管理者メニュー以外からは検査結果をみることはできません）。
- ② パスワードを入力して被検査者情報を閲覧・印刷してください（パスワードが必要です。P.204の「問い合わせ先」にご連絡ください。また、パスワードの取得及び変更については、操作マニュアルをご覧ください）。
- ③ 管理者用のデータファイルでは、複数の被検査者のローデータが累積してID（識別記号）で示されています。

被検査者ID（識別記号）、検査実施日で検索ができますので、閲覧したいデータを選択すると結果の画面が開き、印刷可能となります。

結果表にはID（識別記号）が印刷されますが、利用者用結果を説明する際には被験者氏名を書いて呈示できるよう「氏名欄」を設けてありますので、必要に応じてご利用ください（記入は手書きです）。

累積データファイルでは、回答が数値化されて表示されています。快-不快評価版では選択肢が9段階（-4・-3・-2・-1・0・1・2・3・4）で示されています。また、累積データファイルには、マウス操作を検査者に変更して実施した場合、その情報が記載されています。

なお、制限時間内に回答が選択できなかった場合、累積データファイルでは【-】で示されます。

一方、小集団実施をした場合、所定の方法で累積データファイルに入力を行うと、その情報が累積データに記載され、自動計算された結果の閲覧と印刷ができます。手順については、操作マニュアルをご覧ください。

なお、小集団実施を行う場合には、スクリーン等に投影し、被検査者が個別に回答用紙に記入する形式で行います。回答用紙は検査に同梱されています。

### (3) 被検査者情報のデータファイルの取り扱い（4感情評定版と共通）

被検査者の累積データファイルには、ID（識別記号）で一覧が記載されています。

なお、ファイルにID（識別記号）に対応した個人情報が格納されていますので、パソコンを廃棄する等の場合、新版 F&T 感情識別検査を適切にアンインストールすることが必要です。

個人のローデータには、本検査の各条件における正解が記載されています。  
管理者のみ利用可能なデータです。  
そのため、管理者以外の者がみること並びに配布等を禁止しています。

累積データにはすべての実施ログが残るように設定されていますので、一時停止により中断した結果についてもみることができます。

シリアル番号及び管理者メニューのパスワードについてのお問い合わせ

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構  
障害者職業総合センター 研究企画部 企画調整室

電話 043-297-9067

電話でお問い合わせください

### Ⅲ 検査結果の解説のために（支援者向け資料）

#### Ⅲ-1 4 感情評定版

##### 1. 検査結果（4 感情評定版）の解説について

被検査者の特性によって、結果のフィードバックに支援が必要となります。結果のフィードバックをパソコン上で行うかどうかについては、検査者が判断してください。

結果表示画面は、本人向けに簡潔に呈示されていますので、必要に応じて以下を解説してください（以下は、支援者用です）。

検査の標準化の結果から、基準となる健常者の正答率は次のとおり。

「音声のみ」	「表情のみ」	「音声+表情」
86 %	85 %	95 %

なお、制限時間内に回答できなかった場合、「結果その1」のマトリクスで示された数字は合計しても32になりません。

混同の傾向については、まず、快-不快の混同があるか、に注目する必要がある。正答率では大きな問題が指摘されない場合でも、快-不快の混同が認められる対象者がいる。これらの対象者の場合、日常生活では、全体としては相手の感情を正しく読みとれるため、快-不快の混同があることに気づかない場合が多い。しかし、快-不快の混同は、対人関係におけるトラブルの原因となると考えられるため、検討の必要がある。

次に、回答に一貫した傾向が見られるか、について検討する必要がある。例えば「悲しみと嫌悪」の混同といった場合、「悲しみ」-「嫌悪」間の双方向性の混同をイメージしやすいが、実際には、常に「悲しみ」を「嫌悪」と（あるいは「嫌悪」を「悲しみ」と）誤るといった一方向性の混同が認められる場合がある。混同の方向性によって予想される問題が異なるため、その方向性に注目した検討が必要となる。

#### 快-不快の混同について

##### ◆ 主として良い方に解釈する場合（不快→快）

「叱られている」あるいは、「注意されている」場面であったり、「相手が不快の感情を表現している」場面であるにも関わらず、相手の「不快」な感情を「快」の感情と読み間違える場合。その場に適切な対応（謝る、今している行動をやめる等）がとれず、対人関係で困難が生じやすい。

##### ◆ 主として悪い方に解釈する場合（快→不快）

対人関係を円滑に維持しているように見える場合でも、高いストレスがある（内的不適応）可能性もある。

このタイプでは、表面的には、適応しているように見えるが、「嫌われているのではないか」「ダメだと思われているのではないか」等と考え、ストレスが高まっている可能性に注意が必要である。また、ストレスがある程度、高くなると、相手に対して攻撃的になったり、自分自身に対するいらだちや無力感などと結びつく可能性があるため、このような場合は、心理的なサポートを検討する必要がある。

### 回答の一貫した傾向について

回答の一貫した傾向とは、以下の場合などを指している。

- ① 4感情のほとんどを、1つの感情と回答する（例えば、全32刺激のうち、その多くを「幸福(嬉しい)」と回答する）。
- ② 特定の感情間で一方向性の回答が認められる  
（例えば、「悲しみ」を「嫌悪」と回答するが、「嫌悪」を「悲しみ」と回答することは少ない）。
- ③ 快（「幸福(嬉しい)」）以外の3感情において、そのほとんどを1つの感情と回答する。  
（例えば、「悲しみ」「嫌悪」全16刺激のうち、その多くを「怒り」と回答する）

これらの傾向は、対象者が他人に対する『構え』を示す手がかりとなる可能性もある。また、①～③以外にも、「幸福(嬉しい)」や「悲しみ」を一貫して、「怒り」あるいは「嫌悪」と回答する傾向にある対象者には、「外界に対する不信」「周囲の人々に対する怒りや恐れ」などが観察されることがあり、こうした心理的な面での検討も必要となる。

## 2. コミュニケーションタイプの解説

被検査者の特性によって、結果のフィードバックに支援が必要となります。結果のフィードバックをパソコン上で行うかどうかについては、検査者が判断してください。

結果表示画面は、本人向けに簡潔に呈示されていますので、必要に応じて以下を解説してください（以下は、支援者用です）。

### 高・受信タイプ

「音声のみ」高 「表情のみ」高 「音声+表情」高

「音声のみ」、「表情のみ」、「音声+表情」のいずれの条件においても正答率が高い。したがって、高・受信タイプでは、対象者が「相手の感情を知ろう」とした場合には、基本的な感情であれば、言葉による状況の説明がなくとも十分に理解されている可能性が高いと言える。

ただし、高・受信タイプであっても、対人関係に困難が認められる対象者がいる。その場合、以下のような問題があるかどうかについて、検討が必要である。

- ◆ 語彙が少ない、話すのが苦手などの理由で、相手に自分の意思や気持ち・感情を適切に伝えられない
- ◆ 状況や相手の気持ちに配慮できないなどの理由で、対人関係に問題が生じる

### 低・受信タイプ

「音声のみ」低 「表情のみ」低 「音声+表情」低

「音声のみ」、「表情のみ」、「音声+表情」のいずれの条件においても正答率が低い。したがって、低・受信タイプでは、対象者が「相手の感情を知ろう」とした場合で、かつ相手の表出した感情が基本的な感情であったとしても、正しく理解されていない可能性が高い。この場合は、日常生活の中で修正できるように配慮するとともに、当面は、言葉を利用しながらのコミュニケーションを心がける必要がある。

ただし、低・受信タイプであっても、対人関係が一見、円滑に維持されているように見受けられる対象者がいる。これらの対象者は、以下の特徴があるかどうかについて検討が必要である。

- a あまり強い意思表示をしない もしくは、他者と積極的な関係を持つとうとしないなど、他者との関係がもともと希薄である。
- b 言語理解に優れている もしくは、状況や場面の理解に優れているなど、他の能力で情報を補完している。

a の場合は、対人関係が円滑に維持されているのではなく、終始受け身的な対応をしたり、対人関係そのものがもともと希薄であるために、問題点が目立たなくなっている状態と言える。

b の場合は、概ね、対人関係は良好と言えるが、言語や状況・場面の理解が十分でない場合、誤解が生じていたとしても、表情や音声からの情報を適切に利用することが困難であるため、その修正が難しいことが予想される。

### 相補タイプ

「音声のみ」低 「表情のみ」低 「音声+表情」高

「音声のみ」、「表情のみ」の単独の情報では正答率が低いものの、両者の情報を相互補完的に利用することで、全体的な正答率が高まる。

この対象者は、会話をする際、音声、表情の両情報が利用できるように相手と向かい合う位置につくことが望ましい。

また、このタイプの対象者の場合、「音声のみ」と「表情のみ」において、それぞれ異なった回答傾向を一貫して持っている可能性がある。したがって、コミュニケーションに際しては、対象者の条件毎の混同の特徴をよく把握しておく必要がある。

### 相殺タイプ

「音声のみ」高 「表情のみ」高 「音声+表情」低

「音声のみ」、「表情のみ」の正答率が高いにも関わらず、双方の情報を利用可能な「音声+表情」で正答率が低い。

相殺タイプは、「音声のみ」と「表情のみ」において、それぞれ異なった回答傾向を一貫して持っている対象者の中に稀にみられる。例えば、「音声のみ」では、「悲しみ」を「嫌悪」と誤る傾向にあり、「表情のみ」では、「幸福」を「悲しみ」と誤る傾向にある対象者が、「音声+表情」において、それぞれの誤りを修正できず、「悲しみ」を「嫌悪」、「幸福」を「悲しみ」と誤る、などの場合である。

したがって、コミュニケーションに際しては、対象者の条件毎の混同の特徴をよく把握しておく必要がある。

### 音声依存 Fタイプ

「音声のみ」低 「表情のみ」高 「音声+表情」低

「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、双方を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は低い。また、その回答の傾向は「音声のみ」と類似していることも多い。

しかし、「表情のみ」の正答率が良くとも、音声からの情報を主たる情報源として利用するという対象者の傾向のために、全体として正答率が低く抑えられている可能性がある。したがって、支援者が誉めたり、叱ったりするときには、必ず、対象者と向かい合い、その時々感情に適切な表情をつけて、表情を手がかりに感情を読みとるようにさせる。対象者は「顔をよく見る」ことで「表情」からの情報の利用を積極的に活用することが重要である。

また、音声情報の利用を適切なものとするために、声を掛ける際には、嬉しそうな声、または、怒った声で、それぞれ、「いま、とてもうれしいです」あるいは「いま、とても怒っています」と言葉にして伝える。このようにして音声と言葉を一致させ、どのような音声がどのような感情と一致しているかを学習し、手がかりとして適切な表情を一致させることで、「このような表情の時は、このような音声」という組み合わせを学習することが効果的である。

### 音声依存 Tタイプ

「音声のみ」高 「表情のみ」低 「音声+表情」高

「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、双方を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。また、その回答の傾向は「音声のみ」と類似していることも多い。

このタイプでは、支援者は、日常生活においても誉めたり、叱ったりするとき、嬉しそうな声、または、怒った声で、それぞれ、「いま、とてもうれしいです」あるいは「いま、とても怒っています」と言葉にして伝え、その後、それぞれの感情に適切な表情を対象者に見せ、「このような音声の時は、このような表情」という組み合わせを学習させることが効果的である。

### 表情依存 Tタイプ

「音声のみ」高 「表情のみ」低 「音声+表情」低

「音声のみ」の正答率が高く、「表情のみ」の正答率は低い。また、双方を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率は低い。また、その回答の傾向は「表情のみ」と類似していることも多い。

「音声のみ」の正答率が良くとも、表情からの情報を主たる情報源として利用するという傾向があるために、全体として正答率が低く抑えられている可能性がある。

支援者は日常生活においても誉めたり、叱ったりするとき、嬉しそうな声、または、怒った声で、それぞれ、「いま、とてもうれしいです」あるいは「いま、とても怒っています」と言葉にして伝え、その後、それぞれの感情に適切な表情を対象者に見せ、「このような音声の時は、このような表情」という組み合わせを学習させることが効果的である。

### 表情依存Fタイプ

「音声のみ」低 「表情のみ」高 「音声+表情」高

「音声のみ」の正答率が低く、「表情のみ」の正答率が高い。また、双方を同時に利用可能な「音声+表情」の正答率が高い。また、その回答の傾向は「表情のみ」と類似していることも多い。

このタイプは、表情から他者の感情を識別することに優れているため、支援者が誉めたり、叱ったりするときに、その時々感情に適切な表情をつけて、対象者には「顔をよく見るように」と伝え、その後、嬉しそうな声、または、怒った声で、それぞれ、「いま、とてもうれしいです」あるいは「いま、とても怒っています」と言葉にして伝える。このようにして音声と言葉を一致させ、どのような音声がどのような感情と一致しているかを学習させ、手がかりとして適切な表情を一致させることで、「このような表情の時は、このような音声」という組み合わせを学習させることが重要である。

### 特定のタイプに分類されない

このタイプに分類された対象者は、特定のタイプに分類される特徴的な傾向は持っていない。対人関係に困難が認められる場合には、表情と音声の両方から情報を得るように心がけることに加え、以下のような問題があるかどうかについて、検討が必要である。

- ◆ 語彙が少ない、話すのが苦手などの理由で、相手に自分の意思や気持ち・感情を適切に伝えられない
- ◆ 状況や相手の気持ちに配慮できないなどの理由で、対人関係に問題が生じる

### タイプを判定できない

1か月以内に指定した順序で3つの検査を実施しなかったため、タイプを判定できない。

### 3. 訓練可能性について

最近の研究結果では、表情から感情を判断する能力は、対人関係を維持する能力と関連性があることが指摘されています。このことは、表情から感情を判断する能力を高めることができれば、対象者の対人能力を高めることができるという可能性を示唆しています。表情は言葉に依存しないコミュニケーション手段です。したがって、言語発達が未熟な幼児・児童、そして言語能力が十分でない知的障害者にも、訓練によるスキルの向上が望める領域であると考えられます。

また、対人関係の機会が豊富で、他者の表情を観察する機会が多い知的障害者では、そうでない知的障害者と比較して、表情識別に優れていることを示唆する研究もあります。このことは、表情識別のスキルは、知的な能力によるだけでなく、一部は、『経験』によって補うことができるということになります。したがって、表情識別能力を高めるためには『観察(経験)』に重点を置いた場面設定をする事が望ましいことは明らかです。しかし知的障害者の場合は、単純な観察学習のみから、この技術を十分に学習することが困難な場合も多くあります。それは知的障害者のメタ認識能力(経験に基づいて、当該課題を解決するために注目しなければならない関連のある事柄を認識すること、またこれまでに用いた解決方法と共通する要素を抽出して応用することなど)が十分でないことによります。そのため、顔のどの部分(例えば、眉、目、鼻、口、しわ等)に注目するか、また、それぞれの感情があらわれたとき、どのように顔(表情)が変化するかなどの具体的な情報を明示することは助けになります。

このことは、知的障害を伴わない発達障害者にも共通する視点です。表情識別能力を高めることで、「他者の感情に配慮しようという構えができること」さらには「表情等から、的確に相手の感情を知り、それに対応した行動をとろうという動機を持つこと」が期待されます。しかし、表情をうまく読みとることができれば、自動的にこの目標が達成されるわけではありません。また、「顔をみるのが怖い」「視線を合わせたくない」といった状況や「声を聞くとときに雑音があると気をとられる」「電話は苦手」「クリアな(明瞭な)声は“喜び”でもしんどい、“怒り”も同じ」といった状況がある場合、表情や音に対する構えや感覚過敏との関連を分析した上で支援の課題を検討する必要があります。

## Ⅲ-2 快-不快評定版

### 1. 検査結果（快-不快評定版）の解説について

#### （1）得点の意味

この検査の結果表で用いられている得点は各呈示条件毎に成人基準値（男女別／年齢区分別／求職・在職の状況別）に基づいて換算した数値（パーセンタイル順位）です。

在学生の場合は大学生・院生データで算出されますが、それ以下の年齢層の場合には、基準値が対応しておりません。

結果表に記載されたパーセンタイル順位の解釈は、次の表のとおりです。

パーセンタイル 順位	意 味
0～ 15	曖昧感情を「不快に」評定する傾向が強い
16～ 30	曖昧感情を「不快に」評定する傾向がある
31～ 69	曖昧感情の評定に特徴的な偏りは見出されない
70～ 84	曖昧感情を「快に」評定する傾向がある
85～ 100	曖昧感情を「快に」評定する傾向が強い

なお、換算表は性別／年齢段階別／求職・在職の状況別に異なります。詳しくは調査研究報告書を参照してください（調査研究報告書並びに検査実施要領については、障害者職業総合センターのホームページからダウンロードすることができます）。

<http://www.nivr.jeed.go.jp/research/report/houkoku/houkoku119.html>

<http://www.nivr.jeed.go.jp/research/report/houkoku/houkoku136.html>

#### （2）結果の解釈

結果表は、得点をプロフィールで示して視覚化した図、及び一般には起こりにくい「快-不快の混同」の状況を示した表で構成されています。

プロフィールは、A検査（高不快）とB検査（低不快）の結果、及び検査間を視覚化することを通して個人の特徴を把握できるように描かれています。

なお、A検査（高不快）が不快度の高い曖昧刺激から構成されているのに対し、B検査（低不快）は不快度の低い曖昧刺激から構成されています。

##### ① プロフィールの読み取りのポイント

- 1) 曖昧刺激に対する快-不快評定値は、一般基準の分布より不快もしくは快の方向に偏っていないか

偏りの有無については、上の表の判定により、「不快に評定する傾向が強い」「不快に評定する傾向がある」「特定の読み取りの傾向は見いだされない」「快に評定する傾向がある」「快に評定する傾向が強い」のいずれかで把握できます。

- 2) A検査・B検査それぞれの結果は、「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の条件によって異なるか

呈示条件間の差	意 味
30 ポイント以上	条件間の「違いが大きい」
15-29 ポイント	条件間の「違いがある」
14 ポイント以下	条件間の「違いは小さい」

- 3) 不快度の高い曖昧刺激（A検査：高不快刺激）への回答と不快度の低い曖昧刺激（B検査：低不快刺激）への回答のプロフィールは、異なるか

A検査・B検査の差	意 味
30 ポイント以上	検査間の「違いが大きい」
15-29 ポイント	検査間の「違いがある」
14 ポイント以下	検査間の「違いは小さい」

- ② 評定において、快-不快の混同があるか

快の感情を「不快」と読み誤る傾向があるか

不快度の高い曖昧刺激（A検査（高不快））を「快」と読み誤る傾向があるか

- ③ 結果解釈の留意事項

上記①において把握した「偏りの傾向」の有無や「検査間・呈示条件間の違い」については、検査実施時点における特徴として理解することが望ましいと言えます。

環境や対人関係などの外的な要因が変化する他、本人の理解や行動様式が変容するなどの内的な要因の変化によっても結果が変わることが想定されるためです。

支援者は、検査結果を本人に説明することを通して共有し、現在の状況と課題を検討する相談支援を進めることが望まれます。このためには、他の資料と関連づけて結果を解釈することも大切です。

## 2. 曖昧感情の評価結果の活用について

### (1) 活用のねらい

結果解釈のポイントは、調査研究報告書に掲載しております。

詳しくは調査研究報告書を参照してください（調査研究報告書については、障害者職業総合センターのホームページからダウンロードすることができます）。

<http://www.nivr.jeed.go.jp/research/report/houkoku/houkoku119.html>

<http://www.nivr.jeed.go.jp/research/report/houkoku/houkoku136.html>

- ① 曖昧感情を深刻にとらえる事例について

対人ストレスや対人トラブルなどとの関連で、「悲観的・自己否定的にとらえすぎる」傾向や行動が生じている可能性が示唆されます。

日常的に「不快度」の高い状況がある可能性があり、その背景にストレスの高い経験があるかどうかなどについてはアンケートや聴取などで把握した上で、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要があると言えます。

② 曖昧感情を楽観的にとらえる事例について

「楽観的・自己肯定的にとらえすぎる」傾向や行動により、対人トラブルが生じている可能性が示唆されます。

背景にストレスの高い経験や対人トラブルがあるかどうかについてはアンケートや聴取などで把握した上で、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要があると言えます。

③ 快の感情を不快にとらえる事例について

対人ストレスや対人トラブルなどとの関連で、「悲観的・自己否定的にとらえすぎる」傾向や行動が生じている可能性が示唆されます。新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果と併せて正解のある検査の正確な読み取りの特徴及び混同の傾向について検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要があると言えます。

④ 不快度の高い曖昧感情を快にとらえる事例について

「楽観的・自己肯定的にとらえすぎる」傾向や行動、対人トラブルの背景に、感情の読み誤りに特徴的な傾向がないかどうか検討する必要性が示唆されます。

新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果と併せて正解のある検査の正確な読み取りの特徴及び混同の傾向について検討の上、こうした結果を踏まえた相談支援を行う必要があると言えます。

## (2) より良い活用のために

支援者は、検査結果の解釈に際し、ストレス要因や対人関係の経験、感情経験の頻度など、快-不快評定版の結果と関連すると考えられる他の資料と関連づけて結果を解釈することも大切です。

例えば、直近（3 か月以内）の主観的な経験が影響する可能性が示唆されており、こうした経験頻度についても把握しておくことが必要な場合があります。

また、日常生活におけるストレス場面への評定の強弱と非言語的に表出される曖昧な感情への快-不快の評定に関して関連が認められています。一般基準の分布より不快の評定をしている場合、特定のストレスの領域・項目が示すストレスは高くないかについても検討が必要と言えます。

なお、快-不快評定版の結果と関連すると考えられる資料について、詳しくは調査研究報告書を参照してください（調査研究報告書並びに検査実施要領については、障害者職業総合センターのホームページからダウンロードすることができます）。

<http://www.nivr.jeed.go.jp/research/report/houkoku/houkoku119.html>

<http://www.nivr.jeed.go.jp/research/report/houkoku/houkoku136.html>

この報告書の取りまとめに際して実施したアンケート調査の様式も、調査研究報告書の資料として掲載してあります。

### 3. 資料：快-不快評定版の基準値について

以下では、本検査の結果表記のための換算表（基準値）を示す。換算表は5種類である。

#### (1) 成人男性（在職者／年齢区分別）

検査得点－パーセンタイル順位換算表 <男性/在職者/34歳以下>

音声条件				表情条件				音声+表情条件			
A検査		B検査		A検査		B検査		A検査		B検査	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-22以下	0	-14以下	0	-30以下	0	-29以下	0	-30以下	0	-26以下	0
-21	1	-13	1	-29	1	-28	1	-29	1	-25	1
-20	1	-12	5	-28	3	-27	1	-28	5	-24	1
-19	3	-11	5	-27	3	-26	3	-27	11	-23	3
-18	5	-10	6	-26	4	-25	3	-26	15	-22	5
-17	10	-9	7	-25	5	-24	4	-25	16	-21	6
-16	13	-8	8	-24	6	-23	5	-24	20	-20	8
-15	18	-7	13	-23	10	-22	5	-23	28	-19	12
-14	25	-6	16	-22	11	-21	6	-22	45	-18	13
-13	28	-5	23	-21	12	-20	6	-21	54	-17	16
-12	33	-4	28	-20	13	-19	8	-20	55	-16	19
-11	44	-3	35	-19	20	-18	9	-19	59	-15	20
-10	50	-2	47	-18	22	-17	10	-18	66	-14	23
-9	62	-1	57	-17	25	-16	11	-17	69	-13	30
-8	67	0	67	-16	30	-15	15	-16	71	-12	35
-7	76	+1	77	-15	35	-14	20	-15	74	-11	42
-6	84	+2	83	-14	44	-13	22	-14	77	-10	49
-5	91	+3	89	-13	49	-12	28	-13	86	-9	54
-4	92	+4	91	-12	55	-11	32	-12	90	-8	59
-3	93	+5	94	-11	64	-10	37	-11	91	-7	62
-2	96	+6	94	-10	67	-9	40	-10以上	100	-6	69
-1	97	+7	98	-9	79	-8	47			-5	74
0	98	+8	99	-8	84	-7	52			-4	84
+1以上	100	+9以上	100	-7	91	-6	54			-3	91
				-6	96	-5	57			-2	93
				-5	98	-4	62			-1	98
				-4	99	-3	71			0	98
				-3以上	100	-2	74			+1	99
						-1	77			+2	99
						0	83			+3以上	100
						+1	90				
						+2	91				
						+3	94				
						+4	95				
						+5	95				
						+6	96				
						+7	96				
						+8以上	100				

検査得点－パーセントイル順位換算表 <男性/在職者/35歳以上>

音声条件			
A検査		B検査	
検査得点	パーセントイル順位	検査得点	パーセントイル順位
-20以下	0	-14以下	0
-19	2	-13	1
-18	3	-12	1
-17	3	-11	1
-16	7	-10	2
-15	8	-9	5
-14	10	-8	6
-13	14	-7	12
-12	16	-6	14
-11	26	-5	20
-10	33	-4	25
-9	43	-3	35
-8	49	-2	42
-7	65	-1	51
-6	73	0	68
-5	78	+1	78
-4	87	+2	91
-3	93	+3	91
-2	95	+4	94
-1	96	+5	96
0	98	+6	97
+1以上	100	+7	98
		+8以上	100

表情条件			
A検査		B検査	
検査得点	パーセントイル順位	検査得点	パーセントイル順位
-29以下	0	-22以下	0
-28	1	-21	1
-27	2	-20	1
-26	3	-19	2
-25	3	-18	2
-24	5	-17	3
-23	5	-16	4
-22	6	-15	8
-21	8	-14	10
-20	10	-13	13
-19	12	-12	14
-18	12	-11	18
-17	17	-10	20
-16	20	-9	24
-15	27	-8	29
-14	37	-7	36
-13	42	-6	42
-12	45	-5	44
-11	55	-4	51
-10	57	-3	59
-9	65	-2	65
-8	77	-1	74
-7	79	0	82
-6	85	+1	85
-5	89	+2	89
-4	94	+3	90
-3	96	+4	94
-2	97	+5	96
-1	98	+6	97
0	99	+7	99
+1	99	+8	99
+2	99	+9	99
+3	99	+10以上	100
+4以上	100		

音声+表情条件			
A検査		B検査	
検査得点	パーセントイル順位	検査得点	パーセントイル順位
-32	0	-27以下	0
-31	2	-26	1
-30	4	-25	2
-29	6	-24	4
-28	8	-23	4
-27	9	-22	5
-26	11	-21	7
-25	14	-20	7
-24	20	-19	8
-23	24	-18	8
-22	36	-17	9
-21	41	-16	11
-20	48	-15	12
-19	52	-14	14
-18	63	-13	25
-17	66	-12	26
-16	74	-11	29
-15	80	-10	37
-14	83	-9	43
-13	89	-8	51
-12	93	-7	56
-11	95	-6	66
-10	96	-5	78
-9	97	-4	81
-8以上	100	-3	85
		-2	89
		-1	94
		0	95
		+1	96
		+2	97
		+3	97
		+4	97
		+5	98
		+6	98
		+7	98
		+8	98
		+9以上	100

(2) 成人女性（在職者）

検査得点－パーセンタイル順位換算表 <女性/在職者>

音声条件			
A検査		B検査	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-27以下	0	-17以下	0
-26	1	-16	1
-25	2	-15	1
-24	2	-14	2
-23	3	-13	2
-22	4	-12	3
-21	5	-11	3
-20	8	-10	4
-19	10	-9	6
-18	13	-8	10
-17	15	-7	12
-16	18	-6	16
-15	21	-5	24
-14	30	-4	33
-13	39	-3	41
-12	45	-2	50
-11	50	-1	58
-10	58	0	66
-9	66	+1	76
-8	72	+2	81
-7	80	+3	88
-6	85	+4	91
-5	92	+5	95
-4	96	+6	97
-3	97	+7	98
-2	99	+8	98
-1	99	+9	98
0	99	+10	98
+1	99	+11	98
+2	99	+12	99
+3	99	+13	99
+4	99	+14以上	100
+5	99		
+6以上	100		

表情条件			
A検査		B検査	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-32	0	-27以下	0
-31	1	-26	1
-30	2	-25	1
-29	3	-24	1
-28	3	-23	4
-27	5	-22	4
-26	7	-21	4
-25	10	-20	5
-24	11	-19	6
-23	13	-18	8
-22	15	-17	9
-21	17	-16	12
-20	19	-15	16
-19	24	-14	18
-18	29	-13	19
-17	34	-12	24
-16	44	-11	31
-15	48	-10	33
-14	54	-9	37
-13	62	-8	42
-12	64	-7	48
-11	69	-6	51
-10	76	-5	59
-9	82	-4	68
-8	87	-3	72
-7	90	-2	77
-6	93	-1	82
-5	95	0	89
-4	96	+1	90
-3	97	+2	95
-2	98	+3	97
-1	99	+4	98
0以上	100	+5	98
		+6	99
		+7	99
		+8	99
		+9	99
		+10以上	100

音声+表情条件			
A検査		B検査	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-32	0	-28以下	0
-31	2	-27	1
-30	8	-26	1
-29	13	-25	2
-28	17	-24	2
-27	21	-23	3
-26	27	-22	4
-25	34	-21	6
-24	39	-20	10
-23	46	-19	14
-22	52	-18	17
-21	58	-17	21
-20	63	-16	23
-19	67	-15	30
-18	74	-14	36
-17	81	-13	39
-16	85	-12	45
-15	89	-11	50
-14	90	-10	56
-13	93	-9	63
-12	95	-8	67
-11	97	-7	76
-10	98	-6	84
-9	99	-5	90
-8	99	-4	92
-7以上	100	-3	94
		-2	97
		-1	97
		0	98
		+1	98
		+2	98
		+3	98
		+4	99
		+5	99
		+6	99
		+7	99
		+8	99
		+9以上	100

(3) 大学生・院生（男女別）

検査得点－パーセンタイル順位換算表 <男性/大学生・院生>

音声条件			
A検査		B検査	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-21以下	0	-11以下	0
-20	1	-10	1
-19	1	-9	1
-18	5	-8	2
-17	10	-7	5
-16	16	-6	9
-15	20	-5	11
-14	24	-4	22
-13	25	-3	27
-12	33	-2	37
-11	37	-1	49
-10	45	0	62
-9	57	+1	76
-8	70	+2	85
-7	72	+3	90
-6	79	+4	93
-5	87	+5	94
-4	93	+6	97
-3	94	+7	98
-2	96	+8	98
-1	97	+9以上	100
0	98		
+1以上	100		

表情条件			
A検査		B検査	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-30以下	0	-21以下	0
-29	1	-20	1
-28	1	-19	1
-27	2	-18	1
-26	2	-17	1
-25	3	-16	2
-24	4	-15	6
-23	5	-14	10
-22	6	-13	16
-21	9	-12	18
-20	10	-11	21
-19	15	-10	22
-18	18	-9	23
-17	23	-8	28
-16	24	-7	40
-15	36	-6	46
-14	40	-5	53
-13	51	-4	62
-12	57	-3	68
-11	62	-2	70
-10	68	-1	75
-9	75	0	81
-8	80	+1	84
-7	87	+2	90
-6	90	+3	94
-5	93	+4	94
-4	96	+5	97
-3	98	+6	98
-2	98	+7	99
-1以上	100	+8	99
		+9	99
		+10	99
		+11以上	100

音声+表情条件			
A検査		B検査	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-29以下	0	-20以下	0
-28	1	-19	1
-27	5	-18	1
-26	10	-17	2
-25	11	-16	5
-24	15	-15	6
-23	19	-14	10
-22	25	-13	12
-21	31	-12	22
-20	38	-11	29
-19	53	-10	40
-18	58	-9	49
-17	67	-8	55
-16	68	-7	64
-15	79	-6	74
-14	83	-5	75
-13	87	-4	79
-12	92	-3	81
-11	96	-2	85
-10	96	-1	89
-9	97	0	93
-8	98	+1	98
-7	98	+2以上	100
-6	99		
-5	99		
-4	99		
-3以上	100		

検査得点－パーセンタイル順位換算表 <女性/大学生・院生>

音声条件			
A検査		B検査	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-20以下	0	-13以下	0
-19	1	-12	1
-18	4	-11	3
-17	7	-10	4
-16	10	-9	5
-15	14	-8	8
-14	22	-7	10
-13	31	-6	17
-12	38	-5	18
-11	50	-4	20
-10	58	-3	25
-9	62	-2	35
-8	70	-1	44
-7	75	0	51
-6	81	+1	68
-5	87	+2	78
-4	92	+3	84
-3	95	+4	85
-2	96	+5	87
-1	97	+6	91
0	98	+7	97
+1	99	+8	98
+2以上	100	+9以上	100

表情条件			
A検査		B検査	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-29以下	0	-21以下	0
-28	1	-20	1
-27	4	-19	2
-26	5	-18	2
-25	8	-17	7
-24	9	-16	10
-23	10	-15	11
-22	11	-14	12
-21	14	-13	20
-20	23	-12	21
-19	24	-11	30
-18	31	-10	35
-17	35	-9	37
-16	40	-8	41
-15	44	-7	45
-14	51	-6	54
-13	55	-5	60
-12	64	-4	64
-11	74	-3	67
-10	81	-2	72
-9	87	-1	80
-8	90	0	82
-7	92	+1	84
-6	95	+2	91
-5	95	+3	94
-4	97	+4	95
-3	97	+5	97
-2	98	+6以上	100
-1以上	100		

音声+表情条件			
A検査		B検査	
検査得点	パーセンタイル順位	検査得点	パーセンタイル順位
-31以下	0	-21以下	0
-30	4	-20	1
-29	5	-19	2
-28	5	-18	8
-27	12	-17	10
-26	18	-16	12
-25	25	-15	15
-24	28	-14	18
-23	38	-13	27
-22	42	-12	30
-21	50	-11	35
-20	52	-10	41
-19	61	-9	48
-18	68	-8	55
-17	75	-7	62
-16	82	-6	74
-15	82	-5	80
-14	87	-4	84
-13	94	-3	90
-12	98	-2	91
-11以上	100	-1	92
		0	95
		+1以上	100

- 質問は大きく分けて、**1** から **3** の3つのパート（全3ページ）があります。
- 各パートの質問内容をよく読んで、すべての質問に教えてください。
- わからないことがあれば、検査者に遠慮なく質問してください。
- ここでの質問は、あなたがどう思うかを尋ねるものですので、あなたの思ったままに教えてください。

## 1 今日の日付、現在の年齢・性別を記入してください

- 今日の日付： 2013年  月  日
- 年齢：  歳
- 性別（あてはまる方に○）： 男      •      女

# 2

以下に 14 の場面が示されています。あなたがその場面を経験するとしたら、どのような気持ちになりますか。あなたの気持ちに最もあてはまる感情を表す語を「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「驚き」「恐怖」「軽蔑」の中から 1 つ選んで、○をつけてください。

なお、下記の文中の知人とは、あなたが知っている人で、その人もあなたのことを知っている人を指します。

	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
例. おいしいものを食べたとき	○						

場面	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
1. 長い間、会っていなかった知人や友人と偶然出会ったとき							
2. 他人に嫌がらせをしている人を見かけたとき							
3. 試験に合格したとき							
4. 苦手な生物（クモ・ヘビ・ゴキブリなど）を近くで見たとき							
5. 仲の良い知人や友人が遠くに引っ越すことになったとき							
6. いい加減な態度や無責任な態度をとる人を見たとき							
7. 初対面の人に、なれなれしい言葉で話しかけられたとき							
8. 階段から足を滑らせて落ちそうになったとき							
9. 面倒な作業を人から押しつけられたとき							
10. 知人や友人に嘘をつかれたとき							
11. 時間をかけて作成したレポートや書類を誤って自分で削除したり、紛失したとき							
12. 大きな地震が起こったとき							
13. 努力して作成したレポートや書類を先生や上司にほめられたとき							
14. 信頼していた知人や友人に約束を破られたとき							

# 3

「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「驚き」「恐怖」「軽蔑」、それぞれの感情がもっている「快」もしくは「不快」の程度を下記の要領で教えてください。

**【その感情が 「快」である場合】**

「非常に快である (+4)」を最大の程度とし、「+1」から「+4」の中で、最もあてはまる数字に○をつけてください。数字が大きくなるほど、快の程度が強いことを意味します。

**【その感情が 「不快」である場合】**

「非常に不快である (-4)」を最大の程度とし、「-1」から「-4」の中で、最もあてはまる数字に○をつけてください。数字が大きくなるほど、不快の程度が強いことを意味します。

**【その感情が 「快」でも「不快」でもない場合】**

「快でも不快でもない (0)」に○をつけてください。

なお、この質問は、あなたが他の人を喜ばせたり、悲しませたり、軽蔑した時に感じる「快」もしくは「不快」の程度を答えるものではありません。それぞれの感情が回答欄の「-4（非常に不快である）」から「+4（非常に快である）」のどこに最もあてはまるか、あなたの考えで○をつけてください。

感情の種類	非常に不快である				快でも不快でもない				非常に快である
喜び	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4
悲しみ	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4
怒り	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4
嫌悪	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4
驚き	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4
恐怖	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4
軽蔑	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4

## 検査後に実施する質問用紙

- 質問は大きく分けて、**1** から **4** の4つのパート（全6ページ）があります。
- 各パートの質問内容をよく読んで、すべての質問に教えてください。
- わからないことがあれば、検査者に遠慮なく質問してください。
- ここでの質問は、あなたがどう思うかを尋ねるものですので、思ったまま率直に教えてください。

# 1

以下の言葉が表す感情を、最近3か月間において、どのくらいの頻度で経験しましたか。

「0. まったくなかった」～「6. 毎日あった」のうち、最もあてはまる答えを **1つ選んで**、**数字に○をつけてください**。数字が大きくなるほど、**頻度が高い**ことを意味します。

なお、数字の「1」「3」「5」はそれぞれ、その前後にある数字間の頻度を示します。

	まったく なかった		月に 1回 あった		週に 1回 あった		毎日 あった
感情の種類		↔		↔		↔	
喜び	0	1	2	3	4	5	6
悲しみ	0	1	2	3	4	5	6
怒り	0	1	2	3	4	5	6
嫌悪	0	1	2	3	4	5	6
驚き	0	1	2	3	4	5	6
恐怖	0	1	2	3	4	5	6
軽蔑	0	1	2	3	4	5	6

# 2

以下に①～④の4つの表情写真があります。

各写真の表情について、2つの質問に教えてください。

問1. 写真の表情は、どの感情を最もよく表していますか。「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」「驚き」「恐怖」「軽蔑」の中から1つ選んで、○をつけてください。

問2. 問1の回答をする際、その感情が強く表れている顔の部分を、以下の回答例を参考に○をつけて全て示してください。○の数は1つでも、複数でもかまいません。

問2の回答の例)



		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
①	 <p>問1. 左の写真の表情が表す感情を1つ選んで○</p>							
	<p>問2. 問1で回答した感情が強く表れている顔の部分に○</p>							

( - 224 - ページに続く)

		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
②		問1. 左の写真の表情が表す感情を1つ選んで○						
		問2. 問1で回答した感情が強く表れている顔の部分に○						

		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
③		問1. 左の写真の表情が表す感情を1つ選んで○						
		問2. 問1で回答した感情が強く表れている顔の部分に○						

		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐怖	軽蔑
④		問1. 左の写真の表情が表す感情を1つ選んで○						
		問2. 問1で回答した感情が強く表れている顔の部分に○						

# 3

以下に24の場面が示されています。あなたがそのような場面を経験するとしたら、どの程度、ストレスを感じますか？

「4. 非常に感じる」を最大の程度とし、あなたが感じるストレスの程度に応じて「0」から「4」の中で、最もあてはまる数字を1つ選んで○をつけてください。

数字が大きくなるほど、ストレスの程度が強いことを意味します。

なお、書かれた状況を一度も経験したことがないため、どのくらいストレスを感じるかを想像できない場合は、「そのような経験がない」の空欄に○を記入してください。

場面	まったく感じない				非常に感じる	そのような経験がない
1. 同じことを何度も言わなければならない	0	1	2	3	4	
2. 会議や話し合いなど、グループでの会話中に「何をしゃべったらいいのか」わからなくなる	0	1	2	3	4	
3. 人が「あなたのことを嫌っているか」気になる	0	1	2	3	4	
4. 嫌いな人と会話する	0	1	2	3	4	
5. 忙しそうにしている人に、あなたの仕事の手伝いを頼む	0	1	2	3	4	
6. 所属しているグループで「自分が孤立している」と感じる	0	1	2	3	4	
7. 会話中に気まずい沈黙がある	0	1	2	3	4	
8. 「人が自分に気がつかって話している」と感じる	0	1	2	3	4	
9. 遅刻する人がいて、待たされる	0	1	2	3	4	
10. あなたの遅刻により、人を待たせる	0	1	2	3	4	

( - 226 - ページに続く )

( - 225 - ページからの続き)

場面						そのような経験がない
	まったく感じない				非常に感じる	
11. あなたがある人を嫌っていることを、本人に気づかれる	0	1	2	3	4	
12. 自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされる	0	1	2	3	4	
13. あなたが貸した物を期日までに返してくれない	0	1	2	3	4	
14. 気をつかって、人にあわせた会話をする	0	1	2	3	4	
15. 自慢話や愚痴を言いたいのに、誰も聞いてくれない	0	1	2	3	4	
16. 話している人が自分に伝えたいことを、理解できない	0	1	2	3	4	
17. 自分の言いたいことが、人に上手く伝わらない	0	1	2	3	4	
18. 忙しいときに、仕事を頼まれる	0	1	2	3	4	
19. テンポの合わない人と会話する	0	1	2	3	4	
20. 同じことを何度も言われる	0	1	2	3	4	
21. 言い争いをする	0	1	2	3	4	
22. 親しくなりたい人と、なかなか親しくなれない	0	1	2	3	4	
23. 借りた物を期日までに返せなかった	0	1	2	3	4	
24. 会議や話し合いなど、グループでの会話中に話の流れがわからなくなる	0	1	2	3	4	

# 4

差し支えなければ、以下の質問に教えてください。

■ 診断名（障害名）

■ 医師から発達障害であると説明を受けた時期：  歳

■ 医師以外の人から発達障害であると説明を受けた方：

1. 誰から説明を受けましたか？

から

2. いつ、その説明を受けましたか？

歳の時、説明を受けた。



#### ホームページについて

本冊子のほか、障害者職業総合センターの研究成果物については、一部を除いて、下記のホームページからPDFファイルによりダウンロードできます。

#### 【障害者職業総合センター研究部門ホームページ】

<http://www.nivr.jeed.go.jp/>

#### 著作権等について

視覚障害その他の理由で活字のままでの本を利用できない方のために、営利を目的とする場合を除き、「録音図書」「点字図書」「拡大写本」等を作成することを認めております。その際は下記までご連絡ください。

なお、視覚障害者の方等で本冊子のテキストファイル（文章のみ）を希望されるときも、ご連絡ください。

#### 【連絡先】

障害者職業総合センター研究企画部企画調整室

電話 043-297-9067

FAX 043-297-9057

調査研究報告書 No.136

発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究（その2）

—新版 F&T 感情識別検査の試行に基づく検討—

---

編集・発行 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構  
障害者職業総合センター  
〒261-0014  
千葉県美浜区若葉 3-1-3  
電話 043-297-9067  
FAX 043-297-9057

発行日 2017年3月  
印刷・製本 情報印刷株式会社

---

